
主義主張

折れた鉛筆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主義主張

【Nコード】

N9442X

【作者名】

折れた鉛筆

【あらすじ】

情けは要らず。容赦もかけず。戦うために剣を取ったのなら是非も無し。戦場に於いては殺す事も殺される事も躊躇は無用。

躊躇う者から死んでゆく。生き残りたくば非情になれ。剣にて殺した者は剣にて斃れ、戦いを拒否する者は豚のように死ぬ。

……戦争を。血と魂の慟哭を。血が湧き肉が踊る物語をアナタに贈りたい。

プロローグ1

『問1・あなたはゲーム、漫画、アニメは好きですか?』

いいえ。興味はありますが、手を出すだけの暇と時間がなく、見たことが無いので好き嫌いを判ずることはできません。

『問2・あなたは友達がいますか?』

いいえ。私の人間関係は大抵がギブ&テイクのドライなものです。友情とは、おそらく私の人生の中で最も縁遠いものでしょう。まあ? 向こうが私のことを友達とと思っている分には勝手だと思いますが。

『問3・あなたは人間が好きですか?』

はい。大好きです。特に好きなのが努力家の人間です。天才も好きですが、努力を怠る類いの天才は嫌いです。

『問4・あなたは今、何をしていると興奮を覚えますか?』

道端で座り込んでいるワル気取りの馬鹿少年どもの背中を、後ろから蹴つり上げる事です。無論、蹴りつけた後は顔を見られる前に即座に逃げますが。

『問5・あなたは自分が素晴らしい人間だと誇れますか』

はい。私はそこら辺の去勢された犬のようなオスとは違う、闘うことを知っているという自負と誇りがあります。

『問6・べたなシチュエーションですが、もしも女の子が柄の悪い複数の男に絡まれていて、困っていたらどうしますか』

見て見ぬ振りをします。

ただ、その女の子が可愛かったら助けます。私は基本的に打算で動くので。

『問7・あなたは自分がどういった人間か自覚していますか?』

自己中心的な男。だが他人を大切に思っている、と周囲に認識されるようにしている。

馬鹿が嫌い。向上心がないオスが嫌い。男女平等という大義名分を掲げておきながら、家庭で夫を顎でこき使い、稼いでくる給料をむしりとって家事や子育てを押し付けてなお男女平等を謳う厚顔無恥な女は殺したい。人間は全て平等とかほざくやつが嫌い。

金は悪徳とか美人は三日で飽きるなんて低レベルな嘘をつく日本の風習が嫌い。

女の顔色を伺う去勢されたオスが嫌い。野心のないオスが嫌い。

ギラギラした欲望を持つ男が好き。実力がある女が好き。大衆の意見に流されない男が好き。陰口ではなく直接文句を言いに来る強気な女が好き。

女らしい女、男らしい男が好き。美人が好き、ブスは死ね。

仕事一筋の男が好き、恋愛ごっこにうつつを抜かす男は嫌い。己を誇る男が好き、男を立てることの出来ない女は死ね。女に優しく出来ない男も死ね。男の傷を癒せない女は消える。

あと安陪、菅、その他諸々の量産型政治家ども。お前らも死ね。

そんな差別主義な人間です。

そして、そんな自分のことを私は大好きです。

『問8．あなたは周囲にどんな風に見られていると思いますか？』

辣腕政治家。独裁者。民主主義を蔑ろにする総理大臣。英雄。ワン
トップ主義。

……まあ、腐った政府を改革し、政治家の天下りや無駄な政策の打ち止め、予算の無駄遣い、延々と貯まり続ける外国に対する借金の支払い拒否など、日本国民の生活水準を大幅に向上させたことで民衆には好かれていると言えます。ただ、政治家の大半には嫌われていますがね。

『問9．あなたは 殺人に、興味がありますか？』

あります。特に礼儀を弁えぬ頭の弱いやつを見ると男女の別なく殺してやりたくくなります。

最近はその衝動を抑えるためにそれなりの努力を要するようになってきました。

人を殺す妄想をしているときや、睡眠時の夢で人を殺している姿を見たときなどは、たまに勃起してしまいます。

特に、私の遣ること為すことにいちいちテレビなどで意見する、訳知り顔の自称政治の専門家とか、拷問で苦しみ抜かせた末に殺したくなります。

なんですかあれ？ 私の前では媚びへつらうくせに、テレビとかで

は強気って。……今度、事故に見せかけて殺してやるうか。

『問10・二次創作の小説によくあるテンプレで、あなたは神様のミスで殺されてしまいました。そしてミスで殺してしまったお詫びに何でも願いを叶えてくれると言われました。あなたは何を願いますか？』

テンプレ？ ……テンプレート、という意味ですか？

まあ、『二次創作の小説』という意味と内容がわからないですが、とりあえず神様がミスするわけないでしょう。全知全能なんだし。

え？ ミスすると仮定して考える？

ふむ。……とりあえず生き返らせてもらいますね。中学生の頃から人生やり直して、後に私にとって目障りになる奴を殺して回ります。警察とかの捜査に引つかからない術も知ってますしね。

え？ 異世界にしか転生できない？ なんですかその理屈。

まあ、仮定 IF
もし

の話で考える分なら面白いので考えてみましょう。

そうですね、とりあえず人間の魂の变革を望みます。

たとえば、全ての男が競争心溢れる野心家であり、かつ努力家になるように。

たとえば、全ての女がジャンルは違えど魅力的で、己の美貌を磨く努力を怠らぬようにするとか。

それだけで、世界は今よりはマシになるでしょう？

怠惰な衆愚どもの意見を誘導するのつて、かなり大変ですし。そうしたら、私が苦勞せずとも日本も安泰です。

あとはそうですね、馬鹿はみんな殺してくださいと願います。まあ、私の願ひ事のせいで国家間の競争が激しくなりすぎて、戦争が起こりまくっても私の知ったことではありませんが。日本が徴兵制を復活させて、私が徴兵されたら、とりあえず、死ぬまで敵を殺しまくってるでしょうね。

『問11・偽善者、聖人、犯罪者、一般人、英雄、軍人、政治家、哲学者、革命家。あなたはいったい何が一番偉いと思いますか？』

……というか、質問が多すぎですよ。そろそろ終わらせてください。

問11に答えるとしたら、それはもう一般人が一番偉いですね。なんたつて、偽善者も、聖人も、犯罪者も、英雄も軍人も政治家も哲学者も革命家も全部が全部、一般人の中から生まれるんですから。それに、一般人という大衆がいなければ、人を殺すことしか出来ない英雄やら軍人やら犯罪者、口しか動かかせない偽善者や哲学者、人を導くことしか出来ない革命家や政治家の食料はいったいどこから出てきてるんです？

考えればわかるでしょ。

貴族よりも、王よりも、農民のほうが尊いように。

地味で、苦しい仕事に耐え続けている農民……一般人のほうが偉いに決まっています。

もつとも？ 私は一般人という大衆に飲み込まれるのは御免蒙りませんがね。

『問12 二次元の美少女と、現実の美少女。どっちが好きですか？』

……アレですか。私がテレビゲームや漫画本などを詳しく見知っているものと仮定しての質問ですよ、それ。

知りませんから。二次元なんか知りませんから。興味はあるけどまだ知りませんから。

真剣に答えるなら、俄然現実の美少女に決まっていますよ。だって、二次元は触れることが出来ないじゃないですか。私は同じ三次元のセックスできる女が好きです。

『問13 あなたは人気者になりたいですか？』

なりたくないです。

むしろ、私の感性や思想を否定したがるような人とは仲良くなりた

くありません。

私は政治家です。人気取りが上手くないと生きていけないのです。ですから個人的な感情を押し殺して今日も人気取りを頑張ってますよ。

「つかアレだ、いい加減に質問終わらせろよ。次で終わりな？」

私は暇な人間じゃないんだよ。

『問14・愛と仕事、権力と自由、義務と名誉、己と他者 何が大切ですか？』

愛と仕事では、仕事ですね。愛はいりません。二の次です。

権力と自由では、自由です。自分の時間のない人生は退屈ですし。

義務と名誉？ 義務に決まってんでしょ。義務も果たせない人間に社会で生きる資格はありません。名誉なんてものは義務を果たしている内に自然とくつついてくる副産物みないなものです。

己と他者？ 阿呆ですかあなたは。己に決まってるでしょ。偽善者みたいに、自分よりも他者だなんて気持ちの悪いことはありません。

この中で順位を定めるのなら……そうですね、1位が己です。義務と仕事と同列で2位。名誉が3位。4位が自由。5位が権力。愛と他者が同列の6位、と言った具合です。

さて。質問の受付はここら辺で終わらせてもらいます。
では

『……問15・貴方は天才ですか？』

ばーか。答えませんよ。問14が最後だって約束でしたから。
では、さようなら。

第一話「アオスブルフ・シュトライテン」

第一話

「アオスブルフ・シュトライテン」

ウウウウオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ

!!!!!!

口腔より迸る、野獣が如き極大の咆哮。

銃火が乱れ交う戦場で、誰もが雄叫びを上げている。俺もまた負けてたまるかと腹の底から雄叫びを上げ続け、手にする小銃から吐き出される銃撃をただ只管に戦場へ撒き散らした。

敵の頭蓋は粉碎され脳漿を撒き散らす。

敵の胴体をズタズタに撃ち破ってピンクの内臓を四散させながら、吐き出されてくる銃弾の雨霰を掻い潜り、死に物狂いの行軍を続けて見敵すれば必殺する事を忘れない。

「づあっ?!」

被弾。左上腕部。戦闘行動に支障なし。

痛みを発する傷口が灼熱となって脳髓を焼く。

アドレナリンが大量に分泌されているのがわかる。

被弾した個所の痛覚を軽減し、周囲の状況を掴む感覚を鋭敏化してくれていた。

「大尉　　ッ?！」

「構うなッ!　前を見る!　死にたいのか新兵　　!!」

部下のひとりが俺の呻き声を聞いて悲痛な叫び声を上げるが、それを激しく叱咤して構わせない。

前を見る、後ろを見るな、血の温度を上げ続け、ただ只管に虐殺しろ!

此処は戦場。

一瞬の油断が死を招き、勇敢過ぎた者が斃れ、臆病すぎる者は味方に撃たれる。

死にたくないなら前を見る。敵を殺せ。

殺して殺して殺しまくって、敵を総て殺し尽くしたら俺たちの勝ちだ　　ッ!

「ノイエン　　ッ!　敵が敗走を始めたぞ、手筈通りに追撃だ、トラック回せエッ!」

「あいよ大尉!　劣等どもを殺し尽くそうぜえ!」

部下に叫び、殺意と喜悦に塗れた声が俺の命令に威勢よく応えた。やって来た軍用トラックの荷台に乗りこみ、生き残っている指揮下の小隊18名を引き連れ、中隊に矢継ぎ早に指示を放った。

俺たちは自走砲部隊と兵站部隊を維持し戦車部隊に支援される、トラックに載せられた装甲擲弾兵だ。敵前線に集中する侵攻部隊の迅速な移動を助け、孤立した敵の部隊を包囲殲滅する事を主な任務としている。

その任に従い、孤立した敵を発見するや俺たちはすぐさま何度目の移動を開始する。

「勝ちましたね、大尉」

トラックの荷台に乗り込み、小銃を脇に置いて左上腕部の応急処置を手の空いている部下にして貰っていると、俺の下で歴戦を重ねている右腕 ノーウェン中尉が話しかけてきた。

その声は、血と硝煙、殺戮に酔いしれた声音だったが、その瞳だけは何処までも冷徹なままだ。

その声は生き残った隊の連中に聞こえるように微妙に大きく、その意図を察した俺は話を合わせることにした。

「ああ、勝った。ここから戦局を覆る事は、それこそ軍神にだって不可能だ」

俺の声が絶対の確信を宿している事を感じ取った部下たちが、これまで強張っていた表情を僅かに緩めた。

そうだ。俺たちは勝ったんだ！

その喜びを満面に広げ、歓喜の声を上げ始める者もいる始末だ。

ノーウェン中尉がここで何かを言おうとするのを、俺は手を上げて制した。

「勘違いするなよ馬鹿ども。あくまで、国同士の勝敗が決したという意味だ」

首をかしげる部下たちに、俺はこれ見よがしに嘆息して見せた。

それは、俺の左腕の応急処置を終えた部下 イングヒルト・ガッ

セナルに対してのメツセージだ。

気を緩めるには早すぎる。家に帰るまでが戦争だ。

そのメツセージを受信したイングヒルトは、生真面目にうなずいて、緊張の抜けた瞳に改めて闘争の炎を灯した。

「だがな、まだ戦場（いくさば）には敵兵が生き残っているだろ？ まだ個人の闘いは終わっていない。敵兵は殺されまいと死に物狂いの抵抗を見せるだろう。それこそ、味方を生かすために対峙した敵を道連れにしようとする者もいる筈だ。俺たちは勝った！ だがまだ死なないと決まったわけではない。死にたくなければ敵を殺し尽くすまで気を抜くな！ 己が死ねば隣に立つ同胞が斃れるかもしれないと恐怖しろ！」

叱咤する俺の声に、部下たちは再び獰猛な殺意を胸に宿し、敵を殺す事の喜悦に代わって、仲間が死ぬかもしれないという恐怖が起った。

そう、恐怖だ。

その恐怖は、きっと敵を殺し尽くすまで消える事はないだろう。

大事な戦友 同じ釜の飯を喰らい、過酷な訓練に共に耐えた盟友が、敵に殺される。

血を分けた兄弟を失うようなものだ。

そんなことは耐えられないと、部下たちは壮絶な覚悟と闘争心、燃える殺意を滾らせた。

その面構えを見て、俺は満足げにうなずいた。

これなら大丈夫だ。ここに来るまでに何人も死んでしまったが、これ以上犠牲が出る事はないだろう。

少なくとも、この戦いでは。

「さすが大尉。大尉の言葉には不思議な力がありますねえ」
「この程度で随分と褒めてくれるな、ノーウエン」

声を潜めて話しかけてくる部下に、俺は苦笑を以って迎えた。

「いやね、大尉がまだ新兵だったころからおれはこの隊に居たんですが、大尉がこの中隊の指揮官になってから、随分とコイツらがイイ目をするようになったんですよ。あんたは、兵を率いるのに相応しい、おれたちにとっての英雄だ」

英雄、ね。

その響きが、どこか別世界の言葉のように思えて、俺は僅かに苦笑を深めた。

ああ、そうだろう。長らく前線で生き続けてきたノーウエンがそう言うのなら、俺は確かに英雄（イカレ野郎）なのだろう。
だって、人を殺しておきながら、俺の内にはただ『敵を倒した』という原始の高揚しかないのだから。

「私も、中尉と同じ意見です、大尉」

「ガッセナル少尉？」

ガッセナルは今の遣り取りを聞いてたのだろう。その言葉はやけに熱っぽかった。

「この戦争で一番の戦果を上げたのは、きっと大尉ですよ！ 大尉がいたから作戦はこんなにも手際よく進んだ、そしてわたしのような未熟者も生き残る事が出来た！ 大尉は、本当に」

その熱っぽい眼差しが、俺にとっては嫌なモノに思えた。

だってそれに宿る感情は？崇拝？だ。

？崇拝？は、遠い存在に向けるモノなのだから。共に戦った戦友に向ける目ではない。

不意に、ガツセナルの台詞を遮るようにトラックが止まるのを、荷台に居た全員が感じ取り、同時に俺は短く命令を下した。

「降りるぞ、お掃除の時間だ」

猟犬が放たれる。

残兵が息を潜めて隠れているのを見つけだし、その抵抗を擣り潰してその喉を噛み切るために。

殺して殺して殺し尽くして、血を分けた家族と同等の絆を持つ戦友たちを死なせないために。迅速に。そしてどこまでも容赦なく、苛烈な殺意に身を任せて敵兵を駆逐し始めたのだった

【 …???:??: … 】

ジーク・ハイル
勝利万歳ッ！
ジーク・ハイル
勝利万歳ッ！

勝利に湧く同胞たちを尻目に、私はソツと瞼を閉じ、この戦争の内

容を頭の中で反芻していた。

私の所属していた隊はそれなりに戦果を挙げた。私自身も、初陣にしては機敏に動いていたと思うし、初めて人を殺したのにもかかわらず罪悪感や気持ち悪さは微塵もない。

ただ、やるべきことをなしたという満足感と、己が生き残ることが出来たという実感が、とんでもなく巨大な達成感となって私の心を充足させた。

ただ、惜しむらくは私が所属する中隊、その中隊長が有能だったことだ。

もしも上官であるジークマイヤー大尉が無能だったら、私はドサクサ紛れに大尉もろとも中隊副官と自分以外の尉官の者を撃ち殺し、隊の実権を握って、この隊の功績を独り占めにしたいたいと思っていたのだから。

まあ、しょせん私は新兵だ。過ぎた野望は身を滅ぼすことを心得ておかねば、ただの愚か者に成り下がってしまうだろう。

私にも愛国心はある。忠勇なるドイツ軍人を手にかけて、優秀な人材を少なくしてしまうのは本意ではない。まったく、困ったものだ。

私はとりあえず担いでいた小銃を胸に抱いて、トラックの荷台の中で眠ろうと思った。

なにせ戦争直後の疲労がピークに達している状態である。私自身は疲労で倒れてしまうほどヤワな鍛え方をしていないつもりだが、私の知らぬところで私の体が限界を迎えているなんてことも有り得る。休める内に休んでおくのが賢明だろう。

メットを外して、代わりにタオルを顔の上におく。そうして外界の視覚情報を遮断して、騒ぎまくる戦友たちの声をBGMに、心地よい睡眠の中へ沈んでいく

勝利万歳ッ！ 勝利万歳ッ！ 勝利万歳ッ！

勝利万歳。

眠りの中でさえ繰り返されるその文句が、私の魂に刻まれる。

そうだ、勝利万歳。

初めは戸惑っていたけど、今の私にとってこの髑髏の帝国は最高の祖国になっていた。

なにせ勝利に対する渴望と、野望がすごい。

能ある者が上に行き、能無しが下でくすぶる。

まあ、中には能無しが上にいる場合もあるわけだが、それはただ家の力を使っただけのおぼっちゃんだ。私の眼中にはない。

僅か10分。

仮眠としては短い時間。

私は、随分と懐かしい夢を見た。

愚かしく、悩ましいまでに腐り果てた、平和で、平穩で、何の気概も持たぬ劣等が蔓延る国での思い出が 私の【最初の母国】の記

憶が

まるで。私とその存在を忘れる事を許されていないみたいに、呪いのようなしつこさで私の脳裏に記憶が再生される。

「アオスブルフ、ここにいたのか！」

「

不意に、私を呼ぶ声がした瞬間に、私は忌まわしい記憶の中から一気に引き上げられた。

瞼を開ける。そして声のしたほうに目をやると、そこには ヘルガローゼ・フォン・リーゼスクレイヤーという黒髪黒目の女がいた。

切れ長の双眸、スツと通った鼻梁と頬から顎の綺麗な流線と白皙の美貌。

オスならばむしゃぶりつきたくなるようなイイ体をした美女がそこにいた。

ヘルガローゼは普段の落ち着いた佇まいをかなぐり捨て、上機嫌に頬を高揚で赤く染めながら私 アオスブルフ・フォン・シュトライテンに声をかけてきた。

「なんだヘルガローゼ。私はこれから眠ろうとしていたところなんだが」

嘘だ。すでに寝ていた。が、眠り始めてそんなに時間が経っていないことを、私の優れた体内時計は正確に把握していたため、如何にも不機嫌そうにそんな台詞を吐いたのだ。

だが、私と同期のユーゲント卒業生である親愛なる戦友殿は、そんな私の機嫌など気にした素振りもなく、私に起きるようせっついて来た。

「何を戯けたことを。これから戦勝を祝う集まりがある。お前もこい」

「いやだ。……と言ってもお前は私の言葉など聞かないのだろうか……」

「当然だ。来い」

ヘルガローゼは私の腕を掴んで強引に引っ張り起こす。仕方なしにトラックの荷台から降りて、私はヘルガローゼに連行される形で歩いて行った。

ヘルガローゼにとって私という人間は、ある意味で恩のある恩人というカテゴリーに組み込まれているのかもしれない。だから色んなところで世話を焼きたがるのだろう。

私がヘルガローゼに初めて出会ったのは、ユーゲント時代の、なんと男子トイレの中だ。

言わずともわかるだろうが、ヘルガローゼは女だ。ではなぜ男子トイレの中に？ 別にトイレ掃除の当番でもなかったのに。

簡単だ。ヘルガローゼは、とある能無しの男ども5人に組み伏せられ、犯されそうになっていたのだ。いくらヘルガローゼが優れているとはいえ、同じく鍛えられている男複数を相手にするには、まだ未熟だった頃だ。流石に抗えなかったのだろう。

まあ、ヘルガローゼが美人なのはわかる。おそらく私の同期の中で

最も優れた器量の持ち主だっただろう。だが私は価値の合わぬ男女の仲は決して認めない主義で、さらに言うなら美人さんを見捨てられるほど鬼畜でもなかった。だから私は、とりあえず興奮して周りが見えていないオスどもに背後から近づき、ボッコボコにしてあげた。ついでに、軍人として再起できぬように徹底的に叩き潰してあげた。両手とか日常生活でも使えなくなるほどグチャグチャにした。

後に私の家とこのオスどもの家の間に不和が起こったらしいが、どうでもいい話ではある。

学校のほうには、私がヘルガローゼを助けたこと。男たちが私に暴行を働こうとしたので叩き潰したこと（嘘）を伝えたら、あとは不祥事を恐れる校長によって事態はもみ消された。

ヘルガローゼは、男に　それも同期の仲間に強姦されかけたのがショックだったのか、それ以降のヘルガローゼは助けてあげた私以外の男には警戒と嫌悪感を見せるようになった。

……正直、私にも下心はあるわけだし、あの男たちと私とではあまり大差はないのかもしれない。

「おう、来たかシュトライテン！」

「ええ、来ちゃいまいましたよノーウェン中尉」

連れてこられた軍用車に乗り込むと、運転席から無精ひげを生やした威ついオツサンが、私に親しげに声をかけてきた。

彼は、歴戦の古兵だ。私は彼の戦歴と人柄、そして能力に敬意を抱いているから、私が親しく出来る数少ない一人である。どうやら中尉が運転手を務めているらしい。

助手席には、なんと中隊指揮官のジークマイヤー大尉がいた。敬礼

しようとする私とヘルガローゼを片手をあげて制し、「今は軍務ではないから、堅苦しいのはなしだ」と言ってくれた。彼もまた非常に優れた士官である。

銀髪に、青い双眸。十人並みの顔立ちだが、その佇まいだけで他を圧する何かがある。

私が素直に尊敬できる上官だ。私は彼以上に優れた上官を知らない。そして私とヘルガローゼが乗り込んだ後部座席には、ひとりの少尉がいた。

私たちと同期の、イングヒルト・フォン・ガツセナルだ。金髪翠眼、愛嬌のある顔立ちの、どことなく子犬を連想させる、軍人をしているのが間違っているような印象の少女である。

彼女はジークマイヤー大尉の強烈な信者であり、彼さえいたら自分は死なないという妄想に浸っているちよつとかわいそうな子だ。他者に依存する心があるから、私とヘルガローゼに圧倒的に劣っているという事実によく自分で気づいたほうがいいだろう。

「で、これからどこ行くんですか、大尉」

「酒場だ。そこで主だった隊の連中と合流する。安心しろ、俺の奢りだ」

「ひゅう〜 さっすが大尉！ 話がわかる！」

奢りだということを始め知ったらしい中尉が歓声を上げる。だが

「……私たちは未成年なんですが？」

「あ？ シュトライテン、おまえ今いくつよ？」

なぜか驚いたらしい中尉。

それに私は肩を竦めた。

「私たち3人は1918年生まれです」

「ああ？　つてえと、今は36年だから……18歳か?!　マジかよ、特にシュトライテン！　おまえ明らかに18歳って感じがしねえ！」

「私たちとアオスブルフを一緒にしないでください」

なぜか驚愕する中尉に、ヘルガローゼが冷めた声で言った。

「こいつが異常なだけですから」

「……あのな、ヘルガローゼ？　私のどこが異常なのか、詳しく教えてくれないか？」

「確かに、シュトライテンは新兵という感じがまったくしなかったな。むしろそこいらのヤツなんか、鎧袖一触に薙ぎ払いそうな能力がある」

「……大尉まで……」

まるで私が異端みたいな言い方を……

「それを言うなら大尉だって……」

「俺がここまでになるのにはそれなりに時間を掛けた。新兵だった時はお前ほどの能力はなかったよ。それとノーウエン、部下の年齢ぐらい把握している、馬鹿が」

「は、ははは……」

いい感じに話題がそれて、大尉は中尉と話し込み始めた。

それに対してホツとしていると、ヘルガローゼがガツセナルとひそひそ声で言葉を交わしていた。

「流石はユーゲント主席卒業生殿だ。大尉は随分とアオスブルフの

ヤツを高く評価している」

「いいなあ、あたしも大尉に評価されたい……」

「イングヒルトなら出来るさ。もっと自信を持て。自信のない者など魅力的には思われないぞ。大尉をお慕いしているのだろうか？」

「ちよっ！？ ヘルガ？！ こんなところでそれを言わないでえ！
！」

なんか、仲間外れされたみたいで居た堪れない。

なので私は窓際席なのをいいことに、過ぎ去る景色に眼をやった。

ガツセナルとヘルガローゼはいわゆる幼馴染関係にあるらしい、親友同士だ。

私と同じく二人は軍人貴族の出身で、もとは騎士階級の名門である。どういう経緯で仲がよくなったのかは知らないが、二人はとても深い絆があるらしい。

なにやら騒ぎ始める二人を尻目に、私は、気づけば再び眠りの世界へと落ちていったのだった。

第2話「異能」

第2話

「異能」

【 : ヘルガローゼ : 】

私、ヘルガローゼには気になる男がいる。

隠し立てしようにも出来ないだろうから、敢えて私から白状しよう。
その男とは、あのアオスブルフだ。

今、私が所属する中隊は隊長であるジークマイヤー大尉も含めて酒場で大騒ぎをしていて、みんながみんなとても楽しそうにしていた。
戦争に勝ったのだ。嬉しくないはずがない。

そして、ビール片手に大騒ぎしながら、ちゃっかり大尉の傍の席を確保しているイングヒルトを微笑ましく思いながら、私もまたはしゃいでいた。

後になってこの時ののはしゃぎようをイングヒルトにからかわれ、赤面する羽目になるが、とにかく私は嬉しかったのだ。生き残れたことが。無事にイングヒルトとアオスブルフが生き残ってくれたことが。

だから、私は苦手なはずの男連中に囲まれていても、この時ばかりは何の嫌悪感も沸かなかつたし、戦友となった彼らと共に時を過ごすことに歓びを覚えることも出来た。

だが

アオスブルフは騒いでいなかった。

クールを気取って落ち着いているのではなく、どこか冷めた眼で私たちを観察しているのだ。騒ぐ中隊の主だった者たちから離れ、静かな席でひとり、酒を飲んでいる。

それに気づいた私はそっと騒がしい席を離れ、アオスブルフに声をかけようと

「あ………」

ふと、この酒場の看板娘らしい赤髪の女がアオスブルフに関心を抱いたのか、肉料理を片手にアオスブルフの席に近づいて声を掛けた。それに私は思わずといった態で声を上げてしまう。

「んあ？ どうしたんだい少尉さん」

「あ、いや……なんでもない」

私に声をかけてきた男　軍曹に無愛想に応えながら、何気ない仕草で空席に腰を下ろした。だが、何のつもりなのかは知らないが、その軍曹は私の席の前を塞いでアオスブルフの姿を見えなくした。アオスブルフと酒場の娘のやり取りが気になってしょうがない。

アオスブルフという男は、その傑出した能力に比例して女に対する手が早い。

特に自分から声をかけてきた女に対しては神業としか思えない速度でベッドインを果たすことさえある。それを知っている私は気が気でなかった。

長い青髪が隠しているが、実はアオスブルフはかなりの美男だ。すらりと伸びた187cmの長身。極限まで鍛え上げられ、まくられた袖から覗く腕は、一分の隙なく筋肉の鎧に覆われている。

鶯色の瞳は知性を感じさせて、メスであるというだけで惹かれてしまう魔性の魅力のアオスブルフは備えていた。そんな魅力に魅入られた一人であるヘルガローゼは、あの娘がアオスブルフが放つ魔性に吸い寄せられているのがすぐにわかったのだ。

「なあ、ちびちび一人で飲んでないで、おれたちと一緒に飲もうぜ、少尉さんよお」

「ああ……」

「そつだ、少尉さんあんた、今夜はおれと寝ないかい？ 愉しませてや」

「っ！ 悪いが、私は席を外させてもらおう」

酒場の娘が、アオスブルフに連れられて酒場を出た瞬間に、私は咄嗟に席を蹴立てるようにして駆け出していた。後ろから、「ぎゃははは！ ギュルク、残念だったな！ 少尉さんはためえにや興味かねえってさ！」「うっせえ！！」という声が響いていたが、私の耳には届かない。

酒場から勢いよく飛び出して左右を窺う。 いた！

一組の男女が路地裏の物陰に消えていくのを見咎めて、私は即座に駆け出した。

「アオスブルフ！」

「ヘルガローゼ？」

路地裏では、アオスブルフが酒場の娘に対して顔を近づけていくところ。女は頬を高潮させて目を閉じていた。

それに私が悲鳴じみた声を上げると、その女は驚いたように眼を開き、アオスブルフは怪訝そうにこちらを振り返ってきた。

「ねえ、彼女は？」

「私と同期の戦友だよ。気にする事はない」

女の間に、アオスブルフはきっぱりと言い切った。

それにヘルガローゼは言い知れぬ怒りの念を抱くが、事実であるだけに何も言い返せなかった。

「な、何をしている！？ 酒場を抜け出して何をしているかと思えば……なにをするつもりだった！！」

「何って……セックスだけど？」

あっけらかんと言い放たれ、むしろ困ったのは私のほうだった。

酒場の娘は赤かった頬をさらに赤く染め、アオスブルフは困惑したように私を見た。

「あー……なにか誤解しているようだが、別に私が彼女を口説いたわけでも、彼女が私を誘ったわけでもない。私たちは交際しているんだ。久しぶりに会ったから、ちょっと先走っただけ」

「え……」

その言葉に、私は驚愕する。

交際している？

アオスブルフと、あの娘が？

思わず声を漏らすと、女のほうは肯定するようにつなずいた。

「だから、ヘルガローゼが考えているような不純な関係ではない。安心しろ」

「あ、ああ……」

あまりにも予想外の台詞に、私の頭は真っ白になった。

「ほら、酒場にもどれヘルガローゼ。私も久しぶりの昂ぶりを静めたら、すぐに戻るから」

「わ、わかった、戻ってる……」

私は、驚きの抜けぬまま、呆然としてふらふらと踵を返す。

踵を返したあと、背後からアオスブルフと酒場の娘のイチャつくような声が聞こえ始めて、私は逃げ出すように走り始めたのだった。

酒場には、戻らなかった。

【 :アオスブルフ: 】

「彼女……」

「ああ、私に好意を抱いているよ」

赤髪の女 アンナ・マリア・シュヴェーゲリンのなにか含むような声に、私は即座に答えていた。

ヘルガローゼが駆けて行くのを見送り、深々と溜息を吐いての台詞だったからか、アンナは面白そうに笑った。

「フランメ……相変わらずモテモテねえ？」

フランメというのは、私の愛称のようなものだ。由来は、私の名がアオスブルフという【噴火】を意味する言葉で、それにちなんで、フランメは【炎】を意味する。

アンナのからかいに、しかし私は平然とうなずいた。

「当然だ、一流の男にはいい女が寄ってくるものだ」

「あら。そのいい女っていうのに、わたしはちゃんと入ってる？」

「まあな。しかし私としてはあまりお前とは関係は持ちたくないが」

「あら、どうしてえ？」

毒女のような、歪むような笑み。

それを浮かべるアンナの顔を一瞥し、私は吐き捨てた。

「お前が【魔術師】とかいうふざけた奴だからだ」

先程はヘルガローゼを『嘘』で追い払ったが、実際の私たちの関係はそんなに甘ったるいものではない。

正直、アンナを抱こうものなら性も根も尽き果てるだろうと確信しているから、抱きたいとは思わない。魔術師と性交するというのは、死んでもいいという覚悟が必要だ。

私はまだ死にたくないのだ。

私がアンナとそれらしい演技をしていたのは、もしも私がアンナと話しているのを見られた時のための予防線だ。

私とアンナが知己であるというのは、あまり知られたくない。特にヘルガローゼには。

「……そろそろその気色悪いポーズはよせ。顔を赤らめるな」

「なによ、そういう風に演技してろって言ったのあなたのほうじゃない。あ、そうか」

にやりといやらしい笑みを浮かべた魔女に、私はアンナが何を言おうとしているのかを察して溜息をつく。

「もしかして、フランメ？ あの娘に惚れてるでしょ？」

「馬鹿な……」

失笑すらこぼしながら、私は迷いなく即答した。

「私がヘルガローゼに惚れている？ 逆はあっても、私から惚れるなんて事は有り得ないよ」

ニヤニヤと意地悪い笑みを口元に刷く魔女に私は言い切って、逸れていた話題を修正するべくアンナを糾した。

「ヘルガローゼの事はいい。それより、なんで古代遺産継承局……アーネンエルベ所属の人間であるお前が、酒場の看板娘なんて無理のある設定で潜り込んでいる。訳を言え、訳を」

「あらひどい。わたし、あなたのためにわざわざベルリンから出張ってきたのに」

私のため？ 甘ったるい声と態度で甘えてくるアンナを邪険に振り払い、私は再度失笑した。

……戯言を。モルモット程度にしか見ていないだろうに。

「で、いい加減に私の【異能】の秘密は解けたか？」

私とアンナの関係をつなぐ唯一の話に話題を転ずる。いい加減に本題に入りたかったのだ。

なにかの暗号か、それか頭がおかしくなったとしか思えない台詞に、しかしアンナはどことなく悔しそうに首を振った。

「いいえ、まだよ。仮説は立てられたけど、原理は不明。……まったく、ふざけてるわよ。なんで魔道のマの字も知らないようなあなたに、【発火念能力】ハイロキネシスなんてものが宿ってんの？」

「……それは私が知りたいよ」

私とアンナが出会ったのは、私が士官学校に通っている頃だ。たまさかベルリンの市街を歩いていると、この貴婦人然とした長身赤毛の美女、アンナに声をかけられたのだ。

『あなた、面白い異能を持つてるわね？』

と。

私がこれまで隠してきた秘密をあつさりで見破り、あまつさえ、

『それ、わたしに調べさせてくれないかしら。大丈夫よ安心して、危険なことなんて何もしないんだから。もしもあなたが望むなら、あなたのそれ、わたしが取り除いてあげるわよ?』

と誘惑してきたのだ。

正直、私はパイロキネシスとか言う異能の存在が、私が人間ではない別の何かであると錯覚させるようで、嫌悪感しか抱いていなかった。

だから得体の知れない……しかし一目見ただけで私の異能の存在を見抜いた女に興味を抱き、知己の間柄になってしまったのだ。

正直に言うなら、後悔している。

今すぐにも縁を切りたい。

「で、その仮説だけど、聞く?」

「ああ」

「そ。あなたのそれは、おそらく精神力に直結しているの」

精神力?

いまいち理解できないが、ここは余計な横槍を入れて話を長引かせないために、私は黙って先を促した。

「精神が高揚している状態で放つと、多分平常のときのそれより威力は上がるわね。しかも異能を使ったからって精神が磨り減るとか、生命力が低下するとか、そういうた代価もないみたい。ふざけてる。あくまで予測だけど、あなたの炎は魔的なモノを被い焼く効果もあって、わたしみたいな人間にとって天敵みたいなもんよ」

「……」

だからどうした、としか言いようがないのだが。
私は魔術とか、その道での戦いとかまったく興味ないから、そんなことを言われても返答に困るのだ。

「ねえ、あなたわたしに解剖されてみない？　きっと原理を見つけ出してやるんだから！」

「ふざける。そのまま標本にでもするつもりだろうが」

吐き捨てつつ、私は左手で胸ポケットから煙草を取り出しつつ、右手を持ち上げて念じた。

シュポツ！　と紅蓮の炎が右手首より先に灯って、異能が発揮される。

それを使って煙草の先に火をつけて、煙草を口にくわえた。

「そういえばさ、あなたって今まで一度でも火傷とかしたことある？」

「ない」

ちらり、と【炎】^{フランメ}に包まれた右手を一瞥し、言う。

「どういうわけだか、私には火の類が通用しない体質でね。小さい頃、試しに自分の家を燃やしたことがあるが、熱いと思った事は一度もないよ」

「なにそれ。家燃やしちゃったんだ。……それでも熱いとも思えないなんて、火の神の祝福でも受けてるのかしらね……。……ああもうおっ！　腹立つわねあなた！」

「知らんよ。なんで私がそんなのなんて、私のほうが知りたい。知りたいから胡散臭い魔術師に頼んだのに、分からずじまいか」

そろそろ縁を切ってもいいだろう。アンナといたって事態の真相が分かるわけではないみたいだし。

その考えが表情に出ていたのか、アンナは不機嫌そうに唇を尖らせた。

「……無理矢理捕まえてやるのかしら」

「やるか？ 返り討ちにしてやる。私はお前のような奴にとっては天敵なのだろう？」

「……やんないわよ。何が悲しくてか弱い乙女のわたしが、生身で10点の怪物とやり合わなきゃならないのよ……」

10点？ それは高いのか低いのか……

「高いわよ。普通人がそこまで行くなんて、冗談にしか思えないわ。いい？ 時々いるのよ、武道も魔道も知らずに、環境だけで生まれる【人間獣】が。……言葉遊びするなら【外道】ってやつかしら。

でもあなたは獣じゃない、人のまますの限界値まで行っている」

「鍛え甲斐のないことを言うなよ……」

人の限界値とか……冗談きつい。

もしもそれが本当なら、これ以上私が鍛錬を積んでも成長しないということではないか。

「あつきれたあ……。まさかなに？ まだ強くなるつもりなの？」

「努力を諦めた人間に生きる価値はない。それともなんだ、お前はその努力をやめた人間か？ だったら心底軽蔑して嘲弄してやる。

ついでに二度と私の前に現れる気がなくなるようにもしてやる」

「お断りよ。わたしみたいな魔道に行く者はね、努力をやめた瞬間に落ちぶれる運命にあるんだから」

「それを聞いて安心した。お前は私の友たり得る者だよ」

「ありがと。あんまり嬉しくないけど。じゃあねフランメ、また会いましょ」

「縁があればな」

そう言つて、私とアンナは再会の約束をするでもなく、無造作に別れたのだった。

しかし……ヘルガローゼとの関係はもう期待できないな。下手な嘘なんか吐くんじゃなかったよ……。

第3話「ポーランド侵攻」

第3話

「ポーランド侵攻」

1939年。9月20日。

【 :????: 】

この日三度目の強襲を退けた時、ドイツ軍、第35自動車化狙撃兵連隊第2中隊第3中隊の陣地は、阿鼻叫喚の地獄と化していた。

敵戦車の侵入を防ぐため、敢えて幅を狭く取り、壁面を入念に補強した塹壕には、敵味方の兵士たちの遺体が堆く積まれている。

中隊指揮官のジェリド・メッサーラ中尉は絶望的な気分を味わっていた。

生き残っている兵士は50名で、正規人員の約4分の1。

敵との近接戦闘を連日のように繰り返しているのだから、当然の結果といえる。

(もう一度戦えば全滅する……)

昨夜から天候が急激に悪化、地表では吹雪が吹き荒んでいて視界は500メートルもない。

ジエリドは選択を迫られていた。

後方の予備陣地に引くか、全滅を覚悟して此処に留まるか。

中隊司令部との連絡は既に途絶しているため、現地指揮官の判断として撤退できないわけではない。

（だが……そんな事をすれば反革命罪で収容所送りにされる……畜生、みんな……！）

寒さと恐怖に奥歯を震わせながら学生時代の友人たちを思う。みんな、自分と同じように徴兵され、今では行方知れずだ。

「中隊長、来ました！ 敵軍、数は5000以上っ！」
「……ッ……！」

吹雪に霞む視界の向こう、雪原を埋め尽くさんばかりに転がる無数の敵死体。

それを乗り越えるように、5000以上の歩兵と30近い戦車が迫る。

歩兵の大半はただの肉壁だ。銃を持たされず、ただ銃弾のみを渡された死兵。

銃を持たされた者は運がよく、持たされなかった者は行き先で墮ちている銃を拾わねばならない。

だが、その数は圧倒的で、いくら質で勝るドイツ軍といえど数の暴力には抗い難かった。

「射撃開始！ 戦車は後方部隊に任せておけばいい！」

号令と同時に、連続した射撃音が耳をつんざく。中隊火力の根幹をなすNSV重機関銃が

弾幕を張り、残弾僅かな迫撃砲が惜しげもなく放たれていく。

後方からも轟音が連続する。陣地に格納された戦車小隊が射撃を開始したのだった。

赤黒い体液をまき散らしながら、次々と弾けとんでいく敵歩兵。しかし敵は怯みながらも前進を続けている。逃げると、後ろから撃たれるとわかつているのだ。

NSV重機関銃の装填手と観測手だった兵士たちが、一斉に銃剣付きのカラシニコフを掴んだ。数秒と経たず、敵歩兵が塹壕に到達。

「来るなあッ！ この糞野郎どもめえ！！」

ジェリドは叫んだ。

損害が続出している事は理解しているが、現状では何の手も打てない。

彼自身の真上にも敵歩兵が押し掛かり、右腕が空を斬って迫る。だが、反射的に自分から倒れ込み、数センチの差でその一撃を躲す。

「喰らえ劣等おおおッ！！」

敵に銃弾を叩き込み敵歩兵の体を粉碎する。

だが、一瞬後、鈍い金属音と共に突如引き金が固まる。

「弾詰まりだと……！？ そんな、」

頑丈さが売りのカラシニコフが故障するとは

表情を凍らせた直後、腹部に強烈な衝撃を受け、ジェリドは地面に叩きつけられた。

「が はっ！」

意識が飛ぶほどの激痛。口から血が吐き出される。砕かれた肋骨が内臓に突き刺さったのかもしれない。

なにで殴られた？ そんな事さえも理解できなかった。

彼を助ける者は誰もいなかった。みんな敵歩兵との格闘戦に巻き込まれ、無残にも殴り殺されたり銃を奪われて蜂の巣にされたり、最期を迎えようとしている。

「そんな……そんな……」

ジェリドは死の恐怖に全身を震わせながら、迫りくる敵兵を見つめた。

どこからか、つんざくようなエンジン音が響き渡ったのは、その時だった。

（この音……オートバイ中隊……！）

絶望に染まっていた心に一筋の光がともる。

（奴らが支援してくれるなら……）

敵の血と自らの血でぬかるんだ塹壕の中を必死に這い、オートバイ中隊の機影を薄曇りの大地に探し求める。

数秒後、ジェリドは目撃した。

数百機の機動兵器　ドイツ軍のオートバイ中隊が、自分たちを気にする素振りもなく、自分たちを素通りしていくのを。

「そんなっ！　なんで！」

ジエリドは半狂乱で叫んだ。

「なんで助けしてくれないんだよぉッ!? どうして、どうしてえええ!」

次の瞬間、ジエリドは背後から近づいてきた敵歩兵に、後頭部を強打され、永遠に意識を失った。

ジエリド・メツサーラ中尉は知らなかった。

あの編隊が、友軍を見捨てる事を厭わぬ部隊だった事を。

そしてそれゆえに、「選別」ソートルング中隊という忌むべき通り名を付けられている事を。

彼らは、SS師団ライヒオートバイ兵中隊「トイフェル悪魔」と呼ばれていた。

【 :ファルエル: 】

【いつものとおり】、耳には救援要請の声が次々と舞い込んできていた。

エンジンの音が鼓膜を震わせる中、SS師団ライヒ オートバイ中隊第1中隊の兵士、ファルエル・シュミット少尉は、硬い表情を変えることなくアクセルをまわし、オートバイの速度を上げた。灰色の空に白く覆われた大地。焼け爛れた森林と雪原に転がる敵の死骸。後方を振り返れば、敵と死闘を繰り広げる友軍の陣地を見る事が出来るだろう。

『 トイフェル01より中隊各員。傾注！ 』

不意に、ヘッドフォンを通して腹の底まで響く冷徹な声が鼓膜に響いた。中隊長を務める、アオスブルフ・フォン・シュトライテン大尉だった。

『 間もなく敵と接触する！ が、各員は陣形を維持せよ！ 』
『 16、了解 』

他の隊員たちの応答に重ね、感情を込めずに答えた。

SS師団ライヒ オートバイ中隊は20機のオートバイ兵で編成されている。

中隊の定数は40名だが、損耗の激しいオートバイ部隊が定数を満たしていることが珍しかった。

そのため中隊は前衛の8機を、指揮官を先頭に楔形の陣形に展開、残り12機を後衛に配置する陣形をとっていた。これがもっとも切り込みに適した陣形だったのだ。

（たった20人そこから敵大軍に突っ込んでいく……いつも通り無茶な任務だぜ）

ファルエルは重い息を吐いた。これから挑む戦いへの心理的重圧がかかる。

ここ数日、SS師団ライヒ オートバイ中隊は、川東岸から連日のように発起される軍団規模の敵勢の攻勢を食い止めるべく、敵軍の奥底まで突入して敵戦車を排除する任務 ファイント・ヤークト 敵軍呐喊に参加していた。

今、中隊は戦車に最短距離で肉迫するべく、西進している敵軍の左翼へと急進している。

吹雪は一段と強くなってきており、視界状況は最悪に近い。状況の厳しさに胃が締め付けられるような気分だった。

新たな救援要請の声。別方向から敵軍へ突入していたオートバイ中隊が、敵戦車の砲撃を受け、地上で身動きが取れなくなっているらしい。このままで全滅するのは確実だった。

『 馬鹿が。部隊間距離を詰め過ぎだ 』

侮蔑するようにアオスブルフの副官 ヘルガローゼ・リーゼスクレイヤー中尉が呟いた。

戦力の分散に繋がる、という理由で前衛と後衛の距離を取らない中隊も多いが、そんな事をすればオートバイの特性 機動力を損なうだけだ。それがわからない無能の下についている奴らが哀れである。

『 中隊長、救援要請が、
要請は却下する 』

ヘルガローゼの上伸にアオスブルフは感情の揺らぎを見せずに応じた。

『 反転すれば任務遂行が困難になる。見捨てるしかあるまい。我々にはより多数の命を救う義務がある』

『 02了解。 総員、聞いてのとおりだ。中隊はこのまま前進を続ける』

ポーカーフェイスを装いながら、不愉快な気分を覚える。

中隊長の冷酷さが気に障ったわけではない。「より多数の命を救う義務」などという綺麗事を、建前のためとはいえアオスブルフが口にした事が原因だった。

『 方位010に敵軍を確認。数は1500以上!』

ヘルガローゼの切迫した声に、注意を眼前へと向け直す。

全ての敵が西へと向かっている。大部分は歩兵だが、まばらに自動車やバイクの姿もあった。

戦車の姿こそ見えないが、情報が正しければ、あの敵集団の背後に群れているはずだ。

『 時にヘルガローゼ、こんな小話を知っているか?』

アオスブルフは突然、天気の話をするような気軽さで尋ねた。

『 どのようなものですか?』

『 ベルリンのとあるラジオ放送にこんな質問が届いたそうだ。

『 外国人の死骸は食べられますか?』と』

『 それはまた……随分と猟奇的な……』

『 今、本国では食糧の量に問題があるからな。中には「敵は食べたいんじゃないか」と考える変態が出てくるのもおかしくはない。 答えはこうだ。』とてもまずくて食べられません。 あ

「あなたがイギリス人でもない限り」

兵士たちの一部から失笑が漏れる。

イギリス軍のレーションの不味さは、ドイツ将兵の間でも有名だった。

笑いを収めながらヘルガローゼが応える。

「これだけの数だ。あの島国に輸出したら、さぞ喜ばれるでしょうな」

ファルエルは表情を変えなかった。アオスブルフがの小話が、厳しい状況の中で戦闘に突入する兵士たちの緊張や恐怖をほぐすためのモノだとわかっていたからだ。

アオスブルフが口調を切り替え、号令を放つ。

「トイフェル01より中隊各員へ。まずは針路上の敵軍を引き剥がす！」

「了解！」

「今だ、行くぞっ！ 各員、射撃開始！ 目標、前方敵集団！」

アオスブルフの号令と同時に、前衛が射撃を開始する。

同時に彼方の敵歩兵が内臓物をまき散らしながら 自動車やバイクが粉碎されていく。

弾けとぶ肉片と金属が、純白の雪原に奇怪な色彩のオブジェを林立していった。

横からの強襲とあって、面白いように敵を撃破していく。その様にファルエルは哄笑した。

直後、周囲の敵軍が一斉に変針、ファルエルたちに向かって突進し

てきた。雑な統率の下の雑然とした反応だった。

（来やがった……！）

『可能な限り連中を引き付ける　各員、右折しながら射撃継続！』

「喰らいやがれ、クソ野郎ども　！！」

怒声とも、悲観とも取れる絶叫が響き、同時に中隊からは敵を侮蔑する声が上がっていた。

所詮は劣等。おれ達の敵じゃあ、ないんだよ！

しかしその高揚は長続きしなかった。

その空気を破砕するのに充分なヘルガローゼの大音声が響き渡る。

『中隊長！　後方から新たな敵影多数！　自動車化の集団が接近中！』

『！』

『数は……2000以上！　距離は1200、1000……60秒後に接触ッ！』

（畜生、数だけは有りやがる……！）

咄嗟に後方に振り向きながらファルエルは罵り声を上げそうになった。

『中隊各員、前衛は自動車に対して命令あり次第攻撃を開始！　後衛は前衛付近に後退、前衛を援護しろ！』

アオスブルフは素早く決断を下していた。

突発事態にも関わらず、全く動揺を見せていない。

だが、それに反発する声が上がった。後衛の一人からだ。

「何を考えているのですか、大尉！？ もうこの場にいる意味はないのではッ？」

「連中を潰せば、それだけ陽動の効果も上がる！ 相対的に弾薬と時間の消耗を抑えられる！」

「私たちにそんな余裕があるわけ」

「自動車を味方陣地に向かわせるわけにはいかない！ それに、我々を追ってきた場合、敵戦車掃討時に背後を襲われる可能性もあるッ！ ここで潰すぞ！」

(くそっ、やるしかないのか……！)

ファルエルは操縦桿を握り締めた。これほどの数の敵を、劣悪な視界で迎え撃つのは初めてだった。

砲撃戦で食い止められるかは、やってみなければわからない。

「連中の足を止める！ 弾種18mm散弾(キャニスター)、斉射3回、撃てエッ！」

小銃から甲高い炸裂音が轟くと同時に、拡散された銃弾が間近に迫った自動車に吸い込まれていく。

散弾の弾片の嵐が、敵の先頭集団を包み込む。着弾と同時に多数の自動車が全体を切り刻まれ足を止めた。殆どの個体は行動不能となったのは明らかだった。

後続する敵軍も損傷した自動車を避けるべく、進路を強引に変更した。隊列が乱れ、集団全体の行き脚が大きく鈍る。

(これを狙っていたのか……！?)

「各員、7mmで射撃開始！ 連中が態勢を立て直す前に殲滅しろ！」

「っ！? このおおおッッッ!」

ファルエルは雄叫びを上げながら7mによる射撃を開始した。炸裂音とともに無数の弾丸が砲口から吐き出されていき、自動車の破片と雪混じりの土砂が舞い上がり、待機を奇怪な色彩に染めた。

敵軍の接近は続いていた。その数は視界だけで1000を超えている。

中隊は応戦しているが、このままでは食い止められなくなるのは明らかだった。

まずい　そう、ファルエルが限界を感じ始めた時だ。

『　総員、傾注！』

断続的な砲声の中、ついにアオスブルフが声を張り上げた。

『　これにて陽動攻撃を打ち切る！　敵軍に向けて突撃開始！

遅れるなよ、私に続けえっ！』

『『『　了解！』』』

20人　いや、いつの間にか1人が減って19人になっていた隊員たちが応答する。

陽動で引き剥がしたとはいえ、目の前には未だ数万を超える敵の肉壁が残っている。

自分たちは、その隙間を潜り抜けて、戦車を潰さなくてはならない

【 …???:??:… 】

「 SS師団ライヒ オートバイ中隊、敵軍に向けて突入を開始した模様です」

オペレーターの報告と同時に小さな映画館ほどの室内に、くぐもつた溜息がこぼれた。

「これで、四個中隊全てが突入した事になります」

再びの溜息の連鎖。誰もが、戦況をどう評価すればいいの迷っているかのようだ。

前線から30キロ以上後方に置かれた基地の戦闘指揮所に集う面々の視線は、壁面の巨大な戦況表示用プロジェクターに注がれている。

「突入成功率は？」

「70パーセントです」

その場の微妙な空気を代弁するかのように、ベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン准尉が平坦な声で呟いた。アップで纏めた金色の髪型の下に、凜とした顔があった。

「判っていた事だ、キルヒアイゼン」

「ちゅ、中尉？」

ベアトリスは慌てて背後を振りむいた。

エレオノーレ・フォン・ヴィツテンブルグ中尉　この基地に展開する戦車部隊、SS師団ライヒ　砲兵連隊第1大隊所属の小隊指揮官だ。

本来ならばベアトリスとエレオノーレも前線で指揮を執るはずだったが、エレオノーレは乗り込むはずのティーガー戦車の調整が遅れたため、ベアトリスはそんなエレオノーレの補佐官として、ここに残っているのだった。そのふたりの顔には、戦いたくとも戦えないもどかしさが滲んでいる。

特に、初陣を飾るはずだったベアトリスは無念そうだった。

「我々は損害を覚悟して連中を送り出している。それに耐えるのも我々の仕事だ」

エレオノーレが傲然と言い放った。

「貴様は戦況をどう見る」

エレオノーレは周囲に聞こえる声で尋ねた。彼女はベアトリスとの会話で、戦況判断を伝えようとしているのだ。此処にいる士官のほとんどは基地要員であり、実戦に詳しいわけではない。

「敵軍呐喊の行方にかかっています」

ベアトリスは淀みなく答えた。

「現在、わたしたちの前線は危機的です。特に地上部隊の損害が深刻です」

プロジェクターには戦場である川西岸の、三つの要塞陣地の概略が表示されている。

「連日の戦闘により、三つの要塞陣地の損耗率は6割に達していません。残り4割の兵力も、最終防衛線である第二次予備陣地に転進しつつ戦いを継続している状態です。この状況を逆転するには、敵戦車を殲滅し、砲兵射撃と航空攻撃を行うしかありません」

「失敗した場合は？」

「各部隊を再編成し、再度、敵軍呐喊を行います」

実際にはそれがどれだけ無謀であるかは承知していた。

敵軍呐喊に参加したオートバイ中隊は、間違いなく戦力を消耗しており、兵士たちの疲労もピークに達しているとなれば、結果はおのずと知れる。

しかし戦車を撃滅出来なかった場合、選択肢はそれしかない。数個の部隊の全滅で前線が死守できるなら、軍事的には十分に許容できる。

事実、そうした部隊の捨て身攻撃によって、前線の崩壊が免れたという事例は数知れないのだ。

「敵戦車に最も早く接触する中隊は？」

「SS師団ライヒ オートバイ中隊です。SS師団ライヒ オートバイ中隊は左翼の先鋒として敵軍に突入しています。おそらく、既に攻撃を開始していると思われる」

「……頼りになるな、彼らは」

「はい、伊達にSS師団最強と言われている」

SS師団ライヒ オートバイ中隊「悪魔」^{トイフェル}は、新鋭、アオスブルフ・フォン・シュトライテン大尉の指揮の下、実戦での精強ぶりを発揮し続けている。

その練度はSS師団の中でも最高であり、それが最強と言われる所以となっていた。

だが、彼らを好意的に見る者は少ない。特に前線の兵士からは蛇蝎の如く嫌われている。

その理由は、当人たちでもどうしようもない原因によるものだ。

「今は、彼らの勇戦に期待するほかない、か……」

既に四個中隊は敵軍に突入している。ここで出来るのは、作戦の成功を祈る事だけだ。

ベアトリスはエレオノーレの横顔を見つめ、そしてとある予感を抱いた。

エレオノーレの視線はSS師団ライヒ オートバイ中隊を示すアイコンに向けられたまま、外される事はなかった。

【 :ファルエル: 】

視線を全周に巡らせながら、ファルエルは大きく息を吐きだした。視界に映るのは布陣したオートバイと、それを取り囲む無数の敵群。敵歩兵が腐肉に集る蠅のように全方位から接近してくる。

まるでゾンビだ。ファルエルはそう毒づく。殺しても殺しても湧き出てくるその様は、本当にしつこくて嫌になる。これだから劣等は。

(戦車は壁の向こうか……！)

ファルエルは奥歯を噛み締めた。

敵の群れに包囲されているため後退射撃は不可能。だからと言って、戦車の予想位置に突進する事も出来ない。

敵群れを盾としながら、中隊連携で一穴を穿ち、一拳に戦車の懐に侵入しなければならぬのだ。

(……こんなところで、死んでたまるか！)

避けがたい死への恐怖と湧きあがる闘争心。ファルエルは唇の端をきつく吊り上げた。

『総員、傾注！』

アオスブルフの張り上げるような声が達する。

『これより中隊は敵戦車掃討を開始する！ 前衛は突撃路を開き、後衛は背後を守りつつ支援砲撃、連中をぶつ殺す！ 「悪魔」ども、突撃にイ、移れエエエツツッ！』

アオスブルフの号令のもと、SS師団ライヒ オートバイ中隊第1中隊は、一気呵成に目標への突撃を開始した。

真っ先に動いたのはアオスブルフだった。他の隊員に先駆けて雪原を突進していく。後方にはヘルガローゼが続く。

ファルエルはヘルガローゼの左後方に位置した。視界には既に四台以上の戦車が、100人余りの歩兵を伴いながら楔状に突出しつつある。

アオスブルフは近くをすれ違った部下にパンツァーファウストを受け取った。

『 斬り込むぞ、ヘルガローゼ！ 援護しろ！ 』

アオスブルフはどのような状況であっても先陣を切る。

侮蔑家のファルエルとしても、その勇猛果敢さだけは認めざるを得なかった。

『 はああああっ！ 』

アオスブルフは戦車集団の数十メートル手前に接近、オートバイの車体を巧みに操り、銃撃を躲しながら瞬く間に戦車の真横を取った。そして

『 私のケツを舐めてみるおおおツツ！ ！ 』

器用に片手だけでパンツァーファウストを操り、戦車のうち一台を撃破した。

一瞬、爆風に煽られて敵が怯む。その隙にアオスブルフに続かんと次々と隊員たちが戦車を撃破していく。アオスブルフが腰の長剣を引き抜いた。

出るぞ、とファルエルは興奮に目を尖らせた。

アオスブルフとヘルガローゼは危なげなく愛車を操って、敵歩兵の陣形を斬り裂くように疾駆し、アオスブルフは長剣を左右の手に器用に持ち替えながら揮う。その度に敵歩兵の首や腕が舞い、ヘルガローゼの小銃が火を吹く度に敵兵は無様なダンスを踊った。

すれ違いざま、アオスブルフが刃を翻す。ヘルガローゼの銃撃が轟く。

敵兵の皮膚が裂け、一瞬で胴体が切断される。バイクの加速力を巧みに利用した斬撃に、一瞬遅れて張られた弾幕に踊らされる様に、ファルエルは戦慄に背筋を凍らせた。

(畜生、上手い……！)

支援砲撃を加えながら、ファルエルはふたりの機動に舌を巻いていた。

この攻撃が最も優れた能力を持つアオスブルフとヘルガローゼの2人にしかできない事を知っているのだ。

19名の連携により、敵戦車の群れは60秒も経たずに全滅した。新たに接近しようとする敵影もない。

『こちらトイフェル01！ 総員、傾注！』

アオスブルフの号令 当人はファルエルたちの背後で、ヘルガローゼたちと共に残存する敵兵への突進を開始しつつ、銃撃を叩き込んでいる。

『戦車の掃討を完了した、これで全ての戦車集団が全滅した事になる。よって、これより離脱を図る！ 続けえ！』

『了解……！』

終わったのか　ファルエルは強烈な安堵を感じた。

…！）
（このまま無事に離脱できれば、俺は今日も生き残った事になる…

戦車が全滅した以上、このまま敵軍の中を一気に突破して離脱することが最良のはずだった。そして、これが最後とばかりに周囲に群れる敵軍に注意を向けた　その時。

『　避けるおッ！』

「　　」
ヘルガローゼの絶叫が響き渡った瞬間、ファルエルは突然自らに襲いかかった衝撃に思考を手放してしまった。

傍から見れば間抜け極まりない。

バイクのアクセルを吹かそうとしていたファルエルが、右の横合いから敵歩兵の体当たりを受け　呆気ないほど簡単に突き飛ばされたのだから。

『　ふぁ、ファルエルううツツ！？』

ヘルガローゼ　ファルエルの指導係だった女の絶叫が再び達すると、同時に宙に舞ったファルエルの体が地面に激しく叩きつけられ、意識が暗転した。

「　　」

時間の感覚が消える。

やがて意識が溶け始めるのがわかった。

気がつけば、ファルエルは誰かの背中に担がれていた。どうやら味方に助けられたらしい。

ファルエルの視界から敵が急速に遠ざかり始める。

彼方から迫る甲高い音響。それが、川西岸から放たれた多数のロケット弾の飛翔音である事に、ファルエルは着弾の瞬間まで気付かなかった。目の前の現実が思考を一時的に麻痺させていたのだ。

紅蓮の炎に包まれる地上を背にしながら、SS師団ライヒ オートバイ中隊「悪魔」は戦場を離脱した。

【 :アオスブルフ: 】

上空から見る川西岸は、地獄と見違えんばかりの光景と化していた。雪原を埋め尽くす敵味方の死骸。そこから流れ出した体液は雪原を赤黒く染めるばかりか、多数の湖に流れ込み文字通りの血の池を生み出していた。

「（随分と遅いお出ましたな……）」

私は航空戦力の雄姿を見上げながら、ささくれた気分で呟いた。

電撃作戦の要である航空戦力の投入のタイミングを、完全に逸している。どうやら本作戦のドイツ側の指揮官は阿呆らしい。無能の下に配された我が身を哀れむしかなかった。

ファルエルは変わり果てた姿となっていた。

四肢が折れ曲がり、あらゆる方向を向いている。特に悲惨なのは頭部だった。

そこにファルエルの面影は残っていない。鼻先から顔面そのモノが粉碎され、口からは血の泡を吹いている。

頭蓋が割れているらしく髪の毛まで血塗れだ。正視に耐えられるものではない。

(あんな倒れ方をすれば、こうもなるだろうさ……)

私は冷めた思考でそう思った。凄惨な情景が目の前にあるにもかかわらず、何も感じない。感じる事が出来ない。

一瞬だけ息をのんだヘルガローゼが、意を決したように近づいてファルエルの様態を確かめる。数秒後、ゆっくりと振り返り首を横に振った。

「手の施しようがありません。もって30分、いや、20分程度……」

「……そうか。わかった」

私は頷くと、ファルエルの血塗れの耳元に顔を近づけ何かを呟いた後、ゆっくりと身を離す。

それから右手に持っていた指揮官用の拳銃、ワルサーPPKを構え銃口をファルエルの眉間に突き付ける。

「総員、傾注」

私の声に感情は籠っていないかった。

「ファルエル・シュミット少尉は重傷を負い、余命幾ばくもない。基地までは保たない。よって、ここで慈悲の一撃クー・ド・グラスを加える」

慈悲の一撃 トドメの一撃。

私はファルエルの苦しみを長引かせないために、この場で彼を射殺すると宣言しているのだった。

「 ちょ、ちょっと、待ってください……」

震える声でファルエルの恋人がアオスブルフに尋ねる。

「ファルエルは生きてるんですよ?! き、基地にたどり着けば…

……」

「……彼を苦しませる事は、お前も望んではないだろう」

「で、でも! なんとかなるかもしれないじゃないですか!」

「……出来る事は何もない」

「 しかし……!」

「安心しろ、私がやる」

「……」

「5秒やる、目をつぶれ」

5秒後、乾いた銃声と、湿った何かが飛び散る音が雪原に響き渡った。

「……ファルエル・シュミット少尉の？戦死？を確認しました。時刻は16時18分です」

「……よろしい」

そう言つて、アオスブルフはファルエルの前に膝をつき、目を瞑らせた。右手を自分の胸元に近づけ、十字を切り一瞬だけ瞑目する。

これで、私が手に掛けた部下の数は、ちょうど10人だ。

部下にも恨まれているだろうな。そんな風に思いながら、私は通夜のように暗い雰囲気の中隊を引き連れて、基地へと帰投していくのだった

時は1939年10月の6日。ポーランドはドイツに降伏した。

第二次世界大戦。その切欠とされる「ポーランド侵攻」。

髑髏の帝国は、世界を相手に戦端を開いたのだった。

閑話「白い吸血鬼と女装の殺人鬼」

閑話

「白い吸血鬼と女装の殺人鬼」

【 …???:… 】

「ハッ、ハッ、ハッ、ハアッ……！」

ピー、ピー！

甲高い警笛の音が夜の街に響き渡る。

「居たぞ、あそこだ！」

「チイツ、こつちもか……！」

黒い制服に身を包んだ男が手にするライトが、襤褸キレのような薄汚れた服を纏う白髪の青年の姿を照らし出し、青年　　ヴィルヘルム・エーレンブルグは忌々しそくに舌を鳴らす。

ヴィルヘルムは追われていた。国家の暗部を司る、恐るべき国家の異端審問官　　秘密警察ゲシュタポの実行部隊に。

その追跡は執拗であり周到。ヴィルヘルムの巢とも言える路地裏、その複雑な迷路を正確に把握し、振り切ったと思えばすぐに次が現れる。

「クソがあ！」

自然、ヴィルヘルムの苛立ちは臨界を振り切っていた。

此処は俺の巢だ。夜の王である己が、なぜ公僕ごときにこうも追い立てられる？

なぜ、俺は逃げてばかりでいる？

「逃がすな、追え！ 国家反逆の危険分子だ、殺してかまわん！」

殺す。

この身に追いつがる公僕どもがこちらを殺すつもりなら、こちらだつて殺し返してやるうではないか。

まるで犬畜生か何かのように追い立てられる屈辱が、ヴィルヘルムに決断させた。

これ以上は我慢がならない。そも、我慢する必要はない。

ヴィルヘルムは曲がりくねる路地裏を右折し、自身の姿を3人の追っ手の視界から一瞬だけ隠して、次の瞬間には高々と跳躍していた。バレエダンサーとしても通用しそうなしなやかな長身が、夜の空を舞う。

「しつけえっ！」

ヴィルヘルムを追って右折してきた公僕どもの頭上から、白い吸血鬼は罵声と共に襲い掛かる。

一瞬、ヴィルヘルムの姿を見失って唾然とした公僕たちは、頭上より降りかかってきた白い暴力に対処する時間を、ただ驚愕を露わにするだけで浪費してしまふ。

その愚鈍さ。ヴィルヘルムはむしろ憐れにすら思った。
このような荒事のために己を鍛え上げてきただろ軍人たちは、ヴィルヘルムという脅威に晒された時、その実力を発揮する前に命運を決してしまったのだから。

「　　っ!？」

「があっ?!」

「あぎゃっ?!」

頭上より振り落とす踵の一撃が1人の後頭部を激しく打撃し脳震盪させ、優雅に着地した後に背後より1人の首を薙ぎ払う拳の一撃で押し折り、慌てて背後を振り返った最後の1人の顔面に無造作に拳を叩き付けた。

みつともない悲鳴をあげ、転倒する男たち。

倒れ伏すそれらを見下ろして、ヴィルヘルムは嘲笑した。

「ハッ、国家反逆だあ？　なあに吹いてやがる、ナチ野郎がよおっ
!!!」

すでに死んでしまった1人を除いて、ヴィルヘルムは蹴りを連続して2人の軍人にトドメを刺した。

いざ殺すつもりでやればこんなものだ。こんな連中では我が身を脅かす資格はない。

つまらなそうに鼻を鳴らし、ヴィルヘルムは独語した。

「はんっ、……　　ったくわけわかんねえな。そりゃ俺も色々やったがよ。てめえらゲシュタポにしょっ引かれる覚えはねえぞ。国家反逆

つてなもしかしてあれかあ？ 近頃どこぞの高官様が、売春窟で殺されかけただのなんだの。……名前はたしか、デイルレワンガーとか言っただけか？」

ゲシユタポの軍人が己を追い回していた理由を思い出し、ヴィルヘルムは侮蔑の意を込めて、眼下にうづくまる1人の男 2人を率いていたリーダー格の男を睨みつけた。

「ボケが。そりゃ俺じゃねエよ。掘ったり掘られたりが趣味の変態ジジイなんざお呼びじゃねえ。つまり人違いで随分追い掛け回してくれやがったじゃねえか。 なあっ！」

「ぐあっ?!」

懐から密かに拳銃を抜き放っていた男の手を思い切り踏みにじって、悲鳴を上げる男にヴィルヘルムは失笑した。

「おお、なんだてめえ。まだ生きてんのか。すげえすげえ。さすが軍人さんは丈夫だねえ。んじゃこれはご褒美だ」

「ヒツ?!」

男が取り落とした拳銃を拾い上げ、それを男の額に突きつけてヴィルヘルムは邪悪に笑った。

怯える男の姿があまりに滑稽で仕方がない。殺し殺され合う場に身を置いているはずなのに、殺される覚悟がなかったのだろうか、この男は？

「噂じゃあ、てめえらの頭は血も涙もねえって言うじゃねえか。ならどうせ戻ったところでよお、結果的には同じだわなあ？ あばよ。えーと……大尉殿？」

「ひ、ひ……や、やめっ、殺さないで……!?!」

男の階級章を見て、ヴィルヘルムは嘲笑うように語り掛けた。
男が無様に命乞いしているがまったく耳に入らないし意に介さない。
ひたすらに憐れで惨めで　そしてそれゆえに腸が抜けるような心地だった。

「こんな、こんな低能に、俺は一時とはいえ追い掛け回されていたのか？」

押さえきれぬ怒気を総身より放出しながら、しかしヴィルヘルムは優しげに語りかけた。

「仕事で下手打って首切られるより、殉死なら特進もあるんだろ？
それならガキと女房の今後は安泰だ」

残酷な宣告。男は変わらず、鼻血と涙と涎で顔を塗れさせ、必死になって命乞いをしていた。そのざまを見飽きていたヴィルヘルムは、もはやこの男に時間を費やす無駄を悟り、さつさと終わらせるべく早口に別れを告げて引き金を引いた。

「バイバイさよならお休みとっつあん」
「ぐはあっ?!」

乾いた銃声が薄汚い路地裏に響き渡る。

額を撃ち抜かれた男の脳漿がヴィルヘルムの頬に付着し、それを拭うこともせずにヴィルヘルムは気だるそうに呟いた。

「ふん……しつかしまあい迷惑だぜ。どこの阿呆がやりやがったのかは知らねえが、この先また間違われてもかなわねえ。こりゃい

っそのこと俺がソイツを殺っちまったほうがいいのかねえ……?」

「ギイイイイイヤアアアアアアアアアアアアあッッッッ
ッ
!!???」

魂切る断末魔の絶叫。

「あん？」

尋常ではないそれをヴィルヘルムは敏感に察知し、胡乱げに悲鳴のした方角に顔を向けた。

「あがあっ?! やめろおっ!」

「来るな、来るな、来るなアアアアアア」

バンッ、バンッ、バンッ、バンバンッ!!

錯乱した男の悲鳴と銃声が連続し、

「ああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああ
あああ
ッッッッッ!!!!!!」

度を超した恐怖に屈した叫び。

知らず、ヴィルヘルムは口端を歪に歪め、心底愉快そうに口を開いた。

「おいおい、噂をすれば、ってやつなのか？ こりや随分とまた、ご機嫌な馬鹿が近くにいてみるみてえだが。……………面白れえ、この俺につまらん火粉飛ばしやがったツケ、今すぐ払ってもらおうじゃねえか」

獲物を見つけた白い吸血鬼は、ペロリと唇の端を舐めた。

歌。

唄。

唱。

元は白かったただろつ優美なドレスを赤く染め、華奢な体躯の殺人鬼

は、さながら天上の天使がごとき美声で歌を唄う。

転がる無数の死体を弄繰り回し、轍となったゴミ屑にナイフを振り下ろす。

何度も何度も振り下ろす。原形を留めなくなって来た男の死体を、辱め蹂躪しそれでもなお飽きることなく振り下ろす。

白いドレスを染める赤は、轍が噴き出す液体だ。

楽しくて楽しくて仕方がない。

熱心に粘土を捏ね繰り回す無邪気な子供のように、小柄な殺人鬼は嗤いながら唄っていた。

「よお」

不意に、殺人鬼の横合いから無愛想な声が掛けられた。

「あー、その、なんだ。お楽しみのところ悪いんだけどよ。ちつとばかりてめえに聞きたいことがあるが。つーわけで、とりあえずこつち向きな。てめえの親父は礼儀云々を教えてくれなかったのかい？」

「……親父？」

白い吸血鬼　ヴィルヘルム・エーレンブルグだ。

立ち込める血臭の中を平然と歩き、ヴィルヘルムは軽い口調で問いを投げた。

それに、小柄なドレス姿の殺人鬼は、吸血鬼の1部の台詞に反応し小さく反駁した。

ニヤリと邪笑し、ヴィルヘルムは肯定した。

「おうよ。糞外道のイカレ淫売小娘でも、木の股から生まれたわけじゃあるめえが。ま、犬っころから生まれた可能性ならありそうだけだよ」

「あはは、ああ、犬ね。そういえば、山羊とか驢馬とかとやるのが好きな親父だったね」

「へえ、そりゃいい趣味で」

無邪気な告白に、ヴィルヘルムは聞き流すように相槌を打つ。

山羊に驢馬ねえ。ケダモノとヤツてなにが楽しいんだか。

「うん、だから多分、僕も人間じゃないんだよ。それから小娘でもないんだなお兄さん。僕は人間じゃなくて、オスでもメスでもないのさ。ほら！」

「ひゅ〜」

ばさっ、と殺人鬼はドレスの裾をたくし上げ、股間部をヴィルヘルムに向けて露出した。

そこには何もなかった。

男性を象徴する男性器が。女しか持ちえぬ性器がどこにもなく、ただ小さな穴が1つ開いているだけだった。

常人ならば目を逸らして嘔吐するだろう有様を、しかしヴィルヘルムは口笛を鳴らすだけであっさりと受け流した。

「ふん、なんだおまえ？ 面白れえ体してんな。挟られちまったのか？ その穴っぼこはよお」

「そうみたいだねえ。もう覚えてないけど。気に入ったのなら抱いてみるかい？ 安くしとくよ、お兄さんなら」

にこりと嗤い掛けてくる女装の殺人鬼。
女性のように艶のある長い銀髪と、深く濁りきった1つしかない碧眼。華奢な体躯とも相俟って、そこいらの少女よりも少女らしい殺人鬼の誘いに、

「ハッ！ そうだな、たまにはゲテモノ食つのも面白そうだが」
失笑するようにヴィルヘルムは顔をうつむけ。
次いで、無造作に手にしていた拳銃の銃口を、女装の殺人鬼に向けて吐き捨てた。

「目障りなんだよてめえ。俺と似たような髪の色しやがってパチモン野郎。おかげでいい迷惑だ。邪魔臭えから逝つとけガキ」
「うあつ!？」

バンッ!

躊躇なく、容赦なく発砲した。
短い悲鳴と共によるめて倒れた殺人鬼。それを見届けて、ヴィルヘルムはつまらなさそうに踵を返しかけ

「……つたく、しょうもねえ。近頃アホばかり増えやがるぜ。こんな日はさっさと帰ってぬあつ!？」

突如として飛来した銀閃が視界の隅をかすめ、獣の如き直感でそれを回避した。
身をねじったヴィルヘルムの腕を掠めたそれ 投げナイフはコンクリートの壁に突き刺さった。

なんとという怪力。

素手で投擲したに過ぎない刃物が、コンクリートの壁を穿ったのである。直撃を食らえばタダではすまない。

戦慄するヴィルヘルムは、驚愕に目を見開いて立ち上がる女装の白い殺人鬼を見ていた。

「なあにするんだよ、いきなり」
「……ッ？」

ポツリとこぼれたソレは怨嗟の声。

「撃ったね？ 僕を撃ったね？ 殺そうとしたね？ つまり、殺されてもいいんだね……？」

呪うように。祟るように。嘲笑う白い殺人鬼は、独眼に赫怒の念を滾らせて、立ち竦む吸血鬼に向かって唾を飛ばす勢いで謳い上げた。

「僕は死なないし殺されない。男でも女でもないんだから子供も生めないし孕ませないし一代で終わるって事は、つまり完成してるってことなんだよ！！ だって、下等な生き物ほどウジャウジャとガキを生むじゃないか。それをしないってことはねえ！」

ブンッ！

一閃した腕にさらにもう一本、大型のナイフが現れた。

咄嗟に身構えるヴィルヘルムに、女装の殺人鬼はニタリと嗤いかけた。

「ねえ、わかるでしょ？ 僕は死なない。不死身なんだ！ 殺され

てたまるかあつ！！　　イイイヤツハアアア！！
「なつ、て、てめえは……！！？」

踊りかかる殺人鬼。吸血鬼は咄嗟に銃を揮って大型ナイフを受け止めたが、背丈で勝るヴィルヘルムを殺人鬼はパワーで圧倒した。小さな体を利し、ヴィルヘルムの懐に飛び込んだのだ。そしてそのままヴィルヘルムの体を持ち上げて、怒声を上げながらヴィルヘルムを投げ放つ。

「だああつ！！」

「うおおおお！！！！？」

ゴミ屑を巻き込みながら吹っ飛ぶヴィルヘルム。そのざまを殺人鬼は迸る哄笑と共に見送った。

「アハハツハハハハハハハハハハ　　ツツツ！！」

「クソツタレがあ、なんだこのガキ、イカしてんにもほどがあるだろ！　撃ったんだぞ、当たったんぞ！！　なんで倒れねえんだよ、ありえねえだろ……！！」

「アハハハ　　痛い、痛いよ血が出る！　銃で撃たれたのなんか久しぶりだあ！」

ぞぶり、と殺人鬼は左腕に着弾した弾丸を、右手で抉り取って投げ捨てた。

そして　数多の殺人経験を持つ畜生、ヴィルヘルムでさえ圧倒される狂気をあらわにし、殺人鬼は唾いながら宣言した。

「ねえお兄さん。でも君は下手糞だねえ。度胸があるだけで射撃の腕はド素人だ。……これ以上そんなものに頼つてると、次でその首、捻じ切っちゃうよ？」

「ふっ、ふふふ…… 上等……！」

背筋が震え上がる。
恐怖に、ではない。

歡喜だ。

アツという間に臨界を振り切った怒りと屈辱に、ヴィルヘルムの赤い瞳は燃え上がり。
手にした銃に銃弾を装填する。

「 いい脚持ってんじゃねえかバケモンが。撃ち殺してやるから掛かって来やがれ」

銃口を据え、ヴィルヘルムは宣言する。

ああ、タダでは殺さない。この屈辱はヤツを心臓をくり貫いてその頭を串刺してやらねば収まらない。

本気になったヴィルヘルムの鬼気が殺人鬼を照準し、その感覚に女装の少年は肩を震わせた。

「うふふ いいなあ、いいよお兄さん。ノれる感じた、名前が知りたい。これから先も、今夜の興奮をたまに思い出して浸りたいよ。……だからあ、ねえねえ！ いいでしょ、名前！ 教えて？ 教えて知りたいんだっ！！」

「…… 1人でトびやがってこの糞が。……ヴィルヘルム・エーレンブルグ。てめえは？」

「ウォルフガング・シュライバー。ふふっ、名づけの親なんかもう居ないけど。……ねえ！ それは多分お兄さんもさ」

「ああとつくに犯して殺して燃やしちまったよ」

「アハハハハ！ いいねえ！ それはサイツコオだあ！」

「おう、気が合ったみてえで反吐が出るぜ」

ペツと血の混じった唾を吐き捨てて、滲む笑気を2人の鬼は漏らし始めた。

「クスツ、ふふふ」

「ふは、アハハハハ」

「アハハハツハハハハハハハ」

ひとしきり嗤いあう。嗤いながら、相まみえた宿敵との邂逅を祝福した。

そして その嗤いが収まった時、鬼たちは同時に、全身から鬼気と狂気と殺気を迸らせ、誇りと矜持にかけて断言した。

「引き裂いてやる！！」

時は1939年、ドイツ、ベルリン。

「生皮剥いで、僕のベッドに敷いてやるよお!!」

「てめえっ！ 教会の十字架にでも串刺してやらあっ!!」

「「いくぞおおおオオ

ツツツツ!!!!」

運命の大戦に雪崩れ込んでいく髑髏の帝国は、恐怖と狂気と狂騒と、そして混沌という名の炎に彩られた、修羅の巷と化していた。

閑話「水星からの招待状」

閑話

「水星からの招待状」

いわく、髑髏の貴公子。

いわく、金髪の野獣。

いわく、二十代で秘密警察の長官の座にまで昇りつめた、エリートの中のエリート。

『人体の黄金律』とまで讃えられる絶世の美貌を持つ男　ラインハルト・ハイドリヒ中将は、その辣腕ぶりと冷酷さから部下はおろか上官たちにすら恐れられる実力者であった。

国に忠誠を。

軍人として、帝国人として？当然？の枷を己に課し、今日という日まで生きてきた。

そこに迷いはなく、ゆえに己の責務を果たす過程でどれほどの血を

浴びることになるうとも構わない。そう思い、そう信じ、そう在ることでも己を守ってきたラインハルトは。しかし、ある出会いを経て以来、言いようのない煩悶を胸の内に抱いていた。

1939年、11月8日。

総統兼首相、アドルフ・ヒトラーの演説中に起こった謎の爆破テロ事件。

その事件を契機に、ラインハルトは？あの男？と出会ってしまったのだ。

髑髏を背負った貴公子殿は、つまらぬ遊びに退屈している子供のような。

「……………」

なにをつまらぬこと思っている、ラインハルト・ハイドリヒ。

ラインハルトは詐欺師の妄言を忘れ去ろうとかぶりを振った。食事を済ませ、残った仕事を片付けるべく己の執務室に戻ってきたラインハルトだったが、執務机に見慣れぬ封筒を見咎める。

（誰がこのようなものを…………）

封筒の中にあつた手紙を取り出し、それに目を走らせた。

そこにあつたのは　どこか見覚えのある字と、聞き覚えのある取
つて回した台詞回しの羅列。思い出すのも不愉快な？あの男？から
の意思表示だった。

『　つまり、先のデイルレワンガー將軍に関する醜聞を揉み消そ
うという貴方の意図、及び立場は重々承知しておりますが、その上
でひとこと言わせていただきたい。あたり部下を死地に追いやるの
はいかがなものか、と。貴方が私の予言、占いを信じておらぬは百
も承知のことなれど、親愛なる中将閣下が、このような些事にかか
ずらうのは見ておれぬと思つたゆえ、勝手ながらご忠言したく、こ
うして手紙などをしたためたしたい。』

大恩あるラインハルト・ハイドリヒ殿。私は貴方の栄光と未来
を信じております。よつて、そのご威光とお名前に万が一にも傷が
つかぬよう、くだんの殺人鬼とやら、なんとなればこの身を以つて
捕らえることも辞さぬ覚悟。どうかその旨、ひらにご容赦ください
ますようお願いしたく　』

「　愚か者が」

最後まで読む事もせずにラインハルトは踵を返し、執務室を後にし
た。

殺人鬼を捕らえるだと？　あの、吹けば飛びそうな軟弱な男が
か？

面白い。だが面白過ぎるせいか逆に笑えない。かつて感じたことの
ない苛立ちに突き動かされ、ラインハルトは足音高く外を目指した。
執務室のすぐ傍に直立していた衛兵がラインハルトに気づき、声を
かけて来た。

「あ　これは閣下。いかがなさいました、このような時刻に　」
「出る。車を用意しろ」

「は。ですがどちらへ？」

「ゲッペルス宰相に会う。……部下の手綱も握れんのか、あの男は……」

軽蔑の意を滲ませ吐き捨てるラインハルトに、衛兵は泡を食ったように慌ててラインハルトを引きとめた。

「お、お待ちください。宰相殿は今夜、総統閣下の共としてオペラ座へ」

「またぞろいつものニーベルングか。くだらん。いい加減に飽きるということ知らんらしいな。度し難い」

「閣下お待ちください、閣下」

制止の声を無視するラインハルトに、衛兵は諦めたように、素早くラインハルトの命令通り車を手配するよう無線機で待機中の運転手に命じた。

共もなく兵舎を後にし、ラインハルトは駆けつけてきたリムジンの後部座席に乗り込み、運転手に端的に命じた。

「出せ」

「は、どちらへ？」

「国立歌劇場……いや、くだんの反逆者を捕らえようと出た者らはどこだ？」

「それでありましたら、ベルリン大聖堂の近辺かと」

「ではそこへ行け」

「し、しかし閣下、それは」

「なんだ？」

「い、いえ、了解であります」

くだらない諫言を一瞥のみで封殺し、ラインハルトは急かすように命令を付け足す。

「急げよ」

「は」

走りだすリムジン。

「……………」

(馬鹿め。あの男、いったい何を考えている？)

懐から呼んでいる最中だった手紙を取り出して、ラインハルトは改めてそれに目を通し始めた。

『 そも、先のポーランド侵攻により戦端が開かれて以来、帝都には複数の凶星が集いつつあります。これは東洋においてラゴ、ケイトと呼ばれ、蝕を起こし、日と月を飲み込む災厄の星。此度の件中でも強力な一星が深く関わっておりますれば、並みの者では歯が立ちますまい。』

閣下の星は王者のそれゆえ、下の者を使うことこそ本分でありましょう。ですが、人材を間違えてはいけません。

凶なる相手には然るべき部下を。覇軍の星を有する者らがこの件に関わらんとしておりますので、彼女らを使ってみるのがよろしいかと思えまする。』

(…… 『彼女』？ 私の部下に女はおらぬ)

らしくもない。よもや書き間違えか？

常に薄ら笑いを口元に刷いている男の顔を思い出しながら、怪訝そうに眉を顰める。

果たして、あの男がこんな書き間違えをするだろうか？

『加えて蠍の大火星、及び孝道の第四星。これらとの縁もある模様。特に後者はこの先、貴方にとってなくてはならぬ影の星ゆえ、ゆめお見逃しなきように。』

親愛なる中将閣下。御身を苛む飢えと渴き。一刻も早くその正体に、貴方自身がお気づきになりますよう、お祈り申し上げておきます。そして願わくば、その目覚めが私にとっても福音となるように。

恐々謹言。カール・エルンスト・クラフト。

追伸、今貴方はこの手紙の冒頭のみを読んで、憤慨しつつ車中にあるのではないですか？ ご心配なく。貴方が此処にこられるまで、私は陰に隠れております。凶星との対峙など、恐ろしくてとてもとても』

「ッ、惚けた男だ。どこまでも私を黜つてくれる」

「な、なにかおっしゃいましたか、閣下？」

「いいや、なんでもない。不遜な詐欺師がなかなか笑わせてくれると思っただけだ。あの男、いつそ道化師にでもなればいいものを」

「はあ……」

「余所見をするな。早く目的の場所へ連れて行け」

「も、申し訳ありません！」

「ふん……」

不愉快そうに鼻を鳴らす。それだけで委縮する運転手の男に、ラインハルトはより一層不快な思いを抱いた。

（凶星に覇軍、大火に孝道の双子星だと？ いったい、私に何を見せようというのだ？ そんな者たちが本当にいるとでも？

……まあいい。道化の出し物が何であれ、無聊の慰めにはなるだろ

う。私の飢えとやらが、もし仮に、あるのならな（

「国防を司る軍の要職にある者が、こともあろうに穢れた売春窟で死に掛けるなど銃殺ものの無様だぞ。貴様もユーゲントで軍の何たるかを叩き込まれたはずだ。…同胞の不始末は？」

「……連帯責任です」

「であるなら、私たちには関係ない、などというのは寢言であり戯言だ。軍の末席を汚す者として対岸の火事にはできんだらう。我々が至らぬから、將軍殿の馬鹿を事前に諫められなかった、とも言える」

現在のベルリンは魔都である。

貧しい者は極限にまで餓え、平然と殺人鬼が蔓延っている。

そしてその最たるものが、デイルレワンガー將軍の醜聞である。エレオノーレの言ったとおり、その將軍が売春窟で女装の殺人鬼に殺されかけたというのだ。

確かに、軍の要職を司る人間が起こしていい不祥事ではない。

まあ、それを言うなら起こしていい不祥事などないのだが。

そして、嘆かわしいことに軍の要職に就く者の大半が、デイルレワンガーと大差ない人間だ。

だからこそエレオノーレはそのような者が蔓延っているこの国の現状に義憤を抱き、自らその殺人鬼を捕らえるべく、クリスマスだというのに部下のベアトリスを伴い行動しているのだ。

「（でも、將軍とは部署が違いますし、お会いしたこともないのに諫めるも何も……）」

ぶつぶつと小声で不満を垂れるベアトリス。それを敏感に聞き拾ったエレオノーレが、

「なんだ。大きい声で言ってみる」

恫喝するようなコワイ声できょろりと部下を睨みつけた。縮み上がるベアトリス。

「ああいえいえなんでもないです今日も中尉ったらお綺麗で！このまま社交界に出れば殿方の熱い視線を一身に浴びること間違いないですよはい！」

「フン」

慌てふためくベアトリスの妄言に、エレオノーレはさも下らなそうに鼻を鳴らした。

不意にベアトリスが真顔になって言う。

「で、それはさておき、今回の事はおっしゃるように軍の恥部ですから、上は揉み消す方向で動いていると思うんですよ。なので、下手につつつくのは危ないんじゃないんですかね。ゲシュタポ長官閣下殿は、噂じゃ鉄と氷で出来ているお方だって、わたし常々聞いてますし」

「私もそう聞いている」

「だったら」

「付け加えて、非常に聡明かつ実際的なお方だともな。それならば問題あるまい。きっと我々の意を汲んでくださる」

「はあ」

やめましようよ、と言いかける部下に、しかしエレオノーレは聞く耳持たない。

それにベアトリスは呆れたようにカラ返事をした。

「……中尉のその漲る自信はホントにどこから来るんですかね。…

…ともかく、そこまでおっしゃるなら逃げずにお供しますけど、そろそろ教えてくれませんか？　いったいどこに行く気なんです？」
ベアトリスの素朴な疑問。

それに、エレオノーレはまるで思い出すのも嫌気がさすとも言いだけに、さも忌々しげに吐き捨てた。

「レーヴェンスボルンだ」

「うーん、レーヴェンスボルン、っていうと、あれですよ、3年前のオリンピックのときに出来たって言う」

記憶の中の知識を引っ張り出しながら言うベアトリスに、エレオノーレはあからさまに侮蔑の言葉を吐き出した。

「早い話、牧場だな。優秀な男の子種を欲して、恥を知らぬ雌犬どもが群がるバビロン。言ってしまうえば立場の逆転した娼館に過ぎん」

呆れを通り越して感心してしまいたくなるような毒舌だ。
その辛辣な評価は、端的に事実を捕らえているため否定しづらいものなため、いつそ清々しくさえある。

「……あの、なんか凄い毒吐いてますけど、あれはあれでちゃんとした意味があると思いますよ？　戦争の弊害として、異民族の血が

混じりやすいつていうのがありますからね。わたしはあまり気にしませんけど、血統を重んじる思想は慣れ親しんだものじゃないですか。中尉の家も、わたしの家も『そういうもの』だし、子供の頃からさんざんばら言われてきたことでしょ？ 誇りある血と家名を汚すな、とかなんとかって」

日頃からその毒舌に晒されてきたベアトリスは、なんとなくレーヴ・エンスボルンの人たちを弁護してあげたくなり、らしくもないことを言ってしまった。

しかしその『らしくない』ベアトリスの言をエレオノーレは鼻で笑うことはせず、肯定的にうなずいて見せた。

「無論、貴種の血統を守り、維持することに否はない。私が気に入らんのはそれを買おうとする浅ましさだ。『誇り』とはなキルヒア・イゼン。受け継ぎ育み伝えるもので、他所から貰ったり、まして売り買ひするものでは断じてない。許せんのだよ、そういった厚顔無恥。国家を腐らすヤツバラがな」

辛辣に過ぎるエレオノーレの思想と哲学に、しかしベアトリスは共感できる場所があったのか、したり顔でうんうんとうなずいた。

「へえ。なるほど。確かに一理あります。大概の女性が政略結婚なんか御免蒙りたいと思っているのに、自分で玉の輿を選べるとなれば、涎を垂らして尻尾を振ると。確かに浅ましいですね。ダブルスタンダードです」

「わけの分からんエゴまがいの言葉を使うな」

「……失礼。でもまあ、そういうのを可愛いと思うのが殿方というものですから、結局うまいこと世は回るんですよ。……いやー、わたしと中尉は、これじゃあ結婚できませんねー」

「……フン」

出来ずともよいよ。

エレオノーレの心中がありありと伝わってくるのに、ベアトリスは悟られないように小さく苦笑した。

そう言えば、なぜエレオノーレは目的地をはっきりと出来るのだろう。

件の殺人鬼を探すのなら、もっと相応しい場所があるだろうに。そのことが気になって、ベアトリスは率直に理由を尋ねることにした。

「で、なんでレーヴェンスボルンに行くんです？」

「ひとり、知り合いが居てな。蛇の道は蛇だ。淫売のことは淫売に聞くのがいい」

「へえ……」

知り合い、という部分で、エレオノーレが何とも言えぬ面持ちをしたのを目敏く発見し、ベアトリスは思わず意味深な声を上げた。当然、それを聞き逃すエレオノーレではない。

「なんだ？」

「あ、いえ、つまり中尉は、お友達が先に結婚するので悔しきやぶ、あ、くう……っ！」

ガチン！ 見ているだけで痛くなりそうな拳骨が、瞬間的にベアトリスの台詞を叩き潰した。

下らないとも言いたげにエレオノーレは吐き捨てた。

「下種のかんぐりだ。友人などではない」

「そ、そうですよね、中尉と友達になれる人なんてわたしぐらいし

か……」

「抜かせ馬鹿者。貴様など庭で放し飼いにしている犬に過ぎん。図に乗るな」

「わん！」

「……………はあ」

ベアトリスの能天気な笑みに、エレオノーレはなんとなく疲れた気分になって溜息を吐いた。

エレオノーレをこんな気分に出るのは、後にも先にもベアトリスただ1人だけである。

「さあ、ほら早く行きましょー！」

【……………】

ドンドン、と乱暴なノックがされた直後に、

『入るぞ』

という簡潔にして明瞭な意思を示す声が聞こえてきて、青髪の女
リザ・ブレンナーは安楽椅子に座って編み物をしていた手を止め
た。

そして、リザが「どうぞ」と言う前にドアががちりと開かれて、
そこからリザの古い友人が姿を現した。

もつとも、友人だと認識しているのはこちらだけで、真紅の長
髪と伶俐な美貌の彼女は、リザとの関係を『ただの腐れ縁だ』と切
り捨てるだろうが。

「久しぶりだなブレンナー。……少しやせたか」

「貴女こそ、一段と険のある顔つきになったわね、エレオノーレ。
相変わらず疲れる生き方をしているみたいけど。」

安楽椅子に座ったまま、リザは編み物を脇のテーブルに置いた。

「ドイツ女子青年同盟、創立時からの幹部候補生様が今更私に何の
用？ まさか同期のよしみで、婚約のお祝いに駆けつけてくれたわ
けでもないでしょう？」

「当然だ」

「ばさり、と資料をリザの前に放るように投げ、エレオノーレは端的
に述べた。」

「貴様に聞きたいことがある。この売春窟、正確な場所は分かるか？」
「なぜ私に？」

その資料を横目に眇め見たリザは、この厳格な友人が何を求めてや
つて来たのかを瞬間的に悟りながらも、敢えて真意を隠した問を発

する。

エレオノーレはそんなリザの腹の中を見透かしたように目を細め、馬鹿にするように音量を高めた。

「貴様らには横の繋がりがあるだろう。未来の夫の行状を調べ上げ、共有し、捨てられぬように予防線を張り巡らせる。女というのはそういう狡からい計算の生き物だ」

「貴女だって女でしょうに」

言っても無駄と知りつつも、リザは含み笑うように指摘したが、エレオノーレは不愉快そうにするだけだった。

「それについて議論するつもりはない。知っているのか知らないのか、協力するのかもしれないのか」

「あの中尉？ いきなりそんな喧嘩腰じゃあ通る話も通らないってどうか……」

そんなエレオノーレの背後から、ひよっこりと小柄な少女が現れた。その、愛らしい少女を見てリザは微笑んだ。

「あら、かわいらしいお嬢さんね。貴女の部下なの？」

「いや、こいつは」

庭で放し飼いにしている犬に過ぎん。

そう言おうとしているのを敏感に察知したベアトリスが、慌てて遮るように応答した。

「はいっ！ わたしはベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン准尉であります！ このたびユーゲントを卒業し、ヴィッテンブルグ中尉のもとに配属されました！ 青春ど真ん中の、1

6歳です」

「とりあえず、コレの事は気にするな。ユーゲントの主席卒業者は少尉に任官するのが通例だが、この体たらくだからな。程度も知れよう」

「主席？ そう、優秀なのね、お嬢さん」

「はい！ 父上和母上也喜んでくれてるんですよ！」

ニコニコと惜しみなく愛嬌を振りまく少女に、リザもまた柔らかく笑い返した。

が、エレオノーレはいい加減に本題を進めたいのか、ベアトリスをぎろりと睨みつけた。

「キルヒアイゼン」

「なんですか？」

「黙れ」

「……了解（ヤヴォール）」

しゅん、と途端に萎む少女の明るさ。

そしてリザの対席にエレオノーレが腰を下ろし、話を進めようとする

「それでブレンナー、」

「クス」

「おい貴様、何を笑っている！」

笑みをこぼしたりザを、エレオノーレが目を剥いて怒鳴りつけた。並みの者なら萎縮してしまうだろう大喝に、しかし図太い神経を持っているのか、リザはびくともせずになお微笑みを口元に刷いていた。

それに、ベアトリスがほんの少し尊敬の色を顔に浮かべた。

「ふふ、いえ、ごめんなさい？ 貴女も何かと大変なようで、羨ましいわ。で、さっきの話だけど、確かに知っているとえば知ってるわね。なぜならここ、どちらかというとお客は女性のほうだから」
「ん？」

「わからないかしら。つまり」

「え？ えっ！？ じゃあこれって、要するに」

「ああ、なるほど、合点がいった。ますます以ってここは墮落婦女子の巢窟だな。まさかとは思うが貴様……」

「誤解しないで？ ここには過去の過ちを悔いている娘も多いのよ。わたしはただ、彼女たちの悩みを聞いてあげているだけ」

「懺悔すれば赦された気になる。屑の駆け込み寺というわけか。……ふん、お似合いだよブレンナー。貴様、男に捨てられれば尼僧にでもなればいい」

「ええ、考えておくわ。それでエレオノーレ？ 貴女はいつたいうするの？」

席を立ち、エレオノーレを威圧的に見下ろすりげに、エレオノーレは剣呑な表情をぴくりとも動かさなかった。

「レーヴェンスボルンを告発して、ゲッター送りにでもする気かしら？」

「そうしてもいいが、より賢明な判断をしてやろう。貴様とて、はなからそれを条件に雌犬どもの罪を不問にふさせようという腹だろう。……まあ、痛めつけても口を割る玉ではないし、 magari なりにも政府高官の婚約者だ。腹立たしいが丁重に扱うしかあるまい」

「そう。ありがとう。だったら」

「案内しろ。今すぐにだ」

話は終わりだ、とても言いたげにエレオノーレが立ち上がり、行く

ぞと目でリザに告げる。
リザもまたそれを諒解した。

「ええ、わかったわ。聞いた話だと、今夜そこにはゲシユタポが向かったらしいし」

「……また面倒な。だが、考えようによっては渡りに船か」

「……あのー。中尉」

不意にエレオノーレの言いつけどおりに黙り込んでいたベアトリスが、恐る恐るといった態で口を開いた。

「なんだ？」

「その、彼女も連れて行くんですか？ 危ないですよ」

「ああ、貴様はコイツがどういう奴か知らんからな。引つ張って行かんと、平気で嘘を教えかねんのさ。ちょうどいい機会だ、キルヒアイゼン。貴様に人生の真理を教授してやる」

「なんでしよう？」

ふん、と鼻を鳴らし、エレオノーレはリザを一瞥した。

「女は信用するな、だ」

第5話「黎明（後）」

第5話

「黎明（後）」

【 :アオスブルフ : 】

「ヘルガローゼ……」

「……………」

はあ、と私は深く嘆息した。

約4年経ち、かつての部隊から異動してそれぞれ大尉と中尉に昇格し、お互い公私ともに必要なパートナーの関係になったのにも関わらず、ヘルガローゼは私と二人きりになった瞬間に、重い沈黙をまとうようになっていた。

アンナ……恨むぞ。

下手な嘘をついた私の責任だが、あの場に居合わせたアンナに恨み言をこぼしたくなる。

なんたつて、私からしてもあの場にアンナがいたこと事態が予想外だったのだ。頓珍漢な嘘を吐いてしまったのもそれが原因。だからアンナが悪い。

そんな風に情けない言い訳を言いたくなる。だが、男としての

矜持がそんな女々しいことを言わせてくれずに、私はずっとアレが嘘だった、と言い出せずにいた。

単に、あの女とはもう別れたとだけ言っただけであるが、それがさらにヘルガローゼとの関係に溝を開けるだけに終わった。簡単に女を棄てる男は信用できない、とのこと。まことにごもつともである。

『そもそも交際すらしてないから!』

私の心の叫びである。

「せつかくベルリンに戻ってきたんだ、どうだ、一緒に回らないか?」

「……………」

「……………いやまあ、無理には言わないが。……………じゃあ、せつかくのクリスマスだし、私はぶらぶらしているよ。ヘルガローゼはどうする?」

「……………」

「……………」

はあ。再度の溜息。

そして、私はいったいなぜ、ヘルガローゼのご機嫌伺いをしているのだろうか疑問に思う。

ヘルガローゼが美人だから? ……それはある。というか美人に構いたがらない男はいないはずだ。

この3年間、ともに生き残ってきた戦友だから? ……これが一番大きな理由かもしれない。

美人だからという理由では、私はおそらく関係の改善を諦めていた

はずだ。

「あ、ヘルガ！」

「！ イングヒルト！？」

ふと、たまさか4年前の同僚、イングヒルトと鉢合わせし、ふたりが驚きの声を上げた。

ふたりは親友同士だったのだ。軍という、いつ死別してもおかしくない世界で、生きて再会できた喜びは凄まじかった。

さきほどまでの暗い雰囲気はあつという間に払拭され、女二人はアオスブルフを尻目に会話に花を咲かせる。

いたたまれない気分になるが、まあ、ヘルガローゼが無表情の冷たい顔でなくなっただけマシだと思おう。

そう自分に言い聞かせ、私はイングヒルトに声を掛けた。

「久しぶりだな、ガツセナル」

「あ、お久しぶりです、大尉！」

ビシッと敬礼してくるイングヒルトに、私は苦笑しながら応えた。軽薄な印象のイングヒルトが、まさか同期の階級を気にするようになるとは。

とはいえ今はプライベートだ。そんな時まで軍内の規律を持ってこられても困るので、苦笑を引っ込めた後はジト目で睨みつけた。するとイングヒルトはちよつとだけ舌を出して、愛嬌を振りまく。

「……なんちゃって うん、久しぶりアオスブルフ君。凄いなえ、

今、わたしたちの同期の中で大尉までなっちゃってるの、アオスブルフ君だけだよ」

イングヒルトはなんとというか、そこにいるだけで場の雰囲気明るくなるオーラをまとうようになっていた。

階級は中尉。充分に彼女が有能であることが、その堂々とした様子からも窺えた。

私は一応の友人として、少しだけ再会を喜ぶ気持ちが出てきた。

「で、ジークマイヤー大尉はどうした？ いつも一緒にいたじゃないか」

「ぶつぶう、今はもう大尉じゃなくて少佐に昇進しちゃったよ。そしてわたしが少佐の副官になったのです！」

「ホントか?!」

ヘルガローゼが驚きの声を上げた。

それに、少しだけ得意げに笑ったイングヒルトは、ちょっとだけ沈んだ声を出した。

「うん……ノーウェン中尉、この前のポーランド侵攻で……」

「」

そこから先は言わずとも分かった。

死んだのだ。

「……そうか。だが彼なら悔いはなかっただろう。最後まで勇敢だったんだろっ?」

「うん！ ノーウェン中尉って凄いだよ！ 少佐やわたしまで守られちゃったもん！」

「へえ！ ジークマイヤー大尉……いや、少佐を守ったのか。まあ、それもおかしくはないな。少佐の背中を守れたのは、ノーウェン中尉だけだったからなあ……。これからはお前が守るんだぞ？」

「合点承知！」

力強く笑い、イングヒルトは胸を叩いた。

彼女は成長している。

それを実感した。

古い友が成長しているというのは、喜ばしい反面、負けてたまるかという気持ちをも呼び起こす。

自然、私は笑みを浮かべていた。

「さて、二人には積もる話もあるだろうし、私はここらで失礼させてもらうよ。ガッセナル、また生きて会おう！」

「当然！ ……って、あれ？」

怪訝そうにするイングヒルトとヘルガローゼを置いて、私はさっさと歩き始めた。

やはり、この国はいい。

誰もが必死だ。生きること、戦うことに。倦んではいても諦めていない。

生きることにとっても真摯で、生き物が平等ではなく、親しい人が死んでもへこたれない精神的タフネスもある。

改めてこの髑髏の帝国に住む人々の素晴らしさを実感しつつ、しか

しアオスブルフは集団には必ず醜い者がいることもまた心得ていた。

「ねえ、ヘルガ？　もしかしてまだ……」

「え、ええ……どうしても、忘れられなくて……」

「ばっか！　アオスブルフ君ほどイイ男なんて、少佐ぐらいしかないんだよ！？　このままじゃ他の女に取られるって！」

「でも……」

「デモも銃殺もない！　早く追いかけて、アオスブルフ君いない！？」

「え、うそ……?!」

「彼の方向音痴ぶりって、普段の彼からは想像できないぐらい滅茶苦茶だからなあ……」

【　：アオスブルフ：　】

デイルレワンガー將軍の醜聞。

それについては聞き及んでいたが、無能の人間について関心の薄い私は、さして興味がなかったから詳しく見知っているわけではないが、しかし現在帝都に蔓延る殺人鬼についてならある程度だけ関心を抱いていた。

なんせ、私がかねてから目障りだと思っていた軍上層の無能の一人を殺そうとしたというのだ。

会うことが出来たら是非とも感謝したい。そしてこう言いたい。

「もっと国に巢食う蛆虫を処分して回ってくれないかな……」

ふと、本音をポツリとこぼしながら歩いていると、私は目的の場所
実家に帰ろうとしているのに、そこからだいぶ道が逸れている
ことに気づいた。

まずい。

今日は私の誕生日である。実家にはすぐ帰ると伝えてあるから、誕生パーティーの用意でもしているはずだ。

にも関わらず、帰るのが遅れたら父上と母上はイイとして、お祖父様
様が口やかましく罵ってくるのを甘んじて受けねばならなくなる。

正直、それはごめんなので早く帰りたいのだが……

「……クツ、己の方向音痴ぶりぐらい把握しているつもりだったが
……！」

いささか己を過大評価していたようだ。

これまで方向音痴の気は克服するために努力してきたし、そしてあ

る程度は減衰したと思っていたから、つい一人で歩いてても大丈夫だ
と思いついてしまっていたが……。どうやら、最近私が道に迷わな
かったのは、部下やヘルガローゼが居たからだったらしい。

「……………」

不意に、私は見知っている女を見つけた。

女性らしい豊満な肢体と、貴婦人然とした格好、赤い長髪。人を食
った笑みを口元に刷いた、個人的にはいやらしく見える表情の歪み。
だがこの帝都に在るには自然とさえいえる魔性の女。

アンナ・マリーア・シュヴェーゲリンだ。

そして、その傍らには冴えない風貌の神父がいた。

長身瘦躯。くすんだ茶髪に、寝不足なのか両目の下にかなり濃いク
マが出来ている。

神父とアンナ。

この組み合わせがとてつもなく滑稽に思えた私は、なんとなく笑い
がこみ上げてきて二人に対して声を掛けた。

「その御二方。こんな夜中に出歩いているとゲシユタポか噂の殺
人鬼に目を付けられかねませんよ？」

「あら？ 誰かと思っただらフランメじゃない。珍しいわね、そ
つちからわたしに声をかけてくれるなんて」

たまさか噴水の近くを通りかかり、そこでこちらを振り向く妙齡の
美女。だが私はその女が見た目どりの中身をしているわけではな
いことを知っていた。

神父が、私に振り向いてきて礼儀正しく会釈をしてくるのに私も会釈を返して、

「声もかけたくなくなるさ。性悪の魔女と敬遠な神父と一緒に居ればな。こんばんわ、神父さん。私はアオスブルフ・フォン・シュトライテンです」

「これはご丁寧に。私はヴァレリアン・トリファです」

とりあえず、個人としての挨拶をした。

「ちょうどよかった。ゲシュタポが来たって、フランメが居れば捕まらないし、噂の殺人鬼が襲ってきてもフランメが守ってくれるんでしょ？」

「さて。アンナはともかく神父さんには守りが必要だろうからな。……余計かもしれませんが、お供をさせてもらいますよ、神父さん？」

「これはありがたい。何かあった時に現役の軍卒の方が一緒になら心強いですから」

「ちよつとお！ わたしは!？」

「自分で何とかしろ、性悪」

【 : : 】

そうして、帝都にちらばる星々は、今宵運命の邂逅を果たす。

意識せずとも抗おうとも、それは定められたうねりに沿って導かれ、今宵、この時、この場所で、出会うことはひとつの必然。よって

カツカツカツ！ と【異常】を悟って駆ける足音が三つ。

「っはあ、中尉！ 中尉待ってください、走るの早いです、めっちゃくちゃです！」

「甘ったれるなキルヒアイゼン。貴様、民間人よりも足が遅いとはどういうことだ？」

「しょうがないでしょ、だってあの娘じゃ……………」

「はあっ、はあっ、 歩幅が、歩幅が違うんですよあっ！ だって二人とも、背が高けえ！！！」

ベアトリスと、エレオノーレと、リザ。

「ふうくん、ふぶん、ふふうーん。　ねえねえ、ほら見てフランメ、神父様あ。こうしているとわたしって、ドボルザークの歌劇に出てくる妖精みたいじゃあない？」

「……とりあえず、妙齡の女性が噴水の中ではしゃぐような真似はおよしなさい。みつともないですよ？」

「忠言は無駄ですよ神父さん。あいつは馬鹿ですから」

アンナと、ヴァレリアンと、アオスブルフ。

そして

真実。今この時こそが、私にとって転換期となるだろう。なぜなら

「ここに居たか道化師。随分とまた手の込んだ上にふざけた呼び出しをかけてくれたな」

リムジンから降り立ち、黄金の獣が吐き捨てながら影絵の如き男へ声をかける。

男は亀裂のような歪みを口元に生じさせた。

彼と、彼の率いることになるうレギオン。その始まりは、今の
のだから。

「やあ、ようこそおいでくださいました、ハイドリヒ中将閣下。席
はすでに取っております。ともに観覧いたしましょう」
「なに………?」

そう、では「ねより

「」

「………」

猛々しい雄叫びが猛烈な勢いで迫る。

二対の白。

銃とナイフを振りかざし、倒壊する住居が吹き荒び、

「っ！」

黄金が息を呑み。

「え!?!」

「ちよつと……!」

「これは!」

女三人が驚愕し。

「なんともまた……」

「おかしいことになってるじゃない」

「……やれやれ」

神父と魔女と異端者が、それぞれ呆れ賞賛してしょうがないなと肩を竦めた。

今宵、グランギニョルを始めよう

第6話「髑髏の貴公子」（前書き）

思いのほか好評なようで、恐縮です。

本作品では基本的に原作キャラ、オリキャラ、オリ主の別なく展開によつては死んでしまいます。

まあ、死んでもいいようにオリ主候補は何人かいるんですがね。

さて、第6話「髑髏の貴公子」！ どうぞ！

第6話「罫護の貴公子」

【 …???:??:? 】

「中尉……これは、いったい……」

ゴオツ！ と燃え盛って崩れ落ちるベルリン大聖堂。

それを目の前にして、金髪の小柄な少女……ベアトリスが呆然と声を発した。

「さてな。だが見るキルヒアイゼン。貴様はあれが誰だかわかるか」

対してその上官たるエレオノーレは、微塵も動揺した様子はなく、淡々とした語調で遠方を指し示した。

示された場所には、軍服を着用した1人の男と、全体的に地味な印象を受ける影絵の如き人物がいた。

ベアトリスはエレオノーレの言葉に困惑した。

「え、誰って……」

「ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ中将。彼は、ゲシュタポ長官閣下よ」

「ちょ、ほ、本当ですか……!?」

リザが見知った人物を紹介するような固い口調で告げて、ヘアトリスは慌てて問い質した。だがそれにはリザは応えず、代わりにエレオノーレがうなずく事で返答とした。

「ああ。そしてその隣に居るのはおそらく……」

「誰です？」

「……いや、それはいい」

珍しく躊躇ったように言いかけ、断言しかねたのかエレオノーレは首を左右に振った。

「ともかく、事情は知らんがここに中将閣下がおられる以上、やるべき事はひとつだ。狂った賊から閣下のお身柄を守らねばならん。」

……見る限り、この場に居合わせた軍卒は貴様と私の2人のみ」

「……いいや、3人だ」

不意に割り込んできた声に、エレオノーレたちは背後を振り返った。そこには青みを帯びた黒髪の、長身強軀の軍人がいた。

エレオノーレが思わぬ人物の登場に、珍しいことに目を見開いた。

「し、シュトライテン卿……！ 貴方がなぜここに……！？」

その男の名はアオスブルフ・フォン・シュトライテン。

ユーゲント時代のエレオノーレとリザの二人より一期上で、先輩に当たる主席卒業生だ。

そして……エレオノーレがその実力と心根を認め、尊敬していた唯一の男でもあった。

「あの、彼は？」

ベアトリスがエレオノーレの反応で興味を抱き、傍らのリザに小声で尋ねると、リザはほんの少し困ったように苦笑して、ベアトリスの疑問に答えた。

「彼はアオスブルフ・フォン・シュトライテン。貴女やエレオノーレと同じ、軍人貴族出身の人よ。私やエレオノーレの一期上の先輩で、エレオノーレを【女だから】っていう色眼鏡で見ずに、男と同じように一切の手加減なく接した唯一の人。エレオノーレも、彼の前なら多少は丸くなる。そんな人よ」

「ちゅ、中尉が丸く……！？」

エレオノーレの人となりをよく知るからこそその絶句。

それを横目に睨みつけてくるエレオノーレに、ベアトリスは驚愕した。

もつとも、彼のせいでエレオノーレがさらに軍人への道に傾倒してしまったのだから、素直には尊敬できないけど。

そんなリザの心中を他所に、アオスブルフはエレオノーレの問いに簡潔に答えて、暴走する二対の白に視線を転じた。

「私がここに居るのは単なる偶然だ。まあ、結局私を含めても3人しかいないのだし、ゲシュタポの仕事に介入した越権行為にも大義が立つだろうよ」

「……ですね、あの暴れてる二人、誰だか知りませんが危なすぎます」

視線の先には二対の白。

方や、小柄で少女とも少年とも取れる容姿をした、白銀の鬼。女物

のドレスで身を包み、尋常ではない速度と膂力を發揮して暴風のごとく暴れまわっている。すでに痛覚が消し飛んでいるのか、体のいたるところより出血しているのにもかかわらず機敏な踏み込みに強烈な獣気が込められていた。

方や、長身瘦躯の白い青年。白い髪、白い肌、赤い瞳。典型的なアルビノだ。纏う衣類は襤褸当然なれど、やはりこちらも片割れに劣らぬ獣気と殺気を全身に漲らせ、一挙一動の全てが殺しに直結する致命の一撃を放っている。手にする銃こそは十全には使いこなせていないが、それを補って余りある身体能力と直感が、彼を夜の獣たるに相応しいバケモノにしていた。

アオスブルフの言葉に肯定の意を返したベアトリスに、エレオノーレは鼻を鳴らした。

「ふん、生意気にも一端に鼻が利くか。ならばついでに教えてやる。ああいった手合いには、銃よりも、こいつだ」

しゃりん、と腰に提げていた騎士剣を抜き放ち、その身に戦意を充填し始めて、稀代の女傑の声が達する。

「叩き切り、突き刺して、痛みと恐怖を植えつける。銃とはなキルヒアイゼン。向けられても存外に怖くない物なのだよ」

「はい！ ツ」

ベアトリスもまたエレオノーレに倣って抜剣し、アオスブルフは無駄に力むベアトリスに笑いかけた。

「もしか准尉、実戦は初めてか？」

「はい、でも大丈夫です！」

「そう願いたいな。私も、ヴィツテンブルグも、そしてお前の家も元を正せば騎士階級だ。武門に生まれた以上、殺すことも殺されることも躊躇は無用。行くぞッ！」

「はい！ リザさん、貴女は隠れていてください。オオオオオオツツツ！！」

矮躯から闘気を爆発するように放出し、ベアトリスが雄叫びを上げながら率先して切り込んで行った。ベアトリスが狙うは長身の男。死闘を繰り広げる二人の横合いから剣を薙ぎ払って介入した。

「ああ?!」

常人ならば回避不能な奇襲に、しかし白い青年は応じる手を誤らなかつた。

ベアトリスが己の間合い入った瞬間に新たな敵手の存在を察知し、直後に己の身に迫った剣の刃を見た目に似合わぬ機敏なステップを刻んで回避する。

「このドクサレがあっ！」

口腔より迸る罵り声。

己と宿敵の決闘を邪魔する不埒者に白い青年　ヴィルヘルム・エーレンブルグは、ベアトリスが連続して斬りかかって来るのを、憤怒と共に銃身で刃を振り払いながら、一瞬にしてベアトリスを殺害対象に認定した。

「オオオオオオツツツ！！　フツ、ハアツ！」

構わず必殺の剣撃を放ち続けるベアトリス。

だが、たった数撃でベアトリスの素直すぎる攻撃を見切り始めたヴ

イルヘルムはあっさりと剣を銃身で受け止めて、力任せに一気に吹き飛ばして間合いを開けた。

「なんだてめえ、どこから湧いて出やがった」

吐き捨てるように誰何する、ヴィルヘルムの静かな声。

その声が孕む心情は心底不愉快そうで、呪わしく狂おしい激情を、なんの手加減もなしにベアトリスに叩き付けた。

ベアトリスは一瞬それに怯みそうになったが、その畏れを強靱な精神力で振り払い、剣の切っ先をヴィルヘルムに突きつけ気合を込めて一喝した。

「そこな凶賊、大人しく縛につきなさい！ わたしはベアトリス・ヴァルトルト・フォン・キルヒアイゼン！ 抵抗するなら、手足の1、2本は叩き落す！」

「カハッ！ ハハハッ、アアハハハハッツツ　　！！」

ベアトリスの宣言に、ヴィルヘルムは腹を抱えて大笑する。そして、赫と輝く赤い双眸が、堪えがたい憤怒を爆発させた。

「言うねえ、こりやおもしれえ。貴族の嬢ちゃんが勇ましいことだ。んな細っけえ体でよお……俺とやれるとでも思ってたのかあ！？ 組み敷いて串刺してよがらせて、喚かせて叫ばせて屑みてえにばら撒いてやらあ！！」

「っ　　！　　なんて下種。おまえには救いがなし……！！」

生まれて始めて投げかけられた、明確な殺意と侮蔑と下種な言葉。息を呑みながらも絶句したベアトリスは、軽蔑するようにヴィルヘルムを睨みつけた。

「おう。そんなもんは生まれてこのかた、ただの一片だって感じたことありやしねえよ。おら、来なよ嬢ちゃん。人の喧嘩にアホな横槍入れやがって。そういう真似すりゃ、どんな目に遭うか教えてやるよ」

銃と剣。

男と女。

大人と子供。

彼我の戦力差を正確に推し量った殺人鬼が、不敵に嘯く。

無論、そこまで舐められて黙っていられるほど、ベアトリスという少女は臆病でも敗北主義の雌犬でもなかった。

気高い魂を誇る騎士。16年という短い年月　しかし他の誰と比べても決して劣らぬ密度で鍛え上げられた練成の日々。たとえ目の前の青年に己の戦力が劣っていようと、自らが積み上げてきたもの全てを賭けて、ベアトリス・キルヒアイゼンは白い殺人鬼の打倒を誓った。

「言われなくても……教えてやるのは、こっちの方だあっ!!」

ベアトリスは決死の特攻を仕掛けるべく、その口腔より極大の咆哮を迸らせた

女装の殺人鬼　ウォルフガング・シュライバーは、自身の仇敵こいびとを横合いから掻っ攫われ、不貞腐れた子供のように足元の小石を蹴りつけた。

「……あーあ。なんだよつまない。せつかく盛り上がりかけてたのに。これじゃあ消化不良もいいところじゃないか」

そのさまは、外見だけを見るなら非常に愛らしく無害そのもの。だが、この場に居合わせた誰もがそれを擬態なのだと思知っていた。ゆえに　騎士たる女傑がシュライバーの存在を認可するはずもなく。

「おい。……貴様」

「ん？」

抜き放たれ、月夜を照り返す騎士の刃を手に、エレオノーレはシュライバーに背後から声を掛けた。背後から斬りかかるのは主義に反するゆえに、正々堂々。真正面から叩き潰すために誰何の声を上げた。

「男か、女か。性はどちらだ何者だ」

「クス……どっちでもないよ。見るかい？」

平常運転でさえ非常に厳格な彼女の声は、戦場に立つとさらに威圧的な佇まいを発していた。

そんなエレオノーレの、聞く者に畏怖と戦慄を植えつける声に、しかしシュライバーは怖じることなくドレスの裾をたくし上げ、自ら

の股間部を露出して見せた。

「ほら」

そこには、ぽつかりと不自然に空いた穴がひとつ。

それを見せられたエレオノーレは心底の侮蔑をシュライバーに射込み、しかし狂人たるシュライバーはそれに気づかない。

「だから、お姉さんがどつちでも愛してあげるよ？ どつする？」

「……なるほど。つまらん哲学を持っているようだな。汚らしい」

吐き捨て、これ以上の問答は無駄であると悟ったエレオノーレは、手にする騎士剣を虚空で一閃。これ以上なく明確に戦意と殺意を示して見せた。

「エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグだ。かかって来い淫売。帝都を腐らせる蛆虫が。斬り殺した後、燻蒸消毒してくれる」

「ふ、ふふふ、」

誇り高いヴィッテンブルグの名に賭けて、国を腐らす害虫は生かしておけぬ。

その意思を受けて、殺意や害意には敏感な獣のように、シュライバーは唸り声にも似た笑いをこぼす。

「殺すの？ 殺す。僕を殺す？ ……ふ、ふふふ……また、またそうやって！ 出来ないことを言うやつだなあ」

呆れて物が言えない。

この女はいつたい何を言った？ なんとさえずった？

未完成な下等生物の分際で、完成された生き物であるこの自分を、殺すだつて？

「嫌いなんだよお、誰が誰を殺すんだ？ 言ってみろオオオオオオツツツ！」

その放言、聞き捨てならぬ。

やれるものならやってみろ、だがその前に死ぬのはお前のほうだ！

無数の投げナイフが手の中で踊る。

致命の拳が握られる。

少女のような、少年のような、愛らしい佇まいをかなぐり捨てて、狂える獣は逆鱗に触れた愚か者を仕留めんと雄叫びを上げた。

対し、エレオノーレは凍える声で、狂犬の雄叫びに返答した。

「私が、お前をだ。 思い知れッ！」

「呆れたあ。とんでもない坊やたちねえ。あれ、二人とも半分人間やめちやってるわよ」

アンナ・マリア・シュヴェーゲリンは殺し合う二組の男女を見やっつて、完全に他人事のような気楽さでつぶやいた。

その傍らに立っていた神父、ヴァレリアン・トリファはアンナの言葉を聞いて眉を寄せる。

「つまり、女性将校たちの分が悪いと？」

「そうねえ。彼女たちも非凡ではあるようだけど。たまにいるのよ、ああいうのが。武道も魔道も知らないのに、環境だけで生み出される【人間獣】。ふふ。言葉遊びをすれば、【外道】って奴ね。……

……あら？ この台詞、どこかで言ったような気が……」

はてな？ と小首をかしげながら、アンナは気を取り直して死闘を繰り広げる者たちの戦力の差を分析して、それを神父に解説してあげた。

「……見る限り、小さい坊やが9点。大きい坊やが7点。赤毛の軍人さんはまともだけど、鍛え方が半端ないようだから、同じく7点。金髪のお嬢さんは5点というところかしら。ジリ貧ね。でも他にやりようがない。組み合わせを逆にしたら、金髪のお嬢さんは真っ先に死んでしまうわ。そうだったら、最悪2対1の展開だし。赤毛の軍人さんもそれはわかっているみたいだけど、自分たちが2人がかりで攻めるのは主義に反する、ってことなのかしら。だったらいつそ逃げちゃえばいいものを、それもできないのが騎士道精神。泣けてくるわねえ。手詰まりじゃない」

「では、なぜシュトライテン卿は彼女たちに助勢しないのですか？」

ヴァレリアンは、どっちつかずの距離で戦闘を眺めているだけの男に怪訝そうな目を向けた。

ヴァレリアンの【視た】限り、あの男はこのような事態を座したまま見ているほど臆病でも大人しくもない。むしろ真っ先に突撃していくような男だ。

なのに苦戦している女性将校たちを助けるでもなく、ただ突っ立っているだけなのはなぜなのか？

ヴァレリアンの疑問を受けて、アンナもまた同感なのか呆れたように嘆息した。

「確かにねえ。フランメならどっちの坊やにも勝てちゃうのに」

「なんと……シュトライテン卿はそれほどの方なのですか？」

「ええ。フランメってハッキリ言って化物よ。武道を尋常じゃない密度で極め続けて、人間の限界値に到達しちゃってる。10点満点ね。しかも、厄介なことに変な能力まであるし……」

エレオノーレとアオスブルフ。共に人間としての極限に立っていないから、その戦力には絶対的な差が生じている。

その差は【性別】だ。

男と女とは、筋肉の量、体格を初めとした知力体力の基礎性能に壁があるのだ。

女は子供を生むための機能があるのに対し、男はそれが無い。ただ頭で、体で戦う機能しかないのだ。その時点で生き物としての規格が違う。

ゆえに、持って生まれた才能の量が同じでも、その限界値にはどうしても差が生まれてしまうのだ。

「能力、ですか？」

「（あ、いつけない）……ええ、多分、個人同士でやり合うなら、人類最強なんじゃない？ フランメって。なのに助けに入らないのは、フランメにも騎士道精神があるからなんじゃないの。多分だけど、フランメはどっちかが死んだら、相手がいなくなった坊やのほうを相手にするつもりなんじゃない？」

「それはまた……ずいぶん融通の効かない方なのですね」

ヴァレリアンの率直な感想に、アンナはプツと噴きだして、一応の友人である彼のために否定してあげた。

「普段は融通が効くほうよ？ ただ、譲れない思想や哲学があるだけで」

「なににせよ……軍卒とはいえ女性の危機です。私で何かの役に立つなら、手助けをしたいところですが」

「やめたほうがいいわよ。だってあなた、-10点。ついでに言うのと、あっちで呆然としている青髪のお嬢さんは、平々凡々な1点ね。どうしようもないわよ」

「ならば……あちらの御仁はどうなのですか？」

「……え？」

不意に転じたヴァレリアンの目線に、アンナは呆けたような声を上げた。

「気づいていなかったのですか？ あれはおそらく、ゲシユタポ長官閣下殿に、宣伝宰相の隠し玉。彼らならどうなのですか？」

「……。……っ」

アンナの洞察力を頼ってのヴァレリアンの言葉に、しかしアンナは言葉が出ない。

見えない……魂の質、その本質が。深く……どこまでも沈んでいく
巨大な……。

胸を押さえ、喘ぐように呼吸を乱すアンナ。

それに、神父は唐突なアンナの変貌に、驚愕して、震える声で声を
掛けた。

「……どうしました、シュヴェーゲリンさん？」

「うそ……うそよ……っ、……そんなこと……有り得る、はずが……」

「……………!?!?」

ぼそぼそと紡がれる呪詛にも似た怨嗟の声。

まるで、強者。生まれながらの絶対者。輝ける暴的なまでの黄金。

底なしに沈む深遠の魂。

恐駭する己の体を抱き締めて、魔女は狂乱するようにして絶叫した。

「……なんで……どうして……、なんで、なんで、なんで……!!」

信じられないふざけてる！ 認めないわ、なんであんなのが、

「この世にいるのよおっ!」

【 : : 】

「 どうです？ なかなか興味深い催しでしょう？ 双方共に、ある意味ヒトの極限だ。やはりこの国の人材は面白い。ふらりと外に出ただけで、あのような者らに会ってしまふ。これが貴方にとって無聊の慰めとなれば幸いだが……。感想をお聞きしてもよろしいか？ 」

「 ……」

自称占星術師 カール・エルンスト・クラフトは、常人には目にも留まらぬ速さと迅さで繰り広げられる激戦を離れから観戦しながら、傍らに立つゲシュタポ長官のラインハルト・ハイドリヒに訊ねた。

それに。ラインハルトは微塵も表情を崩さずに、己という人間を誤解している宣伝相の隠し玉を一瞥して率直に告げた。

「 道化師。 …… いや、卿が何者であろうと置いておくが。私はな、それほど大した男ではない。昔から加減というモノが出来なかったゆえに、なんでもあれ真摯に取り組み、結果としていつの間にか今の地位に就いていただけだ。まるで止まることの無い車と同じだ。性能がどうであれ、休まず走り続けていれば世界の一周や二周は誰でも回れる。卿が私に何を感じているかは与り知らぬが、つまるところ

る、ラインハルト・ハイドリヒなどそんなものだ。娯楽が欲しければ他に面白い者はゴマンといょう。そちらに行け」

そうだ。そのとおりだ。

ラインハルトは己の半生を振り返って、改めてそう結論した。

己は手加減とは無縁の人生を生きてきた。

全力を尽くし、そしてそれゆえに中将などという、現在のラインハルトの年齢では考えられない地位に就いている。

ゆえに、ラインハルト・ハイドリヒという人間は、それほど面白い男では、無い。

断言するラインハルトに、しかしカール・クラフトは失笑をこぼした。

「これはまた。貴方に韜晦など似合わない。私が、まだこんなものでは無いと言っても気は変わらぬか」

「なに……？」

こんなものではない、とはどういう意味だ？

この、眼前で繰り広げられる死闘が、なお一層激しくなると言う意味か？

それとも……よもや私が、ラインハルト・ハイドリヒが、か？

「中将閣下。貴方は加減が出来ないとおっしゃった。止まることが出来ぬとも。しかし、では聞かせていただく。貴方は本気を出していたか？ 走るつもりで歩いてはいなかったか？」

「どういう意味だ」

「言葉通り、そのままに」

答えは後者。

カール・クラフトは言う。貴方はそんなものではないと。貴方は全力など人生でただの一度も出した事はないと。貴方は全蹶するような笑みを口元に刷く道化師は、ラインハルトが結論した人生のすべてを否定する。

「卵を割るが如き所業に、獅子は牙と爪を使ったか？ 地を這う虫との競争に、鷹は翼を使ったか？ 貴方のおっしゃる、加減が出来ず歩いた道とは、一体どこにある道だ？ 私には見えない。見たこともない。さきほど車を比喻に出したが、ではこう言わせていただこう。大陸を飛び越え、海に向こうにある敵国を破壊できる新型爆弾。あるいは、宇宙へ飛び出すそれでもいい。その燃料と内燃機関を持ちながら、周りが公道だからという理由で一般車両に載せて走っている。つもりになっている。それが貴方だ。違うかな？」

「楔が、必死に人間たらんとしていた黄金の心の城壁を破壊する、呪いの言葉。吐き出されるそれら全てに、この時、ヒトとしての防衛本能がラインハルトを喚起した。」

「そろそろお認めになさるといい。貴方は本気など出してない。加減が出来ない性分ゆえに、そうしなければ秒と持たない人と世界に倦んでいるのだ」

「馬鹿な。卿の誇大妄想は一体どこまで広がっている？ 爆弾の燃料と内燃機関だと？ 私がそんなものを積んでいるのなら、とうにこの国は灰燼と帰している」

「ですから、なぜそうしないのかと問うている」
「っ……」

だが。そのようなチャチな防衛機能など、カール・クラフトからしてみれば紙切れ程度の壁に過ぎず。

言葉の刃は容易に、眠れる黄金の獣の壁を破壊していく。

咄嗟に返す言葉に詰まったラインハルトに、畳み掛けるように、謳うように邪星は嗤った。

「この国がお好きですか？ 慈しんでおられますか？ 友人、妻、恋人、家族、部下に上官に市井の諸々。貴方がだいそんなものを尊き寄る辺にするなど有り得ない。なぜなら」

「カール・クラフト」

それ以上は聞き捨てならぬ。

最後の防壁が、軍人としての愛国心、忠誠がラインハルトを突き動かした。

「いい加減に口を噤め。初めて会った時に言ったはずだ。卿が国家に害をなすなら許さん、とな。もしこれ以上、くだらん戯言を抜かすなら」

鬮體を背負った貴公子殿は、つまらぬ遊びに退屈している子供のようだ。

牢屋越しに嘯いていた男の言葉を思い出しながら、胸の内から沸き起こる諸々すべてを押し殺し、恫喝するように占星術師を睨み据えた。

「その口、二度と開けぬようにしてくれるぞ」

「おやおや。これはこれは」

しかしその本気の恫喝に、カール・クラフトは少しも堪えた様子は無く、微笑すら浮かべながら言った。

「ですが閣下。最後にもうひとつだけ」

聞くな。これ以上この男の言葉に耳を傾けては駄目だ。呪的な韻を踏む、男の言葉は、ついに、ラインハルト・ハイドリヒの心に致命の一楔を容赦なく打ち込んだのだった。

「この世の黄金率の一形態に、ピラミッドと言うものがありましょう。その頂点には、『誰も横におらぬ』と言うことを。貴方はそういうお方です。ご自覚なさるがよろしいかと」

「下らんな。卿の言う事は何も分からん。餓えや渴き？ 私は自覚などしていない。……しかしなぜだろうな。不明だが……私は今ただ無性に……この者たちを」

捻じ伏せたくて仕方がないんだ……ッ！」

歪みの一言。

檻を開かれ、餌を差し出された獅子が、ついにその誘惑に耐え切れず、迸る魂の胎動に声を震わせた。

「……では、ご随意に」

水星は、ひとつの生命の誕生を言祝ぐように笑ったのだった。

さて。 獣殿は動いたぞ。 君はどう動く？ 私のこと？ 既知？ に無い
異端者殿。

第7話「未知」

「第7話
未知」

「 :アオスブルフ : 」

燃え盛るベルリン大聖堂を背景に、二組の男女が踊っている。

ベアトリスの剣が翻り、敵を斬り伏せんと勇躍し 。 。
ヴィルヘルムの爪と銃とが小生意気な小娘を叩き潰さんと嘲弄し
。

エレオノーレの刃剣が閃光となって敵手を葬らんと勇戦し 。 。
シュライバーの投剣と拳とが、獲物を屠らんと咆哮した。

「 ……キルヒアイゼンか。真っ先に死ぬのは」

俯瞰した第三者の視点で眺めながら、私は冷静に断言した。

なにぶん16歳の少女だ。

身体能力が最も劣り、殺しの経験がないためか、揮われる刃には僅かに迷いがある。

そんな剣ではあの白い青年を打倒するには及ばず、経験豊富な殺人鬼は青臭い小娘を打ち殺すのにそれほど手間を取らないだろう。

おそらく、今の白い青年は遊んでいるのだ。宿敵との潰しあいや邪魔された腹いせに、徹底的に鬪って弱らせ絶望させながら殺そうとしている。

エレオノーレは、自らより強大な敵に対しても、身につけた剣術と戦術眼、白い少年に劣らぬ殺意と気迫を以ってなんとか互角にまで持ち込んでいるが、ジリ貧だ。ベアトリスよりは長く保つだろうが、やはり白い少年には敵わない。

「……………というか、あの餓鬼は何者だ？ あんな小さな体でヴィッテンブルグを圧倒するとは……………」

体格に見合わぬ怪物ぶりを発揮する白い少年を見つめ、私は独白する。

おそらく、女性将校の中では随一の能力を持つだろうと思われるエレオノーレを相手に、脆弱な少女の如き細体で立ち合うあの少年に、私は少なからず驚嘆し興味を覚えていた。

「ともあれ、そろそろ準備でもしておくか……………」

じきにベアトリスが殺される。

よもや助勢しなかったからと恨むような女ではないだろうし、私が出張するのはその時だ。

だが、ベアトリスの才能は惜しい。あと4年も修練を積みあげればエレオノーレを超える剣の使い手に成れただろう。

しかしベアトリスは未熟ながらも騎士たる魂の持ち主だ。

ならばその決闘に無粋な横槍を入れることなど恥すべき所業である。もったいないが、見捨てるより他あるまい。

早く気づけたのは、これまでの弛まぬ修練と歴戦の兵士としての直感とを持ち合わせていたからだ。

この時、私は、運命と出会った。

【 : : 】

「フツ！ ハツ！」

「アハツ！ アハハハ！」

裂帛の気合と共に振り下ろされる騎士剣を、玩具のような薄いナイフ刃で受け流し、ウォルフガング・シュライバーは無数のナイフを一度に4本、片手で投げ放つ。

飛来する弾剣を、エレオノーレは慌てず冷静にかわして弾いて避けて打ち返す。

吹き乱れる暴風のように暴れ回るシュライバー。彼は、正真正銘の化物であった。

この小さな体のいつたいどこに、これほどの膂力があるのだ。エレ

オノーレは打ち合う一撃一撃で手が激しく痺れるのを忌々しく思いつつも、シュライバーの怪物性を認めざるをえない。

そして、エレオノーレの分析はすこぶる正確にシュライバーの本質を見抜いていた。だからこそ、そのシュライバーが唐突にエレオノーレ以外の何者かに怯え、飛びずさったのに驚きを禁じえなかったのだ。

カツ、カツ　軍靴が踵を鳴らす威圧の音。

まるで、満員の狭い個室の中に押し込められた圧迫感が、この空間に充満し、居合わせた者たちは残らず総身を粟立たせて戦慄に総毛立った。

その感覚を遅ればせながらも察知したエレオノーレは、咄嗟に背後を振り返って驚愕した。

「どけ」

「なっ　！」

短く、しかし拒否を許さぬ絶対の命令。

ラインハルト・ハイドリヒ中将。この場の最高階級者。

そして、エレオノーレやアオスブルフが誰よりも先んじて守らねばならない人物でもある。

そんな人物が突如として戦線に介入してきたのだ。エレオノーレは驚き、しかし軍卒としての意識が、ラインハルトが発する暴的なままでの存在感に声を震わせながらも忠言した。

「お、お下がりにください中将閣下、危険です！」

この時アオスブルフは、その守るべき立場の人間を、これまでの人生で目にした何よりも【危険なモノ】だと認識していた。してしまっていた。だからこそ、

「どけと言った」

無造作に、容赦なく薙ぎ振るわれたラインハルトの腕に瞬間的に反応し、エレオノーレを突き飛ばしてその暴力を受け止めることができたのだ。

「グ　ッ！」

己の右腕を盾に見立てて持ち上げ、受け止めた。衝撃を完全に殺しきる防御の構え。

にもかかわらず、アオスブルフは与えられた衝撃に耐え切れず、たたらを踏み、戦慄と共にシュライバーへ迫る黄金の背中を見送るこ
としか出来なかった。

（なんて、重さ……！！）

ジグジグと、打撃を受けた腕が痛みと痺れを発している。

ただの一撃。一撃で、腕を持ち上げることさえ困難なほど、ラインハルトはアオスブルフに『敵わない』という確信を抱かせていたのだ。

体ではない。才能でもない。

魂の、規格が違う

アオスブルフという求め続ける者にとって、始めて目にした『頂点』。アオスブルフはその背中に、絶対的な畏怖と畏敬の念。そして生涯無縁であるうと思っていた、『憧れ』の気持ちを植えつけられたのだ。

そして　なお一層の恐怖を感じていたのは、ラインハルトの標的に設定された子犬。ウォルフガング・シュライバーだ。

獣のソレに酷似した本能と直感力を持つがゆえに、シュライバーは決して敵わぬ存在であるラインハルトに恐駆していたのだ。

やげて、完全に硬直していたシュライバーは、眼前にまで迫ったラインハルトに、呆然と声を漏らした。

「あ………」

「どうした狂犬？　なぜ吼えん」

滲む暴力への愉悦。無意識の内に己へ課していた『手加減』を完全に解除された黄金は、怯える狂犬につまらなそうに吐き捨てた。

「う、あ……あ、ひっ」

手が伸びる。

伸ばしながら、ラインハルトはシュライバーの左目が見えていないことに気づく。

「　その目、膿んでいるだろう。ならば要るまい」

「　うあ、うわああッッッ！　うわあああ、あ、がつ、」

我に返った　　というよりは強烈な恐怖に突き動かされたシュライバーが、ナイフでラインハルトに突きかかる。

だが突きかかった手をあっさり見切られた上にナイフを叩き落されるや、またたく間にシュライバーは首を強靱な握力で締め上げられて、言語を絶する恐怖に恐慌を来たし、声なき声で悲鳴を上げた。

上げようとした。

だが、シュライバーの喉を締め上げていたラインハルトはそんなことさえも許さずに、狂犬の膿んだ右目に指を突っ込み、決る。

「…………ふん」

「うあつ!!??」

つまらなげに鼻を鳴らし、ラインハルトは持ち上げていたシュライバーを無造作に投げ捨て、シュライバーは塵溜めに突っ込んだ。

「そ、そんな…………」

「なんですか、あれは…………!!」

「うそ…………うそよ、こんなの…………」

リザが。

ヴァレリアンが。

アンナが。

その様を残らず目撃した者たちが、絶句し、驚愕し、放心する。人間を超えた【人間獣】を、ああもあっさりと圧倒した暴力に、本能的な恐れを抱いたのだ。

知らず、黄金が忍び笑いをこぼす。

くく、クククク……！

「退け！ 下がるんだキルヒアイゼン ツ！」

ラインハルトの歩みが、今度はベアトリスとヴィルヘルムに向いているのを察知したエレオノーレが、焦燥のあまり声を荒げた。

だが、ベアトリスがそれに気づく間もなく、ラインハルトは2人の間にたどり着き

「え？ あ、 きゃあつ！？」

羽虫を払うかのような容赦のない拳が、ベアトリスの体を薙いで払い飛ばした。

「な、なんだよテメエは……！」

ザツと眼前にまでやって来たラインハルトに、ヴィルヘルムは震える声で誰何した。

ヴィルヘルムに、先程までの暴虐の気は既がない。ただラインハルトと対峙しただけで根こそぎ気力を吸われるようで、虚勢を張るのが精一杯だった。

「何者でもない。貴様はなんだ？」

「ああ……？ 俺は……」

お前は何者か？

そんな、あまりに基本的過ぎて、ほとんど考えたことさえない存在^{レイン}証明^{デル}を問われ、ヴィルヘルムはただ反駁することさえ出来ないことを、この時初めて自覚した。

糾すかのようになおラインハルトは続けた。

「血を好むのか？ それとも忌むのか？
まずは、己の血を顧みよ」

「ガッ!？」

振り抜かれたラインハルトの拳が、ヴィルヘルムの認識を超えた速度で腸に突き刺さり、容易く白貌の殺人鬼を吹っ飛ばす。

「ぐ、お、あ、ぎいあおえっ!」

刻まれる恐怖。植えつけられる畏怖。激痛と恐慌と呆然。それらが緋い交ぜになって、ヴィルヘルムはジワジワと己を締め上げる諸々に、地をのた打ち回りながら自失する。

ふふ……、ふふふ、くくくく、アハハハハハ……ッ!

その様を。

獣は、堪え切れぬ嘲笑を口腔より迸らせ。

眼下でのた打ち回る畜生を躡るように嗤いながら、胸の奥底から沸き起こる？未知？の悦びに震えていた。

「なんてこと……」

リザ・ブレンナーが啞然と呟く。

「どつやらカタがついたようですが……しかしコレは、助かったと言えるのでしょうか……」

神父が嘆くように嘆息し。

「あれが……ラインハルト・ハイドリヒ……」
「……」

魔女と異端者は、ただ立ち尽くした。

「その2人」

「は ハッ！」

「な、なんでありますか、中将閣下」

迸る哄笑が収まり、突然指名されたエレオノーレとベアトリスは声を詰まらせながらもなんとか返答した。

「あちらにいる神父と女2人を、ゲシユタポに連れて行け」

「えっ!？」

「し、しかし閣下、それは……!」

告げられたのは、おおよその件には無関係であると思われる神父とアンナ。そしてリザ。

くだされた指令に、ベアトリスが驚き、エレオノーレが反駁しようと声を上げるが、

「二度言わせるな。今すぐにだ」

断固とした語調に、言葉を飲み込むしかなかった。

自らは軍人。ならば、上官　それも7階級も上の　命令に抗えるはずがない。

「　っ、かしこまりました。行くぞキルヒアイゼン!」

そのことを承知していたエレオノーレは、あらゆる反論を瞬時に飲み込み、立ち尽くす部下を叱咤するように声を張り上げる。だが、ベアトリスは未熟ゆえの無謀を犯し、倒れ付す白い殺人鬼たちを指し示した。

「あ、で、ですがその、あ、あの2人はどうするのです？ 国家反対の」

「卿らの知るところではない。私が戻るまで神父たちを拘束している。それから中尉」

「ハッ！ エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ中尉であります！」

なおも言い募ろうとするベアトリスを遮るようにして、エレオノーレは完璧な敬礼と共に張り上げた声で名と階級を名乗った。

余計な口を叩くな馬鹿者！

無言の一瞥でベアトリスの口を強引に閉じさせ、エレオノーレはラインハルトに正対した。

「卿ら2人、異動願いを出しておけ。ゲシュタポに来い」

「っ！」

「そ、そんな……」

「わかったか？ では行け」

「ハッ！」

突然の異動命令に、しかし2人の女性将校たちは拒否できない。できる権限はなく、拒否する気概などラインハルトを前にしては保てるはずもなかった。

逃げ出すように神父たちのもとに駆けはじめたエレオノーレとベア

トリス。それを傍から見ていたカール・クラフトは忍び笑いをこぼしていた。

さて、おそらくは生まれて始めて振るったであろう、手加減の薄い暴力の味はいかがでしたかな？ 中将殿。たとえ貴方が否定しようとして、私には見える、感じられる。その魂が、歓喜に打ち震えていることを。

おや？ 酔ってしまわれているのか。無理も無い。なにせ……そこにまだ、立っている男がいるのだから。

含み唾う水星の目は、黄金の瞳の向かう先 2人の？ 既知？ になり異端者へと転じられた。

【 :アオスブルフ: 】

帝都を騒がせていた殺人鬼は倒された。

エレオノーレでも、ベアトリスでも、ましてや私でもなく。

本来なら守られる立場にあるべき男　　ラインハルト・ハイドリヒの手によって。

軍人として恥ずべき気持ちは　　しかし無い。
むしろ殺人鬼に対して同情の念すらあつた。

あんな理不尽極まる暴風に晒されたのでは、二本の脚で立っていられるはずも無く。

強者としての矜持を持っていただろう2人は、力こそを寄る辺とした誇りを根本から叩き折られたはずだ。

いや　　かぶりを振って、同情の心を捨てる。

誇りを折られたのは犯罪者。死刑が適用されているのが目に見える凶悪犯だ。

騎士ではない、軍人ではない、同胞でもない。ならば、彼らのことなんぞで心を動かすなど愚の骨頂である。

中将がエレオノーレとベアトリスに命じる。

アンナと神父、そしてブレンナーをゲシュタポに連行し拘束しておくようにと。

その真意は読めずとも、軍人なら従うほか無い。一度は反駁しようとしたようだが、すぐにその気概は鎮まって、わめくアンナと、従容として従う神父、ブレンナーを引き連れて、エレオノーレたちは退場していった。

「……………」

そして　　残ったのは私とラインハルト。　　それともう1人。存

在感の薄い影絵の如き男。

宣伝相の隠し玉　名は確か、カール・クラフトといったか。

ともかく、私がこれ以上この場に残っておく必要は微塵となく、である以上、私は何か面倒に巻き込まれる前に、速やかに退場するべきだ。

そう判断した。　なにせ、中將の強烈な凝視が　否、カール・クラフトまでもが私を見ているのだから。

本能ではなく、理性が感じた。
理性ではなく、本能が命じた。

逃げる

喰われるぞ

焦燥にも似た思考に突き動かされ、私は中將にのみ敬礼し、逃げ出すようにして踵を返そうとして

「待て」

勘弁してくれ……

呼び止める、玲瓏な男の声。

それに、思わず天を仰ぎたくなりながらも、私は渋々と足を止めた。軍卒である以上、呼び止められたのなら勝手に立ち去ることはできないのだ。

この時ばかりは、軍人である我が身を嘆いた。

「何でありましょう、中将閣下」

「卿は何者だ？」

「ハッ！ 私はアオスブルフ・フォン・シュトライテン大尉であります！」

「そういう意味ではない。アオスブルフという男は【何者】だと、そう問うている」

傍から聞いていれば、頭のおかしい質問に聞こえる。

だが、実際にラインハルトに直面し、その言葉を耳にしている私には笑えない。笑えるはずがなかった。

私は何者か？

はからずも、中将が先の白い青年に投げかけた問でもある。

その問を受けて、しかし私は一瞬も迷わずに即答した。

「私はアオスブルフ・フォン・シュトライテンという一個の男です。それ以外の何者でもなく、ゆえに、私は私であるとしかお答えできません」

「そうか」

確固とした意思をこめての言葉に、ラインハルトは納得したようにうなずいた。

そして どういうわけか、ラインハルトの目がこれ以上なく癡猛に輝いているのを、私は見てしまった。

まさか、な。

勘違いであってほしいと、単なる思い違いであってほしいと、儂い願望に縋り付きながら私は身を強張らせ 次の瞬間。無造作に雑

ぎ払われたラインハルトの右腕を、私は咄嗟に回避していた。

「中将閣下、何を　　ッ!？」

こちらになんらかの落ち度があり、それをラインハルトが修正のため放った一撃なら、甘んじて受けねばならない。そして、それなら受ける覚悟はあった。

だが、ラインハルトの放った今の一撃は、修正ではなく、破壊の一撃。完全に私を殺すつもりで放った、掛け値なしの致死攻撃だ。

いきなりのそれに、私は胸の内ですごく舌打ちした。

もしかとは思っていたが、正気を失っているのか……!？

そんな馬鹿な。ラインハルトの目には、確かに理性がある。ならばなぜ、私を殺そうとした!? 殺意が漲る拳を振るった!？

「ほう……」

飛びずさって一撃を回避した私に、ラインハルトが感心したように唸った。

そして　なんと、ラインハルトが構えた。

軍隊式格闘術……ではなく、極めて自然体な戦闘態勢。いつそ惚れするほどの美しさを湛えた、戦闘者たる姿。

白い少年にも、白い青年にも構えなかったラインハルトが構えた姿が　ここまで美しいとは。

その姿に武人として尊敬の念を抱く。
が

「どういつつもりです、中将閣下！ 私に何か落ち度でもありませんか？！」

「いいや。単に暴れ足り無かったのな。少し私の運動に付き合ってくれないか、大尉」

運動？ 運動だと？

それほどまで殺意 否、暴力的なまでの圧迫感を放っておきながら、運動？

……笑わせる。

その言葉。侮辱と受け取った。

だが。だが、これはチャンスでもある。

ついさきほど私に感じさせてくれた『頂点』の力を味わえる貴重なチャンス。

ならば、『頂点』を目指すこの身がそれを逃す手はあるまい。

「 よろしいでしょう。上官の駄々をお諫めするのもまた部下の役目。不肖ながら、私がお相手つかまつりましょう」

ザッ、と脚を開いて持ち上げた両拳を軽く握る。息を整え、沸き起こる恐怖や緊張 すべてを感情を封殺し、ただ冷徹な戦術眼のみを頭に残す。肩の力を抜き、瞳孔を広げて視界全体を捕捉する。

時間にして1秒未滿。たったそれだけの時間で、アオスブルフはひとつの戦闘単位へと身を変生し 準備は整った。

「中将閣下。 参ります」

「ああ、来るがいい、大尉」

瞬間でもいい、この渴きを、餓えを癒してくれ　！

それは、おそらく己でも自覚していない？未知？の存在への歓喜。
そしてそれゆえの希望だ。

『もしかすると　もしかするかもしれない』。
そんな、淡い期待。

そして　その期待を知ってか知らずか、アオスブルフという？既
知世界？のイレギュラーは裂帛の気合と共にラインハルトの間合い
へと踏み込んだ

【　：　：　】

「フ　フフフ、ハハハハハ……！」

そして。

黄金と異端が舞い始めるや、抑えていた笑気が遂に限界を超えて水

星から漏れ出ていた。

顔面に亀裂が奔ったかのような、誰がどう見ても笑っているようにしか見えない、同時に誰がどう見ても笑っているようには見えない、異形の笑み。

悪魔的でさえある微笑を浮かべながら、水星　カール・エルンスト・クラフトは歓喜に打ち震える我が身を抱きながら問を発した。

「お前は何者だ？」

私は知らぬぞ。
知らないのだ。

つまり【未知】。

この狂おしいほどに呪わしいゲッターの中で、突如として現れた怪物人物。

求めてやまなかった宝物のひとつが、いきなり天から降ってきたような心地だ。

忌まわしい幾億の歳月を積み重ね、求め続けたモノが手を伸ばせば届く場所にある。それだけで、全てを薙ぎ払ってでも手に入れたいくなる。

だが

「口惜しいかな。私がでしゃばると碌なことが起こらない」

その、呪いとも言うべき宿業に、無限の怨嗟を込めて嘯く。

「お前は何者だ？」

繰り返される疑問。

だが、カール・クラフトはその正体におおよその見当がついていた。

この私と、我が女神と同等の？魂？……性質的には我が女神と同じ【求道型の流出】か。

つまり【特異点】。

この【世界】の【流出者】である我が身に生じた、【既知世界】に囚われぬ魂。

だが やはり疑問する。

「お前は ふふふ、」

なんだ？ 何者だ？

あのイレギュラーが何者かが分からない。

【流出】の域にある魂の持ち主ならば、マルグリット……我が最愛と同じく【特異点】にその魂を隔離されるはずなのだ。にもかかわらず、なぜ。なぜあの魂はこつも自然に【既知世界】に溶け込んでいる？

なぜ、【流出】という神の領域にあるはずのその魂が そうも脆弱なのだ？

そう、あのイレギュラーは弱い。

あまりに弱い。

潜在的には、あるいは総軍に匹敵するかもしれない。

だが足りないのだ。それでは 私に届かない。

「どちらにせよ、お前は面白い」

で、あるならば。

それだけで理由は充分。

「我が円卓に迎えよう。【炎の魂】を持つ勇者よ。そして 叶うならば我が友になってくれないか？」

届くはずの無い声を投げかけながら カール・クラフトは祝福するように、半死半生の態となっている男へと透明な笑みを向けたのだった。

【 :アオスブルフ: 】

数学。語学。経済。政治。歴史に地理に生物学。
それらの学問に15年。一秒の無駄もなく費やし、学び、貪り、糧

とした。

良好な人間関係の構築を平行しておこない、周囲の人間に対する印象構築に同じ時間をかけた。

女を抱いた。遊びではなく、己の経験として得るために。いずれ出会うかもしれない愛する者との行為の中、恥をかかない為に己という個人を高めようとした。

体を鍛えた。無駄なく。

志を持った。緩やかに死んでいく祖国を建て直そうと奮起して、政治家になった。

そして、民心を得て選挙に勝利し、独裁者の謗りを受けながらも改革を進めた。10年かかった。

待っていたのは、信じていた部下からの裏切り。暗殺だった。

祖国がどうなったのかなんて知らない。死んだから。

目が覚めた時、自分が子供になっていたのに驚いた。

そして、どういうわけか自分が外人　アーリア人になっていたのに混乱した。

だが、私はその混乱を脱した時、知ったのだ。周囲の人間がドイツ語を話しているのを。

髑髏の帝国。アドルフ・ヒトラーが夢見た千年帝国、ドイツ第三帝国に生を受けたのだと。

原因は不明。何も分からない。

だが、私は行動せずにはいられなかった。性分だったのだ。何もせずにいるというのは、私の魂の在り方に反する。

体を鍛えた。

頭脳は、既に前世で磨き上げた自負があったのだ。ゆえに、己の持ちえる才覚を全て肉体を鍛え上げ、研ぎ澄ますことにのみ費やしたのだ。

そして、年月を重ねて肉体が少年にまで成長すると士官学校に入学した。

政治家は、もうこりこりだった。

粉骨碎身の精神で改革を推し進めた末に裏切られたのがトラウマになっただろう。政治に関わるのはもう嫌だったのだ。

だから、政治家ではなく、今度は軍人を志したのだ。

主席卒業。

周囲の者、家の者たちは私を讃えたが、私にとっては当然の結果でしかなかった。

そして実戦。

殺し合い。

思いの他、冷徹な思考を保ったまま死地を潜り抜けた。

やがて、私はこの国の者たちの必死さを知った。知ったからこそ、この国が好きになった。

いずれ滅びる運命を知っていながら、それでも愛してしまったのだ。

この国を守りたい。

そう願ひ、私はさらに己を鍛え上げた。

さらに　さらに、さらに。積み上げて、鍛え上げ、いずれ興る連合軍に負けぬよう、勝てるように己の存在を。そして部下たちを厳しく容赦なく練磨し続けた。

そして至つたのだ。

至つたと思つていた。

【頂点】に。

ヒトの、頂点へ。

だが勝利にはまだ足りないと思つていたから、さらに己を磨き上げてきた。

ああ、白状しよう。

私は慢心していた。

傲慢にも、一対一ならば私に敵う者などいないのだと思い込み、勝手にこの世に絶望しかけていた。

なんて愚かな。なんて無様な。

そして 生まれて初めて私の心に畏怖と畏敬の念を刻み込んだ男の拳が、一切の容赦なく私の横つ面を捉えた時。

私はようやく、これまで己を縛っていた醜き鎖（慢心）から解放された。

私の顔は、おそらく腫れ上がって見るに耐えない醜男のソレに整形されてしまっているだろう。右腕は折れ、肋骨は内臓に刺さってこそいないが折れている。

重傷だ。これ以上続ければ、まず間違いなく軍人としての生命を絶たれることになるに違いない。

構うものか。

むしろ、ここまで追い込まれるまで慢心に囚われていた己の愚劣さには吐き気がする。

ああ、死んでもいい。こんな無様を晒してまで生きていたいとは思わない。

ただ……一矢報いることもせずには斃れるのだけは、絶対に、この意地と誇りと魂に賭けて、絶対にッ！絶対に御免だ　　ッッッ！！

「　　目は醒めたか？　大尉」

黄金が問う。

傷ひとつ、打撲傷ひとつなく。

息すら乱していない黄金が、この二度の人生でただの一度も目にしたことのない【頂点】の人間が。目の前に。いる。

目の前にいて、そして、この身が全霊を尽くす瞬間を待ち望んでいる。

「ハッ、ハハハッ

」

自然、私の口から、血泡とともに笑声がこぼれた。

ああ、醒めたとも。醒めましたとも中将閣下。我が親愛にして偉大なお方よ。

故に

シュー

総身より立ち上る気炎が、アオスブルフの体に纏わりついて発火す

る。

循環する血液が沸騰するマグマのように熱く燃え。『噴火』する闘気を全霊の気迫と共にラインハルト・ハイドリヒへと叩き付けた。

「もはや貴方を上官とは思わない。殺す【つもり】ではなく、確実に【殺す】気で、貴方に挑みましょう。それが礼儀だと、そう弁えておりますので」

「面白い」

笑う黄金。

悪魔的に、その本能を急速に開花させながら　水星が浮かべていたものと同種の笑みを口元に刷いた。

愛すべからざる光の君　メフィストフェレス。
覚醒するには早すぎる、黄金の目覚め。

「気に入った。実に気に入ったぞ大尉。卿を我が友に迎えよう」

讚える黄金。生まれて初めて目にするだろう異能の力を目撃しても、その声に怖れの念は微塵もない。
それでこそ、私を始めて【燃えさせた】男。この程度で怖れられては困る。屈服させ甲斐がない。超え甲斐がない。

ああ、超えてやるぞ中将閣下。

貴方を倒し、必ずや貴方に言わせてやる。

『負けました。貴方が一番です』 と。

黄金は炎を操る異端者に最大の賞賛の念を賜わし、その覇気に自らもまた【全力】を贈ることを決定した。

「 来い」

「ウウウウおおおおおおおおおおおおおお
ツツ！！！！！！」

最後の交錯。

交わる黄金と、朱色を纏う魔人。

迸る咆哮を拳に乗せ。

黄金の獣の拳が放たれる。

そして 両者の拳が振り抜かれた。

第7話「未知」(後書き)

黄金の拳は魔人の胴の真ん中を撃ち抜き。
魔人の炎拳は黄金の貌を掠めていった。

勝利は黄金。

敗北は魔人。

長い長い序曲はこれにて閉幕。

運命は始まり、開幕までの閑話が語られる。

次回、閑話「後悔」。お楽しみに！

閑話「後悔」（前書き）

なんかランキングに乗ってしまった。しかも一位。

作者感動！！

ゆえに怒涛の4話連続投稿なり。

閑話「後悔」

閑話
「後悔」

【 : ヘルガローゼ : 】

1940年、1月の4日。

アオスブルフが鍛え上げた「悪魔」中隊を引き継ぎ、ヘルガローゼ・フォン・リーゼスクレイヤーは大尉に昇格。中隊長に就任した。

前中隊長のアオスブルフ・フォン・シュトライトンはゲシュタポへ異動した。何を思っていたのか。誰よりも彼が忠勇なるドイツ軍人だということを知っていたヘルガローゼは疑問する。

「なぜ、あいつは私の前からいなくなった」

愛想をつかされたのだろう、と自問に対して自答する。

軍務の最中でしか言葉を交わさなかったこの数年間。その間も、アオスブルフは変わらず私に話しかけてくれた。

その好意に甘えて、あぐらをかいていた。

その結果が、コレ。

あいつのいない部隊。

私が補佐するはずだった、尊敬していた、同期の上官。

つまるところ。私は私の愚かさのツケを払うことになったのだ。

アオスブルフと、あの、赤毛の美女。

その2人の関係を知って、アオスブルフが別れたと言っていたのにも関わらず、その事実には拘泥して距離を置いていた。それがいったい……どれほどあいつを傷つけていたのか。どれほど場の空気を悪くしていたのか。

「馬鹿な女だ……」

アオスブルフはゲシユタポで少佐に昇進したらしい。

らしい、というのはあいつが私に教えてくれたのではなく、イングヒルトの上官、ジークマイヤー少佐がたまたま知り得た情報を伝えてくれただけだ。

……昇進したということすら、あいつは私に教えようとはしなかった。完全に見放されたのだと、悟った。

今のアオスブルフは、ゲシユタポ長官の側近らしい。栄転だ。

本来なら忌むべき部署の仕事だが、前線では一番の嫌われ者だったあいつにとって、ゲシユタポでの勤務など変わりはあるまい。ただ出世したという事実のみを認識し、これからも国に対して忠義することだけがわかった。

「大尉殿！ 出撃命令が出ました！」

部下の一人が呼びかけてきた。

私はそれに小さくうなずき、私情を全て押し殺して声を張り上げる。

「よし、出撃だ！」「悪魔」ども、私に続けえーっ！」

「了解！」

あいつがいない部隊。

それだけで隠しようのない不安が、私だけでなく部下たちの間にも流れていた。

当然だろう。部下たちは、私ではなくアオスブルフの実力を信頼し、信用し、従ってきたのだから。たとえ嫌っていた上官とはいえ、呪っていた相手とはいえ、その実力だけは疑いようがなかったのだから。

ヘルガローゼだけで何が出来るのか。

そんな、言葉にはしていないが、明確な疑惑の目で私を見る部下たち。

最も危険で過酷な任務を、この女の指揮で切り抜けることが出来るのか。もしや、この戦場を最後に、自分たちは敵の只中で全滅する羽目になるのではないか。

「アオスブルフ、見ている」

負けない。

負けてなるものか。

あいつだって、初めはそんな目で部下たちに見られていた。

所詮は若輩。戦場を知らぬ若造に自分たちを率いる資格と力量

はあるのか？

そんな、露骨な侮りを向けられていたのだ。

だが、アオスブルフはそれらを実力だけで薙ぎ払った。

なら、私にも同じことが出来ないはずがない。

アオスブルフと言う英雄の傍に居続けたこの身が、英雄と同じように出来ないわけがない。

だから　私はきつと死なないだろう。

きつと生き残って、私は

「謝らせて欲しい。生きて帰ることができたら、私を抱いてくれ

」

決意を胸に。

決然と前を向く。

そして　不屈の魂を持つ歴戦の兵は、機械仕掛けの愛馬を駆って戦場に突撃していった。

第八話「約束」

第8話

「約束」

よく誤解されるのだが、アオスブルフという男は決して傲慢ではない。
むしろ何事にも真摯に取り組み、そしてそれ故に微塵も驕らず、常に全力で生きているのだ。
その性格は会得した武術の特性にも及ぶ。

？一撃必殺？

そんな傲慢で都合の良いモノなど初めから眼中になく、徹底的に効率のみを求めた実戦的な殺人術だけを会得している。

見栄えなど求めない。武骨が良い。一撃で仕留めようなどと、そんな都合主義は己の人生にとってはジャンル違い。そんなものなど望まない。目指そうと思えない。

仮に、アオスブルフが一撃で敵を打倒できたとすれば、それは単に彼我の戦力差が激しすぎた場合だけであり、実力の近い者同士での戦いになれば、十中八九アオスブルフは時間をかけてじっくりと敵手を料理するだろう。

殺されずに殺す。

優秀な兵士の条件とは、数多くの敵を殺せることではない。単純に殺傷力の大小を問うならば、兵士は航空機から投下される爆弾一発にも劣る。

兵士見習い一人を一人前の軍人に育てるために要する費用を言えば、コストパフォーマンスはあまりにも悪すぎるということになってしまふのだ。だから本当の意味で優秀な兵士の条件とは、かけられた費用を償却せぬままに死なないこと　つまり確実に生きて還って来るということである。

戦闘より生き残った兵士によって齎される諸々の情報は、次の戦闘の趨勢をも変える可能性がある。

敵の能力。性質。装備。戦術。志気。これらを知っているのと知らないのでは勝算が劇的に変わってくる。現代の戦争は情報戦の段階でほぼ勝敗が決まると言われる所以だ。

だからこそ、生存能力の高い兵士は、それだけで価値があると言える。

その価値観。兵士とは所詮はひとつの戦闘単位に過ぎないという認識が、私が身につける殺人技術を淡泊なものとしている。

だからこそ、私は己の戦力を冷徹に推し量り、そこには誇りも愛着もない。私が身につけた戦闘術など、戦闘行為を効率的に進めるための『道具』でしかないのだ。

だからこそ、その『道具』をより効果的に磨き上げる術を私は心得ていられた。

「スウー……。……。フ　ッ！」

調息し、五臓六腑に新鮮な酸素を送り込み、気力を充溢させる。

ふつつつと沸騰する闘気を循環する血液に雑ぜ、気力と闘気が臨界

に達した瞬間、苛烈な剣気を総身より炸裂させた。

比喻でもなんでもなく、周囲に砂塵が舞う。

私を中心に物理的な風が吹いて、中庭の柱に砂利が飛ぶ。

呼吸を吐き出し、裂帛の気合を迸らせながら 両手に構えた騎士
剣を大上段から振り下ろした。

「ハアアツツツ!!」

両断。

否^{いや}。物言わぬ、抵抗出来ぬモノを斬っても意味はない。そんな
ものは実戦には通用し無い。

ならば

「ジャ ツ！」

先手必勝。左半身より入身し、後手に回った敵手が振り下ろしてく
る剣の腹に肘を叩きつけて軌道を逸らし、左肩から体当たりする。

身長187cm、体重80kgの質量がぶつかって堪らずたたらを
踏む敵手へ右手の剣を突き出し心臓を抉らんとした。

だが、敵手もまたツワモノ。咄嗟に左腕を盾に即死を免れるや地面
の砂利を蹴り上げてこちらの目を潰しにかかり、私が反射的に目を
閉じて異物の侵入を防いだ瞬間、敵手は逆襲に転じた。

首筋が灼熱の舌に舐められたかのような錯覚。

研ぎ澄まされた五感が敵手の一手を先読みし、咄嗟に体ごと首を傾
け頸動脈を裂かれるのを阻止し、剣を薙ぎ払って敵手を己の間合い
から引き離す。

目を開ける。

こちらの負傷は、首筋に掠り傷ひとつ。戦闘行動には何の支障もない。

敵手は左腕を損傷。傷の深さから、おそらくは使い物にならないだろう。今後のことを考えずに盾に使えば、左腕は壊死して切り離さなければならなくなるのは間違いない。ソレとは別に、出血のことを考えれば、長期戦は不利。間違いなく短期戦を仕掛けてくる。では、こちらの戦術は長期戦だ。敵手が最も嫌がる戦術を採用し、長期戦の構えを選択するのがこちらにとっての最善手。

と、敵手は思い込み勝負を焦った。

不利に追いやられた者は、みな一様に焦りを覚える。これはどんな強者にも言えたことであり、命に関わる負傷をした者は迅速な決着を望んですぐにでも仕掛けてくるのだ。そうでないとならば、勝負に勝つても死んでしまう可能性が出てくるゆえに。

つまり、それは攻撃手段を単純化させるということでもある。

読みやすい。そこまでくればこちらの勝利は磐石だ。

敵手が攻撃を仕掛けると体を一瞬だけ緊張させる。その瞬間を狙って私は踏み込んだ。

呼吸を読まれたことに驚愕し、しかしそれでも私の攻撃に対応しようと敵手は防御の構えに移行する。剣を大振りに横一閃。一步下がってこちらの斬撃を回避して敵手は嘲笑した。一閃を避けられた私の体は大きく横に崩れ、背中が見える。敵手はその背中目掛けて必勝を確信した剣を振り下ろした。

瞬間。

私はぐるりと体を捻転させて背中に迫る剣を回避し、かわしざまに捻転させた運動エネルギーを右脚に収束。渾身の右回し蹴りを敵手の右脇に叩きこむ。

肋骨を粉碎され、吐血し、致命的な隙を晒す敵手。それを見逃すことなどせず、私は敵手の首筋を斬りつけ、頸動脈を切り裂いた。

……… 終幕。

残心し、敵手の最後の悪足掻きに備えるが、それはなかった。確実に死んだことを確認すると、私はゆっくりと息を吐き出して剣を腰に差してある鞘へ納めた。

「 お見事。 流石は少佐 」

離れより投げかけられた賞賛の言葉に、乱れた着衣を整えながら振り返った。

声をかけてきたのは、私と同じラインハルト直属の部下であるエレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ大尉。真紅の長髪を頭の後ろで結び、漆黒の軍服で一分の隙もなく鎧われた長身は、さながら宮廷に在る騎士のようだ。

その伶俐な美貌に賞賛の念を載せて、直立した姿勢のまま私に対している。

もう少し楽に崩してもイイと言っても、彼女の厳格な性質は上官に対しては生真面目に接する癖をなくさない。堅苦しいと思う反面、むしろそれが好ましいとも思う。

「 …… まだまだだ。 こんなものでは、足りん 」

そんなエレオノーレに、私は苦々しく吐き捨てた。

仮想敵は仮想敵。百万殺しても価値はなく、また成長に行き詰っている私にとってはお遊びに過ぎない。

私が相手にしていた虚像の敵をエレオノーレも視えていたのか、驚嘆したように唸った。

「？アレ？ほどの修練を積んで、なお足りぬと？」

「当然だ。私がハイドリヒ卿の域に辿り着くのはまだ先だな……」

はあ、と陰鬱な気分を溜息に乗せて丸ごと吐き出し、私は空を仰いだ。……忌々しいほど真つ青な空を。

「まさか……少佐は中将閣下を？」

「目指している。当然だろう。憧れのヒトだ」

なにやら驚愕しているような様子のエレオノーレの声音に、私は少し驚きながら返答した。

私にとって、素直に？尊敬？できる実物大の人間は、ラインハルトただ1人のみである。これまでは歴史上の人物の偉業に対してしか抱いていなかったソレを、生きている人間に向ける事が出来たのだ。これを喜び、超えるべき対象として見ないほうがどうかしている。

私が定義する『憧れ』とは。その尊敬する人物を超えるための渴望の呼び名でしかない。

自分でも難儀なものだと思いが、飽くなき上昇志向は私自身にもどろしようもないのだ。

私がエレオノーレの問いに驚いたのは、私はエレオノーレもまた己と同種の人間であると思っていたからだ。ゆえに、その声にラインハルトを？崇拝？ 超えることの出来ない絶対の壁と自らの中で設定している気配を読み取って、驚いたのである。

「 ヴイツテンブルグ。まさかお前、ハイドリヒ卿を超えようと思っていないな？」

「……それは、
「いや、いい」

今の問がエレオノーレの急所を突いたものだったことを悟り、無理に答える必要はないと力ない反駁の声を遮った。

「どうも私とお前は違う人種だったらしい。勝手に期待して勝手に落胆するのは筋違いというものだ。お前にはお前の価値観があるんだろっ」

そう言いつつ、やはり失望の念は隠せなかった。
私がエレオノーレを買っていたのは、その尋常ではない厳格さゆえだ。

他者に厳しく、そして己にはさらに厳しく。人一倍どころか二倍、三倍の鍛錬を積んで、己の才能や家門にあぐらをかかず、常に己を鍛え上げる向上心。そこに私は、私に通じるものを見出していた。だからこそ私はエレオノーレに失望したのだ。

おそらく、エレオノーレは絶対強者を求めていたのだろっ。
自分が何をしても及ばぬ超人を。自らを？征服？する絶対者を。力づくで己を奪ってくれる最強の男を。

所詮、エレオノーレも女だった、ということだ。

エレオノーレは私の目に侮蔑の色があるのを敏感に察知したのか、顔を朱に染めて睨みつけてきた。

(……凶星か)

その反応に、さらに一層、私はエレオノーレに失望した。その反応が凶星を突かれた者特有の反応だと知っているからだ。

「で？ 用もなく私の鍛錬に口を挟んだわけではあるまい。何の用だ、ヴィッテンブルグ」

「……ハッ、ハイドリヒ中将閣下がお呼びになっております。執務室に少佐をお連れするようにと」

「わかった」

「つつなずき、私はさっさと歩き出した。

一歩後ろに控えるように続いて歩き出すエレオノーレ。

「……なあ、ヴィッテンブルグ」

「なんでしよう、少佐」

余計なお世話かもしれないがな。

そう思いつつも、私はエレオノーレに対して顔も向けずに問いかけた。

「ユーгент時代の私とのやり取り、忘れたのか？」

「」

息を呑むエレオノーレ。私はやはり前を向いたまま、背後を振り向きませずに、詩を誦んじるように唱えた。

「『貴方を超えてみせる。私が貴方を超えた時、私は貴方に言いかけたことがある』　そう、お前は言ったな？　そして私はこう言った」

「　『なら、私はお前の目標であり続けるために、常に上を目指し続けよう。お前が歩みを止めたのなら、一生私に追いつき追い越すことなど叶わない』……」

ポツリと、エレオノーレがこぼす。

よく覚えているじゃないか、と私は微笑した。

「今のお前はどうか？　現状の己に満足しているのか？　私は満足していない。『まだだ、まだ私はこんなものではない』。そんなふうに己を鍛え、育んでいる。私はまだ成長を諦めていないんだ」

誇るように。

己の在り方と魂だけを誇るように。

圧倒的自負を声音に載せて、私は断言した。

　　まだだ、まだ上がある。なら登るしかあるまい。上があると知ってしまったのだから。

「……お前は？　ハイドリヒ卿という『頂点』を知って、尊敬の念を、憧れを抱いたところまではいいい。だがそこで止まったのか？

なぜだ？　なぜ止まった？　私はまだ登っているぞ。『頂点』

を目指して。お前との約束を守って登り続けている。……私を超えるのではないのか？　私に言いたいことがあるんじゃないのか？　少なくとも、今のお前は私を超える事は絶対に出来ない。いいか、絶対にだ」

「私は……」

忘れかけていた？熱？が胸の内に蘇ったのか、その？熱？に喘ぎにも似た苦渋の声をエレオノーレは漏らした。

中庭からラインハルトの執務室は近い。

言いたい事は山ほどあったが、時間がないから後一つ。

出来の悪い後輩に、私は小さく囁きかけた。

「満足していいのは、死ぬ時だけだと教えてただろう」

「」

沈黙したエレオノーレを一瞥し、私はハイドリヒ卿の執務室の入り口をノックした。

「アオスブルフ・フォン・シュトライテン少佐であります！」
「入れ」

玲瓏な、腹の底まで響く美声。魔力すら込められていそうな、圧倒的威厳に満ちた王の声。

その声を耳にしただけで、私に3年前の暴虐の夜を思い起こさせる。怖ろしさと誇らしさで背筋が震える。

ドアを開け、敬礼をした後に入室し、ラインハルトという史上最大の傑物には不釣り合いな質素な執務室を視界に納めた。執務室の最奥。その中心に1人の男が座っていた。

ただそこに在るだけで尋常ではない存在感と魔的なまでの圧倒的なカリスマ。この髑髏の帝国に在って尚、その辣腕ぶりと冷酷さを畏れられている、髑髏の貴公子。黒太子。

2年前より伸ばし始めた、豪華な黄金の長髪。さながら獅子の

鬘のようなそれと同じ、金色の瞳。奇跡的なまでに整った「人体の黄金律」とまで讃えられるほどの美貌。そして……2年前のあの時、私によって付けられた、火傷の跡のような一文字の傷跡が左目の少し下を走っている。

「ご苦労だった。大尉は下がれ」

「ハッ！」

ラインハルトは軽く手を上げてエレオノーレをねぎらい、退出を促す。

機敏な仕草で敬礼し、エレオノーレは私とのやり取りを一切感じさぬ、平常そのものの調子で退出していった。

「ハイドリヒ卿。いったい何用です」

「いや、用があるのは私ではない。カールが卿に話があるそうだ」

ラインハルト・ハイドリヒはアオスブルフ・シュトライテンを『友』として遇してくれているが、私にとっては友である前に尊敬する上官である。

ゆえに最低限の礼節は弁え、しかし無用な挨拶は省き、単刀直入に用件を訊ねるとラインハルトはもう1人の『友』の名を挙げて、傍らを指し示した。

そちらを胡乱げに見やる。

するといつの間にか……いや、初めからそこに居たのであろう存在感の薄い男が私に微笑みかけていた。

この私に微塵も気配を感じさせないほど『武』に通じたようには見えないが、得体の知れなさで言えばラインハルトにも匹敵する怪人物　カール・エルンスト・クラフトは、何とも言えない気色悪い笑みを口元に刷いていた。

「クラフトが？」

私の記憶では、2年前のラインハルトが毛嫌いしていたはずの人物であり、宣伝相の隠し玉と呼ばれていた、胡散臭い印象の男だ。そしてどういうわけか私の許可もなく私のことを『友』と呼ぶ、妙に馴れ馴れしい奴でもある。

だがまあ、その妙に芝居かかった口調と仕草さえなかったら嫌いな人種ではない。別に好きでもないが。

「どういうことだクラフト。私を呼び出すとは何様のつもりだ。しかもハイドリヒ卿の名前を使うとは」

「いやいや、仮に私が呼び出しても応えてはくれないだろう？ 少佐殿は」

「当然だ。貴様の相手をしていられるほど私は暇ではない。さっさと宣伝相のもとに帰れ」

好きでも嫌いでもない人間は毒にも薬にもなりはしない。私の信じる持論の一つだ。

だからこそ邪険に扱ったのだが、クラフトは私の吐いた言葉をいちいち吟味するようにうなずきながら、心から楽しそうに嘯いた。

「相変わらずの毒舌だ。しかし私はこの『普通ではない』面子での、あたかも『普通の友人』同士のように見える会話がなぜか楽しい。貴方はどうだ？ 楽しく思ってくれていたら嬉しいよ」

「……意味がわからんことを……」

気色悪いな本格的に。こちらの言葉を噛み締めるような態度。まるで変質者のようではないか。

不快げに私は眉をひそめつつ、クラフトの科白を糾した。

「そもそも私は貴様と友人になった覚えはないが？　せいぜい知人といったぐらいだぞ、貴様は。友人とはなクラフト。互いが互いを認め合い尊敬し、成長を促して、精神的安息を与えてやれる者のことだ。そういった意味で、貴様が私の糧になつてくれているとは思えんぞ」

「なるほど。しかし私にとって貴方は『精神的安息を与えてくれる者』に該当するが？」

「感性を疑うな。私とのやり取りのどこに『安息』を感じる要素がある。率直に言おう。頭は大丈夫か？」

「貴方と話しているのが面白い。こうして貴方の一つ一つの仕草を目にするだけで心が癒される心地だ。貴方が生きているだけで、貴方がそこい居るだけで、私は貴方という全ての存在に感謝したい。たとえその気持ちが一方向通行でも。感謝していると言う気持ちだけは知ってもらいたい」

「私もだ。卿には感謝しているぞ、アオスブルフ」

「変態のクラフトはともかく、ハイドリヒ卿もですか？」

クラフトのアレな発言にちょっと引きつつ、なぜかクラフトと意見を同じくしたラインハルトに私は眉をしかめた。

……正直、クラフトの今の台詞は色々な意味でアウトな気がしないでもなかった。

「卿は『既知感』というものを知っているか？」

ラインハルトが忌々しいものを語るような語調で問いかけてくるのに、私は首をかしげた。

「既知感……デジャヴというものですか」

「そうだ。何もかも知ってしまったという錯覚。あるいは実感。 どのような美酒を飲もうと。どのような美女を抱こうと。どのような音楽を聴こうと。既にそれらは知っている範疇。 経験の中に存在する過ぎ去った残滓に過ぎない」

ラインハルトが嘯き、それを引き継ぐようにしてクラフトが両手を広げ、舞台俳優のように芝居かかった口調で語った。

「人は未知を体験せずして生きられない。繰り返すということがいに苦痛であることか。なぜなら人の人生の意義とは、『未知』を知りそれを『既知』へと変えていく作業こそが本質であるべきなのだ」

「 だというのに『未知』を知らず、知っていることばかりの世界でどうして生きているなどと言えよう。どうして己が本当に存在していることを実感できるのか。生きてはいないのだから死ぬことも出来ない。始まりが用意されていない以上、終わりを迎えることすらも出来ない」

「地獄……ああ、地獄だ。これほどの地獄は他に存在しないだろう」
ラインハルトとクラフトは、舞台を同じくする役者のような口ぶりで交互に謳い上げ、私に語った。

つまり、この二人は『生きている実感がない』と言っている。なにもかもが面白くないと言っている。

私には理解できないだろうが、知っていて欲しい。だから語っていると聞いた風情だ。

「 まあ、ハイドリヒ卿とクラフトが妬ましいほど仲良しなのはわかった。だがそれで？ 結局クラフトは何が言いたい」

ああ、私には理解できないよ。だから理解できない別次元の視点を

語られてもつまらないし興味も持てない。そんなもの、私には一切縁のないモノだ。

だから私はうんざりしたように問いかけると、クラフトは私をハッキリと指差した。まるで私のほうが異常なのだとも言いたげに。

「だが　なぜか貴方は私たちの『既知』に入っていない。新鮮なのだ。未知。貴方という存在に私たちは『既知感』を感じない」

「卿と話している。卿と対している。これだけで『生きている』と実感できる」

「この歓喜。きっと貴方にはわからないだろうが、それでも。それでも感謝を捧げよう。私たちは貴方という存在に感謝しているのだ」と

「はっ……突然何を語りだすかと思えば。……ハイドリヒ卿もハイドリヒ卿です。なぜにこんなヤツバラを傍に置いているのです。私が言うのもあれですが、友は選ぶべきでしょう」

傍から見ればクラフトの言動は狂人のそれにしか思えない。それを言うならラインハルトもだが、ラインハルトはどこか悪ノリしているような稚気を感じられたから許容できた。

この3年間繰り返し返した心の底からの忠言に、しかしラインハルトは応えない。

まあ、はなから無駄な諫言だとは思っていたが。

「……ハイドリヒ卿。どうやらクラフトの用とやらは済んだようなので、これで失礼させていただきます」

クラフトの妄言の相手をするのは疲れる。ラインハルトが悪ノリしてきたのなら尚更だ。

ゆえにこそ、こんな下らないことを聞かせるためだけに呼び出したクラフトとラインハルトに、私は僅かながら怒りを覚えた。

敢えて言おう。私は無駄が嫌いだ。

それと、一人で勝手に喋り続ける男は、もつと嫌いだ。

……前言を撤回しよう。

私はカール・エルンスト・クラフトが嫌いだ。

クラフトという道化師が疎ましく、ついでに言えば前世で感じたことのある『ニート』っぽい雰囲気嫌悪を感じてもいた。

引きとめようとしなかったのを了承と受け取り、私はラインハルトにのみ敬礼を送って執務室から退出したのだった。

「ふ、怒らせてしまったな、カール」

ラインハルトは完璧な敬礼とともに退出していく友を見送り、しばらくの沈黙の中、先程のやり取りを頭の中で反芻しながら笑った。

「ええ。彼にとっては不愉快な一幕ではあったでしょう。しかし、もしも彼に言えば怒られてしまうのでしょうか、私は彼を怒らせるのが楽しくてしょうがない」

「まったく。悪趣味だぞ」

呆れたように言いつつ、ラインハルトとてアオスブルフの一挙一動に日々感動している身である。クラフトの台詞を責めることなど出来ようはずもない。

「ところでカール。なぜアオスブルフを【騎士団】に勧誘しない？」

笑いをおさめたラインハルトが、不意に純粋な疑問を表に現し、盟友に問いかけた。

「私とていつ勧誘するか迷っているのですよ、獣殿。どうにも私は英雄殿との関係を気に入ってしまったようだ。それを変化させるのにほんの少し躊躇いを覚えてしまっている」

「ふ　だが、彼は我々の友だ。それに？未知？である彼を騎士団に加えれば、それだけで面白くなりそうだと思うのだがな」

「然り。されど果たして彼が騎士団に入団してくれるかどうか……」

？既知感？を感じぬ盟友とのやりとりに、黄金と水星は子供のような笑みを口元に刷きながら真剣に迷っていた。

アオスブルフ・フォン・シュトライトン。

アレは正真正銘の異物。

それを騎士団に勧誘するのはいい。だが彼が入団してくれたとして、どの座に彼を据えるべきだ？ 彼の性質を鑑みるに、相応しい座は

否、そもそも入団してくれるかどうか。

なぜなら彼は、超常現象の類いを忌避している傾向がある。己が異能を誇るのではなく嫌悪していることからそれが窺えた。

「勧誘は時期を見てからにしましょう。私としても彼には騎士団に入ってほしい。なんとすれば策を弄して彼の意志を曲げねばなりませんまい」

「友に対するその不義は、いずれ謝罪せねばな」

ラインハルトの言葉にクラフトもまたうなずいた。

「彼に相応しいのは天秤の七位か、あるいは獲得のルーンを持つ十位か。……彼に相応しい聖遺物は、私が用意しておきましょう」

「ほう、カールが？」

「鼻屑になるでしょうが、騎士団の者が不満を言う事はありませんまい。なにせ、私は彼らに嫌われてしまっている」

「ふ、日頃のおこないが返ってきた結果だろうに」

ラインハルトは友の去って行った後ろ姿を思い出しながら、最後にポツリと嘯いた。

「次に会える時を楽しみにしておくよ、友よ」

第九話「黄昏」

「 第9話
黄昏」

「 今、何と言った……?」
「で、ですから」

秘密警察実行部隊少佐として任務を果たし、本部に帰還しようとして護送車の助手席に乗り込もうとしていると、不意に慌てたようにやって来た部下が私に報せを届けた。

「だから、何と言ったと聞いている !?!」
「ひ……?!」

激昂する私に、部下は完全に委縮してしまっただが、今の私にはそれを気にかけるだけの余裕がなくて 私から余裕を奪い去った呪文の正体を知ろうと、躍起になって部下に迫った。

「言え! 早く!! 早く言えええええええ!!!!」
「ひいいいつ?!?! で、ですからあ、長官閣下が、暗殺”
”され 「
「あ 「

襟を掴んでいた手を離し、よろよろと足をもつれさせて、倒れそうになる。

だけど部下の前でそんな無様を晒す事も出来なくて、アオスブルフはなんとか護送車の車体に手を当てて、倒れるのを防いだ。

暗殺？

死んだ、のか……？

あの、あのラインハルト・ハイドリヒが……

暗殺なんて、そんな、つまらない死に方を……？

「少佐、少佐！」

「あ、ああ、すまん。悪い、少し1人にしてくれ」

気が付けば、アオスブルフは秘密警察の本部に戻ってきており、勤務時間を終えて我が家に帰宅する段になっていた。

呆然自失していた私に声をかけてきた部下に、私はなんとか返事を返し、よろよろと己の執務室に戻って、椅子に腰を落とした。

「
頭が真っ白になっていた。」

何も考える事が出来ない。

何かをする気にもならない。

「
ハイドリヒ卿が、死んだ？」

信じ、られない。

あの、圧倒的存在感と能力とを兼ね備えた、英雄が？

あの、アオスブルフがただ一人尊敬した、唯一無二の“友”が……

無くなった？ この世のどこからも消え失せたのか？

「……………」

まるで魂の抜けた人形のようにだった。

アオスブルフという男は、強烈に信奉していた、憧れ目指していた男があっさりと死んでしまった事に、ただ呆然とし

やがて、ゆらりと糸が切れた人形のように倒れ伏しかけ

「……………ふう」

糸の助けではなく、己の力だけで再起した。

息を吐く。かつて、両親を亡くした時以上の衝撃と悲しみを受けたが、それでもアオスブルフという男の心は折れなかった。

「ハイドリヒ卿……………さぞ無念だったろうな……………」

そう呟き、いや、と苦笑しながら訂正した。

「ふ、あの方に無念という思いは無縁か。……………すっかりしろアオスブルフ。お前は、ラインハルトに仕える者ではなく、国に仕える軍人だろうか」

言い聞かせる。己に。己の存在意義を確かめるように呟く。

「流石に、堪えた……………。……………おい、私は帰る。車を用意しろ」

「ハッ！」

頭を振って、アオスブルフはなんとか体に渴を入れて我が家に帰宅するべく部下に声をかけ、車を用意させるのだった。

数日後、虚無感を絶ち切り、精神が回復したアオスブルフのもとに辞令が届いた。

『アオスブルフ・フォン・シュトライテン秘密警察少佐を中佐に任命する。武装親衛隊第二師団、ダス・ライヒの大隊長として異動せよ。大隊副官はエレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ少佐である。奮起せよ同志中佐』

アオスブルフの前世の知識は、近い内に引き起こされる戦争
『プロホロフカの戦い』についても網羅していた。』

『プロホロフカの戦い』 それは、1943年7月に起こった戦争である。

歴史上もっとも大きな戦車戦の一つに数えられ、そして。この戦争を契機に東部戦線での主導権を失い、アオスブルフの愛する国ドイツは守勢に回ることになる。

それ以降は劣勢を挽回することはなく、ゆるやかに45年の滅びまで歩んでゆく事となる。

「流石に、今回はかりは死ぬかもしれんな……」

ふん、とつまらなさそうに鼻を鳴らして、アオスブルフは口の中で独語する。

「（プロホロフカでの戦争は、ソビエト赤軍、ドイツ両軍に大きな損害が出たという。我が祖国は幾つかの局地的勝利を得る事が出来たが、損害が大き過ぎる。……しかも、困ったことに私が指揮するのは戦車部隊。……指揮した経験はあまりないのだがな）」

これまでアオスブルフが激戦を潜り抜けてこられたのは、己自身の練度と悪運、そして得意な戦術パターンを戦場に適用できていたか

らだ。

アオスブルフの必勝戦術は、機動攪乱、敵軍呐喊にある。

戦車のような鈍重な部隊には適正が薄い。いや、そこいらの連中には劣らぬ指揮官ぶりは見せられるが、一流の戦車部隊の指揮官の中では下位に位置するだろう。

正直、私は副官のエレオノーレに指揮を丸投げしたい気分だ。

戦車部隊の扱いに長けたエレオノーレなら、安心できるというものなのに、なぜ私がエレオノーレに指揮を託そうだなんて考えられないのか。それは

「中佐……」

執務机に着いて部隊編成を確認し、脳内で次の戦争のシミュレートをしていると、傍らに控えていた赤毛長身の美女　エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ少佐が声をかけてきた。

「なんだ、ヴィッテンブルグ」

「申し上げにくいのですが、隊の訓練をしなくてもよろしいのでしょうか」

「せんでいい。今、部下たちに無用な訓練を課して疲れさせてみる、戦争に影響が出るだろうが。……そんなことがわからんお前ではあるまいに」

「………申し訳ありません」

エレオノーレの顔から覇気が消えていた。だから　私はこの副官に頼ろうとは思えないのだ。

普段の彼女なら口にするはずもない愚問である。切れ者のエレオノーレのらしくない。

私は、深々と嘆息した。

「……陰気臭いなヴィッテンブルグ。今のお前に傍に居られると鬱陶しくてかなわん。シャンとしろ、シャンと！」
「ハッ」

一喝する。だが表面上はいつもの厳格な顔つきだが、エレオノーレの目に覇気が宿らない。

原因は、わかる。分かり過ぎるほど分かる。

「ヴィッテンブルグ……ハイドリヒ卿が亡くなられたことがショックなのは分かるが、切り替える。そうできなければ死ぬぞ」

「……ハッ。申し訳ありません」

「……。暇を遣る、今日はもう帰れ」

「そ、それは……！」

「命令だ。帰れ」

「……………ヤヴォール了解」

消沈したまま私の執務室を後にするエレオノーレを見送るでもなく、私はこれからの事を思っただく、深く深く嘆息した。

「……………遺書でも書いておくかな」

戦死した時のことを考えて。

第10話「儂きかな千年帝国」(前書き)

わーい、エレ姐さんが大人気！

それはともかく、みなさまにお訊きしたい事が。

読者のに、アオスブルフとヘルガローゼってどう思います？

感想にアオスブルフとヘルガローゼに関するものがなくて、好感を持たれているのかわからないのかわからず、ちょっと困惑気味です。

教えてくれたら嬉しいなあ、と作者は感想をお願いしたいです。

第10話「儂きかな千年帝国」

第10話

「儂きかな千年帝国」

各戦車は誘導手のもと、小隊ごとに疾走し、砂埃を上げていた。

「……准尉、進路右45度に修正。急げよ」

アオスブルフは照準機に目を当てながらインコムを通して部下に命じた。

その直後にアオスブルフの乗る戦車は右に旋回を始める。その数秒後に、ソビエト赤軍の戦車部隊の主砲が一斉に火を噴いた。

だが、旋回中のアオスブルフの戦車には命中せず、手前の地面に着弾して煙を立てたのみだ。

撃ち返すアオスブルフの戦車。見事命中。

一両撃破、よくやったと部下を労いながら、いたって平静を保ったままアオスブルフは1人ごちた。

「照準機が僅かにズレているな。仕方ない、ズレているのならそうと心得て撃つまでの事だ」

再びの一斉砲撃。まるで敵手の動きを読んでいるかのようにアオスブルフは指示を的確に下し、移動すると車体を掠めるようにして砲弾が飛んでいった。

インコム越しに後方の車長　大尉が声を上げた。

「中佐、このまま撃ち合ってたらギリ貧だ。どうする！」

「わかっている。焦れるな馬鹿者。目の前の敵に向けて砲撃だ！」

その後包囲010に向けて進路を取れ。距離を埋めるぞ！」

「了解！^{ヤウオール}　愛してるぞ兄弟！！」

後方4番車長の大尉が叫び、それにアオスブルフは失笑する。

俺も愛してるよ。馬鹿野郎が。

ここは死線だ。誰も彼もが死んでいく。みんながみんな死んでいく。死骸を晒さず。砲弾と爆発に吞まれて燃やされていた。

同時にアオスブルフと大尉の戦車が砲撃し、その直後に一気に距離を詰めるべく最大戦速で赤軍の戦車4両に向けて突撃を始めた。

アオスブルフの砲撃は外れたが大尉の砲撃が命中し、4両のうち1両を撃破。

「ふん、大尉、残りを叩くぞ」

「了解だ。同時砲撃、頼むぞ！」

「4、3、2、1……発射しろ！」

発射された4発の砲弾の弾道は正確で、四発とも見事に命中。

戦果に満足する暇もなく、煙の向こう側から1両の砲弾が大尉の戦車を直撃した。

両方がほぼ同時に爆散する。

「……さようなら戦友。いずれヴァルハラで会おう。ミハイル。我

が兄弟」

瞑目する暇などなく、アオスブルフは指示を発した。

「准尉！ 撃たれるぞ、左25度修正急げ！！」

赤軍の戦車の砲塔がこちらに向いているのを発見し、部下に怒鳴る。

「了解、左25度修正！」

復唱の声を聞き流し、アオスブルフは敵戦車を照準機に捕捉しつつ砲撃しようとして

「チツ、准尉、コイツから降りるぞ！ 詰んだ！！」

進行方向に地面の窪みがあるのを見つけたのだ。この状況は詰んだ。手の打ちようがない。

素早く決断してアオスブルフは戦車から飛び出たが、准尉は間に合わず、窪みに落ちて敵戦車の砲撃を浴びて戦車と諸共に爆散した。

爆炎がアオスブルフの全身を舐めるが、熱くない。火傷一つ負わぬ。

アオスブルフの異能 『パイロキネシス念発火能力』の影響 普段はそれに忌々しい思いを抱くところだが、今度ばかりは感謝した。

背中に激痛。

無視し。

アオスブルフは駆けだした。

「チツ……これだから戦車は……！」

性に合わない。鈍重で、思うように動いてくれないから苛々する。誰だ、私を戦車部隊に回したのは。

胸の中でぼやきながら、アオスブルフは小銃を撃ち放ち、敵兵を射殺しながら後退する。味方と合流せねばマズイ。

「中佐　　！！」

己を呼ぶ声を聞きつけて、アオスブルフは咄嗟に駆けながら爆音に紛れながらも届いたその声の方角に顔を向ける。

「グイッテンブルグか！」

赤軍の戦車の傍にいる敵歩兵を撃ち殺し、戦車の脇を駆け抜けながらエレオノーレに合流した。

「ご無事ですか、中佐！」

「ああ、まったく、戦車部隊の指揮官としてはお前が上だよ」

「そんなことは　　」

無駄口を叩く暇はないと知っながら、つい弱音にも似た発言をしてみました。己を戒める。アオスブルフはかぶりを振った。

「さて　　悪いが俺は戦車には乗らん。お前がこの大隊の指揮を執れ」

「なっ！？　なぜですか？！」

「情けない話、私は限界なんだよ」

エレオノーレに背を向けて、背中を見せる。

そこには、爆散した戦車の破片が、深々と突き刺さっていた。

「
「見ての通り、致命傷だ。私は死ぬ。死ぬから、副官のお前が指揮を執るのは当然　ブオツ！」

肺腑より競り上がって来た血を吐き出し、アオスブルフは膝をついた。

「中佐!？」

「おっと」

駆けよって来るエレオノーレの腕を強引に掴み、胸の中に抱き締めた。

「な、なにを」

するのです。何故か赤面しながらそう言おうとするエレオノーレを遮るように、爆発する炎が2人を包み込んだ。アオスブルフはもろに爆炎を浴びたが、アオスブルフの護りを受けたエレオノーレは無傷　火傷一つない。

「戦車から降りるなよ馬鹿者が。　ほら、行けヴィッテンブルグ。お前が今から大隊長だ」

致命傷を負っているにも拘らず、平常時と変わらぬ語調と態度で、エレオノーレにアオスブルフは命じた。

これが火事場の馬鹿力と言う奴なのだろうか？

本来なら既に死んでいないとおかしい人間であるアオスブルフは、

笑いだしたくなるほどいつも通りなのだ。

「あ、あ……」

「行け！　？エレオノーレ？！！」

胸の中心を殴りつけて、アオスブルフは一喝した。

鉄拳のごとき重いそれがエレオノーレを？軍人？に引き戻す。

「は、ハッ　！！　エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ少

佐！　中佐の指揮権を引き継ぎ大隊長として復帰します！！」

「　よろしい。それでこそだ」

駆けだすエレオノーレを見送って、アオスブルフは満足げに頷いた。

プロホロフカの戦い　ドイツ第三帝国の命運を決定づけたこの
戦争で、ナチスドイツは幾人も英雄を失った。

アオスブルフ・フォン・シュトライテンSS中佐。戦死。二階級特進で准将に昇格した。

第10話「儂きかな千年帝国」（後書き）

実は。

作者は現在第2部の中盤まで書き終わっているのですが。

第3部についてまったく考えていません。

今の内に第3部のルートを決めたいのですが、どうしたらいいと思います？

1・魔帆良学園ルート

第二部の主人公が主な視点となります。

ぬらりひょんとか正義の味方もどきを、後に現れるアオスブルフさんと一緒にボッコボコにする。ついでに原作キャラが沢山死んで、現実の厳しさを教えてあげるというルート。

2・川神学園ルート

第一部主人公、つまりアオスブルフ視点となります。

第二部主人公はあんまり出てくることは無いルート。

3・ディエスルート。

学園モノなんか知るか！ 早く練炭出して！ エレオノーレ出してえ！

第一部主人公と第二部主人公がセットで出てきます。

第三部にも、どのルートにせよ影の薄いオリ主がいますが、1, 2, 3のどれかを感想で選択し、そのルートでは誰をヒロインにしたらいいか、意見をいただきたいです。お願い、優柔不断な作者を助けて！

閑話「再燃する紅蓮」

閑話

「再燃する紅蓮」

「ハイドリヒ中将閣下」

生き残った。

生き残ってしまった。

憧れていた人が死んで。

主と仰いだ人が死んで。

エレオノーレは恥知らずにも生き残ってしまった。

死に場所と定めていた筈の戦場で死ぬ事を赦されず、生き残ってしまったのだ。

エレオノーレは覇気を消失していた。

戦争が終わって、敗走して、兵舎に籠って。

憧れを失い、活力を失い、軍人としての己を見失った。

「シュトライトン卿……………」

憧れの人。

ユーゲント時代に最も敬愛し、いつかは並び立ちたいと願った人も、死んでしまった。

己が腑抜けていたからだ。
ラインハルト・ハイドリヒという輝きを失って自失し、切り替える
事が出来ずに戦場に出て、あの人の補佐をしなければならなかった
のに、自分の事だけで手いっぱい。挙句、援護する事さえできずに
アオスブルフという憧れを失ってしまった。

「なぜ」

なぜ死んでしまわれたのです。

中将閣下。

シュトライテン卿。

なぜ私を置いて、みんないなくなる。

「私は」

どうすればいい？

「私は」

なぜ。こんなに苦しい？

「私は」

吐き気がする。

腹の中の何もかもを吐きだしたくて、エレオノーレは苦悶した。

「ふん。アオスブルフの言っていたとおりだったか」

「ッ」

不意に、エレオノーレは自室に入り込んでいた人物に遅ればせながら気づいて、咄嗟に跳ね起きていた。

「貴様は……」

賊か？

そう問おうとして、エレオノーレはその人影　女に見覚えがある事に気づいた。

黒髪に黒目の伶俐な美女だった。

身につけているのは軍服ではなく、貴族の令嬢が着ているようなドレスで、その女は子供を孕んでいるのか、僅かに腹が膨らんでいた。

「ヘルガローゼ・フォン・リーゼスクレイヤーSS大尉だ。貴様の一期上の先輩だぞ。私の顔を忘れたのか？　ヴィッテンブルグ」

「リーゼスクレイヤー大尉？　……私は今はもう少佐だ。そのような口の利き方を　」

「とつくに軍から除籍しているから、？元？がつく。軍属でないから敬語を使ったり使われたりする覚えはない」

あっさりと言い捨て、ヘルガローゼは久しぶりの再会を祝うふうでもなく、つかつかとエレオノーレに歩み寄って来た。

なんのつもりだ、とエレオノーレが疑問するより早く。

ガンッ!!

無造作に振り抜かれたヘルガローゼの拳が、なんの手加減もなくエレオノーレの頬を打ち抜いていた。

「ガッ?!」

「……やれやれ。現役の軍人が、妊婦の拳さえ捌けないのか。呆れたな」

強烈な衝撃だった。

訳も分からず吹き飛び、壁にぶつかってなんとか倒れるのを堪えたエレオノーレはヘルガローゼを睨みつけた。

「なんのつもりだ、リーゼスクレイヤー!」

「アオスブルフ」

「ツツツ!!!??」

「彼の遺書を私は彼の部下から渡された。それを読んだら、こんなことが書かれていた。『部下が腑抜けていたら渴を入れてくれ』と。いわば今のはアオスブルフからの修正だと思え。か弱いメス犬が」

口端から血が滲む。

だが、ヘルガローゼが口にした台詞のほうがよほど衝撃的で。エレオノーレは愕然とした。

「そしてこう書いていた。『立ち直るまで殴り続ける。なんなら顔

の形が変わるまで整形してやるといい』とな」
「グッ、」

さらに、一撃。

反対の頬にヘルガローゼの拳が突き刺さり、エレオノーレは呻きながらよろめいた。

「情けないな、ヴィッテンブルグ」

「な、んだと……？」

「尊敬していた上司を失い、腑抜けていたせいでアオスブルフを死なせ、あまつさえ幾人かの部下も失っているにもかかわらず、おめおめと生き恥を晒している。憎いよ私は。私のアオスブルフを死なせた貴様が！」

「……………」

「私はアオスブルフの子供を孕んでいる」

「ッ！？」

その告白に、エレオノーレは驚愕して　　言い知れぬ激情が心に点った。

それは、嫉妬とでも言うべき黒い感情だった。

「悔しいか？ 羨ましいか？ アイツに抱かれた私が。アイツの子供を孕んでいる私が。だから私の方が貴様より悲しいし悔しいしアイツを死なせた全てが憎い！！　今すぐにも軍に戻って敵を殺し尽くしてやりたい　！！！！！！」

ダン！　とヘルガローゼは拳を壁に叩きつけ、憎悪の炎が宿る昏い眼差しで、エレオノーレを真っ向から見据えた。

「だが、私は死ぬわけにはいかない。殺されるわけにはいかない。

生き続けなれないといけない。アイツの子供が私の中にいるんだ、死ぬわけにはいかない死ぬわけにはいかない死ぬわけにはいかない

ああ。だから、私は、アイツに想われている貴様が殺してやりたいほど憎い」

「私が、中佐に……？」

想われていた？

それは、いつたい、どういう……

「私がアオスブルフの子供を孕んでいるのは、私が頼みこんだからだよ。抱いてくれと。お前の女にして欲しいと。もう何も責めないし文句も言わないしなんでも言う事を聞くから抱いてくれと。恥知らずにも頭を下げて。アオスブルフは私を抱いてくれた。子供を与えてくれた。代わりに、軍を抜けると。戦争に関わるなど。家の力を使ってなんとしてもベルリンを離れると言われた。そして、言っていたよ、アイツは。ヴィッテンブルグ、お前という部下を持って幸せだと。誇らしいと。同じ人種の奴と出会えたと喜んでいた」

「あ
」

『どうも私とお前は違う人種だったらしい。勝手に期待して勝手に落胆するのは筋違いというものだ。お前にはお前の価値観があるんだろっ』

あの時の、言葉は。

あの失望は。

そういう意味だったのか。

ヘルガローゼは侮蔑も露わに吐き捨てた。

「だが、あのアオスブルフでさえ貴様という人間を見誤っていたよ
うだな」

「なんだと……？」

「気に障ったか？ 一人前に。だが貴様に怒る権利は無い。アイツ
の期待を裏切り、アイツの想いを裏切り、軍人としての己さえ見失
っている貴様には」

「……………」

「……………アオスブルフ、こんな女のどこがよかつたんだ」

失望の吐息。そして、最後はぺちりと撫でるような平手打ちがエレ
オノーレの頬を打って、ヘルガローゼは去って行った。

その一発は、先の2発よりもずっと、ずっと深くエレオノーレの心
を打った。

「 シュトライテン卿」

なにをしているエレオノーレ。
なにをしている、好き放題言われ、殴られたまま泣き寝入りするつもりか！

ジン、とひり付くような頬の痛みが、そう叱りつけてくれている気がした。

「
」

胸の中に、炎が点る。荒れ狂う炎。

己が人生で出会った二人の偉人に対する思いを明確に自覚した紅蓮の騎士は、奮い立って自らの両脚で立ちあがった。

「リーゼスクレイヤー　　ツツツ！！」

「ツ！？」

部屋を出ていった女に追いつがり、エレオノーレは怒声を張り上げた。

「礼だ、受け取れ　　！！」

ガン！　と気合の籠った拳を叩きつける。

不意打ち気味に炸裂したエレオノーレの報復の一撃が、ヘルガロ―ゼの顔を捉えた。

「グウツ！？」

「よくも好き放題やってくれた。貴様は妊婦だからな、それだけで勘弁してやる」

「い、言ってくれる……！！」

忌々しそうに睨み据えて来るヘルガローゼの目が、今は少しも堪えない。

エレオノーレは、完全に立ち直っていた。

それがわかったのか、不快げな顔つきのまま、ヘルガローゼは何かを言い募るでもなく、あっさりとエレオノーレに背を向けた。

「……それでいい。ヴィッテンブルグの人間は誇りと共に死ぬ。ゆめその在り方を損なうな」

「心得ている。息災でな、……先輩」

ひら、と手を振って、ヘルガローゼは今度こそ去って行った。

「シュトライテン卿………私は、貴方をお慕いしておりました」

素直な思いをこぼして、エレオノーレは？ 軍人？ に戻る。

いつか戦場で死ぬその時まで、己は己の生き様を貫こう。

そう、ヘルガローゼの遠くになっていく姿を見送りながら、エレオノーレが心に決めようとした瞬間

「ヴィツテンブルグ。アオスブルフは生きていますぞ。騎士団
に入れば再び会える」

黄金の音がして。

紅蓮は、その甘い誘いに、惑った。

第11話「新生する炎」

第11話

「新生する炎」

死ぬには早いぞ、英雄殿。

意識が世界に融けゆく中、男はそんな言葉を聞いた気がした。

私が築くオペラの舞台。そこに立つまでに死なれたら、私が困る。獣殿も困る。

なに……？

(こじ、は……………?)

目が覚めた。

靄がかかった頭で思考したのは、己の存命を疑うことだ。

(なぜ、生きている……………?)

死んだ。戦車の残骸に肺腑を貫かれ、間違いなく死んだはず。戦場に死骸を晒し、そのままヴァルハラへと旅立つはずだった。

（なのに、なぜ）

なにより、あのような場所で死ぬなど貴方にとっても無念だろう？

貴方は死にたくなかったはずだ。死を恐れてはいなかったが、それでも護りたい物があったはずだ。

この国を。滅びゆく運命を覆したいと望んでいたはずだ。

（そうだ。私は死にたくない。死ぬにしても運命を。ドイツ第三帝国の滅びを避けて、なんとしても千年帝国の礎とならねば）

故に、ヴァルハラへと旅立たんとする貴方を引きとめさせてもらった。

生きたいのなら、私と契約して欲しい。

(契約?)

頭の中に いや、魂そのものに語りかけられている。男は誰に教えられるでもなく自然と悟って、?世界?に問うた。

(契約とはなんだ?)

貴方に人間を棄ててもらおう。

己が人たらしとするを諦め、魔の域に住む魔性となれ。

さすれば私は貴方に力を与え、新たな生命を与えるだろう。

(……………)

さあ、如何に? 答えを聞かせて欲しい。

(……………己の【人間】を棄てる。それだけなのだな?)

そのとおり。

（ならば 是非もなし。もう一度命を与えるというのなら。貴様が神か悪魔かは知らんが、いいだろう。結ぶぞ、その契約！）

よろしい。聖槍十三騎士団黒円卓第十三位、副首領、カール・エルンスト・クラフト＝メルクリウスが貴方を祝福する。

ようこそ天秤の担い手。我がオペラの監督者。聖槍十三騎士団黒円卓第七位、大隊長、アオスブルフ・フォン・シュトライテン。

貴方に意デイリス・ス悪魔パーダの魔名を。青騎士の称号を贈ろう。

（……なるほど。力とは、）

魔術。英雄殿も実在だけは識っているだろう。

もっとも、貴方に植え付けるそれは【エイヴィヒカイト】という、私のオリジナルなのだがね。

（クラフトと名乗ったな。……あのクラフトか？）

然り然り。貴方の友、カール・クラフトだ。

(誰が友だ。……だがまあ、今度ばかりは感謝しよう。どうやらこれは、泡沫うたかたの夢というわけではなさそうだ)

まさか感謝されるとは。恐縮ものだ、骨を折って聖遺物を造り出した甲斐もあるというもの。

感謝された事に対する感謝だ。私はもう一つ、貴方に贈るモノがある。

(……………)

貴方は【信じた友に裏切られる】。

呪いを。貴方の宿業をカタチにした。

どうか、英雄殿。貴方が己の宿業を超える時が来るのを祈っておこう。

【 :アオスブルフ: 】

「ギョあつ!?!」

翻るは白い巨剣。

屠るはソビエト赤軍

連合を組んだ有象無象の雑魚の一端

血飛沫と共に絶命したそれを無感動に見やり、私　アオスブルフはまた一つ数を足した。

「　　89,986。……ふん、相も変わらず数ばかり。私にとって都合はイイが、いい加減にこの作業にも飽いてきたな」

敵陣の只中で敵の魂魄を吸い、私はつまらなそうに独語した。

今のアオスブルフは公的には既に死亡している。

だが、それは？人？としての死であって、？魔？としての生を私は生きていた。

聖槍十三騎士団黒円卓第七位、大隊長、デイリス・スパードとして。

「……殺せば殺すほど強くなり、己の魂の質を磨けば磨くほど進化する、か。……それにしただって私は殺し過ぎたか」

「それでもねえぜスパード。シュライバーの馬鹿はもう100,000以上も殺してる」

背後より湧いた異形の気配に、しかし私は動じることなく肩を竦めた。

「アレと比べられても困るがな。　　ヴィルヘルム、貴様は殺らぬのか？」

振り返った私の目に入ったのは、いつぞやの白い青年　『闇の賜物』という聖遺物を得て吸血鬼と化したバケモノだった。

名をヴィルヘルム・エーレンブルグ。

聖槍十三騎士団黒円卓第四位、カズィケル・ベイ串刺し公。ワルシヤワ蜂起戦にて敵味方の区別なく殺しまくって肅清されたはずの、『白いSS』。

ヴィルヘルムは興が乗らないのか、退屈そうに欠伸をした。

「今は昼だからよお、いまいちやる気でねえんだわ。ワリイが青騎士殿に任せた」

「……構わん。が、あんまりサボり過ぎると、どこぞの勤勉な白い餓鬼に差をつけられるぞ？」

「カハツ！ シュライバーの馬鹿が勤勉う〜？ いやまあ確かに俺たちにとっちゃそうかもな。……ま、夜になったらやりまくる。それまでアンタはお仕事に励んでな」

そう言つて、ヴィルヘルムは姿を消した。

アオスブルフはその気配の行方を探る気にもならず、密かに嘆息した。

「……アンナに神父にブレンナー、それにエレオノーレにキルヒアイゼンまで騎士団にいるらしいが……」

聖槍十三騎士団の首領は、あのラインハルト・ハイドリヒである。生きていたことには驚いたが、同時に嬉しくもあつた。

死んでいたと思つた憧れの人が生きていたのだ。嬉しくないはずがない。

だが。再びかつての上官の下で剣を振っている内に、私はどうしても逃れられない疑問に捕らわれていた。

「……なぜ、ハイドリヒ卿は出陣しない」

運命の神槍。その正当後継者であるラインハルト。

あれほどの力があれば、間違いなくドイツは救われる。滅びの運命から逃れられる。

ラインハルトにはそれだけの力があつた。にも拘らずどうして？

どうしてラインハルトは動かない？

いや、ラインハルトが動かないのには何も言うまい。王が気安く動くようでは堪ったものではないからだ。

だが、ではどうしてラインハルトは私やシュライバー、エレオノーレやマキナに出陣を命じない？

そうだ、ラインハルトが動くまでもない。

私だけで、戦線を回復し、敵に大打撃を
見せるというのに。 否、一国を滅ぼして

「……なにか考えがあるのか？」

わからない。

クラフトの甘言に乗って、何かあると思いながらも騎士団に入団した。

この力は所詮もらい物だ。だが、その力を振るうために、国家のために振るうために私は騎士団に入ったのだ。

にもかかわらず、どうして力を振るう事をハイドリヒ卿は赦して下さらないのか。

どうして、裏に潜む魔物のように暗躍するのか。

どうして、力を蓄えることに専念するのか。

どうして？

どうしてだ？

「……契約では、私がヒトを棄てる事を対価にしている。……クラフトは、私が国を救う事を望んでいるのを知っているが、それを実行に移せるかどうかは言明していない……」

嵌められたか？

かつて稀代のカリスマとして、最高の政治手腕を振るつた政治家としての直感がそう囁いたが、私はかぶりを振ってそれを否定した。

（馬鹿な。私を嵌めてどうする。私は軍人。ハイドリヒ卿も軍人だ。ならば軍人の取るべき道を心得ているはずなんだ）

不安を押し潰し、ただ今は与えられた命令 『力を蓄えろ』 を実行する。

白い巨剣が、再び敵兵の首を刎ねた。

第1部最終話「怒りの日」

第1部最終話

「怒りの日」

1945年、5月1日　ドイツ、ベルリン。

第二次世界大戦の終焉を刻む、ドイツ第三帝国の落日。
ソビエト赤軍に虐殺され、破壊し尽くされて陥落寸前の帝都。

「なんだ……これは……？」

それを眼に、蒼髪の男　アオスブルフは呆然と呟いた。

燃え上がり崩れ落ちる建物の崩壊。

逃げ惑い、助けてくれと叫び続ける帝国民たち。

止まる事の無い銃火と、鈍重な戦車の侵攻。

それを眼に、鳶色の瞳にその光景を収めて、青騎士スパードは疑問
した。

「なんだこれは？」

意味が分からない。

アオスブルフの率直な感想だ。

本当に、意味が分からなかった。

私が護るはずだった全てが崩れ落ちてゆく。

覆るはずの運命は正当なモノとして帝国を滅ぼしていく。

あれはなんだ？

アオスブルフの目の先には、敵味方の区別なく殺し回る白騎士の姿。

あれはなぜ、救いの手を求める帝国民を殺している？

意味が分からない。

私たちの敵は連合軍、ソビエト赤軍だろうか？

どうして同胞を殺しているんだ。

意味が分からない。

意味が、分からない。

アオスブルフはよろよると歩きだした。
銃撃が頭に胴体に腕に脚に当たっても意にも介さず、幽鬼のような
足取りで、歩き出していた。

ホロコースト
塵だ。

アオスブルフの耳に入るのは、悲鳴、怒号、銃声。

死。死。死。死。

滅びだ。

啞然と。呆然と。愕然と。凝然と。

虚ろな表情で、アオスブルフは歩いていた。

その足が、止まる。

不意に目の前に生きている人間を見つけたのだ。

「……曹長」

斃れているその男。階級章は曹長。

帝都守護のために参じた義勇兵なのだろう。忠勇なる男の断末魔の

息吹を感じ取り、声をかけた。

「ちゅ……中……佐……殿……我……々の……祖国……は……？」

曹長は致命傷を負っていた。

しかし、死の瀬戸際に立っているにも拘らず、男は自らよりも国の安否を尋ねてきた。

それに、アオスブルフは考えた。

そうだ。我々の祖国。我が愛しの国はどうなった？

何をいまさら。

黒田卓の魔人が聞いたなら、そうやって鼻で笑いそんな自問である。

滅んだよ。燃えて炎の中に消えていったんだ。

「……ああ、つい先刻、総統閣下が自決なさった。残念だ。我らは敗北したらしい」

濁いた笑みを口元に刷きながら、アオスブルフはかつてなく力ない笑みを浮かべていた。

こんなふうに笑ったのは、初めてだ。

上手く笑えたかどうかも分からない。

ただ、愛国心の強い男は、アオスブルフに嘆きを残した。

そう、嘆きだ。

愛する国が。妻が。息子が。娘が。父が。母が。

死んで滅んで消えてゆく。

消えた後も悪名だけを背負って地獄に落ちる。

それが嫌で嫌で仕方がない。

曹長は、アオスブルフに本音を語った。

本音を受けて、アオスブルフもまた愛国者として問いを投げていた。

「勝ちたいか、曹長」

「……勝ち……た……い……?」

ゴボツ、と血の泡を噴きながら、不思議そうに、おかしそうに曹長はアオスブルフに問いかけて来る。

「そうだ。祖国と同胞、愛する者を護るために戦ってきた貴様に問う。貴様はこのまま敗北を、死を受け入れるのか?」

問いはそのまま己に返って来た。

受け入れる？

なにを？

なぜ？

人であることをやめたのは、そもそもなんのためだ？

ふざけるな。

覚醒した。

愕然と硬直していた意識が溶けて、アオスブルフの魂に火が点った。

「 曹長。貴様を選ばせてやる」

戦うか、否か。

アオスブルフはただ、曹長へそれを問いかける。

バチンッ！！

燃え上がる炎の名は、【怒り】。

「曹長。貴様は、勝ちたくはないか」

勝ちたくはないか？

勝ちたい。

男は、吼えた。

血の泡を吐き出しながら吼えた。

勝ちたい！

勝ちたい！！

「……………か……………勝ち……………たい……………ッ……………！！！！！」

勝利を。勝利を。

ジークハイル……………ジークハイル……………ジークハイル！

「了解した。ではこれから貴様は我が同志だ。殺すぞ、斃すぞ、黄金を」

私たちを裏切った獣を。

劫オッ！！ とアオスブルフの体から赫怒の炎が溢れ出る。

契約はなった。

この男に、この帝都に、この魂に誓おう。

己を謀^{たば}かった報いを。

我が最愛を滅ぼした罪を。

あの、逆徒ハイドリヒを誅さん！

そうか、そうだったのか。

この段になってようやく理解する。

一騎当千のバケモノ　このベルリンは、自分たち聖槍十三騎士団に捧げられた生贄なのだ。

きつと黒円卓の魔人たちは、命じられるがままに、儀式の成就のために赤軍や、帝国民を殺し回っているのだろう。度し難い。赦しがたい。

殺す。絶対に殺す。

この意地と誇りと魂の全てに誓って、黒円卓は破壊する！

「ハイドリヒい……」

漏れた声は怨嗟のソレ。

悪鬼羅刹の呪いのソレ。

アオスブルフが見上げる空は、血と炎と黒煙に彩られたもの。

スラスチカ 鉤十字の刻印を映し出しているところから考えても、既に儀式は八割方成功を収めていると見ていい。

『総員傾注！ 我らが主、偉大なる破壊の君の御前である。その御言葉、黙し、括目して拝聴せよ！』
ハガル

全ベルリンへと届いているであろう天使とも間違えそうな少年の声。

白騎士ウォルフガング・シュライバーの謳う声に、アオスブルフは激しい憎悪の籠った瞳を空に据えた。

赤く、赤い、燃え盛るベルリンの天。
ヒンネム

そこに君臨し、忘我となったベルリンの住民、兵士たちを見下ろし

ているのは輝く黄金の獣。

たなびく鬘の如き髪は黄金。総てを見下す王者の瞳もやはり黄金。この世の何よりも鮮烈華麗であり、荘厳で美しくおぞましい黄金存在してはならない、愛すべからざる光の君。

十一の騎士を率い、黒円卓を治める最強の魔人。

その傍らに在るのは、輪郭の曖昧な影絵の如き男である。

老人とも、若者とも、いかようにも取れるその外見は、隠者のように地味で頼りない。

この対照的な二人こそ、彼らを見上げる総ての存在を凌駕する魔人の中の魔人。

怪物の中の怪物。

黒円卓 聖槍十三騎士団第一位と十三位。首領と副首領。

「
卿ら」

まるで世界の総てを睥睨するように、黄金の髪の中の口が開く。

「己の一生が、すべて定められていたとしたら何とする」

「勝者は勝者に。敗者は敗者に。なるべくして生まれ、どのような経緯を辿ろうとその結末へと帰結する。この世界の仕組みとやらが、そのようになっていたとしたら何とする」

「ならばどのような努力も、どのような怠慢も、祈りも願いも意味は無い。神の恵みも、そして裁きも、全てそうなるように定められているだけだとしたら……卿ら悪魔の子、世界の敵として滅ぼされんとしている者たちは、一片の罪咎なしに犯され、奪われ、踏み躪られているに過ぎない。この、忌むべき法則ゲットの環の中で」

全ての者が恍惚と聞いている中、ただ一人、かつて友と呼ばれていた青い騎士は堪え切れぬ激情を黄金に射こみ続けていた。

「死すらもまた、解放ではない。永劫、そこに至れば回帰をなし、再び始まりに戻るのみ。そして卿らの始まりとは、犯され、奪われ、踏み躪られる敗北者としての始まりだ。ゆえにこの後も無限に苦しみ、無限に殺され続けるだろう。そのように生まれた以上、そのようになるしかない。それを口惜しいと 思うか否か。それを覆したいと 思うか否か」

彼は人に非ず。

黄金の獣。

黒太子。

忌むべき光。

破壊の君。

彼を飾る言葉は全て、例外も無く魔の言霊を帯びたものばかり。
黄金　ラインハルトは魔的なカリスマを放出して、命じた。

「思うならば、戦え！」

不遇の人生を変えたければ、魂を差し出せ。

「運命とやらいう収容所ゲッターに入るのを拒むなら。共に戦え。
卿ら、何を求める？」

ジークハイル
勝利を
ジークハイル
勝利を

—勝利を我らに与えてくれ《ジークハイル・ヴィクトーリア》

「承諾した」

男の、非生物的なまでに整った麗貌に、深い亀裂が刻まれた。
ドクトル・ファウストいわく、誰がどう見ても笑いにしか見えない
が、同時に誰がどう見ても笑っているようには見えない異形の微笑
み。

メフィストフェレス
愛すべからざる光。

「ならば我が軍団レキオンに加わるがいい」

言葉が紡がれたその瞬間に、異変が起きた。

銃を持つ者はそれを口に。

刃物を持つ者はそれを胸に。

何も持たぬ者は火の中に。

撃ち、刺し、飛び込み、自殺する。

百人が、千人が、万人が、異常な速度で死んでいく。その魂が、黄金の男へと残らず吸い寄せられていく。

帝都を貪り尽くす獣の暴食。ホロコースト

アオスブルフはこの光景を、心の底から嫌悪し侮蔑し憎しみ抜いた。

「……美しい。まさに悲劇……貴方を慕い、貴方が守るべき者達が、貴方のせいで死んでいく。貴方はそれを嘆き、喜び、自らの力へと変えるだろう。我が友、私がこの滑稽な人生で、ただ一人畏敬の念を抱いた獣殿……貴方はこれから何を成す？」

影絵の男が口を開いた。

「あなたはいつたい何を求める？」

「愚問だな」

影絵の男の言葉に対し、黄金の獣は眼下を睥睨していた目を傍らの相手へと移しながら応えた。

「法則の破壊と超越……私に道を指し示したのは卿だろう。もっとも、他に個人的興味がないでもないが」

「それはいつたい？」

「法則を創った者」

「なるほど、すなわち」

神か、悪魔か……

「私は優秀な“生徒”を得て幸せだ。エイヴィヒカイトを正しく理解出来ているのは、現状、貴方と英雄殿くらいだ。いや、素晴らしい。この瞬間だけは、何度経験しても飽きがこない。それだけに正直名残惜しくもありませんが……」

「行くのか、カール」

影絵の男の言動からその真意を理解できたのだろう、黄金の獣もまた確信を持って問いかけて、名残惜しさを垣間見させていた。

「ええ、その名も置いて行きましょう。いずれ、必ず逢えるはず。半世紀もすれば東方のシャンバラが完成する。そこに私の代理を用意しておきますゆえ、貴方の下僕達の遊び相手にすればよろしい。今回の契約で、貴方の魂は他に比類なき強度を得た。聖櫃創造の試行も果たした以上、怒りの日まで“こちら”に留まる理由はありません。クリストフのこともある。万全を期すために、幾人か“あちら”に連れて行ってはいかがです」

カール・クラフトの言葉に心得ているようにラインハルトは頷きを返し、その視線を再び眼下へと向け直す。

ラインハルトが示す視線の先にいるのは忠実なる下僕にして、とりわけ精強の騎士でもある四人の魔人だ。

「無論、もとよりそのつもりだ。ザミエル、シュライバー、ベルリツヒンゲン、アオスブルフ……いや、アオスブルフは置いて行こう。どうやら私について来るのに不満がありそうだからな。彼ら三人を共に連れて行こう」

「結構、それは隙のない人選だ。……というより、あの三人以外では、今のあなたに随伴することも適わぬか。それにしても……ふふ、英雄殿は相当お怒りのようだ。彼の心が手に取るように分かる」

「随分と悪辣な契約を持ちかけたらしいが、カールは恨まれていないのか？」

「ええ。彼にとって私は？薄い？モノ。獣殿に並みならぬ親愛を感じていたからこそ、あなたの裏切りが赦せないのでしょうか」

エレオノーレは困惑していた。

アオスブルフが置いて行かれ、自らが連れて行かれる事に。だが主と仰いでいたラインハルトの決定に口を挟むわけにもいかず、ただ黙っていた。

第十位の大隊長、ベルリツヒンゲンは不動の佇まいで懐かしい感覚のする男　アオスブルフを見つめ、次いでクラフトに視線を転じた。

白い少年、シュライバーは拗ねていた。

これからの退屈を思って、今の内に1人でも多く殺しておこうと考えていた。

「では、またいずれ、獣殿。再び我らがまみえる時こそ、互いの目的が成就すると祈りましょう」

「否、成就させると誓うのだ。傍観するだけでは何も掴めん。卿の悪い癖だな、カール」

「……確かに。であればここに誓いましょうか」

ジーク・ハイル
勝利を我らの手に。

この日　世界を敵に戦い続けた髑髏の帝国は壊滅した。

当時、随一の科学力を有していたこの国が、裏では常軌を逸した魔術儀式を実践していたというのもまた真偽はともかく有名な話である。

その申し子たる選ばれた超人達……彼らのために収集された数多の秘宝。

それらが何処にいったのか、そもそも本当に実在していたのか、未だもって不明である。

「……………勝利万歳」
ジーク・ハイル

青騎士は、消えゆく黄金を地上より見送りつつ、無限の怨嗟と極大の炎怒を魂に刻みつけ、勝利を誓った。

第1部最終話「怒りの日」（後書き）

アオスブルフ「ラインハルトぶつ殺す！！」

作者「それなんて無茶ブリ？」

アオスブルフ「裏切り者に死を！」

作者「それなんて無理ゲー？」

アオスブルフ「とりあえず原作開始まで大人しくしていよう。ハイドリヒにはこっち側に帰って来てもらわないと困る。殺せないじゃないか」

作者「作者的には封印エンドが一番平和的でいいんじゃないかなあ
って思うんだけど」

アオスブルフ「この劣等があ！！」

第1部で登場した人物と用語の紹介（前書き）

知ってるだろうけど、知らない人のためのものです。

第1部で登場した人物と用語の紹介

第1部で登場した人物と用語の紹介

用語

・「聖遺物」……聖槍十三騎士団が使用するマジックウエポン。一般的に言われる聖遺物とは異なり、人の想念を吸い続けたことで意思を持った器物の総称であり、必ずしも「聖なる」遺物とは限らない。「餌」として吸ったものが信仰心であろうと怨念であろうと、力のあるアイテムならば聖遺物にカテゴライズされる。

・「エイヴィヒカイト」……聖遺物を武装化し、超常の力を行使する理論体系。聖槍十三騎士団副首領が編み上げた複合魔術。駆式に人間の魂を必要とし、エイヴィヒカイトを操るには常に殺人を続けなければならない。ただ殺した人間の数に相当する霊的装甲を常時纏うようになり、殺せば殺すほど強くなっていく。また、原則としてエイヴィヒカイトを操る者には銃火器やナイフ、打撃などといった“常識的攻撃手段”は通じず、ダメージを与えることは出来ない。その他の特性として、

- 1．聖遺物とその使徒は、聖遺物によってしか倒すことが出来ない
- 2．聖遺物が破壊されればその使徒も死ぬ
- 3．聖遺物による攻撃は、物理的・霊的の両面で防がなければ止められない
- 4．聖遺物が破壊されない限り、その使徒は不老不死などがある。

・「位階」……エイヴィヒカイトは経験を積むことでレベル、つまり位階を上げることが可能である。位階が上がると聖遺物の形状・効果範囲は変化拡大し、身体能力は爆発的に跳ね上がり、超感覚を得るなど、殺し的手段として見た場合、位階を上げることには凄まじいメリットがある。位階が一つ違えば、強さの次元は桁違いになる。聖槍十三騎士団の団員は、ほぼ全員が第三位階「創造」に達している。

1・「活動」 初期段階で、聖遺物に振り回されている位階。暴走・自滅の危険性が高い。生身のまま限定的に契約している聖遺物の特性を使用できる。例えば、刀剣類の聖遺物であれば手を触れずに物を斬り裂ける、といったようなもの。常人の殺傷には便利だが、戦闘に使えるレベルではない。

2・「形成」……契約している聖遺物を具現化できる。五感・靈感が超人化し、高度な破壊と戦闘行為が行えるようになる位階。また、取り込んだ魂の中に高密度な個体があれば、それを実体化させることも可能になる。

3・「創造」……いわゆる必殺であり、切り札を獲得する位階。詳細不明。この位階に達することで、ほとんどの者は聖遺物の形状が大きく変化する。

4・「流出」……創造の能力を永続的に展開する位階。霸道型の創造ならば、その創造を全世界に広げ、覆う世界の法則を書き換える力。求道型の創造ならば、己の魂を特異点に到達させる。

・「武装形態」……エイヴィヒカイトを操る者らの特性には四つの

タイプがある。これには本人の思想や性格、または契約している聖遺物の系統が影響してくるため、同じ術理で紡がれた武装であろうと見た目や使い方は一致しない。

1. 「人器融合型」……肉体の一部、あるいは全身を聖遺物と融合させるタイプ。攻撃面に特化したタイプで、全タイプ中最高の身体能力を持つ。が、発動中には極度の興奮状態に陥り、理性的な判断が困難となる。好戦的かつ破壊的な者、一瞬の快楽を好む刹那主義者、享楽主義者などがなりやすい。聖遺物は、怨念を餌とした拷問器具・処刑用刑具などが大半。

2. 「武装具現型」……聖遺物を武装として具現化する、スタンダードなタイプ。バランス面に優れた基本形のタイプで、特筆すべきメリットもないが、明確なデメリットもない。強いて言えば、使用者と道具という主従関係がはつきりしているために暴走・自滅の危険が少ないのがメリット。職業的戦闘訓練を受けた者、徹底した現実主義者、合理的で感情の制御に長けた者などがなりやすい。聖遺物は、戦闘で血を吸った武器・兵器などの戦闘における道具が大半である。

3. 「事象展開型」……一般的な魔道・呪術に最もイメージに近いタイプ。防御・補助面に優れたトラップ&カウンタータイプで、物理的破壊の顕現ではないため攻撃力は低く、中にはゼロの者もいる。しかし殺すことが難しく、人器融合型と組んで行動した場合には非常に危険な存在。理知的で聡明な者、深い探究心と神経質な拘りを持つ者、学者や芸術家タイプの者がなりやすい。聖遺物は、作者の狂的な情熱を餌とした書物・何らかの芸術品などが大半。

4. 「特殊発現型」……上記三つのどれにも属さない、あるいは複数の性質を持つ特殊なタイプ。他を凌駕する強大な力を発揮するこ

ともあれば、状況によっては全く役に立たないこともあるなど、非常に不安定なタイプ。ある特定の事象や人物に心を奪われ盲目になっている者、純度の高い宗教家や復讐者などがなりやすい。聖遺物は、質の浄不浄を問わず信仰を餌とした物が大半。

人物

例：平均的な一般人

能力値

統率：1 武力：1 知力：3 政治：2 魅力：3
幸運：3 魔力：0

0～3が【平凡】

4～6が【非凡】

7～9が【達人】

10～20以降は【化物】

20は【人智を超えたナニカ】

名前：アオスブルフ・フォン・シュトライテン

性別：男

身長：187cm

体重：80kg

血液型：A

生年月日：1918年12月24日

趣味：鍛錬、読書、セックス

特技：女誑し、人物鑑定

性格：無駄嫌い、執念深い、異常なまでの向上心

好きなもの：努力型人間、綺麗系の美女、己よりも有能な者、強烈な欲望を持つ者

嫌いなもの：ラインハルト、怠惰な人間、無能な人間、誓いを守れぬ者

階級：中佐

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第七位・大隊長

称号：青騎士、青い悪魔
レムリア デイリス・スパーダ

出演作品：オリ主のため無し

能力値

（人間だった頃）

統率：10 武力：10 知力：9 政治：10

魅力：10 幸運：10 魔力：20

（魔人錬成後）

統率：12 武力：70 知力：9 政治：9

魅力：20 幸運：9 魔力：80

（？形成？発動状態）

統率：10 武力：85 知力：9 政治：8

魅力：25 幸運：9 魔力：100

（？創造？発動状態）

統率：8 武力：100 知力：10 政治：7

魅力：30 幸運：8 魔力：120

【スキル】

・「無窮の武練：A+」……ひとつの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手練。心技体の完全な合一により、いかなる精神的制約の影響下にあっても十全の戦闘能力を発揮できる。

・「心眼：A」……修行。鍛錬によって培った洞察力。窮地において、その場で残された活路を導き出す戦闘論理。

・「天才：A」……あらゆる分野で発揮される万能の才能。ランクAの天才は苦手なものなど何も無い。

・「カリスマ：A」……軍団を指揮する天性の才能。カリスマは稀有な才能で、Aランクはおよそ人間として獲得しうる最高峰の人望と言える。

・「軍略：A」……一対一の戦闘ではなく、多人数を動員した戦場における戦術的直感力。ただ本人が強すぎるためあまり必要なスキルではない。

・「政治：EX」……稀代の政治手腕を誇る能力。5年以内に潰れかけていた国の財政を建て直すことさえできる。三国志の諸葛孔明を超える政治力。

・「狂人：A+」……前世の晩年では、激務に激務が重なって狂気を発露するようになっており、そのせいか転生後は生まれた時から狂っていたことになる。が、普段の言動は常人のそれであり、ただ勝利への渴望と、異常なまでの執念深さにのみ狂気が表れる。その狂気は狂人の巣窟である黒円卓の中でもトップクラス。

・「火神の加護：EX」……「火」属性のあらゆるものを無効化する。アオスブルフを「焼き」たければ、太陽並みの熱を用意せねば通用し無い。ただ、人肌の温もりなど、攻撃系統ではない熱や害のないものは感じられる。前世世界の神様が授けたチート能力。

・「思念炎：A+」……パイロキネシスの俗称で呼ばれるアオスブルフの異能。精神が昂揚するにつれ火力を増大させることができ、その炎は破邪の属性を帯びているため「魔」に対する効果は絶大。己の間合いにしか発動できないが、その火力は黒円卓の魔人にも通用する。前世世界の神様が授けたチート能力。

・「女誑し：EX」……チートだが、最初から持っていた天然もののスキル。女であるというだけで、人種や種族、年齢の一切を超越して問答無用でアオスブルフに好意を懐かせ、口説かれればかなりの高確率で才ちる。失敗しても好意が増大し、いずれは陥落してしまふ全人類の男の敵。ただし、既に恋人や想い人の類がいる女には何故か通用しづらい。

【人物紹介】

転生者。前世では日本人だった。

【無駄】 【無意味】と認識する全てのものを徹底的に嫌う合理主義者であり、【無能】 【怠け者】を嘲る差別主義者でもある。

西暦1980年生まれで、2018年に内閣総理大臣に就任。持ち前の能力と人脈、カリスマを駆使して日本の政策の【無駄】、政治家の天下りという【無駄】、その他諸々の【無意味】を徹底的に排除。いつまで経っても貯まり続ける外国に対する借金を「払う必要はない」とし、借金を踏み倒す。25年には世界で一番落ちぶれた国・日本の経済を回復し、税金の引き下げ、国民の生活水準の向上

を成功させた。日本史上最大の政治手腕を発揮し、民衆の支持は絶大だったが、自衛隊を解体し政府指揮下の軍隊を設立しようとした翌年に、日本の台頭を恐れた諸外国の総意により、事故に見せかけられて暗殺された。

享年57歳。稀代のカリスマとして、現代世界で知らぬ者のいない傑物とされた。

死後、気がつけば1918年に生まれ、アーリア人として後のドイツ第三帝国に転生したことに気づくや、今度は軍人への道を志す。政治家の仕事には完全に倦んでおり、かつ裏切られるのはこりこりだったためだ。

持ち前の向上心も手伝い、彼は瞬く間に軍人としての才能を開花。16歳で士官学校 ユーゲントを主席卒業し、少尉に任官。その2年後の36年に初陣を飾る。

異例の出世スピードで39年には大尉に昇進し、ポーランド侵攻で多大な戦功を挙げた。その年。彼は始めて尊敬できる人物と出会う。

ラインハルト・ハイドリヒ。後の黒円卓首領にして、ゲシュタポ長官。

彼とラインハルトは黒円卓の黎明に出会い、そして互いを『友』と呼び合う親友となった。

だが、人生の絶頂に居た彼は、43年に転落し始めることになる。

ラインハルト・ハイドリヒの死。

歴史を熟知していたはずのアオスブルフはしかし、25年間のアーリア人としての人生を生きているうちに史実ではラインハルトが暗殺されているというのを忘れていたのだ。

前世の己もまた暗殺されて志半ばで倒れた。そして今また尊敬する人を【暗殺】で失ったという悲憤で、数日間の間は虚無感に支配されて思考を停止していた。

直属の上官が死亡したことにより、中佐に昇進しゲシュタポから武装親衛隊のダス・ライヒの大隊長に異動されたのを契機に虚無感を振り払い、戦場におもむくことになる。

だが、ラインハルトの死の報せに衝撃を受けていたのはアオスブルフだけではなかった。

エレオノーレ。ダス・ライヒにアオスブルフの副官として配属された若き少佐である。ラインハルトの死に対するショックから抜け切っていないかった彼女は、戦場での働きに精彩を欠いていたのだ。そして、本来ならありえない失態を演じる。

戦争の最中アオスブルフは戦車の破片が脇腹に深々と突き刺さり、重傷を負った。アオスブルフは表向き死亡したことになったのだ。

そして、本格的にアオスブルフの転落は始まった。

気がつけば、アオスブルフは盟友カール・クラフトの魔術により死に至ろうとしていた体を再構築され、聖遺物を操る魔人へと転生させられていたのだ。

二度目の死を乗り越えた英雄の魂は凄まじい密度と強度を発現し、他の団員たちとは一線を画する存在になっていた。後にエレオノーレとも再会するが、それを喜んでいる暇もなく事態は急展開を迎える。

聖槍十三騎士団の結成に尽力するエレオノーレを横目に、アオスブルフは生きていたラインハルトの動向に不穏なものを感じた。

彼は髑髏の帝国のために動いているのか？ そんな疑問だ。

今の自分たちが動けば、帝国が敗れることなどありえないのだが、何故かラインハルトとカール・クラフトは闇で暗躍するのみ。

そして、決別のとき。

45年の、ベルリンでの戦い。

あるうことかラインハルトはアオスブルフを始めとする団員たちに、

敵味方の区別無く殺戮するように命じたのだ。

啞然とするアオスブルフだったが、すぐにラインハルトのおこないに激怒。愛する祖国を滅ぼされた憎しみを全てラインハルトに向けて復讐を誓った。

喰らった魂の総数は敵約10万。

約18万の敵味方を殺戮したシュライバーに次ぐ魂量である。

4人の大隊長の筆頭であり、唯一現世に残った大隊長として首領代行の権限を得るが、聖餐杯ヴァレリア・トリファに指揮権を移譲。単独で世界をまわることになる。

死を超越した彼を団員たちは畏怖と共に認めており、ラインハルトやカール・クラフトをそれぞれ「ハイドリヒ」「クラフト」と呼び捨てにしているが、団員たちはそれを黙認している。

独断で聖遺物の魔人を増やす権限を持っており、とある狂科学者にロート・シュピーネという魔名と聖遺物を与えてヴァレリア・トリファの指揮下に配属した。

首領と副首領を除く黒円卓最強の存在で、彼の首に掛けられている懸賞金は国が2つ買えるほどの金額である。

聖遺物は【憤怒の巨剣】。形態は武装具現型。位階は創造。発現は求道型。階級は中佐で、青化の英雄。

彼の聖遺物はカール・クラフトが錬成した宝具で、特別製。ラインハルトの持つ【運命の神槍】と起源を同じくする白い巨剣であり、流出位階に到達しうる可能性を秘めたアオスブルフに期待をかけて贈られたものである。

ただ、不死創造は一切おこなうことができず、ただの武装としての用途でしか使用できない。

青騎士の称号を贈られているが、彼は黄金錬成　ラインハルトの

不死創造には不要の存在であり、それゆえにラインハルトに対する従属の呪いは薄い。

カール・クラフトに『信じた友に裏切られる』という呪いを受けており、その宿業がラインハルトの一件で事実であると知ると、一生涯、友を作らないことにした。

首領を除く騎士団員はカール・クラフトを嫌っているが、アオスブルフは全く恐れておらず、むしろどうでもイイ奴と認識されているのみである。

名前：ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ
性別：男

身長：192cm

体重：77kg

血液型：A型

生年月日：3月7日

階級：大将

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第一位・黒円卓首領

称号：愛すべからざる光の君、黄金の獣
メフィスト・フェレス

出演作品：Dies irae

能力値

(人間だった頃)

統率：15 武力：15 知力：15 政治：15

魅力：15 幸運：15 魔力：25

(魔人錬成後)

統率：100 武力：200 知力：150 政治：150

魅力：200 幸運：100 魔力：測定不能

(?形成?発動状態)

統率：100 武力：250 知力：150 政治：150

魅力：250 幸運：150 魔力：測定不能

(?創造?発動状態)

統率：200 武力：300 知力：200 政治：200

魅力：300 幸運：200 魔力：測定不能

(?流出?発動状態)

「全て予測不能」

【スキル】

持っていないスキルなど無い!!! ……と思う。だって百万人以上の経験とか、団員たちのスキルとか使えるんだもん。

【人物紹介】

完全無欠のチート。マジ鬼畜。黒円卓のメンバー(副首領除く)が総出でかかっても勝てない。テンプレのチートオリ主でさえ、この人の前には霞む。公式チート最強型。

魅力や武力が能力数値100を突破している時点で、常人は彼の威光に耐えられず圧死してしまう。存在自体が凶器。むしろ広域殲滅兵器。

『ネギま!』や『真剣で私に恋しなさい』の人たちが黒円卓に加勢しても打倒は不可能。ラインハルトさんを倒したければ聖遺物を所

持し、なおかつ同じ【流出位階】に到達していないと話にならない。ナギ・スプリングフィールドやジャック・ラカン、人間最強クラスをデコピン一発でミンチ もとい、殺せてしまふ。原作と強さは変わっていないのにこの有様である。

髑髏の帝国 ドイツ第三帝国の秘密警察長官。最終階級は大将。黄金の長髪と瞳を持ち、常に気品に溢れた振る舞いをし、「人体の黄金律」とまで評されるほどの完璧な美貌を持つ男。幾百万もの魂を喰らい、比類なき強さの魂を有し、超越者として騎士団に君臨する絶対にして最強の存在。

かつてはナチスの高官であり、人として真つ当に生きていたが、カール・クラフトと出会ったことで自らの持つ本当の力と永劫の既知感に囚われた世界の法則を知る。そして自身の持つ真の全力を発揮できる機会を求め、既知法の法則を破壊するために活動を始める。聖槍十三騎士団を盟友カール・クラフトと共に結成し、本作品最高最悪の武装組織を率いるようになる。

それを持つ者は世界を支配すると言われる運命の槍の正当後継者。第二次世界大戦の裏で配下の団員たちを暗躍させ、敵も味方も滅ぼし続け、壊し続けた。ベルリン陥落時より消息不明。彼が戻ってきたとき、世界は破滅するとされる。

その気になれば連合軍を撃破できたであろうに、それをせず髑髏の帝国を見捨てたばかりか、敵味方の区別無く殺す命令を団員に出したことで盟友アオスブルフの怒りを買った。

アオスブルフの元・憧れの人。現在は憎むべき、斃すべき敵と認識されている。

名前：ヘルガローゼ・フォン・リーゼスクレイヤー

性別：女

身長：173cm

体重：61kg

スリーサイズ；

B：83 W：60 H：82

血液型：A

生年月日：1918年7月7日

階級：大尉

出演作品：オリキャラのため無し

能力値

統率：7

武力：6

知力：7

政治：4

魅力：8

幸運：5

魔力：0

【人物紹介】

オリキャラ。代々有能な軍人を輩出してきた軍人貴族リーゼスクレイヤー家の長女。

幼い頃から聡明で、強いリーダーシップを発揮していたことから将来を期待されて、ヘルガローゼもまたその期待にこたえて才能を開花させていく。

彼女の運命はユーゲントでアオスブルフという青年と出会ったことから加速し始める。

36年の初陣。39年のポーランド侵攻にいたるまで、公私にわたってアオスブルフを補佐していたが、アオスブルフがゲシュタポに異動してからは一度しか会っていない。だがいつもアオスブルフのことを気につけて、一度だけ会った時にアオスブルフの子供を妊娠。軍を離れ、アオスブルフの子を産んでリーゼスクレイヤー家の子供として育てていた。

43年にアオスブルフが戦死したという報せを受けて愕然としたが、アオスブルフが死ぬかもしれないという覚悟はあったためすぐに立ち直る。

そして、ラインハルトに続きアオスブルフまでも失って完全に心が折れてしまったエレオノーレに喝を入れ、再起を促すのに一役買った。

第2部以降で彼女の子孫が登場する可能性が……？

名前：エレオノーレ・フォン・ヴィッテンブルグ

性別：女

身長：180cm
体重：65kg

血液型：A型

スリーサイズ；

B：87 W：64 H：85

生年月日：1919年12月13日

階級：少佐

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第九位・大隊長

称号：紅蓮、赤騎士^{ルベド}

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：8 武力：7 知力：7 政治：5

魅力：7 幸運：5 魔力：0

（魔人錬成後）

統率：9 武力：67 知力：7 政治：4

魅力：8 幸運：4 魔力：78

（？形成？発動状態）

統率：10 武力：83 知力：7 政治：4

魅力：8 幸運：4 魔力：100

（？創造？発動状態）

統率：10 武力：98 知力：7 政治：4

魅力：9 幸運：4 魔力：120

【スキル】

・「心眼：B」……修行、鍛錬によって培った洞察力。窮地において、その場に残された活路を導き出す戦闘論理。

・「火砲術：A」……銃火器の類いを十全に使いこなせるスキル。

跳弾なんて朝飯前で、（絶対にしないが）鼻歌混じりに跳弾の嵐を起こすことも可能。

・「狂人：A+」……ある想いを狂気の域にまで押し上げた思いの力。が、強大な理性の力で狂気は普段は抑えられている。

・「カリスマ：C」……軍団を指揮する天性の才能。Cランクは軍団長として非常に優秀で一国の軍隊を司る名将クラスである。

・「洞察力：A」……自身や指揮する部隊に掛けられた策略、謀略を看破する洞察力。Aランクの洞察力を持つ者にはほとんどの策謀が通じない。

【人物紹介】

元武装親衛隊第二師団、ダス・ライヒの大隊副官（原作では大隊長）
騎士団幹部であり最高実力者の1人。赤騎士。

首領、服首領を除いた騎士団中では群を抜いて強大な存在。

葉巻を好む女性軍人。軍人貴族出のエリートだったが、ラインハルトと関わり魔道に傾倒。

首領の暗殺事件後とほぼ同時期に闇にもぐり、片腕として騎士団の結成に尽力する。正統派軍人ゆえに厳格苛烈な性格で、思想と行動に【遊び】が無く、物事に妥協や容赦をすることがない。またプライドが高く、一度彼女の逆鱗に触れたものは無事ではすまない。

部下であったベアトリスからは深く敬愛されて懐かれており、彼女自身も満更ではなかった模様。反対に、ユーгент時代からの同窓生で旧知の間柄であるリザとは昔から反りが合わずに剣呑としている。

同じくユーгент時代の先輩であり上官でもあるアオスブルフに深い思慕の念を懐いており、ラインハルトに対しては純粹に「忠誠」

と「軍人としての憧れ」の念を持っているのみ。
原作では全身の左半分に深い火傷の痕があったが、本作品では火傷を負っていない。

カール・クラフトから「炎（恋情）は届かない」という呪いを受けており、彼を嫌悪し、一線を引いている。

ベルリン陥落時より消息不明。

名前：ベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン
性別：女

身長：159cm

体重：46kg

血液型：B型

スリーサイズ；

B：78 W：56 H：77

生年月日：1923年7月30日

階級：中尉

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第五位

称号：戦乙女
ヴァルキユリア

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：5 武力：7 知力：5 政治：3
魅力：7 幸運：6 魔力：0

（魔人錬成後）

統率：5 武力：50 知力：5 政治：3
魅力：7 幸運：7 魔力：48

（？形成？発動状態）

統率：5 武力：65 知力：5 政治：3
魅力：8 幸運：7 魔力：66

（？創造？発動状態）

統率：5 武力：83 知力：5 政治：3
魅力：9 幸運：8 魔力：100

【スキル】

・「心眼：B」……修行、鍛錬によって培った洞察力。窮地において、その場に残された活路を導き出す戦闘論理。

・「剣術：A+」……時代が時代なら剣聖と呼ばれる域の剣士。一対一の戦闘ならば、たとえ格上が相手であろうとも互角に戦うことができ、場合によっては勝利を手繰り寄せることができる。

・「対武器戦闘：C」……敵が何らかの武器で武装している場合、スキル【心眼】による洞察力が増大する。

・「戦乙女：A+」……集団戦、個人戦に関わりなく、絶望的な戦況においてのみ発動する固有スキル。その戦場において自身に有利になりやすい展開を手繰り寄せ、不利な戦局を一気に覆すことので

きる可能性が発生する。

【人物紹介】

聖槍十三騎士団・黒円卓第五位。

戦乙女と称えられた独ソ戦争の英雄であるが、性格は陽気で飾り気のない気さくな女性。他団員とは異なる陽性な気質の持ち主で、本来騎士団に居るには不自然な人物であったが、ある目的のために敢えて騎士団に所属していた。騎士団に入る以前からの上官であったエレオノーレを深く敬愛しており、首領と副首領に魂を売っていない団員でもある。アオスブルフと同様にラインハルト打倒を目指している。

魔道に頼らず純粋な剣士としての技量を極めており、魂の総量などの根本的な力の差を別にすれば、エレオノーレと伍するほどの戦闘技術を持っている。

名前：リザ・ブレンナー

性別：女

身長：174cm

体重：57kg

スリーサイズ；

B：93 W：60 H：91

生年月日：1919年2月11日

血液型：O型

階級：無し

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第十一位

称号：大淫婦^{バビロン}

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：2 武力：1 知力：7 政治：6

魅力：7 幸運：3 魔力：0

（魔人錬成後）

統率：2 武力：35 知力：7 政治：6

魅力：7 幸運：3 魔力：60

（？形成？発動状態）

統率：2 武力：37 知力：7 政治：6

魅力：7 幸運：3 魔力：72

【スキル】

・「優柔不断：D」……すぐにはなにも決断できず、うじうじと考
える癖がある。偽善者の類いが所持するスキルである。が、ランク
Dは軽度のため、いざ決断すれば行動は早い。

・「女の底力：C」……？？？

【人物紹介】

元生命の泉教会、レーベンスボルン所属。

アーリア人の純血種を量産するために尽力し、軍籍ではないが少佐相当の地位と権限を持つ。

人格破綻者揃いの騎士団内では、比較的良識のあるまともな部類の人間で、裏では自分の大儀の為に人を殺すことに葛藤している。しかし葛藤するだけで何もできず、またしようとしもない「偽善者」でもあり、自他共にそれを認め、たびたび揶揄・非難されていた。カール・エルンスト・クラフト「メルクリウスから「死者しか愛することができない」という呪いを受けており、彼を畏怖し、嫌悪している。

凶悪な存在を生み出す特性を持っており、戦闘力は高くないが、聖槍十三騎士団黒円卓第二位の「トバルカイン」を武器として使役するので単体での戦力分析はあまり意味がない。

もしも聖槍十三騎士団と戦端を開くのなら、ある意味で真っ先に潰さなければならぬ存在。

エレオノーレとはユーгент時代からの付き合いであり、アオスブルフともその時から面識があつたが彼とも意見が合わず仲が悪い。リザ本人はそれほど嫌いではないが、アオスブルフが一方的に嫌っている。理由は、「優柔不断な奴は嫌い」とのこと。

名前：ヴィルヘルム・エーレンブルグ
性別：男

身長：182cm

体重：73kg

血液型：AB型

生年月日：7月10日

階級：中尉

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第四位

称号：串刺し公
カズイクル・ベイン

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：2 武力：7 知力：3 政治：0

魅力：6 幸運：0 魔力：2

（魔人錬成後）

統率：2 武力：54 知力：3 政治：0

魅力：6 幸運：0 魔力：60

（？形成？発動状態）

統率：2 武力：68 知力：2 政治：0

魅力：6 幸運：-1 魔力：72

（？創造？発動状態）

統率：2 武力：75 } 96 知力：-1 政治：0

魅力：7 幸運：-10 魔力：95

【スキル】

・「水星の呪い：EX」……真に欲したものが手に入らない。本気を出せば出すほど幸運値がマイナスを振り切る。

・「戦争狂：A」……戦争こそ生き甲斐。戦争の相手に足る敵と戦うとき、最大のコンディションに跳ね上がる。

・「直感：B」……獣じみた直感力。超能力並みとは行かないが、かなりすごい。ただし不意打ちに弱い。

【人物紹介】

元オスカー・デイルレワンガー隊、第36SS所属武装擲弾兵師団団員。かつては凶悪犯罪者上りの軍人で、気性が荒く、殺人狂で戦闘狂。非常に好戦的で、正しい意味で「危ない」性格の持ち主。現存する団員の中では、アオスブルフを除き一、二を争う戦闘力を持つ。

父と姉との近親相姦から生まれたアルビノ。日光をはじめとした光の類いを嫌うが、夜になると全ての感覚が増幅し研ぎ澄まされるという性質を有している。本人もその吸血鬼のような属性を好み、アイデンティティとしている。

また筋金入りの人種差別主義者でもあるが、その一方で高い戦闘能力や精神力を見せる相手には人種を問わず一定の敬意を見せる側面も持つ。ワルシャワ蜂起戦にて敵味方市民の区別無く虐殺したことで粛清されたとされるが、その後も世界中の戦場に出没しているため、戦場のオカルトとして兵隊世界では【絶対に戦ってはならない】伝説の存在になっている。

同胞で歩きし団員にも遠慮なく殺意を振りまく狂人ではあるが、同時に騎士団員たちを「戦友であり、家族である」と称するなど、彼なりの仲間意識を懐いている。

カール・エルンスト・クラフト＝メルクリウスから「永遠に奪われる」という呪いを受けており、彼を畏怖し、憎悪している。

名前：ウォルフガング・シュライバー

性別：男

身長：158cm

体重：50kg

階級：少佐

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第十二位・大隊長

称号：白騎士アルペド、フロース・ウイトニル悪名高き狼

出演作品：Dies irae

能力値

(人間だった頃)

統率：2 武力：9 知力：0 政治：0

魅力：7 幸運：0 魔力：4

(魔人錬成後)

統率：2 武力：6 9 知力：0 政治：0

魅力：7 幸運：0 魔力：7 6

(?形成?発動状態)

統率：2 武力：8 3 知力：0 政治：0

魅力：7 幸運：0 魔力：9 9

(?創造?発動状態)

統率：2 武力：9 0 知力：0 政治：0

魅力：7 幸運：0 魔力：110

(?創造(真)?発動状態)

統率：2 武力：99 知力：-10 政治：0

魅力：3 幸運：-2 魔力：140

【人物紹介】

元武装親衛隊第三師団、髑髏の大隊長。兼、東部戦線遊撃部隊、アインザッツグルッペンの特務行動部隊長。階級は少佐。騎士団幹部であり最高実力者の1人。白騎士。首領、副首領を除いた騎士団中では群を抜いて強大な存在。

然団員中最も人を殺した、主義も主張も信念もない殺人狂の少年。敵味方の区別無く殺し、暴れ、肅清されかけたところを騎士団に拾われる。

人格は異常者という形容すら生ぬるいほど完全に壊れており、その行動と凶暴さは制御不可能。が、ことコロシに関しては異常なまでに優れているため、実力至上主義の騎士団内では不動の地位。

力で屈服させられた首領以外には味方にすら牙を向けかねない危険人物。

現在、ベルリン陥落時より消息不明。

名前：アンナ（ルサルカ）・マリア・シュヴェーゲリン「ロリバ
ージョン」

性別：女

身長：146cm

体重：34kg

血液型：B型

誕生日：11月18日

スリーサイズ；

B：75 W：50 H：72

階級：准尉

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第八位

称号：魔女の鉄槌マレウス・マレフイカラム

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：4 武力：？ 知力：8 政治：7

魅力：7 幸運：2 魔力：20

（魔人錬成後）

統率：4 武力：45 知力：8 政治：7

魅力：7 幸運：2 魔力：60

（？形成？発動状態）

統率：4 武力：48 知力：8 政治：7

魅力：7 幸運：2 魔力：70

（？創造？発動状態）

統率：4 武力：55 知力：8 政治：7

魅力：7 幸運：2 魔力：80

【人物紹介】

聖槍十三騎士団黒円卓第八位。
アーネンエルベ局の魔女。騎士団最年長者。

ドイツ古代遺産継承局アーネンエルベの初期メンバーで、騎士団入団以前から魔道に踏み込んでいた。

第一部では魅惑的な貴婦人然とした大人の女の容姿をしていたが、時が経つと何を思ったのか十代の少女のような外見に変身する。作者的には残念。

実年齢は副首領を除いた団員の中で最年長を誇り、気まぐれでマイペースな性格、かつふざけたような言動が目立つが、その本性は狡猾で残忍で老獪な拷問好きで、ヴィルヘルムと残忍さは同等。

他の団員同様、消息不明の幹部（アオスブルフ除く）たちを畏怖しているが、その中でも特に、魔道において自らより遙か高みの領域に居るメルクリウスに対しては、「永遠に追いつけない」という呪いを受けており、激しい劣等感と憎悪を懐いている。

ただ、幹部であるアオスブルフに対しては畏怖の感情はなく、普通の友人のように接していた。

大戦中、所属していたアーネンエルベの同僚に憧れに近い思慕の念を懐いていたが、呆気なくその人物は戦争で死亡してしまう。彼に自身の気持ちを伝えられずに終わったことが少なからず後悔として残っており、彼女が不死を追い求める無自覚かつ根源的な理由となっている。

名前：ヴァレリア・トリファ

性別：男

身長：192cm

体重：77kg（本来の体では身長：181cm 体重：66kg）

血液型：A型

誕生日：6月4日

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第三位

称号：神を運ぶ者

クリストフ・ローエンクレーン

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

統率：4 武力：-10 知力：6 政治：7

魅力：4 幸運：3 魔力：10

（魔人錬成後）

統率：4 武力：70 知力：7 政治：8

魅力：7 幸運：4 魔力：100

（？創造？発動状態）

統率：4 武力：70 知力：7 政治：8

魅力：8 幸運：2 魔力：120

【人物紹介】

現世に残った唯一の幹部、アオスブルフから指揮権の移譲を受けた騎士団の暫定的最高司令官。裏で策を練り、団員たちを指揮・扇動している。

本名はヴァレリアン・トリファ。その本性は冷酷非情で、目的のた

めには手段を選ばない残忍さを持つ狂信の徒。他者の心を探り、同調して言葉巧みに誘導する人身掌握・操作術に長けている。また自分の霊質を操り、普通の人間に擬態したり、騎士団員すらも欺くほどの隠形をも可能とする。

カール・クラフトからは「自分に近い存在から死んでいく」という呪いの言葉を受け、『邪なる聖人』とも呼ばれており、彼の力を信用しているアオスブルフには一番距離を置かれている。

名前：ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲン

性別：男

身長：186cm

体重：?kg

階級：大尉

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第十位・大隊長（原作では七位）

称号：鋼鉄の腕、ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲン黒騎士

出演作品：Dies irae

能力値

（人間だった頃）

不明

(? 形成? 発動状態)

統率：7 武力：85 知力：7 政治：3

魅力：6 幸運：3 魔力：110

(? 創造? 発動状態)

統率：7 武力：100 知力：7 政治：3

魅力：6 幸運：3 魔力：130

【人物紹介】

聖槍十三騎士団・黒円卓第七位。騎士団幹部、大隊長。四騎士の1人、黒騎士。銘は鋼鉄。呪われしマキナ。

元武装親衛隊第一師団、アドルフ・ヒトラー親衛連隊所属。

無精髭を生やした武人で、寡黙で殆ど言葉を発さず、無愛想。実際に一度死んだ人間で、その際に名を失っており、ベルリツヒンゲンという名も称号であり、本名ではない。彼のことを知る数人の者はマキナと呼ぶこともあるが、これも名ではない。

正体はディエスイレ原作主人公と同じく聖遺物そのものであり、その個我は第二次世界大戦に活躍した英雄であるが、本人は自分が何者であったかを忘却している。

死は唯一無二であるという持論を持っており、自分がいつ死んだかもわからず、死者として蘇らされていたことに絶望し、真実の死を渴望している。ツアラトウストラ 原作主人公と戦い殺すことで開放される約束を双首領と結んでおり、彼との戦いを「ヴァルハラへ逝くための最後の聖戦」として待ち望んでいる。

宿敵であるツアラトウストラと、自分とほとんど似たような境遇であるアオスブルフに対してのみはやや饒舌になり、彼らを「戦友」や「兄弟」と呼ぶなど、どこか親しげな様子すらも浮かばせる。事実、生前の彼はアオスブルフと共に戦場を駆け抜けたこともある。

その強さは首領を含めた騎士団員全員に一目置かれ、双首領に忠誠を誓わず独立独歩の立ち居地を取っていることにも不満の声はない。

カール・クラフトから「安息（死）を取り逃がす」という呪いを受けており、彼を嫌悪し、信用もしていない。

先述したように、体そのものが聖遺物であり、桁外れの威力を誇る両腕を持ち、無双の体術による格闘をおこなう。

奥の手の創造は、『人世界・終焉変生』ミスガルス・ウォルスング・サガ。

「真実の死を迎えたい」という彼の渴望からの能力は、その拳に触れたモノが誕生して一秒でも時間を経ていたものならば、物質・非物質を問わず、たとえ概念であろうともその歴史に強制的に幕を引く（破壊する）、防御が絶対不可能な一撃必殺の力。創造を発動させると両腕が鋼鉄の腕に変化する。

一切揺らぎのない求道型創造の究極形であるため、上位の位階にあるラインハルトですらこの一撃を喰らえば無事では済まず、そのため万分の一程度でありながらも彼に勝利しうる可能性を持つ。

その属性ゆえか、『白騎士』と『赤騎士』でさえ打倒困難な『青騎士』の天敵である。

ベルリン陥落時より消息不明。本来は七位に据えられるはずが、本作では十位になっている。

名前：カール・エルンスト・クラフト

性別：男

身長：？

体重：？

肩書：聖槍十三騎士団黒円卓第十三位・副首領

称号：水銀メルクリウスの王

出演作品：Dies irae

能力値

測定不能！

【人物紹介】

老若の判別がつかず、影絵のように造形をハッキリと記憶できない曖昧な存在。

世界の真理に最も近い魔術師、ヘルメス・トリスメギストス。その他にカリオストロ、カール・エルンスト・クラフト、ファイスト、ノストラダムス、パラケルスス、クリステイアン・ローゼンクロイツ、ジェフティ等々、歴史上に数え切れないほどの多くの名を持ち、果てしなく長い時を彷徨っていた。

エイヴィヒカイトを生み出し、それを団員に授けた全団員の師にあたる存在であると同時に、一部の将校たちのお遊びでしかなかった騎士団を魔人の集団に仕立て上げた張本人。

首領と唯一同格の存在で、アオスブルフを含めた三人で親友同士でもある。だが、首領とアオスブルフ以外の古参の団員からは病的なまでに恐れられ、憎まれ、「存在をなかつたことにしたい」とまでされるほど忌み嫌われている。狂人揃いの団員たちの中でもなお異常なほどの狂人かつ危険人物であったと言われる。彼と面と向かつて口を聞くことができた者は、首領とアオスブルフにマキナの3人

のみで、エレオノーレとシュライバーですら一線を引いているほどであった。

また、古参の団員は彼によって皮肉交じりの魔名と決して覆すことができない『宣託（呪い）』を授けられ、その業と彼の力に対して極度のコンプレックスを懐いており、どうにかして彼と彼に自覚させられた宿業を超えようと躍起になっている。

人の一生を『未知を既知に変える作業』と定義しており、既知しか感じられない己の生と永劫回帰の法則に囚われた世界に飽き果てている。

彼のとつた全ての行動の目的も、この無限に続く既知感を超越するための布石である。

第1部で登場した人物と用語の紹介（後書き）

ラインハルト、マジチート。

理由づけ設定

理由づけの設定

かつて世界随一の科学技術を誇っていたドイツが、その裏で常軌を逸したオカルトの研究をしていたというのは、かなり有名な話だ。

そして、その一つにこんなものがある。

？超兵生産計画？

脳のリミッターを全解除し、常にアドレナリンを大量に分泌させ、痛覚を遮断、感情を抹殺した、命令に忠実なクローンの超人兵を大量生産しよう、というものである。

善人ならば聞くだけで胸糞の悪くなる計画だ。

だが、その技術は結局完成させられることはなかった。

第二次世界大戦の終結。ドイツの敗北。その結果、その研究は闇に葬られた。　　はずだった。

はずだった、というのは、実際にはその研究は戦後も続けられてい

ただ。

狂った、研究者たちの手によって。

結果、彼ら狂人どもは強靱な精神力と執念で、その技術を確立したが、それと同時にその研究は今度こそ国に知られてしまう。

研究者は一人残らず肅清され、その素体たちは『万が一』に備えて？ 廃棄所？ という名の収容所に入れられていた。政府の高官たちが自分の身を守るための、私兵として。

名を、？ブルシリーズ？。

ナチスドイツが敗北した1945年以降 約60年代まで量産され続けた少女たちは。

そして、何代目かの一番目から十九番目が廃棄処分されて世代交代した時。研究所が黒円卓と東方正教会の戦いに巻き込まれ全壊した。

生き残ったのは、何代目かの12番目の赤ん坊。

引き取り育てたのは、黒円卓の幹部。

【青騎士】と呼ばれる、現存する黒円卓最強の魔人だった

第1部外伝

第1部外伝

「魔法世界に至るまで」

「川神流奥義 無双正拳突きiiiiiiiッッッ!」

ドガン ッ!

世に名高き『武神』と呼ばれる壮年の男、川神鉄心は目の前に仁王立ちする男の胸板に全力の拳を叩きつけた。

丹田から氣を発し、震脚する足、捻転する腰回りから背、インパクトする拳に全開で強化したそれは、暴風を纏って大氣を擦過した。

常人の目には映らず。

生半可な達人でも目に映らず。

ただまともに武神の拳を受けて、男はコンクリートの壁にぶつけられた熟れたトマトのように四散しなかった。

「なあっ!?!」

「……あと二撃だ」

驚愕する、最盛期の武神。

それに、黒衣を纏った蒼髪の男

アオスブルフは淡々と呟いた。

あと、二撃。

その宣告に、武神は戦慄のあまりドツと冷や汗を噴きだす。

『お手並み拝見だ、武神殿。先手から十撃、貴様に譲ってやろう。私は避けもしなければ防御もしない。さあ、どうぞ？』

先刻、非公式で試合を申し込んできた青い悪魔に、武神は激怒した。その挑発。その驕り。このワシの攻撃を十発耐える？ しかも無防備で？

誇り高き武人は激昂し、その驕り高ぶった面を全力で殴り付けた。

だが、青い悪魔は宣言通り一步も動かず。

武神の攻撃を顔で受け止めた。

『あと、九撃』

カウント、された。平然と。淡々と。

その事実に向更怒り、武神は持ち得る技を次々と、叩きつけ、

「どづした？ あと二撃だ。早くしろ」

「っ……っ?!」

結果。八撃まで、全て利かなかった。

文字通り、歯が立たぬ。

武神は、戦慄し。そして 無敗の生涯において、これが非公式の試合だったことに、安堵していた。

「 川神流奥義 星、砕きいつ!!! 」

「 川神流最終奥義 星殺しいつ!!! 」

最大の威力を誇る川神流の武術。

しかし、やはり まったく堪えた様子はなかった。

青い悪魔が動く。驚愕のあまり自失する武神の額の前まで手を差し出し、指で指を引っかけ

「 十撃。確かに受けた。 採点だ。川神鉄心、および川神流。

『 三十点 』 「

デコピン。

ぶしゃあああああっ!!
血が噴き出し、吹っ飛んで撃破された。

武神 川神鉄心の矜持を粉碎した青い悪魔は、淡々と述べた。

「 なにが星砕き、なにが星殺した。貴様は武術家ではないのか？

武術家ならば広範囲を攻撃して周囲に被害をもたらす技を使うな!

貴様は阿呆か？ それは『武』術ではない。『殺人術』だ。武神

を名乗りたければ、もう一度生まれ変わって出直してこい劣等」

辛辣に侮蔑を投げ掛けて、それを聞き届けて気絶した鉄心に、アオスブルフは嘆息した。

「ああ、それと。よかつたな劣等？　これは非公式だ。公式では、まだ貴様は無敗で最強のままだぞ？」

どうせ聞こえていないだろうがな。
ハッ、と鼻で笑いながら、アオスブルフは呆然とする川神院の門徒たちを無視して、川神院をあとにした。

「才能があつても、強さがあつても、心が愚かに曇らせたままでは評価にあたいせん。それでは体育の授業で走り回っている子供の方が、よっぽど評価出来るというものだ」

己の私兵となるにあたいする輩を探して世界を巡る青騎士　アオスブルフは、期待外れの『最強（笑）』に、心底呆れるしか術を持つていなかった。

「……どうでした、師匠」

川神市を後にし、用なしとなった日本から出国しようと空港に向かっている、不意に1人の少女がアオスブルフに声をかけた。

その少女の姓は『櫻井』。聖槍十三騎士団黒円卓第二位「トバルカイン」の二代目候補とされる、黒髪黒眼の、東洋人だ。

どこことなくソリッドな印象の少女に、アオスブルフは肩を竦めて答えにした。

「そうですか」

少女　櫻井鈴は、無表情でアオスブルフに対している。

鈴はアオスブルフを嫌っていた。いや、個人としてのアオスブルフは好き、なのかもしれないが、？魔人？アオスブルフは毛嫌いしていたのだ。

だが、そんなアオスブルフを師に仰いでいるのは、単純に鈴はトバルカインになりたくないからである。少なくとも、アオスブルフの傍に居る間だけは安全なのだ。

基本的に身内に甘い　いや、下の立場の者は確実に保護してくれるアオスブルフは、あらゆる災厄から身を守ってくれる。世界最強の化物の護りである、心強いのだ。

もっとも、「働かざる者食うべからず」な信条を持つアオスブルフは、ただ鈴を保護していたわけではなかった。

礼儀作法を叩きこみ、乱れた口調を正し、戦闘技術や学問を徹底的

に叩き込み、責任感の薄い性根を叩き直されていた。

結果として、鈴は人間としては最強クラスの實力を身に付け、兵士として戦えば武神にすら匹敵する超人になっていた。

「レイ、感卦法は習得できたか？」

「はい。持続時間は未だ五分程度ですが、実戦に耐えうるレベルにはなりました」

「よろしい。黒円卓連中は相当な暇人でな、ハイドリヒに着いて行った幹部を除き、現存する者たちは魔法使いの技術を吸収して、感卦法などは当たり前のように修得している。自身の戦闘力をブースト出来る手段は残らず身につける。魔に殺されたくはないのだろう？」

「……はい」

真顔でうなづく鈴に、アオスブルフは苦笑した。

「キルヒアイゼンはレイに手を出そうとはしないだろう。アンナも、クリストフも、シュピーネも。だが、ヴィルヘルムは別だ。もしも奴に出会ったなら、戦わずして逃れる術はお前にはない。私が傍に居れば、奴も手は出さんかな。ヴィルヘルムは今、世界のどこかにいる真祖の吸血鬼 『闇の福音』を探し回っているらしいから、レイなど眼中にないかもしれないのが救いか」

安心させるように言いながら、ふと思いついたようにアオスブルフは鈴に言った。

「そういえば、あの子供はどうした？」

「……ブル・トゥエルブですか？」

「ああ」

「……あの娘を、師匠はどうするつもりでいるのです」

「私の将来の私兵だ。部下だ。ゆえに近い内に鍛えるつもりでいる。それがどうした」

「……………」

「……情が移ったか。しかしだな、私がお前に約束したのは一つだけだ。レイの意思に反し、黒円卓の聖槍を引き継がせはしない。それを守っているだけありがたく思え」

「……………はい」

暗い顔のままの少女に、アオスブルフは何度目かの溜息を吐いた。

「……………レイ、そういえば、お前の家で戒という子供が生まれたい。い。お前の甥だ。顔を見せに行つてやれ」

「え……………？」

「今のお前はあの子供の傍においておくわけにはいかん。暇をやるから実家に帰れ。命令だ。拒否は赦さん」

「……………はい」

トボトボと歩いて行く少女の後ろ姿に、アオスブルフはポツリと言葉を洩らしながら見送った。

「……………情の深いいい子に育ったのはイイが……………。少し優し過ぎるな、あの娘は」

もしかしたら、レイは自分から進んで屍兵になるかもしれない。

戒が、あるいはこの先の櫻井の人間が屍兵にならないでいいように、人柱として己を差し出す。レイは、そんな女だ。

予感と言うよりも確信めいたものを感じつつ、アオスブルフは

不意に生じた気配に、胡乱げに眉をしかめた。

「誰かと思えばクラフトか」

背後に立つ気配の名を言い当て、振り返ったアオスブルフに、その影絵の男は薄く笑いかけた。

「久しいな英雄殿。まさか私を覚えていてくれたとは」

「御託はいい。何用だ」

「いやなに、英雄殿は自身の意に沿って動く手駒を欲していると知り、友として相応しい場に招待したく思った次第。どうですか英雄殿。貴方は、私の招待に応えてくれるか？」

「……どうせ、裏があるのだろうか？」

いつかの契約のことを思い出しながら睨みつけると、その男
カール・クラフトは苦笑した。

「裏とは人聞きの悪い。単に、あと十数年後に完成する舞台までの時間つぶし、オペラの予行演習に付き合ってもらいたいと思っただけですとも」

「オペラの予行演習だと？」

「しかし。貴方は未知だ。未知ゆえに私は獣殿の不死創造の舞台において、貴方がどう動くかがまるで読めない。ゆえにこそ、舞台監督者である貴方と、そして観覧する立場である私が、どのように【本番】の行き先を予想すればいいのか。それを図るための余興だ」

「……相変わらずの鬱陶しい話し方だな。……で、その舞台はどこ

だ？ ヨーロッパ？ 中東？ それともシャンバラ？ どちらにせよ、アンナとキルヒアイゼン、ヴィルヘルムは招集をかけたい。使いを出しておけ」

「これはこれは。随分と乗り気なようで嬉しいよ」

「ふん、言いたくはないが、実は私も暇でな。暇潰しになるというのなら、貴様の望むように踊ってやるのも悪くはない。ただ、私だけ踊るのもつまらんだらうから？ 同志諸君？ を巻き込んで遊んでみようと思っただけだ」

「結構。では、私は貴方と、黒円卓の爪牙をオペラの予行演習に招待する。舞台は

魔法界。大分裂戦争」

邪悪の水星は、にたり、と相変わらずの気色悪い笑いを浮かべて、アオスブルフを迎え入れたのだった。

教えて青さん！ 疑問に答えるコーナー！

教えて青さん！ 疑問に答えるコーナー！

いきなりですが、第3部のルートが確定しました。

ずばり、3。ディエスルートです！

もう1、2が眼中にないぐらいの人気ぶりでもう……（笑

読者さんの疑問。

疑問1、『保有する魂の絶対数に劣る青騎士が、不死英雄化した白騎士と互角以上に戦えるのは何故？』

答え。

アオスブルフ「 シュライバーの戦術を思い返してみるといい。形成状態ではさして渴望が反映されないから、私はその気になれば簡単に追いつける。シュライバーの攻撃（拳銃）の威力が弱過ぎて私の霊的装甲を突破できずダメージを負わない。ゆえに、形成状態のシュライバーは私の敵ではない。シュライバーの創造（偽）、これもまた攻撃手段が本来の物ではなく、拳銃かバイクの轢き逃げアタックだけだ。だが、形成状態と同じように、私に拳銃は攻撃力不足で利かず、バイクは受け止めて破壊できるから、耐久力が壊滅的に雑魚なシュライバーは死ぬ。

シュライバーの創造（真）。これは困ったことに、この状態になられると私ではまったく触れられない。が、この状態のシュライバーはオツムの緩い馬鹿さんだからな、馬鹿の一つ覚えのように突っ込んで殴りに来るだけだ。私はこの状態のシュライバーには、単純に思念炎で全身を覆い自分を守るだけでいい。シュライバーは自分から思念炎に包まれた私に突っ込んで来て、勝手に自滅してくれる。思念炎は、本編中でアンナが言っていたように、？魔？に対して絶大な威力を発揮する。不死英雄化して、完全なる？魔？となったシュライバーや黒円卓の面子にとって、私の放つ思念炎は天敵だ。脆いシュライバーは一発で死亡するのは確実だな。

まあ、シュライバーが自分から私に近づいて来ず、ずっと攻撃してこなかったら千日手となって決着がつかなくなるわけだが。

というわけだ。納得できたか？」

作者「赤騎士ザミエルさんは、その炎の特性上、アオスブルフにまったく攻撃が利かないから勝ち目なし。ただ、黒騎士マキナは思念炎なんか利くかボケエと突っ込んで来て殴りに来るので、普通に死ねる。マキナ天敵、とはこういうことです。

流石のアオスブルフも、マキナを相手に一度も攻撃受けずに勝つなんて無理で、マキナにいたっては一発攻撃当てれば必殺なんてチートですからね」

疑問2、「青さんの子孫は男か女か？」

答え。

アオスブルフ「私が聞いた話によると、どうやら男と女が1人ずつ

の双子らしい。教育婆と化したヘルガローゼが丹精込めて英才教育を施した結果、女のほうは礼儀正しい文武両道に秀でた淑女となつたらしい。さすが私の孫だ。……男の方？ こちらはヘタレだな。私の血が流れているから当然才能はあるが、ヘルガローゼの教育の末にグレて、遊佐なんとかという餓鬼とつるんで遊び回っているらしい。あれは私の孫ではない。いいか、あれは私の孫ではない」

作者「練炭のクラスメイト（予定）だが、あまり親しくない。こんな感じです」

練炭『なにこれ初めて見る感じ（未知）で怖いよ』志狼&エリー『なん、だと……？』

疑問3、「青さんの呪いの「友人」ってところが曖昧だね」

答え。

アオスブルフ「これは、私の心境が問題だな」

作者「ラインハルト「卿は我が友だ」

アオスブルフ「ありがたい。我が友よ」

メルクリウス「貴方は我が友だ」

アオスブルフ「……なに言ってるんのお前？」

てな感じで、相手が一方的に「友達だ！」と言う分には呪いは発動しない。

青が信頼し、尊敬し、目標とした瞬間に呪いは発動。必ず信頼を裏切られ、その時に青が最も大切にしている物を破壊する。そして青さん激怒でソイツを殺す、みたいな」

疑問4、「主人公が未来知識で兵器やら発明品やらをドイツのために使わないのはなぜ？」

答え。

アオスブルフ「率直な話、私は未来兵器については知識が無い。前世であらゆる学問を学んだつもりだったが、どうやら軍事関連は欠けていたらしくてな。だから今度の生では軍人を志したのだ。……ハイドリヒい！」

作者「なにか思い出して怒ってる青さん。発明品については、普通に知っていました。下手に造って「みなさん、これはすごいものです」とか言ったら政治に巻き込まれるかも、と政治に軽いトラウマを持っている青さんは敬遠し、未来知識を出すのを渋ってしまった、という感じ。青さんの心境は『未来の発明品はどれも凄いものばかりで、それゆえに凄過ぎて悪目立ち ちよっと開発者として来てもらおうか え、ちよっとそれヤダ』」

ちなみに、作者はKKKを知りません。やりたいとは思っています。が、今からやり始めて設定を本作に組み込むのは無理っぽい。ですので、KKKを視点においた感想は答えづらいです……（汗

そして前々話の「理由づけ設定」で言っていた通り、第2部で……プル・トゥエルブが登場します。

機動戦士ガンダムUCからのゲストキャラ。

これは単に、アオスブルフの私兵という立場を考えた時、作者の頭の中で化学反応が起こった結果です。こんな感じに。

作者「うーん、青さんの私兵、シユピーネだけってちよつとなあ。そうだ、青さんが目をかけるぐらいの人材を造ろう。まず身体的才能がないとなあ。凡人以上だから普通の人間はダメだ。では普通ではない人間から考えよう。　　そういえばガンダムUC面白かったなあ。ん？ フロンタルってシャアのクローンだし、強化人間で二ユ一タイプだし丁度よくね？　　あ、いやでもフロンタルって需要ねえだろ。じゃあマリーダで」

みたいな？

どうか作者を責めないで！
作者の頭が悪いの！　だから作者は悪くない！！（爆

てなわけで、第2部、どうぞ！（逃

第2部「プロローグ」

第2部？守護する者？

「プロローグ」

『問1・あなたはゲーム、漫画、アニメは好きですか？』

おう、好きだけど。文句あるかよ？
特にあれだ、戦記物が好きだね。血湧き肉踊る、ってえの？ そんな感覚が感じられる奴は最高だね。

『問2・あなたは友達がいますか？』

んー……居るな。『アレ』が友達なら。
でも親友は居ない。よくて『少し仲のよい友人』ってとこだ。

『問3・あなたは人間が好きですか？』

好きか嫌いかで言えば、好きだな。
というか、よほどの人間不信でもない限り嫌いな奴なんていないだ
ろ。

『問4・あなたは今、何をしていると興奮を覚えますか？』

興奮って（笑）。なんで自分の性癖さらすようなこと言わなくちゃ
ならんの？
いや、まああれだ。俺としては別に進んで隠したいものでもないし、
言っちゃうか。

ずばり！ 満足みちじびき 輝石きせきが最も興奮する瞬間とは！

夏の海。ビキニタイプの水着。尻に食い込んだパンツを直す美少女
の姿である！！

変態ですね。

『問5・あなたは自分が素晴らしい人間だと誇れますか』

知るか。

『問6・べたなシチュエーションですが、もしも女の子が柄の悪い複数の男に絡まれていて、困っていたらどうしますか』

助けるよ。当たり前だろ。助けて当然。
その女の子って可愛いんだろ？ チンピラが絡む女の子って大抵が可愛いって相場で決まってるし。ならば助けねばな！

『問7・あなたは自分がどういった人間か自覚していますか？』

満正輝石はオタクである。
それ以上でもそれ以下でもない。

ちなみに、実戦格闘技オタクである。俺って喧嘩で負けたことないのよね。

『問8・あなたは周囲にどんな風に見られていると思いますか？』

喧嘩代行人。荒事担当官。

……カツコよく言えばな。

普通に言えば用心棒。もしくは盾要員。

っーか、あれだ。

てめえら人のこと筋肉馬鹿とか脳筋とかバカにしてるくせに、いざとなったら掌を返して頼ってくるのやめてくれる！？ めっちゃ腹立つんだけど！

『問9 . あなたは 殺人に、興味がありますか？』

アホですかあんだ。あるわけねえだろ。こちとら法治国家日本で育ったゆとり世代の糞餓鬼だぞ。

『問10 . 二次創作の小説によくあるテンプレで、あなたは神様のミスで殺されてしまいました。そしてミスで殺してしまったお詫びに何でも願いを叶えてくれると言われました。あなたは何を願いますか？』

……。
……。
なあ、さっきからいったい俺の何が知りたいの？ 一般人の心理とか調べちゃってる人なのアンタ。おい。教えるよ。

……だんまりか。

いいけど、あんまりそういう態度は関心しないね。殴りたくなる。

さて、とりあえず質問に答えないと話が進みそうにないんで答えるが……

「何でも願いを叶えてくれる」、ねえ……。

そうだなあ。俺だったらアレだ、『ヴィンランド・サガ』の世界か、『三国志』の世界に行きたいな。でも弓矢とかって剣より凶悪だし、それで射殺されたりしたくないから、『矢避けの加護』がほしい。

あ、あと出来れば死にたくないし、死にくくい「幸運」と、俺って頭悪いし、頭の回転とか洞察力とかレベルアップして、金持ちの家に生まれさせてくれたら嬉しいな（笑）

『問11・偽善者、聖人、犯罪者、一般人、英雄、軍人、政治家、哲学者、革命家。あなたはいったい何が一番偉いと思いますか？』

全部偉い。

あ、犯罪者と偽善者以外な。

『問12・二次元の美少女と、現実の美少女。どっちが好きですか？』

二次元美少女！ ロリ以外のヒロインはみんな俺の嫁！
リアルの女はあれだ、もう少し女らしさを磨いて出直して来いって話だ。憤みというものを知りたまえ。

『問13・あなたは人気者になりたいですか？』

なりたい！ 一匹狼気取ってるってよく言われるけど、そんなんじやねえよ馬鹿野郎！
俺だって……俺だって友達欲しいんだ！！（泣）

『問14・愛と仕事、権力と自由、義務と名誉、己と他者 何が大切ですか？』

愛と金！！

同列です。え？ 金は選択肢にないだつて？ じゃあ自由と言い換えよう。

自由は金で買えます。
愛は買えません（断言）。
だから俺はこの二つを一位に設定するぞ！

『問15・貴方は天才ですか？』

むーん……。……運動神経は抜きん出ているって言う自信はあるが、
天才なのか、って聞かれたら違う気がする。
俺が格闘技で強くなれたのだって、努力してたからだし。

あれだ、よくテレビとかで、努力で成し遂げたことを勝手に「奇跡だ！」と　番組がほざいているのを聞くとイラツとするな。

どこが奇跡だ。てめえら馬鹿かよ。
努力を奇跡って言葉で片付けられる側の気持ち、わかるか？　ぶっちゃけプライドに傷をつけてさらに泥を塗りたくって、そんでもって口汚い罵倒を浴びせかけているようなもんだぞ？
ちったあ頭使って言葉吐けよ。俺より頭良いんならさ。

……って、全然関係ないところに話が逸れたな。

すまん、質問はコレで終わりな？　これから師匠に会いに行かないかやいかんし。

第1話「脱走、されど失敗」

第1話

「脱走」

「居たぞお、こつちだあ!!」

「ピーー! ピーッ!」

警笛を吹き鳴らす音が反響し、軽装の鎧に身を包んだ男が大音声を発した。

「チイツ! こつちもか!!」

男の声と警笛の音を聞きつけた者たちが一斉に集まりだす気配を、小柄な少年は敏感に察知して盛大に舌打ちする。

そこは広大な屋敷だった。

と言つても、度が過ぎるほど煌びやかなわけではなく、温泉旅館のような落ち着いた風情を醸す上品な屋敷。調度品の一つ一つ、そのどれをとつても自己主張は控えめで、屋敷にある全ての環境や雰囲気、全体で存在感を発する慎ましい印象である。

そう、そこは広大な屋敷だった。

広大過ぎた。

この屋敷の主 ガウエイン・D・シュツラーハの実子である少年、ミリオルド・A・シュツラーハはその広大さのせいで、生まれて17年も過ぎているのに未だにこの屋敷の全容を把握できずにいた。

そして、ついでにこの屋敷に配備されている警備員の全体数もまた把握できていないのだ。

「 見つけましたぞ、御曹子！！」

「まったく、一体全体何人いるんだてめえらは……ッ！」

次第に追い詰められつつある

そのことを認識していながらも、なおも不屈の念を燃やしてミリオルドは逃走を続行した。

板張りの渡り廊下を曲がり、眼前には両手を広げて通せんぼをする使用人の女が現れると、ミリオルドは一瞬の躊躇もなく両脚から？を放出して『瞬動』を発動した。瞬き一つする間もなく間合いを詰めて、使用人の女の顔に飛び蹴りを浴びせかける。

「ひでぶっ！？」

「ヘッ！ 女でも容赦なしが信条なんでね、手加減はしねえぜ！！」

ドグシャア！ と吹っ飛ばされて力なく倒れ付す使用人の女に、ミリオルドはふてぶてしく笑って言った。

着地と同時にもう一度『瞬動』で真っ直ぐの廊下を駆け抜けて、忌々しげに吐き捨てた。

「にしても……どこまで行けば出口に着くんだ？ でか過ぎだろこの屋敷！」

「まっただくだな」

「ゲエツ!？」

逃走が始まって2時間あまり。いい加減に飽き飽きしていたミリオルドが、廊下に沿って走って行くのも時間の無駄と察し、中庭に向けて意識を向けた瞬間。

ミリオルドの目の前に、突然壮年の男が現れた。

思わずといった態で悲鳴を上げるミリオルドに、男はニヤリと笑いかける。

「おまえを探すのに、だいぶ時間を食われてしまった。……せめてこの半分ぐらいの広さにして欲しいものだ」

「せ、先生……」

ブワツと冷や汗を全身から噴出し、ミリオルドが口元を引くつかせながらその人物の呼び名を口にした。

先生　この屋敷の警備隊長にして、ミリオルドの父ガウエインの側近。それに加えてミリオルドの座学講師にして実戦戦闘術の師匠でもある。

その厳しい容貌と、自他共に認める万能振りから、彼を知る者たちからは敬意と共に『先生』と呼ばれている。

本名はディリオルム・ウィーヴェエ。筋骨逞しい褐色の長身と、撫で付けられた白い短髪が特徴的なヘラス族の男である。

「先程の『瞬動』は見事だった。？入り？がまだまだだったが、？抜き？は評価に値する」

「ど、どうも……お褒めにいただき光栄です先生……（汗）」
「女に対して躊躇がないのも良い。殺し合いの場で男女の別などまったく無関係だからな。騎士の家系に生まれた者として、おまえは敵と見定めた者には一切の容赦をしてはならない」

淡々と言いながら、次第にウィーヴェの総身から気炎にも似た気が滲み昇ってくる。

それを肌でひしひしと感じながら、ミリオルドは完全に気後れしたように一歩後ずさる。

「私としては、是非その思い切りのよさを勉強でも発揮して欲しいものだが……」

「は、ははは………ぜえったい、無・理!!」

ダンッ！ と床を蹴って脱兎のごとく逃げ出すミリオルド。だが、背後に向かって逃げ出したにもかかわらずミリオルドの眼前に再び忽然とウィーヴェの姿が現れる。息を呑みさらに背後に逃げようと振り向くと、そっちにもウィーヴェ。さらに背後にもウィーヴェ。ウィーヴェ。分身でもなんでもない、ただミリオルドが背後に振り向く瞬間に目の前に回りこみ続ける、ウィーヴェ。

「なにこの無理ゲー……」

ガックリとだつ力するミリオルド。

「なんだ諦めたのか？」

「勝てる気しねえもんよ」

実際問題、ミリオルドがウィーヴェに勝る点は皆無に等しい。

実戦経験、身体能力、氣の総量から氣を使った技の数と技の練度、

攻撃範囲のリーチに戦闘センス。何から何まで劣っている。そんな相手をどうこうできるはずもなく、ミリオルドは逃走を諦めたように溜息を吐いた。

降参降参と手を振るミリオルドに、ウィーヴェは纏っていた気を霧散させながら淡々とした語調で言う。

「そうか。ならば己の部屋に戻り、課された課題を消化しろ」

「ヤダネッ!」

その瞬間。ミリオルドは密かに足裏に練り続けていた気を爆発させるようにして『瞬動』で中庭に移動。さらには高等技術の『虚空瞬動』を発動し、空中で空気を蹴るようにしてウィーヴェを撒こうと高速移動した。　　が。

「ギヤスッ?!」

案の定というべきか、今度は後ろから追いつがってきたウィーヴェに一瞬にして追いつかれ、拳骨ハンマーをのう天にぶつけられ、ベチャッ! とミリオルドは地に叩きつけられた。

「敵わぬと見るや逃走するために方便を吐く。戦闘者としては合格だが、騎士としては落第だぞ、馬鹿者が」

「ちくしょう……ッ!」

襟首をつかまれ、ずるずると引きずられながら自室に連行されるミリオルド。

ミリオルドは悔しげに呻いた。

こうして、ミリオルドの1089回目の家出は、見事に阻止されたのだった。

第2話「束縛は嫌いだ！」

第2話

「束縛は嫌いだ！」

【：ミリオルド：】

誤解を避けるために先に言っておくと、別にミリオルドはシュツラ
ーハの家を嫌っているわけでは断じてない。

父ガウエインは『先生』ウィーヴェと同様で厳格だが、人として、
親として尊敬できる人物だ。

母ミレイユはお淑やかで、儂げですらある美貌と優しい性格で、息
子として大好きである。

家の使用人たちも規律にうるさいところはあがるが、それさえ守って
いたら何も言つてこないし、むしろ親切でミリオルドに対しても暖
かく接してくれる。

血の繋がった兄弟 弟と妹とは、広過ぎる屋敷の弊害か、あまり
会った事はないがよく懐いてくれていて大切に思っている。

だから家に対する不満はない。

あるとすれば、この身に課せられた義務に対してのみだ。

おまえの将来は決定されている。

国に仕え、王に仕え、民に仕える騎士として、おまえは一生を消費するのだ。

信じられなかった。
耐え難かった。

己の一生が既に定められていて、そのためのレールが既に敷かれているだなんて。

ミリオルドはただそのレールを沿って歩いていけばいい。そうするだけで、全てが上手く回る。そう言われていた。
父でも、母でも、先生でも、兄弟でも、使用人でもなく。

国の勅使とやらが直々にそう言って、ミリオルドの生涯を束縛したのだ。

その時からだ。

ミリオルドが家から出たがり、シュツラーハの名を捨てたがるようになったのは。

ミリオルドが オスティア・ウェスペリタィア王国の在り様を憎悪するようになったのは。

「魔法使いの総人口は約6700万人で、我が王国が加盟するメセンブリーナ連合には旧世界の出身人が多い。対し、ヘラス帝国には新世界に元々住んでいた亜人がほとんどを占めている。ここまででは以前の時間にやったが、復習はちゃんとしてあるだろうな」

デイリオルム・ウィーヴェは相変わらずの淡々とした口調で、大人しく講義を受けるミリオルドに問いかけた。

対し、ミリオルドは退屈そうに大きな欠伸をしながら肯定した。

「ふあゝ……。……はい」

「次に欠伸をしたら鼻を折るぞ」

「へえゝい」

「……新世界の国家郡は旧世界のそれとは異なり、独特の法律体系、経済体系、交通・通信機構、教育制度を持っている」

やる気なさげなミリオルドに、しかし幼い頃からのミリオルドをずっと見知っているウィーヴェは、ただミリオルドの態度を受け流した。

これで成績が落ちているのなら容赦なく鉄拳制裁を加えるのだが、ミリオルドはその辺りをきちんと心得があるので、成績を落とすよくなへまはしなかった。基本的にミリオルドは講義は真面目に受けているのだ。……傍目には決してそう見えないが。

「我が王国は小国だ。取り立てて特産物があるわけではないし、国の軍が精鋭であるというわけでもない」

「ようはあれでしょ、先生。『歴史と伝統のウエスペリタティア王国、麗しき千塔の都、空中王都オステティア』。『世界最古の王国』。『魔法世界の文明発祥の聖地』。『歴史と伝統【だけ】が売りの小

国』でしょ？ つまらん国ですよ」

「……………あまりそういうことを言うな。誰に聞かれて、誰の耳に届けられるかわからんのだぞ」

「へえ〜い」

本格的に愛国心が欠如しているミリオルドに、しかしウィーヴェは何も言う気にならなかった。

ウィーヴェはヘラス族である。それを理由に差別され、一時期は王国の奴隷だった時期もあったのだ。

今でこそちゃんとした地位をガウエインに与えられ、それに恩義と友情を感じているとはいえ、ウィーヴェにも愛国心は欠片もない。そんなウィーヴェがミリオルドに愛国心を説くことなどできるはずがなかった。

「隊長」

不意に、ウィーヴェが講義を進めようとする直前で、ミリオルドの部屋の外から警備隊に所属する男の声が届いてきた。

「なんだ、入れ」

「ハッ！」

胡乱げに言うウィーヴェに、男は威勢の良い応答と共に静かにドアを開いた。

「……………一応ここ、俺の部屋なんだが……………？」

「あはは、ちょっと失礼するよ御曹子」

「……………」

部屋の主であるミリオルドではなく、ウィーヴェに対してのみ礼を

取る男にミリオルドが不満げに呟くと、男は笑いながら敬礼してき
た。
それにムスツとするミリオルドを横目に、男は早速ウィーヴェに向
き直る。

「隊長、御館様から呼び出しがかかっております」

「なに？」

「し急やって来るように、とのことですよ」

「……わかった。ミリオルド、今日はここまでだ」

「ありがとうございます！！」

急用ができたらしいウィーヴェに、メツチャ笑顔のミリオルド。
それにウィーヴェはやれやれと嘆息し、

「ギル。ミリオルドから目を離すなよ」

「了解！」

そう言っつてウィーヴェはミリオルドの部屋から退出して行った。

「……………」

「……………」

途端、会話が途切れ沈黙が流れた。

しばらくして、男　ギルが沈黙に耐えかねたように口を開く。

と同時。

「……………御曹子？　休憩しないのです？」

「してるっつーの。……………お、ミリヤじゃん。どっした？」

「え、お嬢様?!」

出口のほうに目をやって、何気ない口調で妹の名を言うミリオルド。釣られたように驚きの声を上げてそちらにギルが目をやった瞬間。ミリオルドが気配を殺して立ち上がり、ギルの後頭部に気弾を放って気絶させた。

「ふっ、ちよろい……」

ニヤリ、と不敵に笑うミリオルド。

今現在のミリオルドはウィーヴェにこそ劣るものの、シュツラーハ家に仕えるどの警備隊員を凌駕する戦闘能力を持っているのだ。ギル一人でミリオルドを抑えられるはずもない。

「にしても……相変わらず警備隊の連中はミリヤに惚れ抜いてんな」

いや、確かにミリヤは地上の天使だけでも。

愛する妹の笑顔を思い出しながら、ミリオルドは早速行動を開始した。

「ウィーヴェを俺から離すとは……失策だったな父上様よお！」

【 …ガウエイン… 】

「呼んだか」

書斎に入り、蔵書を検分しているらしいシュツラー八家当主ガウエインに、ウィーヴェは礼を払うでもなく無造作に声を掛けた。

ガウエイン……現役時代は王国騎士団の団長を務めていた老豪傑は、ちらりと最も信頼する右うでであり、同時に親友であるウィーヴェに視線をやった後、手にしていた蔵書……魔法に関する本を棚に戻しながら労った。

「よく来てくれたな、友よ。茶でも飲むか？」

「いらん。それよりも用件を言え」

「やれやれ……少しはゆとりを持って。そう四六時中肩に力を入れっぱなしだと疲れるだろう」

「用件を言え。無ければもう行くぞ」

「ああ待って待て！」

さっさと踵を返す親友に、ガウエインは慌てて制止の声を掛けた。

まったく……無駄嫌いの堅物なのがこの男の最大の欠点だな。

「まあ、こちらとて暇があるわけでもない。ゆえに単刀直入に本題に入ろう」

「それでいい。私は多忙なんだ。早く済ませたい」

ふん、と鼻を鳴らし、主君であるはずのガウエインに上から目線でのものを言うウィーヴェに、ガウエインは苦笑し、そして次の瞬間にはあらゆる表情を打ち消して、完全な真顔になった。

その顔つきで、こちらの用件がただごとではないと察したのか、ウイーヴェは幾分まじめにガウエインに対する。

「王女殿下が何者かに攫われた」

「……………」

「し急搜索隊を編成し、王女殿下の行方を探るようにと王陛下の勅使が命じてきた」

「……………シュツラー八家だけに、か？」

「無論違う。我々だけではなく、他の騎士階級の者たちや軍も動いている。私はこれから王宮に行かなくてはならんからな。この屋敷の警備隊のほうから王女殿下の搜索班を、おまえが編成してくれ。

頼むぞ」

「わかった」

一国の王女が攫われた　これだけで国の一大事だ。

王女殿下の身の回りを固めていた者たちは残らず罰せられ、その大半が政治的地位を落とすことになるだろう。

この事件はおそらくそれを狙ったものだ。

政争。

大分裂戦争という大戦の最中で、そんな下らないものに精を出す国の害虫どもには反吐が出るが、王命に逆らえるほどシュツラー八家は権力がないし、政治的味方も多いわけではない。

「　御館様！　大変です！！」

ガウエインはさっそく任された仕事の遂行に動こうとするウイーヴェを横目に、自身もまた書斎から退出しようとする、不意に警備隊副隊長　ラヴィリアが書斎に駆け込んできたのに少し驚いた。

「なんだ、そんなに慌てて」
「そ、それが」

御曹子がだっ走しました!!」

「な、なんだとお!?!」

いきなりの報告に驚き、目を剥く。
だっ走というのはおかしな表現だが、御曹子　この場合、次男ではなく長男のほうだろう　の家出にかけける執念はまさにそう呼ぶに相応しいほどだ。

「第一門、第二門、ともに突破され、既に屋敷を出て行かれてしまったようです!!」

「ばかな……正しいルートを知らねば脱出できぬ魔法結界を、突破しただと?!　警備隊は何をやっていた!」

「それが、立ち塞がった者たちはみな倒されてしまい……!　というか隊長以外に御曹子を止めることなんか出来ませんって!!」

「あの愚息があ……!!」

こんな大変な時に何をしている!!

怒りのあまり目の前が真っ白になるような心地を味わう。

ミリオルドは、次期シュツラー八家の当主の座を継ぐ男だ。そしていずれは王国騎士団に入団し、くさった王国の内部を改革していくべき人材なのだ。それがどうして国のしがらみから逃れることばかりにふ心する?!

「正しいルートを把握し、脱出するのに1000回以上も失敗を積み重ねてきたのだ。そろそろ脱走できても不思議ではない。……それにしてもミリオルドめ。警備隊を残らず撃破するとは、私との稽古の時も実力を隠していたな……」

どおりで、最近ミリオルドの成長が遅いはずだ。

ミリオルドはウィーヴェに実力を隠し、だっ走するにはまだ力不足だと誤認させていたのだ。

その手際、その演技力。

伊達に【シュツラー八家の神童】と謳われていないというわけか。

「やるな、馬鹿弟子」

怒り狂うガウエインを尻目に、ウィーヴェはどこか感心したようにそう呟いていたのだった

「（´・`）、（クツククク・・（´・`）、（フハハハ・・（´・`）
（ハアーハツハツ！！）」

完 全 勝 利 ！！

城壁もかくやと言わんばかりの堀を飛び越え、1kmも屋敷から離れると、ミリオルド 俺は高らかに笑声を迸らせながら、よつやく忌々しい魔法結界を突破した歓喜に打ち震えていた。

「いやあ、いくらなんでも広すぎると思ってたが……まさか結界を張って同じ所をぐるぐる回らせていただけだとは……ったく。くだらねえ小細工を施しやがって」

実際の屋敷は常識的な広さだった。

十分に豪邸の域にはあるが、それでも外の景色すら見渡すことすら出来ないほどの広さだなんて間違っても言えない。

俺を逃がさないために張ったとは思えないが、それでも厄介すぎる結界である。誰が、どうやって張ったのかは気になるところではあるが

「今はそんなことよりも、？今度の人生？で初めてひとりで外に出られたこの喜びを、存分に楽しもうじゃないか！！」

ああいや、そうじゃない。

「楽しむのも後だな。とりえずこのクソツタレな国から出ねえと、俺の物語が始まらねえ！」

そくだそくだ。国から出ないうちは安心できない。もしもウィーヴ

エに追いつかれたらその時点で俺の物語がバッドエンドになる。もしそうになったらまた屋敷に連れ戻されて、決められた通りのクソつまらん人生を生きねばならなくなるだろう。

「せつかくの？二度目？の人生だ。楽しく生きなきゃ損だもんだよ」

ふふん、とせせら笑いながら王宮のある方角に中指を突き立てて「ファック・ユー！」と叫び、俺はさっそく国境目掛けて駆け出したのだった

「そっいえば 国境にも国防軍がいるかもなんだよなあ。……メンドクせえ」

第2話「束縛は嫌いだ！」（後書き）

アンケート

「第1部で登場した人物と用語の紹介」を読んだ皆さまならご存知かもしれませんが、第1部主人公アオスブルフは、黒円卓の魔人の錬成の権利をカール・クラフトに与えられており、好き勝手に私兵を造る事が出来ます。

まあ、青さんの性格上、魔人を大量に作って「数で押せ！」戦術を取る事はありませんし、そもそも聖遺物の基となる物がそんなにゴロゴロ転がっているはずがありません。

ゆえに、作者は青さんの私兵集団は4人だけと決めております。

あ、形成（笑）さんは青さんの私兵という立場ですが、それは聖餐杯の希望で作ってあげた、いわば聖餐杯への贈り物なので、数には入っていません。

さて、そこで作者「折れた鉛筆」から、読者がたにアイデアを募集したく思います！

既に最初の1人はガンダムUCの「マリィダ・クルス」が私兵の1人としてエントリーされていきますので、残りの3人！

この3人のオリキャラ、もしくは「マリィダ」のように他作品の原作キャラを引っ張って来て魔人化させるなど、青さんの私兵に相応しいアイデアを作者にください！

キャラクターの名前、聖遺物、渴望、創造の能力、これを、これを
考えて作者に与えて欲しいのです！！！！！！

……なんか、悪い感想が来そうな予感がヒシヒシとしますが、作者
は負けません。

堅実で確実な性格のアオスブルフが、策もなくラインハルトに挑む
ことは絶対にありません！ なので、アオスブルフの策の一助とな
るようなキャラクターが欲しいのです！

折角のクロスオーバー的な作品なので、是非、是非！ 奮って軽い
アイデアでもいいので応募して下さい！ お願いします！！

良好です。提示された課題は問題なく消化しており、明後日には次の段階に進めると思っています。

「アリカ？ 礼儀作法は見られるほどになりましたが、ダンスの練習はどうなっています？ 今度以前のパーティーの時のような無様を見せればお仕置きですからね」

……はい。よく心得ております、お母様。

「殿下。ご機嫌麗しゅう。どうです、一緒に踊っていただけませんか」

よいだろう。

「殿下」

「殿下」

「殿下」

「殿下」

「

「…………はあ」

力尽きたようにベッドへうつ伏せに倒れこみ、ウエスペリタティア王国第1王女、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアは、幼い子供には不釣合いな深い疲労の滲んだ息を吐いた。

今日も今日とて朝から晩まで魔法やダンスの稽古、歴史や数学などの一般教養、老獯な貴族たちとの会話……一瞬も気を緩めることさえ出来ない時間を過ごした。

アリカは王女だ。

アリカという存在はその全てが国に捧げられ、アリカという血肉の一片にいたるまで、国民の納める税によって構成されているのだと弁え、ゆえにこそ物心ついたころから始まった過酷な王宮暮らしを従容と受け入れていた。

だが……アリカはまだ幼い少女だった。

先月に7歳の誕生日を迎えた、あまりにも幼すぎる少女。

王女どころかそこらの農民の娘と同じ無力な存在で、親や近い人々の温もりを欲する小さい存在だったのだ。

時々、夢想する。

温かい両親。温かい家庭。
優しい世界。優しい人々。

朝に目を覚ましたら、自分の身の回りを囲う全てが、そういったものに姿を変えているように、と。

あまりに儂く、望むのも愚かしい幼い願望を抱いていた。

アリカは望んでいた。意識すらしていないずっと奥底の深層で。

だが、そんなものはどこにもない。

早熟な少女は 早熟でなければ生きていけない魍魎跋扈のオステイアでは そんなキレイなモノなど存在し得ないと知っていた。

少なくとも、アリカの知る^王世界では。

だから、いつしか夢想の世界から抜け出したアリカは切望するようになった。

白馬に乗った王子様が迎えに来て、この窮屈な毎日から助け出してくれないだろうか。

王女としてのアリカは、この思いを完全に否定し、すり潰そうとする。

少女としてのアリカは、日に日に大きくなる思いを外に向けていた。

「……………何をバカな……………」

苦しくなる一方の狂おしい渴望に、しかし王女としての仮面が張り付いてしまったオスティアの『王女』は、小さな胸に宿る『少女』を忌々しそうに掻き潰し、仰向けに体勢を変える。

そうだ、バカだ。

白馬に乗った王子など、所詮は仮想の世界でしか存在し無い架空のモノ。

そんなものを望むなど、あまりに愚か。『王女』として、頭の片隅にも置いてはいけけない思考回路である。

このまま眠ってしまおう。

そう思った。

明日もまた繰り返す毎日を過ごさねばならない。疲れを次の日まで持ち越しては、それだけで学習速度が低下してしまふ。そんな無様をさらしてはいけない。

自らにそう言い聞かせ、最後にもう一度深い溜息を吐いて、アリカは

ガタン

「誰じゃっ?!」

不意に生じた不審な物音に過敏に反応し、アリカは咄嗟に跳ね起き

ながら誰何の声を上げた。

「おや。王女殿下は随分と鋭い感覚をお持ちのようだ。まさか、我々に気づくとはね」

「バカかおまえ。今おまえが立てた物音が聞こえちゃったんだよ」

「そうだそうだ！ 一番弱っちいくせにリーダー面してんじゃねえ！」

「うるさいですよ。誰かに見つかったらどうするつもりです」
「もう王女殿下に見つかったちゃったけど」

そうして出てきたのは、覆面とローブに身を包んだ、5人の男たちだった。

柔らかいベッドの上から飛び降りて、全身に王家の魔力をまとうて威嚇する。だが5人の不審者たちは一様に堪えた様子はなく、無造作にアリカに歩み寄ってくる。

「誰ぞおらぬか！ ここに狼藉者どもがおる、ひっ捕らえよ！」

「無駄ですよ、王女殿下。なぜなら貴女の身の回りを固めていた使用人どもは残らず処分しましたから」

「おれたちがな。おまえは後ろで眺めてただけだろうが」

「弱いくせにリーダー面してんじゃねえって」

「うるさいですよ。誰かに見つかったらどうするつもりです」

「いや、その『誰か』なんて近くにいないから」

好き勝手に駄弁る5人に、アリカは臍を噛んだ。

始末した？ わらわに気づかれずに、全員？

アリカの身の回りを固めていた使用人は、ざっと十と半ばほどいる。それが、全滅？ たった5人を相手に？
その十数人の中にはアリカの魔法の師もいたのに？

……信じがたいが、事実らしい。

アリカの声が届かぬところまで使用人たちが離れるなんて事はまず無い。にも関わらずうんともすんとも言わないのは、事実、この者たちに制圧、もしくは殺害されたがためだろう。

「……何が目的だ、貴様ら」

「王女殿下がほしいのです」

「卑猥な言い方すんなや」

「そつだそつだ！ まるでこつちが変態集団みたいじゃなか！」

「変態は嫌ですね。我々は紳士です」

「殿下から見れば紛うことなき変態ですけどね、わたしらって」

ようは、拉致か。

一国の王女の身柄を攫うのがどれほどの大罪か、まさかわからぬはずはあるまい。

にもかかわらず平然と言い放ったという事は、よほど腕に自身があるに見える。

おそらくは、アリカ如きでは太刀打ちできぬ相手だろう。

7歳の少女が大立ち回りできるのは映画や漫画の世界だけ。いかに非凡な才女といえど、実戦経験さえない少女が、大人5人を相手に出来るはずもない。

だが、大人しく捕まってやれるほど、アリカは諦めがよいわけ

ではなかった。

「 『魔法の射手・連弾・光の11矢』 ツ！」

指輪状の魔法媒体を介し、5人の油断を突いて無詠唱で魔法を発動して『一番弱い』らしい先頭の覆面に向けて集中攻撃を仕掛けた。

「おっと」

だが アリカの魔法はあっさりと回避され、あまつさえアリカが魔法を唱えた瞬間に残った4人がアリカの背後に回りこむ。

「なっ!?!」

「生憎、王家の魔力で編まれた魔法など喰らいたくないのね。回避させていただきました。にしてもあれです、その年で無詠唱魔法を扱えるとは末恐ろしいお方だ」

男は心底感心したようにうなずきつつ、アリカが背後を振り返るより先に4人に指示を出す。

「暴れられては敵いません。寝かせてさしあげなさい」

「おつよ」

「ガッ」

首筋に鈍い衝撃。感じたことの無い痛みにも、アリカは一瞬にして意識を刈り取られた。

「 ついでに魔力も封じておきましょう。そうすればただの幼女です」

「幼女言うなや」

「なんか犯罪臭のする言い方になるじゃん」

「そうですよ。我々はロリコンではありませんし」

「どこからどうみても犯罪だけどね」

第3話「キセキ」

第3話

「キセキ」

【：ミリオルド：】

あれだ。俺は見つかつたらマズイ状況におかれてあるんで、人目を避けるべく極力人気の無い所ばかりを選んで走っていたわけだ。そしたらバツタリと見つけてしまったのである。

肩に大きな袋を担いだ、覆面の不審人物集団を。

数は5。背格好からして全員人間の男だろう。微量ながらも氣を纏っているところから察するに、一般人ではないようだ。

俺は密出国するために国境を目指していたのだが……

うん。とりあえず露骨なまでに怪し過ぎるので、試しに声をかけてみることにした。単純に、好奇心を刺激されたから。

するとどうだろう。「見られたからには生かしておけぬ！」とか言いながら襲いかかって来やがるではありませんか。

が。
こちららタダで殺られるほど雑魚ではないし、日頃からウィーヴェとかいう化物相手に稽古を積んできた。ゆえに、俺がそこいらの連中に負けるわけではないのだ。

襲いかかって来た4人をとりあえず顎を打って脳震盪させて大人しくしてもらい、残った1人が慌てて肩に担いだ袋を置いて逃げ出すのを、氣弾を放って吹っ飛ばした。

「グオツ？」

「グペツ?!」

「ぎゃひっ、」

「あひんっ!」

「ぎゃああああ!?!?!」

制圧終了。

「……………ざ、ザッコオオオオオオ!」

信じられないほど弱かった男たちに、俺は思わずそう嫌みつたらしく驚いてしまったが、とりあえずその懐を探って身分証明できそうなものを探す。だが、当然そんなものは持っていないかった。

代わりに手持ちの金を根こそぎ奪い、旅の路銀にさせてもらうことにして、さっさと立ち去ろうとしたわけなのだが……ふと、急に仮面男が担いでいた袋が、糞虫のごとく暴れだしたを見咎めてとりあえず助けてやることにした。

「……………んだよ、人攫いだつたのかよコイツら」

つぶくさ言いながら、結び口をほどいて中から出てきた顔を眺めて

みる。

「しかもロリコン、と」

袋の中にいたのは小さな女の子……口には猿轡を噛まされ、目には目隠し。そしてなぜか両手足を亀甲縛りで拘束されている。その道の需要はありそうだが、極めて危険な犯罪臭のする捕まり方だった。どたばたと暴れている様は、かなり強気な気性であるのが窺えたため、とりあえず噛みつかれてはたまらんと声をかけることから始めた。

「おい、俺がためえを捕まえた連中をブツ飛ばした。助けてやったんだから、噛み付くなよ」

「！ (コクコク)」

どうやら言葉は伝わるようだ。

まず猿轡を外し、目隠しを外す。するとそこからこちらがゾツとするような美貌を持った幼女が現れて、一瞬だけ俺は息を呑んだ。

年の頃は7歳辺りであろうに、異常に整った愛らしい容貌。綺麗に澄み渡った翠緑の双眸と、金色の豊かな長髪。将来は絶世の美女の名をほしいままにするだろう、そんな可能性を秘めた幼子であった。

「あー……こつという縛り方ってどうやって解けばいいのかわからんのだが……」

なにしろ亀甲縛りである。生で見たのは初めてで、どこから手をつ

ければいいのか分からない。
仕方ないので氣を放出と同時に薄く圧縮し、バーナーのように縄の縛り目を焼いていくことにする。

「よし、これで大丈夫だな。立てるか、お嬢ちゃん」

「……うむ。助かったぞ」

……偉そうな少女だぜ。

自由になった体を検分するように動かしながら立ち、まるで助けてもらって当然といった様子の金髪少女に、俺の頬が一瞬痙攣した。だがまあ、女の子には優しくする主義の俺は、努めて柔らかく微笑んで見せた。

「お嬢ちゃん。お家はどこだ？ 優しいお兄さんが家まで連れて帰ってやるぞ」

「そうだな……。お主、わらわを王宮に連れて行け」

「はあ？ 王宮？」

なぜに？

意味がわからず間抜けな声を出すと、少女は怪訝そうに俺を見た。

「む？ もしやお主、わらわが誘拐されたという報せを受けて動いていたわけではないのか？」

「おう。もしかしてお嬢ちゃんって貴族の子女なのか？」

「違う。王族だ。わらわはアリカ・アナルキア・エンテオフュシア。ウエスペリタティア王国の王女だ」

堂々と名乗った少女に、俺は啞然と目を見開いた。

アリカ・アナルキア・エンテオフユシア。

少年マガジンに連載中の少年漫画、『魔法先生ネギま!』の主人公ネギ・スプリングフィールドの母で、原作で最も重要な人物である。なんせコイツがいないと主人公が生まれないし。

そんな、『ネギま!』の原作キャラのロリバージョンと出会つとか

……

「……………マジかよ」

「まじ……………? とはどういう意味だ?」

「【本当か】とか、【本気か】とか、そういう意味だ」

つぶらな瞳で疑問する幼女 改めアリカ王女に、俺は親切に教えてやりながら頭を抱える。

……………なんつう奴と関わっちまうんだ、俺は。

「あ……………悪いがやつぱ1人で帰ってくれる? 俺って只今絶賛家出中なんだ。王宮に行くとかマジ勘弁」

「家出? なぜお主は家出しておるのだ?」

「この国が大嫌いだからだよ、王女殿下」

うえ、つい本音をこぼしちまった。相手は王族だぞ、あとで捕まるんじゃないだろうか。

いや、俺はどうせ国を出るつもりなんだし、別に関係ないのか?

あー、もういいや。相手は子供だし、もうすぐ俺とは縁の切れる相手でもある。本音を隠す必要はないだろう。

「ウエスペリタティア王国が嫌い? 何故だ?」

「お嬢ちゃんならわかってそうだけどな。この国の上層部が腐ってるからだよ。……まあ、俺の場合は単に定められた人生を歩まされるのが御免だからだけだ」

「……その口ぶりから察するに、お主はどこかの貴族の子息のようだが、それは無責任というものらしいぞ」

「そ。俺は無責任な人間なの。だから務めから逃げるのになんの罪悪感も湧かないな」

まだ7・8歳の幼女が、他者の口振りだけで身の上を察するとか、どんだけだよ。

そんなふうにも思いつつも、アリカの口調は責めるようなものではなく、どこことなく不思議そうなものだったため、俺は気楽に答えた。

そういえば……魍魎跋扈の政治世界の中で育ってきたアリカって、感情の起伏がまったくない無表情になったって言うけど、今はそうでもないらしい。少しだけだが感情が顔に出てきており、普通に可愛かった。

「というわけだ。俺はこの国から出て自由に生きるから、お嬢ちゃんはお嬢ちゃんて好きなように生きな」

「自由……」

「アディオス、アミーゴ!!」

「待てっ!!」

幼女を置いて行くのは我ながら最低だと思っが、相手が王女となれば話は別。

俺の自由を邪魔立てする奴あ、たとえ国王様だろっが殴り殺してやらあ。

そんな覚悟で背中を向けたのだが、アリカはそれでもしつこく追

縋ってきた。

「んだよ？ 悪いけど今てめえに関わってる暇は」

「わらわも わらわも連れて行ってくれ！！」

「は……………？」

【 : アリカ・アナルキア・エンテオフュシア : 】

言ってしまった……………！

10歳ほど年上の少年に対し、わらわは言うてはならないことを口走ってしまった……………！

俺はこの国を出て自由に生きるから

そんな、これまでただの一度もわらわが考えたことのなかったことを口にした少年に、着いて行きたくなくなってしまったのだ。

自由

言葉の意味は知っていても、一度もその意味を体験したことはない。一生をあつちの王宮で生きていくものと思ひ、すでに諦めていた。いや、それを当り前だと思ひ込んで、大人たちの汚い政治の中で己を殺して、親に甘えられず、わがまま一つ言えず、ずっと耐えていつの間にか耐えられるようになって生きてきた。

誘拐された時、実は王宮の外で生きられるのではないかとほんの少し期待してしまっていたのだ。

だからこそ、その期待、希望を刺激するようなことを言つて見せた少年に、祖国が嫌いだと口にした少年に、惹かれてしまった。王女と知つてなお、粗暴な口調と態度を改めない少年の在り方に興味を抱いて、惹かれてしまった。

少年は数瞬のあいだ呆氣に取られたように目と口を開いていたが、我に返ると怒つたよつな、迷つたよつな表情になつた。

「……あのな、てめえはまだガキだからわからねえだろうけど、てめえは国にとつてかなり重要な人間なんだよ。そんなガキを連れて逃げてみる、追っ手が地獄の果てまで追ってきて俺が殺されるだろうが」
「うっ……」

アリカ・アナルキア・エンテオフユシアは、7歳の少女としては極めて優れた頭脳と精神的タフネスを持っているが、それはあくまで『7歳の少女として』、だ。

幼いゆえの視野の狭さ。なんでもいつかはなんとかなるという樂觀思考。

それが、少年の正論に対して反論を試みさせていた。

「だ、だが、お主なら、わらわを賊どもから助け出したたお主なら、なんとかなるのではないのか!？」

「ばか言うなよ。俺だって人間だぜ？俺より強い奴だって、いくらでもいるだろ。……多分」

少年は呆れたように言いながら、わらわの必死の訴えに対して困ったように頬を掻いた。

「それにな、もしもてめえがいなくなったら、悲しむ友達とか、そういう奴がいるだろ？俺にもいるけど、見るからに責任感の強そうなてめえのことだ、きつとソイツらのこと思い出したら辛く」

「いないっ！わらわがいなくなって悲しむ者など、1人もっ！」

「っ」
「友達なんていない！ 悲しんでくれる者など……っ！」

両親の顔を思い出す。

父は、わらわを含めた子供たち全員の事をただの道具としか見ておらず、母もまた然り。王妃という地位に在り続けるためにわらわという存在を生んだに過ぎず、わらわに対して一片も愛情を注いではくれなかった。

専属講師も、ただ機械的にわらわに座学の講義をするだけ。使用人も、冷めた眼でわらわを監視しているだけ。

そんな世界、嫌いだ

「だから」

「いや、無理なもんは無理だっつーの」

「ッ　　！！」

はあ、と深い溜息を吐いた少年は、哀れむようにわらわを見下ろした。

「なんで俺が、見ず知らずのガキのために命張らにやならんのよ。俺は嫌だね」

「……………」

それは、そうだろう。

虫が良すぎる。助けてもらえただけで良しとしなければ……。

肩を落として、わらわは少年から目を逸らした。

「……わがママを言ってすまなかった。もう行ってよいぞ」

「やっぱ馬鹿だな、てめえ。なんで俺がガキの言うことを聞かなきゃならねえんだよ」

「ぐっ、」

肩をつかまれ、強引に振り向かされたわらわは、驚き呻いて、少年の顔を見上げた。

少年は、笑っていた。自棄になったように、それでも明るく笑っていた

「惨めで哀れで可哀想なクソガキ。あんまりてめえが可哀想なんで、俺は家出するのやめて、てめえの友達になってやる」

「……え？」

「だあかあら、友達！ 友達になってやるって言ってたんだよ！ したら王宮暮らしでも多少は寂しさも紛らわせるだろ？」

「そ、それって」

どういうことだ？

「あれだ、俺って基本的にはお人好しだし。憐れで哀れな女の子を見捨てるなんて真似、死んでも出来るかよ。だから、俺は家出をやる。ついでに騎士になって、てめえを守る側の人間になってやる」

「え……？ え?! それって、つまり、 どういうことだ？」

「だアツ！ 本格的に頭悪いなあまえ！ 何度も同じこと言わせん

な？アリカ？ツ！ いいか？ つまり、俺が、おまえの、味方になるって言ってるんだよ！」

「みか、た……」

みかた。見方？ それとも……味方っ？

「名乗るのが遅れたな。俺の名前はミリオルド・A・シュツラーハ……アリカの専属騎士になるのには数年ぐらいかかりそうだし……そうだな、それまで密かに会いに行ってやる。その時は俺の事は『キセキ』って呼べ」

「……キセキ」

「おう。俺の真名だ。ミリオルドとかっていう名前より気に入ってる。俺がおまえの騎士になるまで、その名で呼ぶんだぞ？」

「わ、わかった、キセキだなっ？」

「おう」

二カッ、と力強く、温かく微笑むキセキに、わらわはようやく現実を認識した。

そうして、少女は運命の騎士と出会った。

アリカという女の、何者にも換えられぬ至高の宝……断金の仲間となる運命の男と。

出会った。

第3話「キセキ」（後書き）

ちなみに、このミリオルド。戦闘能力はこの時点でラカンより少し弱いぐらいですが、これから先、どんどん時間がとぶので、あまり参考にならないと思います。

ちなみに、あの5人組、兵卒としては強いけど、本物の強者には一蹴されるぐらいです。

アリカ王女拉致の場面では、アリカ王女まだちっちゃいですし、まるで相手にならなかっただけのことなのです。

閑話「手紙の遣り取り」

閑話

「手紙の遣り取り」

親愛なる父上殿へ。

わたし、ミリオルドは家出をしました。

家を出てまだ一日も経っていないのですが、わたしは諸々の事情により家に帰らねばならなくなっていました。

それと言うのも、実はわたし、密出国を目論んで国境を目指していたのですが、そこでウエスペリティア王国の王女殿下が拉致されていたのを助け出してしまったのです。

王女をそのまま一人で帰らせるわけにもいかず、仕方なしに家出を諦め、家に帰らせていただきたいと思った次第。

……帰っていいですか？

特別に許す。だから早く帰ってきて拳骨を顔面に食らわせる。

ありがとうございます。愚息はすぐにでも帰らせていただきます。く思います。

ですが、顔面にワンパンチとかマジ勘弁。そんなこと言うなら帰りませんよ？ 俺が帰らねえと色々マズインじゃね？

帰ってこいっついたら早く帰ってこんかあっ！

ではワンパンチに関しては絶対に反撃するので、あしからず。

さて、わたしは家に帰ったら、もう二度と家出を試みないことを誓いましょう。

信じられない？ そりゃそうでしょうねえ。なんせ1000回以上も前科があるんですから。

でも家出したくてもできない理由ができてしまったのです。

聞いて驚かないください。実はわたし、その王女様に気に入られちゃいまして。是非友達になって欲しいと泣いて頼まれてしまったのです。あはは。

男の子として、そんな憐れな女の子を見捨てるわけにもいかな
でしょ？

ちよっ?! 友達!? なにがどうなってそうなった!! そして愚息、手紙で王女を憐れとか言うなや!! もしも誰かに見られたらどう弁明するつもりなんじゃ貴様はあ!?

アンタも言ってるじゃん……。

さて、わたしもあと少しで18歳で成人を迎えてしまいます。

については親愛なる父上殿。わたしの一生に一度のわがママを聞いてください。

わたしは、王国騎士団に入団し、そこで誰よりも優れた戦闘力を見せつけるので、父上が王族に働きかけてわたしをアリカ王女殿下の専属騎士になれるようにしてください。最低2年以内に。

は……? ?

もしも無理とか言うなら、わたしは王女を拉致って王国を密出国することになってしまうので、早くお返事をくださいますよう、貴方の愛するミリオルドはお願い申し上げます。

追伸。

1日以内に返事が来ない場合、わたしはガチで王女拉致つて逃げます。

や、やりかねん……！ あの馬鹿息子ならやりかねん！！
ええい！ わかった、わかったから帰って来い！！ 全て望むままにしてやる！
2年だな？ 2年以内にやればよいのだな？！

さすが父上、話が分かる（ニヤリ）。

じゃ、王女を王宮に送ってから帰りますんで。

ああ、それと。先生が俺をいじめようとするかもなので、やめるように強く言い含めておいてくださいね？ メツチャ怖いんです
けど。

第4話「ウィーヴェ先生」

第4話

「ウィーヴェ先生」

「構える」

広間に連れだされるや否や、デイリオルム・ウィーヴェ 通称『先生』と呼ばれるヘラス族の男はそう言った。

齡20のミリオルドは堪えようもなく噴き出てくる不満を、ウィーヴェに叩きつけた。

「いや構えろって言われたってなあ！！　なんで俺が、先生とやり合わなきゃならねえんだよ！！」

「理由が必要か？」

「あつたり前だ！」

なぜか不思議そうに問いかけてくるウィーヴェに、ミリオルドは怒鳴り返した。

目の前の男は真正銘の怪物である。

幾度の戦場を超えて不敗な、どこぞの弓兵さんみたいな戦歴を持つ彼は、一対多の戦闘では馬鹿みたいな威力の魔法で敵を一掃し、一対一では練りに練られた氣を使つて薙ぎ倒される。

並みの攻撃は氣の防御膜で防がれて、己にダメージを与え得る攻撃

は超絶技巧で捌き抜く。

ヘラス族ってのはバケモノ揃いなのか！ と、筋肉達磨な羅漢を原作的な意味で知っている身として、叫ばずにはいられなかった。

「端的に言えば、これは『卒業試験』だ」

「そつぎようしけんう〜？　なんでそんなことせにやならんのよ。俺はイヤだね」

「貴様に拒否権は無い。ついでに、私を倒さねば、卒業は認められん」

「はあっ!?!」

あまりに理不尽な言葉に、ミリオルドは驚きと不満の混ざった声を上げた。

「ふざける！　イヤだって言ってるだろうが！　先生相手に勝つて、どこの無理ゲーじゃボケが！　仮に勝ってもこっちも死ぬわアホお！」

「……拒否権は無い、そう言ったはずだがな」

瞬間、ウィーヴェの姿が掻き消えた。

瞬動　完全に？入り？と？抜き？を悟らせぬ絶技の域のそれを行使して、巨漢の男は一瞬にして弟子の間合いに踏み込んでいた。

「なっ、」

「歯を食い縛れ、馬鹿弟子」

ガッツウウン

ツツツ!!!!!!

ミリオルドの顔に、巖の如き拳が突き刺さり　　ミリオルドは鼻血を吹きだしながら吹っ飛んだ。

ガシャバタドカン！！　と訓練場の壁にぶつかり跳ねまわり地面に激突。そうしてようやく停止した時、ミリオルドは地面に突っ伏していた。

「……おい”……ッ”、このグゼンゼイ、ブツヴに今の、じねる、ぞ……（ガクッ）」

どさりと倒れ、ミリオルドはそれきり沈黙した。

びくっびくっと痙攣し、それは正真正銘？死？を意識させる真に迫った　演技だ。

「……くだらん真似はよせ。今程度の一撃で死ぬほど、可愛げのある男ではあるまい」

「……いや、そこはほら、騙された振りをして去って行くのが優しさとか、そう思わない？」
「思わん」

妄言を吐く不詳の弟子に、ウィーヴェは嘆息した。

「マジかよ。マジで本気でやり合おうって？」

「始めからそう言っている。……別に本気を出す必要はないぞ。その場合は、私のサンドバックになるだけだ」

「勘弁しろよ……先生に殴られ続けるとか、そんなマゾゲー絶対やらねえ」

弱音（？）を吐きながら立ち上がり、腹を決めたミリオルドは拳を構えた。

「ワリイが、先生は俺にとっての『壁』なんだ。ぶち壊して先に進ませてもらうぜ」

「私を倒せもしない輩に、王女殿下をお守りする資格は無い。」

と、ガウエインが言っていた。ほら、貴様の欲しがっていた理由が出来たぞ」

「……はっ」

鼻で笑いながら、今度はミリオルドから動き　　ウイーヴェは、弟子の成長した姿に、小さく微笑んだ

「」

「」

二人は戦士である。

互いの力量は正確に推し量る事は出来ている。

即ち　　ミリオルドが僅差でウイーヴェを凌駕している、と。

だがそれは僅差　　紙一重の差でしか無い。それゆえに、その程度の差などウイーヴェの持つ実戦経験を前にすれば吹けば飛ぶ程度のものだ。

ゆえに、ミリオルドは下手に動けず、
またウィーヴェはカウンター狙いゆえにミリオルドを待った。

この勝負、一瞬で終わりだな。

奇しくも二人の洞察は一致した。

長々と、ダラダラと拳を交えるつもりは毛頭ない。

二人とも戦闘者ではあるが戦闘狂ではなく、最短で、最善の結果を、
周囲を巻き込まずに済ませる事を念頭に置いている。
もしも二人が辺りの事を考えずに暴れまわれば、きつと辺りは焦土
と化す。故に本気で暴れるわけにはいかなかった。

「
.....
」

ミリオルドは、ウィーヴェの教えを思い出していた。

「勝機は四種ある。「先の先」、「先」、「先の後」、「後の先」という。

「先の先」とは、敵が油断していたり、裏をかかれたりなどして隙を見せている機。

「先」とは、敵が攻撃を仕掛けようとして、意識が攻撃に集中し、体も攻撃準備のために固まり、防御がおろそかになる機。

「先の後」とは、敵が攻撃を繰り返している最中、防御のしようがない機。

「後の先」とは、敵の攻撃を己が防いだ直後、敵が体勢を立て直すまでの、無防備になる機。戦いとはこの「四機」の奪い合いだ。己の狙いを隠し、敵の狙いを掴み、裏を衝いて勝を取れ』

わかってるよ、先生。

内心でポツリと呟きながら、ミリオルドは齒噛みした。

(つつてもあれだ。先生の野郎、もろに「後の先」を狙ってんじゃねえかよ……)

しかも長期戦も辞さぬ覚悟。つまり、こちらから動かぬ限り状況は動かない。

それは同時に、こちらに「先の先」の勝機があるという事でもある。

(……先生の「読み」を上回らにや勝ちはナシ、つてか。相変わらずクソ堅実でクソ確実な手段を取ってくれるじゃねえか。俺みたいな若造が先生みたいな百戦錬磨の怪物の「読み」を上回るのは至難……) なら、攻撃をこつちが先に仕掛けて、カウンターを打つて来るのを耐えて、「後の先」をこつちが取るしかねえ) 0・4秒

(と、馬鹿弟子は考えているのだろうか。こちらが用意してい

るのは二段構えのカウンターだ。隙は無いぞ） 0・6秒

（ って感じで先生は容赦なく考えてるんだろうな。マジ無理ゲーだろこれ。手の内全部読まれるとかやめて欲しい。だったらこっちはその二段構えの二撃目を躲して攻撃だ！） 0・7秒

（ ともあれ、馬鹿弟子の執る戦術は全て把握している。そこからの発展戦術も想定済み。どうする？） 0・8秒

（ どうせ全部読まれてんだろうけどさ。なら、小賢しい小手先の技術はいらねえ、こつなったら俺の若さと溢れる青春パワーをぶつけてやるぜ！！） 0・9秒

（ 開き直った弟子は厄介だ。一撃目は無理でも二撃目で確実にシトメねば、私の負けか） 1秒

ジャリ、ミリオルドが一步進み出た。
ザッ、ウィーヴェは身構えた。

瞬動で10メートルの間合の内1メートルを進んで全身を氣で強化すると同時に中国拳法の活歩の歩法で5メートル進みさらに1メートルを瞬動で小刻みに進んで間合を攪乱する。

その全ての動きを正確に読み取りながら戦術を組み立てウィーヴェは総身に氣を張り、両の拳に両の肘に両の膝に氣を集中。打撃をどこからでも繰り出せる構えを取る。

間合いに踏み込む。
拳が唸る。

ヘラス族の戦士の拳が、一撃目を放った。

「ツアツ！」

シュボツ！ 拳が大気を滑る摩擦で爆音を生む。視認さえできぬ超速のソレを、ミリオルドは勘だけで回避し懐に潜り込む。中国拳法、八極拳が最大効果を発揮する至近距離。

だが ミリオルドが攻撃動作に移るよりも早く、ウィーヴェの二撃目が放たれた。

膝。

視界一杯に広がる巨大なそれに、ミリオルドは呆れた。

(対応早すぎんですけど……)
「あがつ?!」

氣の膜を顔に張りつつ、咄嗟に自分から上に跳びながら威力を減衰。

ダメーシ不十分。一瞬で看破したウィーヴェは、即座に連撃の構えを取った。

腰だめに全力の一撃を放つ。

直撃 する前にミリオルドは虚空瞬動でさらに上に逃げ

それさえも読んでいたウィーヴェは拳をドンピシャでミリオルドを照準、極大の氣弾を撃ち放つ。

「マジでっ!?!」

こればかりは回避不能。
ミリオルドは覚悟を決めた。

宙転。頭を下に、足を上に。
足から氣を放出して落下加速、頭部、突き出した両腕に全力強化。
ミリオルドは自分から氣の拳圧に突っ込んだ。

「なにっ?!」

驚愕はウィーヴェエ。

全力で放った氣弾を、人間砲弾と化したミリオルドが突破する。

「とっつげきいいいいい ツツツ!!!!!!」

馬鹿丸出しの叫び声。それが猛烈な勢いと威力を伴いながら迫るのに、ウィーヴェエは爆笑した。

「ハッ、ハハッ、ハアーハッハッハッハッハ!! ガウエイン、どうしてお前からこんな馬鹿が生まれた!!!! よし、来い馬鹿弟子い!!!!!!」

体勢が僅かに崩れているが、お構いなしに拳打を撃つ。

それをミリオルドは額で受け、激痛に顔を顰めながら振りかぶった拳をウィーヴェエに叩きつける。

「ぐおっ」

「がはっ」

どろどろり。

ウィーヴェが放った攻撃は4回。
対してミリオルドが放ったのは1回。

ウィーヴェは倒れたまま腹を抱えて笑いだした。

普段は泰然自若とした堅物がこつも笑うのを、ミリオルドは初めて見た。

「ハア ハツハツハ！ やるなあ、本当に強くなったな馬鹿弟子！
いいぞ、いいだろう！お前はもういらん、どこへなりとも失せる
クソ弟子が！！」

「……あ、そ。……頭痛いんですけど」

「知らん！ さっさと殿下の許へ行かんか！ 死んで帰ってこい、
生きて帰ってきたら私が殺してやる！！」

「うわなにそれこわい。帰ってこれねえじゃん。妹にも弟にも会え
ないじゃん」

「どうせ弟の方は騎士団に出る。妹の方はどこかに嫁ぐ。ならば会
えるはずもない」

「……だからこの国が嫌いなんだよ、俺」

機嫌よさげなウィーヴェを、立ち上がったミリオルドは見下ろし、

頭を、さげた。

「 ありがとうございます！ 先生のおかげで、俺は強くな
った！」

「おう。誇れミリオルド。お前はこの私を超えたのだ」

倒れたまま晴れやかに笑ったウィーヴェに、ミリオルドは、もう一
度だけ頭を下げた。

深く、深く。目一杯深く

第5話「オステイアの騎士」

第5話

「オステイアの騎士」

出会いから2年後。

【 :????: 】

「ミリオルド・A・シュツラーハ」
「ハッ！」

見るも豪華な装いに身を包んだ壮年の男が、威厳漂わせる荘厳な声音を発し、目の前に膝をつき顔を伏せる青年の名を唱えた。

文武百官が居並ぶ騎士叙勲の式典だ。今年、新しく王族を守護する崇高な任を帯びる青年に、羨望の眼差し、嫉妬の目、激励の意を、古めかしい白い鎧と槍で武装した騎士たちが、それぞれ向けている。

「汝、オステイアの王族を守護する者たらんとする覚悟はあるか？」

「ハッ！」

「汝、仕える主に身命を捧げる覚悟はあるか？」

「ハッ！」

「汝、己を殺し王族の盾たらしんとする意思はあるか？」

「ハッ！ 私、ミリオルド・A・シュツラーハは全霊を尽くして王陛下や王子、王女殿下をお守りし、滅私奉公することをここに誓います！」

勇ましく、凜と吼えるようにして胸の内を語る青年に、幾人かの先任騎士たちが感心したようにうなずいた。

今日日、この青年のような忠誠心にあふれる者自体が非常に珍しいのだ。ほとんどが名誉や権力を欲する者共ばかりで、そういった魍魎がオステイア王国に跋扈している。心ある者たちは、青年が初志を忘れず忠国の士であり続けることを切に願った。

「よろしい。ならば【騎士】シュツラーハよ、御前を王族の守護騎士に任命する。我が娘アリカ・アナルキア・エンテオフュシアに命途切れるその時まで仕えよ」

「ハッ！ 一命を賭してお仕えいたします！」

名を挙げられた王族の名に、文武百官の間に驚愕が走った。

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア。並み居る王族の中で最も次期王の座に近いとされる、第1王位継承権を持つオステイアの王女。

これまで身の回りにはメイドや召使以外を置かず、決して特定の護衛を着けられなかった王女に、まさかこのような若造が護衛を任じられるとは！

そんな有象無象の驚きをよそに、玉座の傍らにある王族の座から幼い少女が膝をつく青年に歩み寄った。

「 わらわがアリカ・アナルキア・エンテオフュシアである。汝が、我が騎士たらんとする者か？」

その間に、アリカ王女の父であり王である国王は、不快そうに眉をしかめた。

事前に打ち合わされた台詞に、そのような問はないはずだったのだ。アリカはこのような公の場で完全な独断で、己につけられることになる若輩の騎士を試そうとしているのだ。

もしも意に沿わぬ答えを出したのなら、決して己の護衛とは認めめと。

アリカはそう言っている。

そして、長年王家に仕え続ける者たちのみが、その意図を察することができた。なぜならアリカが投げかけた問など、儀式の中には一切含まれていないからだ。

哀れ青年。王女の気紛れな一言で恥を晒し、これからの一生を【認められなかった者】という烙印を押されて生きていくことになるのか。

そんな哀れみの目で見られていることなど意に介さず、青年は堂々と、しかし周囲の度肝を抜く発言をした。

「ハッ。私が王陛下にアリカ王女の守護を任じられた騎士でありま。殿下におかれましては王陛下の任命を受けた私を傍に置いてくださいますよう、お願い申し上げます」

お前が自分を試す資格などない。王の命令なのだから大人しく認めろ。

つまり、青年は遠まわしにそう言い放ったのだ。
不敬ぎりぎりの台詞回しに、儀式に参列していた者たちの大半が絶句した。

斬られても文句は言えぬぞ！

そんな驚きの眼差しの中、アリカは一つうなずき、その小さな体には不釣り合いな長剣を抜き放った。
慄然とする宮殿内。

だがアリカは周囲の不吉な予感とは正反対に、なんと小さく微笑んだ。滅多なことでは表情一つ崩さないあの王女が、だ。

「ならば、認めよう。わらわを守護する騎士シュツラーハよ。わらわに仕え、わらわのために生きよ」

「ハッ。これより我が剣は貴女と共に在り続け、我が誠心が曇ることのなきことを天地神明、我が父祖、我が魂に誓いましょう」

10歳近く年上の青年の肩に、幼い少女は剣の腹を乗せて、恭しく両手を捧げた青年の手に、その剣を預けた。

「 此処に新たな騎士が誕生した！ 祝えよ我が朋たちよ！」

王の宣言を受けて、我に返った文武百官が新たな主従に万雷の拍手を浴びせ　そうして儀式は終わったのだった。

【 :???: 】

白い鎧を鬱陶しそうに外し、投げ捨てるようなぞんざいさで床に置く。兜にいたっては完全に投げ捨てた。

正直、兜や鎧の類いは邪魔でしかないのだ。

そうして現れたのは、未だあどけない容貌をした青年の顔だった。

長い金髪をオールバックに撫で付けた白皙の貌。紅顔の美少年と称するには険しすぎる双眸は不機嫌そのものに歪められており、鍛え上げられた肉体を惜しげもなく晒す。

一筋一筋を丹念に、入念に織り込むようにして編まれた筋肉の束が、両腕を、両脚を、胴体と首筋をくまなく覆っており、それはさながら筋肉の鎧である。

パンパンに膨張した醜い鎧ではない、実戦を重視したスレンダーな鎧だ。

男ならば誰もが憧れるだろう、ギリシヤの男神像のような肉体美を現実のものとしているその青年は、黒い装束を纏い、白銀の肩当てを右肩に装着する。露出した右豪腕の指先を意外に器用に動かして、黒い革ズボンを穿いた後にベルトを締めて、首から下の全身を覆い隠すような真っ白いマントを身につけた。

ちょうど青年が普段の格好に戻り終えたのとほぼ同時に、ひとりの少女が青年の部屋にやって来た。

「これで、晴れてお主はわらわの側役となったな、キセキ」

その少女は美しかった。

年の頃は10歳ほどだろう。「美しい」と形容するには幼すぎる面貌だが、しかしその可憐な貌にある碧い瞳は確かに「美し」かった。強く、靱い光を宿した目の光。その目に見つめられれば、免疫のない者ならばたちどころに恋に落ちるだろう、魅惑の輝き。

腰まで届く黄金の髪と、愛嬌のある白皙の貌。将来は一級の美女になるであろうことが窺える佇まいは、しかし青年には少しも通用していないのか、青年はその少女に険悪な声を発した。

「おい」

「なんだ？」

青年、ミリオルド・A・シュツラーハは、己が仕える主であるはずの少女、アリカ王女を睨みつけた。

それだけで不敬罪で牢獄に叩き込まれても文句は言えない。

だが、とうの阿里カは少しも気にした様子はなく、むしろミリオルドのその態度を当然のように受け止めていた。

「さっきのあれ。ありやなんだ？ いきなり取り決めになかったことを口走りやがって。俺に恥をかかせるつもりだったのかよ？」

ミリオルドが言っているのは、さきほどの騎士叙勲の遣り取りだ。本来なら、ああいった面倒な儀式など手っ取り早く終わらせるため、伝統とやらに則って無駄な時間を浪費せずに終わらせるはずだった

のである。

にもかかわらず、アリカが勝手に妙なことを言い出したので、ミリオールドは内心大いに慌てていた。そのせいで、普段の「優等生の若輩騎士」という仮面をかぶるのを忘れ、不敬ぎりぎりの発言をしてしまったのだ。

あの言い様はアリカの騎士の座から外されても文句は言えない、本当にぎりぎりだった。

「ふん。仕来たりどおりに進む儀式が退屈だったからな、あれぐらいの稚気は許せ。お主は小娘の悪戯すら流せぬ器量か？」

「……チツ、ああ言えばこう言う奴だ」

不機嫌そうに舌打ちする10歳年上の青年に、アリカは小さく微笑んだ。

3年前、アリカが何者かに拉致されたのを切っ掛けに、アリカは王国貴族シュツラー八家の嫡男である彼と出会った。

ウエスベルタティア王国での息の詰まる王宮暮らしに心底倦んでいたアリカは、彼の奔放な性格と、アリカの素性を知っても態度を変えなかった彼に心を開くようになっていたのだ。

シュツラー八と言えば、無名だが王族に仕える騎士を代々輩出してきた一門である。その堅苦しさだけが取り柄の平凡極まりない連中の中で、どうしてミリオールドのような男が生まれたのか。アリカからしてみれば不思議でならない。

「キセキ」

「んあ？」

「……これで、隠れて会う必要はなくなったのだな？　好きな時に会えるのだろうか？」

「おう。護衛だしな。嫌でも一緒にいないといけねえ。まっ、お上の連中に対する不満のガス抜きには付き合っただけから、安心しろ」
「……ふふ」

アリカはまだ10歳の幼い女の子である。

息の詰まるような息苦しい生活の中で、唯一年頃の少女のように振舞えるミリオルドの存在を、完全に信頼し、また頼りきつてもいた。事実、ミリオルドは一国の王女に頼られるほど　通常なら十数人体制で行われる護衛を、王にたった一人で任されるほどの実力者であった。少なくとも、戦争中のヘラス帝国や連合からかなりの高待遇で勧誘が来るほどの。

これからは隠れて会う必要はない。

その事実によりアリカは年相応の柔らかい微笑を……公の場では決して見せない笑顔を浮かべた。

「もう、これからは【ミリオルド】と呼んでよいのだな？」

隠れて会っていた時、もしも名前を呼び合っているのを誰かに聞かれたためと、ミリオルドはアリカに偽名　【キセキ】という名を使っていた。

だが、それはもう不要だ。もう堂々と会うことが出来るのだから。

そう思っただけのアリカの問いに、しかしミリオルドは首を横に振った。

「いや、これからも今までどおりでいいだろ」

「なぜだ」

「なぜって、あれだ、俺あその【キセキ】って名前に思い入れがあ

るからだよ。ミリオルドとか言うカツテエ名前は嫌いだ。呼び方を
変えても無視するからな」

「つまり【キセキ】という名は、わらわしか呼んではならないとい
う意味か？」

「まあ、そうなるな。俺のその名を知ってるの、今んとこアリカだ
けだし」

「わらわだけ、か……」

ミリオルドの言葉に、愉快的気持ちになる。

自然とアリカの頬は緩んで、ミリオルドを見つめた。

ミリオルドは思う。

(……なんか、【ロリ】アリカ・ルートに入っちゃったような気が
するんだが……。……ええいっ！俺はロリコンじゃない！ロリ
コンじゃないんだあああああー！！)

なんとなく場の雰囲気にはたるような顔のアリカと、表面上はふて
ぶてしい表情を崩さず、しかし内心では盛大に吼え猛っていたミリ
オルド。

この時のアリカとミリオルドの思い出は、最も綺麗で、最も大切な
記憶となる。

騎士を持った王女は、大人の、汚い政争の世界に巻き込まれていくのだ。

本人たちの意思など無視して

第6話「オステイアの日常」(前書き)

書き溜めが、消えかけている……!!

なんとか第2部の間だけでもペースは落とさたくないが、
ぴ、ピンチです……!

第6話「オスティアの日常」

第6話

「オスティアの日常」

封筒を切った手が、緊張に僅かに揺れた。

書簡を持ってきた兵士の手前、アリカは平静を保っているように装っていたが、実際は顔色を保つのが精一杯だった。

ここ数日、オスティア周辺を斥候がうろついているとは聞いていたが、まさかいきなり書簡を送りつけてくるとは、流石に予想外であった。いったい、どういうつもりなのだろうか。

「ヘラス帝国軍はどうしている。もう領土に入ったのか？」

「いえ。それはまだ。領土線をギリギリのところまで、進軍を停止しています。ですが、部隊の展開は終えているようです」

国際法によって、オスティアを中心とした約二〇キロ四方はウエスペリタティアの領土と定められている。無断で侵入すれば国境侵犯になる。それを避けたということは、すぐに攻めかかるつもりはないらしい。

「そうか。わかった。警戒だけはくれぐれも怠らないようにしてくれ」

兵士を下がらせると、アリカは書簡に目を通した。

内容は簡潔である。

形式的な挨拶を省き、ごてごてと添えられた美辞修辭を読み飛ばせば、要するにウェスペリタティア王国王女、アリカとの会見を望む、と書かれているだけだった。会見の目的も不明である。

「会見……か。どういつつもりじやろうな。キセキ、どう思っ？」

アリカが問いかけると、ミリオルドは欠伸交じりに呑気な声を出した。

「あん？　なんか言っ？」

「じゃから、会見のことじゃ」

どうやらアリカが読み上げた書簡の内容さえ聞いていないらしくかった。

仕方なく、もう一度かいつまんで書簡の中身を説明する。

「この前、キセキも言っておったじやろう。帝国がオステイアを落とそうとするのは当たり前だと。帝国はグレートブリッジで大勝して勢いに乗っておる。わざわざ会見を望む理由は無いと思っのじやが」

「ハン。あれだ、この前のオステイア侵攻作戦で俺に痛い目遭わされたからじゃないか？　なんにしるどうでもいい。アリカに任せる」「今回は無関係ではいらぬよ。会見にはキセキも参加してもらいたいとある」

「はあ？」

一転して不機嫌そうな声を上げ、ミリオルドは寝そべっていた身体をガバツと長椅子から起こした。

「どこの馬鹿だ、んなこと言う奴は！」

「署名にはムース・ヘルス子爵とあるな」

「……知らねえぞ、そんな奴」

「わらわも聞いた事は無いな」

勇将揃いのヘラス帝国には、高名な将軍が山ほどいるが、ムース・ヘルスなる名前はついぞ耳にした事が無い。

「会見がしたいと言うのじゃから、誰が相手でも会わぬ訳にはいかぬな」

「俺も行くのかよ？」

「ご指名じゃ。無視するわけにはいかん。面倒な話になるかもしれぬが、暴れたりしては駄目じゃぞ？ キセキ」

「気が進まねえなあ。なんで12の餓鬼のアリカが外交なんて真似をせにやなんねえんだよ。ウエスペリタティアの政治家は無能揃いなのか？」

「……言うな」

ぼやくミリオルドに、アリカは頭痛がしたのか額を押さえた。

アリカは即、返答の草稿を書き始める。その手つきはとても12歳の子供のソレとは思えないほど滑らかだ。

会見の旨は了承するとして、問題はその場所である。

敵だらけの城内では子爵も警戒するだろうし、アリカとしても敵をみだりに王宮に上げるわけにもいかなかった。

結局、間を取って会見の場所には城下の宿を指定した。護衛の兵二百を連れてくること、直前に下見する事も認め、こちらも同数の護衛兵のみで会見に臨むという条件で打診すると、了解したという答えが返って来た。

会見の期日は、本日の午後。

すぐに会見の場所となる宿から宿泊客を追い出して、アリカは準備を進めた。

指定された時間には戒厳令を出したが、もとより城下にはヘラス帝国の侵攻の噂が広まって、大通りの人通りはぱたりと途絶えていた。

そんな中、ヘラス帝国の軍は肅々と行進してきた。

「来たようじゃな」

やってくる軍列を宿の一室　　2階から見下ろして、アリカはミリオルドを促した。

やれやれといったふうに、いかにも気乗りしない顔が窓の外を覗きこむ。

「うわ。なんだありゃあ。見たことねえ旗じゃねえかよ」

「……うむ、確かに。見た目は無駄に派手じゃが」

紺地の旗には、金糸で一角獣が描かれていた。様々な意匠が凝らされ、戦場で掲げればさぞかし見栄えがしそうなものだが、目にした覚えはまったくない。

「……ありゃあ、数合わせの部隊だな」

ミリオルドが言う。兵士1人1人の肉つき顔つき体つきを見て、間違いないと断言する。

アリカはミリオルドの目を信頼しているのか、なるほど、とうなずいた。

おそらく補給物資の輸送に回されて前線には出てこない部隊なのだろう。

「彼らが使者か。ずいぶんと侮られておるみたいじゃな。わらわたちは」

「舐められるのが目的かもな。会見をこちらから破綻させるゝとか……ムカつくな。こっから唾飛ばしてやるつか」

「会見の時は……まあ、素で対してやれ。猫かぶりしておらぬお主と対したら、さぞかし動揺するじゃろうからな」

「はん。一言も口利いてやんねえよ」

吐き捨てるようにミリオルドは言う。

ああ、やってらんねえ。ぼやいて窓から離れていく護衛を溜息とともに見送り、アリカは行軍して来る部隊に目を戻した。

ヘルスという名前はついぞ聞いた事は無いが、指揮官としての力量はおおよそ知れた。おそらく会見は碌なモノにはなるまい。予感というよりは確信めいたものを懐いていたところに、その報せは入って来た。

「王女殿下、ムース・ヘルス子爵閣下、ご到着いたしました」

なるほど、思っていた通りの人物だ。

「いやいや。噂通りお若く美しいですな。こたびは会見を快く受諾して頂き、ありがたく思っております」

にこにこと柔和な笑みを装いながら、暗に青二才と皮肉っているのか、ムース・ヘルスは？若い？を強調して言うと、それが紳士の礼儀と言わんばかりに握手を求めてきた。

「わらわもお会いできてうれしいですよ、子爵」

完全な鉄仮面で『嬉しい』と言い切ったアリカにミリオルドは男らしさを見たような気がした。

アリカはムースの手を握る。くによくやと柔らかかなその感触に、アリカはやはり、と思う。この男は似非軍人だ。日々鍛錬に明け暮れる軍人の手は、節くれ立つのが当たり前だった。おそらく剣をまともに握った事もないだろう。

もともと、そんなことは手を握るまでもなく予想がつく。体格はイイが、それはただ体が大きいというだけで、だらしなく緩みきったその肉体は、おおよそが無駄な贅肉だった。

当年40歳という顔は顎のあたりが締めなく膨らみ、髪は頭頂まで見事に禿げあがって、残された髪が何とか側頭部にしがみついているというていである。

「なんか燻製肉ハムが食いたくなってきたなあ」

ギョツとするような事を言ったのはミリオルドだ。一言も口を利かないと言っておきながら、ヘルスを見た途端にからかいたくなったらしい。素を出していいとは言ったが、自由過ぎである。

「おっさんもよ、腹減らねえか、腹」

「お、おっさん!？」

そんなふう呼び捨てられた事は無かつたのだから。驚きと怒りがない交ぜになつた顔でヘルスが目を見開く。

「いやさ、なんか急に腹減つてなあ。おっさんは腹減らない？」

自分の腹を見て、と付け加えそうなところに、アリカは無表情の裏側で笑いを堪えて、すつと割り込んでいった。

「申し訳ありません。この者はこの通り、礼儀を知らぬゆえ。腕だけは立つゆえ護衛として使っておりますが。悪気はないのです、どうかお気を悪くしないでいただきたい」

言つて、深々と頭を下げる。王女が子爵に非礼を詫びるなど、滅多にないことである。ヘルスの虚栄心もそれで満足したらしい。

「い、いや、私も見ての通りの年齢なれば、そう呼ばれても仕方ありませんな。勿論、気にしておりませんが。はは、なかなか変わったところがおありのようだ」

言いながら、ヘルスは椅子に腰を沈めた。

「ハッ。変なのはてめえの腹もだろ」

ぼそりと漏らしたミリオルドの一言に、一瞬、口角をひくひくと振るわたしたもの、すぐに思い出したように愛想笑いを浮かべた。

「ははは。面白いお方ですな」

声が見事なぐらいに乾いている。

「かさねがさね申し訳ない。ミリオルド、少し黙っていてくれぬか」
「へえ〜い」

ぞんざいに返して、ミリオルドはそっぽを向く。

からかうのにも飽きたのか、下品にも大あくびをする彼の隣にアリ力は腰をかけた。ヘルスを正面に見据えて、改めて口を開く。

「それで、会見を望むとの事でしたが、どのような用件です」

「いやいや、いきなり本題などよしましょう。しばし、ゆるりと歓談など……」

「勘違いなさらないでいただきたい。あくまで我々は敵同士。会見の席を設けたのは、友誼を結ぶためではありません。貴殿もヘラス帝国の名でこの会見を申し出た以上、公式な使者としてこの席にいるのでしよう。貴殿の発言は貴国の皇帝陛下の言葉、少なくともわらわはそう認知していますが、それともこれは貴殿の独断で望んだことですか？」

「い、いや、決してそのような事は。この会見は皇帝陛下の勅命を受けて……」

「ならば、いらざる歓談などは無用にしましょう。では、ご用件をうかがいます」

「は、はあ。それでは……」

半ばしどろもどろになりながら、ヘルスは背後を振り返ってお付きの従士を呼んだ。

生意気な若造め。悔しげな横顔が、子爵の苛立ちを雄弁に物語っていた。

これが幼いアリカの政治手段だった。

アリカはまだ政治家として、為政者として未熟もしいところ。ゆえにこそ本職の政治屋には一個も二個も格が劣る。

そこで、その格を補うためにミリオルドがいるのだ。

ミリオルドが悪態をつき、公式の場にはあつてはならない態度を取る。そうして相手のペースを乱してアリカがミリオルドを窘め、場の主導権を握る。

結果として、ミリオルドは対外的には【うつけ者】、アリカは【毅然とした王女】という評価を得るに至っていた。

アリカとしては、ミリオルドに悪名を背負わせることに罪悪感を覚えたが、

「ばーか。餓鬼が大人の心配なんかすんな。いいんだよ、これで。俺に頼らなくてもいいように、アリカが政治屋として早く成長すればいいだけの話だ」

そう言つて、ミリオルドは笑つたのだ。

アリカは今、政治の場における駆け引きを必死になつて身につけていつている。

ミリオルドにこれ以上の悪名を背負わせないために。

現在、ミリオルドを外交の場に連れてくるべきではないという声があったるところから上がってきている。

そして、場合によっては護衛の任を解任するべきだという声も。

アリカは強硬な姿勢でそれを跳ね退けていた。ミリオルドを手放したくない、という思いと、ミリオルドという『悪役』をアリカが失うと、それだけで政治の場ではいいように踊らされてしまふとわかっていたからだ。

子爵は、しかし再びアリカに向き直った時には元の愛想笑いに戻っていた。

「これをご覧いただきたい」

そう言つて、一枚の書面をテーブルの上に滑らせる。

「これは皇帝陛下よりミリオルド殿に宛てて書かれた親書でございます」

「ミリオルドに？」

「皇帝陛下におかれましては、先頃のオステイア塔都市での戦いでミリオルド殿の働きぶりに、いたく感心をなされまして、是非とも我が臣下の列に加えたいと、こうおっしゃられております」

アリカは咄嗟にミリオルドを見たが、そのミリオルドはまったく興味が無いらしく、豪快に耳の穴に指を突っ込んで、耳掃除に勤んでいる有様だった。

「……それはつまり、ミリオルドにヘラス帝国に下れ、とおっしゃっているのですか？」

アリカが訊き返すと、ヘルスは芝居がかった動きで大きく頷いた。

「直臣に加えたいと仰っておるのです。これはなかなかない名誉な事ですぞ」

阿呆か。

ミリオルドが小さく呟いた。

ミリオルドを引き抜くための会見だったのか。それにしても、せめてアリカがいなくてここでミリオルドのみに接触すればいいものを、どうして公の場で、しかも主であるアリカの目の前でそういう事を言うのだろう。

どういう考えだ？

「しかし、ミリオルドは我がウエスペリタティア王国に忠誠を誓う騎士です。主君に背いて敵に走るは信義にもとる行為。騎士として、ミリオルドがそのようなことをするはずはない」

いや、わりとどうでもいいんだけど。

ミリオルドが再び呟くのに、アリカは黙っているとガンを飛ばす。

「はて、信義とおっしゃいますか」

ふたたび芝居がかった仕草だった。

顎に手を添え、天井を見上げながら思い出す素振り、ヘルスは惚けたような声を出した。

「その信義、先に破ったのはどちらですかなあ。なあ、ミリオルド殿？」

「……………どういことですか？」

「皇帝陛下もお嘆きになっておられましたぞ。先のオスティアでの

戦い、戦っておられたのはほとんどミリオルド殿のみ。結果として我ら帝国は撃退されてしまいました。ミリオルド殿も相当に疲弊なさっておいででした。あのような不当な扱いを受けているとはなんという事だ、とそれはもうご自身の事のように……」

「ミリオルドとてご厚意には感謝するでしょう。しかし、それはそれ、これはこれ。筋が違うでしょう」

「は？」

確かに、先の帝国の第一次オステイア侵攻では、帝国はミリオルドに撃退されている。

援軍を寄こさなかった連合に、ミリオルドもアリカも怒っている。だが

「例えあれが不適任で信義を欠く命令だったとしても、だからミリオルドが信義を破っていいという理由にはなりません。裏切られたから裏切ってもいいと認めるのですか？ わらわには自己弁護の言い訳にしか聞こえないのですが、貴殿はどう思います？」

「い、いや、もちろん、おっしゃることは正しいと思い」

「そうであるう。わかっていただけただけで幸いだ。では、これで」

有無を言わせず席を立とうとすると、ヘルスは慌てて腰を浮かして遮った。

ミリオルドは完全に沈黙している。何を考えているのか、アリカを黙って見守っていた。

「お、お待ち下され。そうおっしゃらず、今しばらくお話を！」

「話すことはもうないと思うが？」

丁寧語からもとの王族の口調に戻り、アリカは断定する。

「そ、そう結論を急がずに、もう少しお付き合いを」

「急いだつもりはない。順当な帰結じゃ」

「そうおっしゃらずに、今しばらく――」

懇願するその顔には、苛立ちがはっきりと見て取れた。まだ年若い小国の王女など、手玉に取るのは簡単と高をくくっていたのだろう。それが逆に主導権を奪われて、おろおろと狼狽するしかないのだから、悔しくてたまらないのだ。

しきりにアリカとミリオルドを引き留めながら、その脳中ではどういふふうに斬り込もうかと必死で考えているに違いない。

「この上、何を話すというのだ。何も無いじゃろっ」

アリカがにべもなく切り捨てる。

すると、不意にヘルスの目に輝きが戻った。

「いやいや、私ごとでは不満かもしれませんが、今しばらくお付き合いください。一つお聞きしたい事があるのですよ」

急に猫なで声になったかと思うと、急に自分を卑下しはじめる。

「先程からのご見識といい、堅い信念といい、私めも感服しておるのですが……しかし、不思議ですな。貴女ほどの逸材がこのような辺境で不遇の立場に甘んじられておるとは」

「不遇と言うが、わらわはそのように思ったことはない。国内では最高位の王族としての身分と、さらにウェスペリティア王国の外交を任される立場を戴いている。これを不遇と言うのは、贅沢に過ぎるというもの」

「いやはや、欲の無いお方ですなあ」

ニヤニヤと笑う目が、不意に上の立場から見下すようなそれに代わる。

「しかし本当ですか？ 失礼ながらお二方のことは調べさせていただきましたよ。報われているとは言い難いのでは？ いや、虐げられていると言っても過言ではないでしょう」

お可哀相にと同情したような表情を浮かべて、ヘルスは僅かに顔をうつむける。小さく首を振ったりして、大根役者が名優気取りだった。

なるほど、それが切り札か。

アリカとミリオルドの2人と、メセンブリーナ連合との確執は、一部では有名である。

【黄昏の姫御子】という、オスティアの象徴ともいうべき【道具】の解放を願い、行動する彼らは元老院にとって目障りなのだ。だからこそ、先の戦争では援軍を寄こしてはくれず、ミリオルドかアリカ、そのどちらかが死ぬ事を謀っていた。これを突けば、容易く引き抜ける。憐れむ素振りを見せてやれば、すぐに転ぶ。浅はかにもそう考えたのだろう。

少し調子に乗り過ぎじゃな。

内心では冷笑を浮かべながらも、アリカが黙っていると、とうとう主導権を握ったと勘違いしたヘルスがさらに氣勢を上げて続けた。

「特にミリオルド殿。貴方などはMMM元老院には格別の怨みがあるのではないのですか？」

と、ミリオルドに水を向けるのだから、もはや救いようがない。

「話を聞いた時には、温厚なこの私も憤りを隠せませんでしたよ。元老院のやりようは酷いものですな。私でしたら、とてもとても耐えられないと」

「てめえ、うるせえよ」

耳掃除に勤んでいた指をおもむろに引き抜くと、ミリオルドは身乗り出すようにしていたヘルスにフツと息を吹きかけた。もちろん、耳垢まじりの黄色い息を。

「う、うわっ！ な、何をする！」

ヘルスが慌ててぱたぱたと手を振る。吹きかけたミリオルドの方は、くく、と悪びれた様子もなく、それどころか腹を抱えて爆笑していた。

ヘルスは憤然となって立ち上がった。ミリオルドを指差すや、顔を紅潮させて怒鳴る。

「ぶ、無礼ではないか！ いったい何のつもりで」

え、とヘルスの顔が次の瞬間、驚愕に青ざめていた。音もなく動いたミリオルドが、いつの間にか子爵の眼前に立ちはだかっていたのだ。

「おっさん、もう帰りな」

吐き捨てるように言って、ミリオルドは無造作にヘルスの胸倉を掴み上げた。

その格好のまま、ずるずると窓の方へ引きずって行く。

「あ、ちよ、ちよつと待て。待たないか。いや、待ってくれ。

お、王女殿下っ!」

助けを求める声が上がっていた。

「子爵」

アリカは椅子に座ったまま、顔を振りむけずに冷ややかな声で応じた。

「あまり人の過去をほじくるのは感心せぬな。まして軽々しく口にするのも」

「そんな、で、殿下　　うわああああっ!?!」

絶叫とともに悲鳴ともつかない声を尾に引いて、放り出された子爵の体が窓の外に沈んで見えなくなった。

「はっ。ざまあみろっつの」

ぱんぱんと手を払うミリオルドは、清々した顔をしていた。

「何をしておる？　お主らの主人は帰ったようじゃが？」

突然のことに立ち尽くしていた子爵のお付きに、アリカは冷たく言った。そうして慌てて出ていく彼らを見送ると、おもむろに窓際の

ミリオルドに近づいた。

「ずいぶんと派手にやったな」

「なに言っただか。止めなかつたくせによ」

「そうだったかのお？」

軽く笑って、アリカは惚けたように肩を竦める。

窓の外では、雑言を吐き散らすヘルスの金切り声がこだましていた。

「 思い出したんだけどよ、あいつ、ヘラス帝国の外交官だ」

「あれが？」

ミリオルドの言葉に、アリカは驚愕した。

あんな無能が外交官？ …… 帝国も苦勞しているようだ。

「今回ここに派遣されてきたのは多分、あれだな。ヘルスに失敗をさせて、外交官の座から引きずり下ろすためだろ。無能を排して帝国は満足。加えてヘルスの野郎の報告を受けた皇帝殿は怒ったふりをして、『ウエスペリティア王国の王都を陥とすぞ！』と、攻める口実を造る。一粒で二度美味しいってな。第二次オステティア侵攻作戦の幕開けだ」

「 …… 姑息じゃが、したたかじゃな、ヘラス帝国の皇帝は」

アリカが呻くように言った。

ミリオルドは脳筋と思われがちだが、その頭脳をきちんと使えば現在の未熟なアリカを凌駕する知力を持っている。やる気を出せば、だが。

そのことを知っているアリカは、ミリオルドの言い分に納得して、己の未熟を思い知った。

この場でこそアリカはヘルスを手玉に取った。が、それすらも踊らされていたに過ぎないのだ。

「いいや、皇帝じゃないな、この策を考えたのは」

「……なんじゃと？ では誰が」

「おそらく、ヘラス帝国皇帝の寵愛を受ける第一皇女　オリガ・シュフェレア・ヘラスだろうな。噂だと、相当な切れ者らしいし、外交長官はソイツだ」

「オリガ……」

それならば知っている。

第三皇女に外交のなんたるかを叩きこんでいる、ヘラス帝国の皇族随一の才媛。様々な人材の収集をおこない、ヘラス帝国宰相も兼任する凄腕の政治屋。国力で連合に劣る帝国を、戦争に耐えうる状況に保たせているある意味で帝国の生命線。

自然、険しくなるアリカの顔つきに、ミリオルドは苦笑した。

「ライバル視してんのか？」

「……いや、今のわらわでは到底太刀打ちできぬじやろう。後一年か二年で対等になり、すぐに追い抜かねば」

「それでこそ我が主。　ま、気にすんなアリカ。俺がソイツより凄いと発言わんが、お前がオリガを超えるその時まで、つまらん策に引つかからせるつもりはない」

「頼もしいな」

クツ、とアリカはミリオルドに笑いかけた。

「さて。さっさと帰ってアスナと遊ぼうぜ。あんまり長くアスナお姉ちゃんを待たせると拗ねられるぞ、妹殿？」

「うぐ、……わかった、帰る。……今日は何をして遊ぶのじゃ？」
「んー……そうだな、カードゲームなりボードゲームなり、アスナと相談しながら決めようぜ」
「そうじゃな」

すっぱり公務のことから思考を切り替えて、アリカとミリオルドは宿を後にし、王宮に帰って行ったのだった。

第6話「オステイアの日常」(後書き)

次回か、それとも次々回に、とうとう青い人が出てくる、かも？

第7話「第3次オステリア防衛戦（序）【仮契約】」（前書き）

私兵候補募集の期限を定めるべきだと、感想で指摘されました。

まったくもってそのとおり。

忘れていた作者、実に馬鹿ですね。……もうしわけない。

さて、私兵募集は、明日の午後6時までにしたと思いますので、どうかそのつもりでお願いしたい。

では、第2部第7話、どうぞ。

第7話「第3次オステイア防衛戦（序）【仮契約】」

第7話

「第3次オステイア防衛戦（序）【仮契約】」

「…………アリカ。今なんつった？」

王族の守護騎士の叙勲を受けて早5年。25歳の立派な大人となったミリオルドは、公私にわたって補佐し続けた15歳のアリカ王女に向き直り、静かにもう一度聞き返した。

すると、誰もが目を瞠る美少女へと成長したアリカは、詰問の色濃いミリオルドの間に顔色一つ変えずに淡々と繰り返す。

「聞こえなかったか？　ヘラス帝国が再び大軍勢を率いて此処オステイアに向かっている。ついては、これを迎撃するために、わらわも出陣することとなった」
「……………」

なぜだ。

ミリオルドはソファアの背凭れにもたれかかりながら、思わず天を仰いで声なき声で盛大に嘆いた。

『原作』じゃあアリカが戦場に出ることなんてなかったのに、

どうして出陣だなんてアホなことを言い出す……。

「……アリカ。前から思ってたんだけどよ、てめえ頭いいけど実はバカだろ？ 一国の王女が戦場に出るとか……死に行くようなもんだって！」

『バカだろ？』のバカの部分にアクセントを利かせて巻き舌気味に発音する。

それにアリカは面白くなさそうにミリオルドを一瞥して、

「ふん。元老院の愚か者どもに付き合っておったら頭が痛くなった。ストレス解消じゃ。無論お主にも付き合ってもらうぞ。お主が付いておれば、わらわがお主より先に死ぬことはあるまい？」

そんなことを言った。

「護衛を盾か何かと勘違いしてんのかよ、てめえは……」

ストレス解消ってなんだよ。

ストレスを解消したいがためだけに初陣をあっさり決めやがったのかよ。

なにこの娘。誰のせいでこんな性格になっちゃったの？

俺のせいですね、わかります。

ミリオルドが深々と嘆息し、まったく乗り気でないのを見咎めて、アリカはおだてるように、挑発するように頬を緩めた。

「なんじゃ、まさか『オスティアの金獅子』ともあるう者が、主君を守り通す自信がないと？ 情けない、それでも騎士か」

「あのな……俺あてめえの友達やるためだけに護衛やってるようなもんだぞ？ 騎士なんて称号にやなんの魅力も執着も感じんね」

呆れたように言いながら、ミリオルドはやっぱりやる気を出さない。それに業を煮やしたのか、アリカは忌々しげに吐き捨てた。

「……この防衛戦、『アスナ』が狩り出される」

「あ……？」

ピシリ、とミリオルドの表情が凍り、部屋の雰囲気が悪化するものとなる。

「なんだそりゃ……アスナはもう戦争には狩り出さないって、てめえの親父はそう約束したよな？！」

「所詮は口約束じゃ。それに、ウェスペリタティア王国は歴史と伝統だけが売りの小国じゃぞ？ いざとなったら反故されるに決まっておろう。国が頼ってしまうほど、『黄昏の姫御子』の力は戦争に有用なのだ」

「ガキを戦争に狩り出すって……知っちゃあいたがマジでやるつもりかよ！」

「だから！ アスナの負担を減らすためにわらわも出陣するのだ！

お主はどうだ？ 前線にも行かずに不満だけを漏らすのか？ 情けない、それでもお主は男か！！」

「ッ」

アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。

ウェスペリタティア王国の王族の1人で、『黄昏の姫御子』と呼ばれる幼い少女だ。

そして、『完全魔法無効化能力』という、魔法を使う者たちにとっ

て天敵とも言える異能を持っているがゆえに、長く幼い姿のまま戦争で使われ続けてきた？ 道具？ でもある。

ミリオルドとアリカは、そんなアスナに少なからず情を抱いており、なんとかしてその役目から解放しようと動いていたのだ。

ミリオルドはアスナを娘のように思っており、それを見捨てることなんて絶対に出来ない。

一喝されたミリオルドは息を吞んで、ガシガシと頭を掻いた。

「……チツ。わあつたよ。もともと拒否権なんかねえし、アスナにかかる負担を少しでも減らせるなら人殺しでもなんでもやってやらあ。……てめえの親父、いつかぶん殴る」

「うむ。わらわも殴ろう」

小さく笑い合い、ミリオルドは真顔に戻って端的に問いかけた。

「で？ 敵側の軍勢はどれぐらいかは把握してんのかよ」

「うむ。魔法戦艦が3百隻、鬼神兵が約20体、帝国兵が6万じゃ」

「……おいおい、普通に死ねる数じゃねえかよ。前々回と前回と比べモノになんねえじゃねえかよ。あれか、俺に万夫不倒の英雄みたいな活躍しろって言ってんのか？」

ヘラス帝国の大軍勢に、ミリオルドが頭を抱えた。

ウエスペリタティア側の兵力はその10分の1。加えて鬼神兵だなんて豪華な物は一体も無く、戦艦も王族が逃げるための避難用小型戦艦が5隻のみ。

ミリオルドはオスティア側が保有する戦力の中で最大の英雄として

持て離されている。

が、死ぬ気で頑張っても敵大軍勢の足を止めることは出来ない。そして、氣と魔力を全て注ぎ込んで奮迅しても、1万人と鬼神兵10体辺りを虐殺した辺りで力尽きるだろう。

ミリオルドの力は充分すぎるほどの化物の域に到達しているが、もしもヘラス帝国側がミリオルドを無視するようなことがあれば、それだけでウエスペリタティア王国は敗北する。ミリオルドが敵軍勢を潰走させるまで持ち堪える戦力が王国にないから当然だ。

「メセンブリーナ連合からの援軍は？」

「……『紅き翼』を派遣すると言われてきておる。ふざけおつて、たった3人しか送つてこぬとは、オスティアを守る気があるのか連合は……！」

忌々しげに吐き捨てるアリカに、ミリオルドは目を見開いた。

「おいおいマジかよ。もうそんなところまで進んでんだな」

「なにがじゃ？」

原作が。

「……いや、なんでもない。とにかく俺らは俺らだけでやれるように想定しておこうぜ。俺が賢く立ち回つても、せいぜい1万と鬼神兵10体ぐらいが限界だ。アリカは？」

「わらわは4千。鬼神兵は5体ほどじゃろうな。……にしても、たった1人でそこまでイケるとは、相変わらずの出鱈目じゃな、キセキは」

「鬼神兵を単独で倒せる時点ですぐめえも非常識だけどな」

嘯きながら、ミリオルドとアリカは頭を悩ませる。

足りない、どう考えても戦力が足りない。これでは何も守れない。

やがて、しばしの沈黙の後に、ミリオルドが頭を掻きながら提案した。

「あー……、言いにくいんだが……俺の戦力を上げる方法があるんだけど……」

「なに？ そんな都合の良いモノがあるのか？ わらわに出来ることならなんでもするが」

「仮契約」

言いにくそうに、しかしハッキリと告げる。

それにアリカの目が点になった。

「は？」

「当然でめえが主でな。そしたら俺をアリカの魔力で強化できるし、王家の魔力っていう魔法使い殺しのチートが俺にも扱える。アーティファクトっていう便利アイテムも手に入るし、デメリットは1つもないぞ」

「ちょ、ちよつと待て！」

能面の無表情が崩れ、泡を食って噛み付いてくるアリカに、ミリオルドはジト目を向けた。

「あん？　なんでそんなに慌てんだよ……もしかしてあれか、契約方法を気にしてんのか？」

「あ、当たり前じゃ！　王女の口付けは安くないのじゃぞ？！」

「あのなあ……準備があれば血を飲めばいいだけだろ？　別に接吻

に限定する必要は」

「せ、接吻!？」

「……聞いちゃいねえし……。……おい、誰か!！」

嘆息し、部屋の外で待機している魔法使いに声をかけて入室を促す。するとすぐに「はい」という応答と共に部屋に冴えない風体の魔法使いの男が入ってきた。

「これから俺と王女殿下とで仮契約をする。魔方陣の準備をしろ」

「か、仮契約ですか!？」

「早くしろ!」

「はっ、はい!」

なぜだか顔を赤くしてアリカを横目に見た男に一喝し、迅速な行動を指示する。

「殿下。申し訳ありませんが、貴女に拒否権はありません。戦場に
出ようと言つのです、護衛の戦力の増大を望むのは当然の義務でし
ょう」

「うっ……うむ。わかった」

人目があるため猫を被ったミリオルドに、アリカは面白くなさそうに無表情になりながらうなずいた。

わらわだけ慌てて、バカみたいではないか。

「で、血を交換する儀式の準備はどれぐらいかかる?」

「えっ? キスで仮契約しないので?」

「どれぐらい時間がかかるかと聞いているんだが」

ピシリ、とこめかみに青筋を浮かべ怒気を込めて睨みつけると、魔法陣を描いている男は顔を青くしながら答えた。

「い、1時間です!」

「……おいおい、1時間も準備に時間がかかるのかよ」

ヘラス帝国が攻め寄せてきているのに、そんなに悠長に構えてられない。

そうか。オコジョ妖精がいないとそんなに時間がかかるものなのか。

「じゃあないな。……殿下、現状では接吻による仮契約しか手段がありません。お覚悟を」

「う、」

息を呑むアリカに歩み寄りながら、ミリオルドは小声でささやきかけた。

「（人工呼吸のようなもんだ。躊躇うな）」

「そ、そうじゃな、所詮は儀式、緊張する道理などありはせぬ」

深呼吸しながら言うアリカにミリオルドは苦笑した。

アリカも女の子だしな。そりゃ、俺みたいな奴と仮契約だなんてホントは嫌だろ。

だというのに嫌な顔一つせず、すぐに割り切ることができたアリカに感心した。

「じゃ、行くぞ」

「うむ」

魔方陣の上に移動し、お見合いの形に向き合う。顔が真っ赤になっているアリカに、ミリオルドはからかいの意味で囁きかけた。

「（なあ、舌挿れていい？）」

「ッ　　！！??？」

「ひでぶっ?!」

王家の魔力を込められた平手打ちを喰らって吹っ飛ぶミリオルド。ただでさえ赤くしていた顔をさらに赤くしながら、アリカは怒鳴った。

「し、痴れ者がっ！　そ、そんなこと許すわけがなからう！」

「いたた……殿下の緊張をほぐすための冗談だったのに……」

頬に真っ赤な平手の痕を残しながら、ミリオルドは魔法陣の中に戻った。

「（じよ、冗談だから気にすんなって）」

「（それでもっ、し、舌をいれるなどと、そんな破廉恥なことは言うな!!）」

「（わあっ たつて。……でも、緊張は少しは解けたろ？）」

気まずそうに目を逸らしながら、アリカはうなずいた。

「よし、じゃあ　　」

「あ……」

身長差のせいでミリオルドを見上げる格好になっているアリカの顎

を掴み、そつとその唇に自身の唇を重ねた。

「ん」

(柔らかっ!?!? アリカの唇やわらけえっ!?!?)

「
バクティオー
仮契約!?!」

第7話「第3次オスティア防衛戦（序）【仮契約】」（後書き）

【今話で登場した仮契約カード】

名前：ミリオルド・A・シュツラーハ

主：アリカ・アナルキア・エンテオフユシア

称号：輝きを栄えるさせる者

徳性：正義

方位：北

色調：金

星辰性：太陽

アーティファクト：「輝ける光輝の装式」

【「輝ける光輝の装式」の能力】

・「光輝の鎧」……魔法攻撃に優れた防御力を発揮する黄金色の全身騎士鎧ルスキン。氣や物理には通常の防御力しか発揮しないが、魔法に関するなら広域殲滅魔法さえほぼ完全に防ぎ切ることができる。全身の鎧の継ぎ目から霧を放出し、魔的な索敵を遮断、接近戦闘における敵手の視覚情報を妨害することができる。

・「光輝の盾」……物理攻撃に優れた防御力を発揮する黄金色の片手盾。魔法には通常の盾と同様の防御力しか発揮しないが、氣を使った技能や物理攻撃に関するなら城壁を一撃で破碎する威力の攻撃をも完全に防ぎ切ることができる。

・「光輝の剣」……己と主の魔力を刀身のない剣に籠め、刀身を実体化させる黄金の聖剣。攻撃力は籠められる魔力量に比例する。刀

身は籠められた魔力の総量によって肥大化し、ミリオルドの最大出力の魔力を装填された場合は20mほどの巨大な霊体剣となる。

第2部のカギとなる、切り札の登場です。

これがあって初めて……

第8話「第3次オステイア防衛戦(中)【観察・邂逅】」

第8話

「第3次オステイア防衛戦(中)【邂逅】」

【 :????: 】

「全精霊砲消失！ 広域魔力減衰現象を確認！ これは……ま、間違いありません、ウエスペリタティア王国の『黄昏の姫御子』です！！」

「ふん……」

戦艦の艦長席から戦況を見遣りながら、ヘラス帝国のオステイア侵攻軍総指揮官 黒衣を纏った青髪の男は退屈そうに鼻を鳴らした。

オペレーターが喚くように報告してくるのを関心薄げに聞き流しながら、男は自軍側の鬼神兵が数体行動不能に陥り、かつ帝国軍の魔法使いたちが空中から地面に落下し、内臓破裂して死亡するのを見つけ、呆れたように目を眇める。

「『黄昏』ね……不吉な渾名をつけているとは思っていたが、なるほど。確かに魔法使い連中にとっては『黄昏』だ」

魔法の使えぬ魔法使いなど、肉壁としてしか使えぬ劣等ではないか。

「一番、二番隊を下がらせる。魔法使いは邪魔だ。三、四、五番隊の戦士と鬼神兵を前線に押し上げ、数で敵を殲滅しろ。魔法艦隊は精霊砲充填に移り、後方に下がらせた魔法使い連中に広域殲滅魔法の詠唱に入らせる。私の合図と共に撃て。『黄昏の姫御子』とて永続的に異能を発動していればいずれは疲弊する。大規模魔法を連続し、オスティアの象徴を削り殺すぞ」

帝国軍はよく訓練され、またよく統率された軍であった。男の指示が発されるや迅速に、かつ的確に行動して戦場は男の意のままに構築されていく。

その様に別段満足するでもなく、男は冷めた目で戦場を眺めやっていた。

(アレが、『オスティアの金獅子』か……想定していた範囲を上回らん。所詮は劣等か)

男の視線の先には、黄金の全身鎧を身に付け、両手に黄金の剣と盾を構える騎士の姿。このオスティアを守護するウエスペリタティア王国最強を謳われている、一流の武人の名で知られる男だ。

金獅子は鬼神兵の絨毯爆撃にも等しい魔力砲を掻い潜って胴体のコアを破壊し、前線に押し上げられていた帝国の戦士たちを千切っては投げ千切っては投げの繰り返しで、個人が挙げた戦果とは思えない、瞠目に値する活躍をしていた。

だが

男はそれでも失望した色を瞳の中に滲ませて、冷酷に声を上げた。

「相手はたった一人だ。何を梃子搦っている？」

聞く者の心胆を握り潰すような、圧倒的な威厳と力を籠められた声だった。

静かなその詰問に、この戦艦の本来の艦長が声を震わせながら、しかし素早く応答した。即答せねば男の拳が飛んでくことを文字通り体に覚え込まされているがゆえの条件反射で、艦長は気をつけの姿勢を取ったままハキハキと声を上げる。

「は、ハツ！ 相手は一人なれども、かの高名な武人です。帝国の精鋭といえど梃子摺っても致しかたないかと」

「阿呆か貴様？ 敵に『高名』もクソもない。あるのは殺す者と殺される者の二択だ。」

こう教えたはずだな？ 個人で敵わぬならば数で当たれ。味方を殺されたくなければ己を捨てろと。一人が殺されたらその隙を突いて組み付いて、その一人が殺されるまでにさらにもう一人が組み付き、身動きを封じてから殺せ。それが出来ぬならば、役に立たぬ屍を用いて盾にしる。 達せ」

「は、ハツ！ 何をしている馬鹿者ども！ たった一人に梃子摺るとはそれでも帝国軍人か！ 数で押せ、己を捨てろ！ 青騎士殿の訓練を忘れたか ！！」

艦長が怒鳴り、男の命令が全軍に達せられる。

「くだらん……なぜこんな小国を落とすのに2度も失敗している？ 帝国も人材が足りていないようだな」

だからこそその私たちが。

傭兵として帝国に参加したにもかかわらず、いつの間にか軍部の総司令官の座に据えられてしまった我が身を嘆いて男は嘆息した。それもこれも、男の持つカリスマと、天才的な政治手腕を持っている

たせいだ。おかげで帝国の国力増強のために尽力する羽目になり、二度と関わりたくないと思っていた政治に手をつけてしまった。結果として帝国の国力は増大し、己の身分をさらに確固としたものにしてしまったではないか。いらぬしがらみに囚われたくはないのに。

(それもこれも、オリガのせいだ。……帰ったら躰けをするか)

「レムリア様！ 我が帝国軍の背後より戦域に高速で接近する敵影を発見！」

「数は？」

「数は……たったの3人です！ しかしこれは……全員が通常の4倍の速度で接近中……！」

「4倍？」

オペレーターの報告に眉をしかめ、ついで男は納得したように声を上げた。

「ああ、連合の切り札『紅き翼』か」

なるほど、ならば3人というこちらを舐めているとしか言えない数なのもうなずける。

連中が噂どおりの戦力を有するならば、オスティア王国軍と手を合わせれば、帝国軍6万など撃退は楽勝であろう。

男は落ち着き払ったまま艦内を見渡した。

誰一人として、帝国の脅威となる3人に『恐れ』を抱いていない。ただ指揮官たる男を黙って見つめ、全幅の信頼と共に次なる指示を待っていた。

男はその信頼の眼差しをどこか眩しそうに眼を細めながら、しかし口はいつもと変わらぬ鉄拳の如き重みを持って命令を放つ。

「 マリーダを出せ。3人の足止めをさせる」

『 マリーダ。敵はたったの3人だが、強敵だ。気を抜くな。そして必ず生きて帰って来い』

「了解、マスター」

長い栗色の長髪を首の付け根で結いながら、碧い眼を持つ少女は敬愛し親愛する主の命を受けて無感情に応答し、数瞬のあいだ目を閉じて瞑目した。

少女は美しかった。

抜き身の刃の如き伶俐な佇まいと、女性的でありながら鍛え上げられた肢体。

白皙の美貌は色のない名画のように感情が抜け落ちていたが、それはあらゆる事態にも冷静を持って分析できる冷徹さをも兼ね備えているという証左に他ならない。

身につけている物は、首から下を覆う黒いタイツ。豊満な胸と四肢

をくつきりと浮かび上がらせるそれは、伊達や酔狂で身につけてい
るのではなく、防刃防弾、加えて対魔力加工を施された立派な防具
である。

「
アテアット
来たれ」

少女は一枚の仮契約カードを取り出して、短く詠唱した。

ア－ティファクト、シユラハト・ヴァッフエ『全周覆う戦士の装具』。

少女の両小手、両脛に淡い緑光を放つ鋼の軽鎧が鎧われ、次いで胸
元に黒龍の紋章が彩られた緑光纏う胸甲が形成され 少女の鼻か
ら上にツノのある独眼の仮面が現れる。

そして。その両手には2本の魔力剣。青と緑。

緑の鎧と仮面に覆われた少女の背後に、16基の魔力念動砲が現れ
浮遊し始める。

「 マリーダ・クルス[＝]クシャトリヤ、出る！」

ふわりと少女 マリーダ・クルスの体が浮遊し、マリーダは16
の緑光の軌跡を引き連れて飛翔した。

体の成長を止められて『道具』として使用させられているかもしれないのだ。

「ッ？」

数百メートル先の塔の頂点に、3体の鬼神兵が近づき、そこに居るオレンジ髪の幼い少女が、ぼんやりとそれを見上げた。

咄嗟にナギがアンチヨコを取り出して『雷の暴風』の魔法詠唱に入り、それを解き放つ直前。

黄金の閃光が奔り、塔に手を伸ばしていた鬼神兵はいとも容易く伸ばしていた腕と胸を破碎されていた。

「なんだあつ!？」

「『オスティアの金獅子』 ウェスペリティア王国の英雄、王女殿下の守護騎士ですよ」

アルビレオの言葉に、ナギは好戦的な笑みを浮かべた。

なにせ鬼神兵3体を一蹴したのだ。その男がかなりの強者であることは見るまでもなく知ることができる。

と。

「光の精霊101柱、集い来たりて敵を射て! 『魔法の射手・収束・光の101矢』ッ!」

塔の真上に現れた1人の少女が、魔法剣を触媒にして魔法を発動させる。籠められた魔力は王家の魔力。魔法使いにとって天敵であるそれが魔法の矢と化して1本に圧縮・射出され、それだけで鬼神兵1体を貫通しその後方にある帝国軍勢を屠り削った。

「お、おいおい、魔法の射手で鬼神兵貫通って……」

「あ、あれは　王女殿下?!」
「なっ!?!」

ナギが呆れ、アルビレオが驚愕し、詠春が絶句して塔の真上の少女に目を向けた。

間違いない。あの人物はウエスペリタティア王国第1王位継承権保
持者、アリカ・アナルキア・エンテオフュシア。たなびく金色の長
髪を風にさらわれるままに、なおも高らかに黄金の従者に向けて詠
唱を始めた。

『　契約執行180秒間、アリカの従者「ミリオルド・A・シユ
ツラーハ」!!!』
『オオオオオオオオ　　ツツツ!!!』

主が魔力を補給し、従者であるミリオルドの纏う魔力が王家のそれ
に変質。

手にする光輝の剣に最大出力で魔力を注ぎ込み、光り輝く聖剣が2
0m以上の長さに伸びて鬼神兵や敵兵を一振りごとに一掃していく。

そのあまりの猛威に帝国軍は近寄ることすら出来ず、援軍に来たは
ずの『紅き翼』の面々ですら、金色の主従を呆然と見遣ることしか
できなかつた。

「へっ、眺めてるだけなんてつまらねえ、行くぜアル、詠春！」
「ふふ、いいでしょう。彼らだけに戦ってもらっては、わたしたちはいつたい何しに来たかわからないですしね」

「むっ！ 避ける二人とも！！」

「っ
ッ！」

詠春の叱咤にも似た声に、二人の魔法使いは咄嗟に身を捻る。
瞬間、一瞬前まで二人のいた位置を、2条の光が真上から降り注いだ。

突然の奇襲攻撃に、しかし2人は慌てずに対処。魔力障壁を張ってさらなる追撃の魔法の射手に似たビーム状の魔法攻撃を防ぐ。だが、アルビレオとナギを取り囲むように現れた

8基の魔動砲は次々とビームを放ち、たったの3撃を防いだけで2人の魔法障壁は破壊された。

「な、」

「なんですって　っ?!」

超一流の域にあるナギたちの魔法障壁がたったの3撃で破壊されたことに、2人は驚愕した。

さらにビームを放ってトドメを刺そうとするのを、詠春が愛刀「タ風」を振るって氣の刃を射出。2基の魔動砲を破壊して、放たれたビーム攻撃による絨毯爆撃に穴を開け　その隙をナギとアルビレオは突いてなんとか無傷で回避することに成功した。

「た、助かったぜ詠春」「助かりました、詠春」
「油断するからだ馬鹿者め。来るぞっ！」

上空から、落下するようにして向かってくる敵影。旋回しながら落ちてくるそれに、詠春が前衛として真つ先に斬りかかった。

「神鳴流奥義 雷つ光お剣ッ！！」

「マン・マン・テロテロ」

氣を雷に変質させそれを一気に放出する対軍用の技を繰り出す詠春。同時にナギが呪文詠唱に入り、さらに詠春を援護するようにアルビレオが重力魔法を無詠唱で繰り出す。

広範囲に効果を及ぼす詠春の技を回避するために大きく回避運動を取る緑色の鎧の女だったが、回避した先にアルビレオの重力魔法がかかけられ直撃。並みの者ならそれだけで圧殺されるはずが、独眼の仮面を付けている女は一切の痛痒を感じているようには見え、アルビレオは困ったように眉をしかめた。

全力ではないとは言え、あまり効果を発揮しなかった己の魔法と、馬鹿げた耐久力を持つ敵に呆れてしまったのだ。

だが、それでも動きを鈍らせる程度の効果は発揮し、その隙に『サウザント・マスター』ナギ・スプリングフィールドの呪文が完成した。

「 契約により我に従え、高殿の王。来たれ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稲妻！ 行くぜオラアッ！

『千の雷』イッ！！」

規格外の魔力が解放され、極大の対軍勢用の雷が敵影一個に向けて進む。
個人に放つには明らかかなオーバーキル。こればかりは耐え切れるはずもなく、独眼の仮面の女は咄嗟に腕を交差して防御の姿勢をとった。

直撃。

「……………マジかよ」

ナギの唾然とした呟き。
アルビレオと詠春もまた同じ気持ちだった。なにせ、女の鎧には罅こそ入っているものの、女自体にはほとんどダメージが通っていないかったのだから。

パシィッ！

独眼の仮面が罅割れて、女　マリーダ・クルスの素顔があらわになる。

14歳のナギより5歳ほど年上の、歳若い女が冷徹な眼差しを3人に射込み、無感動に勧告した。

「……………お前たちの足止めを命じられている。死にたくなければ、そこで大人しくしている」

「ほう、我々3人に対して大きく出ましたね。余裕があるので？」

アルビレオの挑発的な声音に、マリーダは淡白に答えた。

マリーダの両小手の袖部分から2つの剣柄が滑り出てくる。右に青。左に緑の魔力剣を形成して、それをアルビレオに突きつける形でマリーダは淡白に口を開いた。

「警告は繰り返さない。大人しくそこで止まるか、私に殺されるか。選べ」

（これは……魔力を高密度に圧縮している？ かなりレアなアーティファクトですね……喰らえばタダではすみませんか……）

「へっ、舐めんじゃねえ！ 俺たちはそんな脅しにや屈しやしねえぜ！」

威勢よく吼えるナギ。

それに、マリーダは哀れな生き物を見るような目で、そうか、と1つうなずいた。

「お前、名前は？」

「俺か？ 俺はナギ、ナギ・スプリングフィールド。最強の魔法使いサウザント・マスターだ、覚えとけ！」

「覚えておこう。それがお前たちを殺すせめてもの手向けだ」

左手に氣。右手に魔力。

「むっ？！ いけません、ナギ、詠春、彼女を止めてください！」

マリーダが何をしようとしているのかをすぐさま察知し、アルビレオが焦ったように声を張り上げた。

アルビレオの言葉を受けて、瞬時にマリーダに接近する剣士と魔法剣士だったが

合成。究極技法『感卦法』。

瞬間。マリィダの纏う魔力と氣が一気に数倍に跳ね上がった。

ナギの腹に強烈な蹴りをぶつけて間合いを離し、詠春の剣撃を一本の魔力剣で受け止め罅迫り合いになる。

吹っ飛ばされたナギがすぐさま反転しマリィダに襲い掛かろうとするも魔動砲14基の内、8基がナギを牽制し、次いで魔法詠唱に入ろうとしたアルビレオを妨害。

詠春と罅競り合うマリィダに近寄れずにナギは舌打ちした。

「チツ、なんだこれ、邪魔なんだよお!!」

ナギがターゲットを14基の魔動砲に切り替えた瞬間、一瞬にして魔動砲は拡散して一気に破壊されるのを防ぐ。

苛ただしげにアルビレオと協力し、なんとか4基撃墜したところに、詠春が悲鳴を上げた。

「ぐあああああつ?!」

拡散し不規則に動いて動きを一定にしなかった魔動砲の1つが低出力でビームを放ち、詠春の背中を焼いたのだ。その瞬間、詠春は大きな隙を罅競り合っていたマリィダに晒してしまった。

「詠春っ!!」

瞬間、あまりの激痛に反射的に大きく仰け反った詠春の腹に、マリーダの魔力剣が突き刺さった。

「ぐっ？」

抜き放ち、落下していく詠春に蹴りをぶつけて落下を加速させると同時に落下方向を修正。アルビレオへと向かって詠春は飛来した。

避けて詠春が地面にぶつかってしまったら、瀕死の重傷を負ってしまっている詠春の命はない。それを察してしまったアルビレオは咄嗟にそれを受け止めてしまった。

詠春に続いて飛来したのは、マリーダが無造作に投げはなった青い魔力剣だった。詠春を受け止めて隙を生んでしまったアルビレオを、諸共に串刺さんとする攻撃。

アルビレオはそれに抵抗する魔力障壁を張ろうにも間に合わないと察し、他に防ぐ術が見つからず、死を覚悟した

「オラアッ！」

が。仲間の危機を見過ごすリーダーではない。ナギは2人とマリーダの間に立ち塞がるや、その魔力剣を蹴り飛ばして2人の危機を救った。

「下がってるアル！ 詠春の治療を頼む！」

「わかりました、気をつけてくださいナギ、彼女は強敵です！」

「わかってらあ！」

ひゅうつ、と浮遊する10基の魔動砲を自身の背後に集結させ、マ

リーダーは後退する2人を追うでもなく、ただナギに正対する。

下手に追撃してナギから目を逸らせば、それだけで危ないのだと兵士としての本能が察知していたのだ。

「やるじゃねえかアンタ。名前は？俺は名乗ったんだから、アンタも名乗れよ」

「 マリーダ・クルスだ」

「 マリーダか、いい名前だな」

「 ああ、マスターが付けてくれた名前だ」

ふっ、と冷徹だったマリーダの頬が僅かに緩んだ。それに、ナギはマリーダの美しく儂い笑みに一瞬目を奪われる。

「 ……なんだ？」

「 あ、いや、……な、なんでもねえっ！」

ナギは14歳の少年だ。歳相応に異性に興味があるナギにとって、マリーダほどの美女の笑みは見惚れてしまうものだったのだ。

マリーダが元の無表情に戻り胡乱げに問いかけると、ナギは慌てて首を左右に振った。

「 ……なあ、マリーダ。俺たちの仲間にならねえか？ アンタが仲間になってくれたら、この戦争をもっと早く終わらせることができる！」

「 断る」

ナギの『いいこと思いついた！』みたいな唐突な勧誘に、マリーダは一瞬の揺らぎもなく即答した。

一瞬も迷う素振りがなかったことにナギは不満を感じ、悪ガキじみ

た顔つきで唇を尖らせる。

「なんでだよ」

「2つ理由がある。1つ、私がマスターを裏切ることなどあり得ない。2つ、戦争を早く終わらせたければ、お前が私の仲間になればいい」

「なっ　　!？」

マリィダの言葉に、ナギは驚きの声を上げた。

勧誘した側が勧誘されたのだ。驚かないはずがない。

「な、なんでそうなんだよ！」

「戦争を早く終わらせたいんだろう？　なら、現状で戦況が有利な帝国に味方したほうが戦争は速く終わるのは自明だ。劣勢側が戦局を覆した場合、戦火はより拡大する。無関係な犠牲者はその分増える」

「ぐ、　」

「お前たちがしているのはそういうものだ。おおかた、お前は敵を倒して名を上げたいのか、それとも強い敵と戦って満足したいのか。そのどちらかだろう」

ぐうの音も出ないほどにマリィダに言い負かされたナギは、それでも負けん気強くマリィダを睨みつけた。

「お前が私を勧誘した理由は、所詮は敵の理屈だ。お前が帝国につけば、おそらくはあと数ヶ月としない内に連合は敗れ去るだろう。

……どうする？」

「俺は……俺はみんなを裏切れねえ」

「だったら？」

「アンタを、マリィダを斃す！」

「いいだろう。ならば私はお前を『殺そう』」

オブラートに包んだ言い方をしたナギに対し、直球で言い放ったマリーダは、独眼の仮面を付け直しながら背後の魔動砲10基を散開させ、静かに告げた。

「死ね、ナギ・スプリングフィールド」

「誰がつ！ 死ぬかよおおおおお ツツツ！..」

第8話「第3次オスティア防衛戦（中）」【観察・邂逅】」（後書き）

【今話で登場した仮契約カード】

名前：マリィダ・クルス

主：アオスブルフ・フォン・シュトライテン

称号：戦士^{クシャトリヤ}

徳性：勇氣

方位：東

色調：白

星辰性：月

アーティファクト：「^{シユラハト・ヴァツフェ}全周覆う戦士の装具」

【「全周覆う戦士の装具」の能力】

・「魔力剣：2本」……青と緑の魔力剣。召還した柄に魔力を込めると、込められた魔力の3倍の密度の魔力刃が形成される。また、？氣？で代用することも可能で、マリィダの最大出力の魔力剣は、収束された広域殲滅魔法に匹敵する威力を発揮する。ビムサベ

・「浮遊型魔力念動砲：16基」……マリィダの念を受けて動く、魔力念動砲。同時に8基まで動かすことができ、「魔法の射手」に似た魔力弾を放つ。圧縮した魔力レーザーであるため貫通力に優れ、その威力は最強クラスの魔法使いが張った魔力障壁を3撃で貫通するほど。

ぶつちやけファネル。

・「エフィールド」……マリダの小手、脛に淡い緑光を放つ鋼の軽鎧と、胸元に黒龍の紋章が彩られた胸甲が形成され、マリダの鼻から上にツノのある独眼の仮面が現れる。その鎧は魔力障壁に似た守護膜を展開。魔法全般に有効。平均的な能力値の者の魔法は完全に無効化し、それに倍する威力を持つ魔的な技は、その威力を減衰させる。さらに、自身の魔力障壁も重ね掛けでき、それによって防御力が向上する。

……何このチートという感じだが、人外魔境の黒円卓の中では「ふーん。それで？」と流される程度でしかない。

ちなみに、青さんは『連合VS帝国』！というフレーズを見ると、条件反射的に帝国に所属してしまいます。

ドイツ第三『帝国』の軍人だったために、ソビエト赤軍やその他の国家の『連合』軍に、名前だけで嫌悪感を抱くのです。

青さんが帝国所属なのも、それが主な理由と言えましょう。

……そういえば、マリダの渴望ってどんなものになるのだろう……

(汗)

どうしよう、どうしようか、どうしたらいいと思います？

閑話「吸血鬼の憂鬱」

閑話

「吸血鬼の憂鬱」

「馬鹿な！『千の雷』を受けて無傷だと！？」

「ぎゃあー！！」

S 「そんな！ あつああああ m k s んかつささぢhしdさhぢ
ツー！！??？」

「てめえはヴィルヘルム?! なんでネギま世界に！ てめえ、もしかして転生者か!? つぎやあああ!!!??？」

「へっ、甘く見たな?! ナギの千倍の魔力を持つこの俺様に挑むなんぎやああああ!!??!!??」

「おれだつて聖遺物持つてんだよ！ 形成（笑）！つぎやあ
!??」

「ふっふっふ、ヴィルヘルムに転生したのか？甘いな、おれは白騎士ぎやあ!??」

「ふ、雑種の分際で王たるこの我に挑むとは……死に急ぎやわらばっ!??」

「ちょ！ ヴィルヘルムが感卦法とかマジ受けるwwwがわらばあつ?!」

「……………なんなんだ」

漆黒の装束。赤い腕章。アルビノの白い髪と赤い瞳、真っ白い肌のアーリア人。

聖槍十三騎士団黒円卓第四位、串刺し公たる白貌の吸血鬼は、うんざりしたようにぼやいた。

意味が分からなかった。

青騎士の招集に応じて魔法界にやって来ていたヴィルヘルムは世界を放浪し、まだ見ぬ敵を求めて血塗れの旅を続けていた。

その最中で、何人かは血が湧き肉が躍るような強敵もいるにはいたのだが

「まったく、わけわかんねえなあ。なあおいシュライバー。なんでテムエの聖遺物を持つてる奴がいんだ？」

そう、その中には彼の宿敵である大隊長、『白騎士』ウォルフ・ガング・シュライバーの聖遺物と渴望ルを持つ偽物がいたのだ。

ヴィルヘルムは嘆くように、『城』にいるだろうライバルへと語りかけた。無論、答えは無い。

シュライバーの聖遺物と渴望と言っても、ヴィルヘルムはまったく苦戦しなかった。むしろ瞬殺した。

戦闘技術は雑魚。聖遺物の効果によってヴィルヘルムはソイツに指一本揺れられなかったが、創造を発動し闇夜の結界でソイツを吸うと、あっさりと殺せてしまった。

むべるかな、ヴィルヘルムがシュライバーを宿敵としているのは、その桁外れの戦闘直感と殺人技術、18万にも及ぶ強大な魂量燃料を持つからである。戦闘直感も殺人技術も魂も半端な雑魚に、梃子摺るはずがない。

その他にも、色々といった。

現黒円卓の最高指揮官、青騎士を凌ぐ魔力量を持つ珍獣。

己を転生者と呼称するわけがわからない雑魚。

やたらと金ぴかでこちらの神経を逆なでにする、傲岸な態度の雑魚。

どれもこれもヴィルヘルムの戦闘欲を慰めることのできる輩だったが、いざその魂を喰らうと

そう、不味いだ。

薄く、不味い。まるで泥水でも啜っているかのよう。

本来、あそこまでの戦闘力を持つているのなら、純度が高く密度の濃い魂の持主のはずなのだが、あまりの不味さに例外なく吐き出してしまった。とてもではないが食えたものではない。

「それに転生者だあ？　アホが。俺あ一度も死んだ事も殺された事もありやしねえよ」

朽ち果てた死体を蹴り飛ばし、ヴィルヘルムは吐き捨てた。

魔法界に来て、満足のいく魂を持っていたのは、長年ヴィルヘルムが行方を追っていた『闇の福音』ぐらいだ。

あれは巧くて美味かった。600年の歳月を生き延び、研鑽し、孤高を良しとし己の道に誇りを持っていたあの女は、ヴィルヘルムが己以外に『吸血鬼』と認めるに足るバケモノだった。

それに比べてあの猿どもは……

「あら？　どうしたのベイ」

ふと、見知った声がヴィルヘルムを呼ばれる。そちらに不機嫌な様子の吸血鬼が目をやると、赤毛の小娘が歩み寄って来るところだった。

「なんでもねえよ。ただ、コイツも不味い魂だったんでな、吐き出して始末してたところだ」

「ベイも？」

「あ？　てめえもか？」

ルサルカ・マリーア・シュヴェーゲリン。

聖槍13騎士団黒円卓第八位、魔女の鉄槌。ヴィルヘルムの同胞であり旅を共にする魔女である。

その魔女の反応に、ヴィルヘルムは胡乱そうにルサルカを窺った。少女の容姿をしたロリ婆は気持ち悪いモノを見たような顔で自分の体をわざとらしく抱きしめた。

「さつきね、わたしのことを見て『ルサルカたんハアハア』とか言いながらにじり寄ってきたイケメン変態がいたの。咄嗟にナハツエーラーで拘束して、食べたんだけど……美味しくなかったらから捨てちゃった」

「……………どうなってんだこの世界。そんなんばつかなのかよ」

呆れたように嘆息する魔人二人。

ルサルカのことなど眼中にないヴィルヘルムだったが、この時ばかりは心を一つにしていた。

「スパイダの野郎、俺たちにゴミ掃除でもさせたいのか？」

「フランメに限ってそれはないんじゃない？ そんな嫌がらせみたいなこと、メルクリウスの糞ぐらいしかしないわよ」

にこやかな笑顔で断言するルサルカに、青騎士の性格を見知っているヴィルヘルムも「確かに」と認めた。

あの軍人という人種を絵にかいたような男が、部下の立場にいる者を粗雑に扱うわけがないと、崇拜する黄金の獣に対する忠誠に並ぶほどの信頼を懐いていた。

「そういえばベイ。フランメが帝国軍を率いてオスティアに攻め入

「だったらいいわよ？　せつかくの戦争なのに、どうしてベイは参加しないの？」

「はン。はなから勝つ気のない戦に参加してどうすんだよ。そそのる奴がいるわけでもねえのによお」

くだらない、と魔女の妄言に吸血鬼は失笑した。

敵のいない戦場など、ヴィルヘルムが参加する謂われはない。自由参加だと青騎士は言った。ならばいけ好かない奴の指揮下に入って闘うよりも、こうして好き勝手にいる方がマシである。

そもそも、現在のヴィルヘルムはあまりに強すぎた。

魔力を使った身体能力強化『戦いの歌』、気と魔力を合成する技法『感卦法』、闇属性の魔法に『闇の福音』が使っていた闇の魔法にと、数々の魔法戦闘スキルを　青騎士に　習得させられており、一騎当千の力を持つ敵でもない限り、聖遺物を使うまでもなく素の力のみで圧倒出来る。

通常の戦場など、もはや吸血鬼に取って屠殺場でしかないのだ。

「いるわよ？」

「あ？」

ルサルカの邪笑。

それにヴィルヘルムは怪訝そうにした。

ルサルカとてヴィルヘルムの実力は知っているはずである。他ならぬルサルカが、ヴィルヘルムに闇の魔法を授けたのだ。知っているはずがない。

なのに、『そそのる』敵がいると、ルサルカは言った。

「誰だそりゃ。まさか、俺が今しがた始末したような奴じゃないだ

ろうな？」

「さあ？ それは保障できないけど、きつと殺意を湧かせてはくれるんじゃないかしら」

「それは？」

「メセンブリーナ連合所属ウエスペリタティア王国第一王女守護騎士、

『オスティアの金獅子』。

どう？ 少しは殺る気出た？」

「…………ハッ、」

魔法の吐き出した台詞に、吸血鬼は失笑を洩らしていた。

金の獅子？ それは、なんの冗談だ？

黄『金』の、獣　王である『獅子』　なんとという愚かしくも浅ましい僭称だ。

その名を名乗るのに　その名を与えられるに相応しい傑物なのか？　それが黒円卓に対する挑戦だと、わかっているのか？

「ハハッ、ハハハッハハハッハハ　　ツツツ！」

迸る哄笑。

爛！ と輝く赤い双眸に狂気と憤怒を宿し、怒れる白貌の吸血鬼は宣言した。

「いいぜえ、決めたぞ。ソイツは何を置いても俺が喰う」

「そ。じゃあ精々ベイとその子が戦う時は、わたしは離れておくわ

ね

「好きにしるや」

吐き捨て、ヴィルヘルムは踵を返して歩き出した。

「帰るぜ。スパイダの野郎に会う」

「ちようどよかった。わたし、フランメに見せておきたいモノがあるの」

吸血鬼と魔女は邪な笑みを浮かべながら、速やかに夜の闇に溶けていった

閑話「吸血鬼の憂鬱」（後書き）

- ・ミリオルドに死亡フラグが立ちました。ハヤクニゲター
- ・アオスブルフにメルクリウスのイベントフラグ 『氾濫する未知現象』が立ちました。が、青さんは水星を拒絶してイベントをへし折りました。

……感想で、『メルクリウスがミリオルドという未知にどんな感想を持つのだろうか』的な質問？がありました。

ずばり、『ああ、またか……』です。正直『未知』そのものには興味が無くなってきています。青さんのように『未知』で、強大な魂を持っている場合のみ、興味を持つようになっていきます。

ヴィルヘルムの現在戦力は、全てのスキルを駆使すれば、原作の4割増し。トバルカイン？敵じゃねえ！ 大隊長に手が届くか届かないか、ぐらいの強さ。シュライバーと戦った場合の勝率は、なんと5割。

ルサルカの現在戦力は、後に判明するのですが、全てのスキルを駆使すれば原作の5割増し。魔法界、旧世界で最高最悪最強の魔女。黄金錬成しなくても普通に不老不死になれちゃってる。だから黄金錬成は割とどうでもいい。裏では青い人と手を結んでいる。

ベアトリスの現在戦力。原作の3割増し。強過ぎる。

クリストフ、バビロン、シュピーネの現在戦力。変化なし。

二代目トバルカイン（鈴）の現在戦力。原作の3割増し。青さんに鍛えられちゃってるから、レイ個人の技量も一段階上になっている。

アオスブルフの現在戦力。……秘密。ただ、『何このチート』状態のヴィルヘルムが敬遠するぐらい。

城にいる大隊長ズ。原作から変化なし。おい現世の黒円卓メンバーに追いつかれるぞ！

ラインハルト。普通に強い。

メルクリウス。変化なし。というかしていても誤差ぐらい。

マリィダ。黒円卓の番外位。青騎士の私兵。まだ人間。現在戦力は『紅き翼』のアルビレオ3人分。（微妙な例えですが気にしないでね）

読者様 『六道真輝』様からの投稿で青さんの私兵になった『ジューダス・ストライフ』。まだ人間。現在戦力はマリィダより一枚上手。

読者様 同じく『六道真輝』様からの投稿で青さんの私兵になる『川神百代』。人間。というかまだ生まれてない。未来で私兵になる模様。

読者様 『MD』様のオリキャラ投稿で青さんの私兵になる『オリスト・アルバ』。人間。が、まだ青さんの部下ではなく、出会っ

て青さんに目を付けられてはいるものの、狂人になっていない。

読者様、数多くの応募、本当にありがとうございます！！

私兵に選ばれなかったキャラクターたちは、どれも魅力的ではあるものの、作者の技量では扱いきれないと判断したからで、決して嫌いだからではありません！

それと、ジューダスさんが好きな読者様達に注意を。

本作のジューダスさんにはベルゼブブは宿っておらず、特異体質の血液ということになっています。だって世界が違うんだもん。

あと生れも境遇も違うため、性格と口調がおかしくなっている可能性が高いです。ですから、『こんなのジューダスじゃない！（涙）』みたいな感想にも、多分お答えできないです。

『このジューダスはこんな奴なんだ』、と暖かい目で見守って頂けると、作者としてはありがたいです。

読者様たち！ 作者の我がままに付き合っていただき、また多くの魅力的な人物を紹介してくれて、本当にありがとうございます！！

次回の第9話以降、第2部終盤に入ります。

第9話「第3次オステイア防衛戦（終）【勝利と敗北】」

第9話

「第3次オステイア防衛戦（終）【決着】」

「……戦力が足りないな」

奮迅する黄金の主従が帝国軍の足を止め、次第にその数を減らしていくのを目視で確認しながら、私は淡白に呟いた。

「だったら中佐が出ればいいじゃないですか。すぐに決着になりますよ？」

艦長席で頬杖を付いていた私の傍らに小柄な女性がやってきて、そんなことを言ってくる。

私はそちらをジロリと睨みつけ、金髪碧眼の愛嬌のある顔立ちの女に拳を振り上げた。

「キルヒアイゼン。修正されたいのか？」

「ちよっ！？ 嫌ですよそんなの！ 中佐の拳骨とか本気で洒落にならないんですから！！」

ベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン。

私と同じ聖槍十三騎士団の黒円卓に所属し、第五位の座に据えられている魔人だ。

見た目こそ若々しいままだが、実際に生きた歳月は60年を越している、立派なバケモノの1人である。そして同時に、私と【目的】を同じくする、黒円卓内での唯一の同志だ。

今回の作戦では副官として伴っているが、あまり副官らしい仕事をしてくれずに私は頭を痛めていた。

「私が出て勝ってはいけない。そう言われているだろう」
「なぜです？」

「……本気で修正してやろうか、貴様……」
「ままま待つてください中佐！ 今思い出しますから！」

うーん、うーん、とわたしはじめにかんがえてますよー的なポーズをとるベアトリスに、私は溜息を吐いた。

……これで、三代目トバルカインとなる櫻井戒少年を剣の弟子に迎えているとは。まずは師匠のなんたるかを叩き込んだほうがいいのではないだろうか？

アーウエルンクスの人形はザコ過ぎて使う気にもなれないが、副官のオツムが緩いのもどうかと思う。

「えつと……連合の息の根を止めてはならない。ギリギリで戦局を安定させて戦争を長期化させるべし、でしたっけ？ いやあ、造物主も嫌な指示を出してくれそうですよね……」

「ふん……だが定期的に殺人し魂を喰らわねばならん私たちにとって、都合の良い環境であることは確かだ。気に喰わんが、望まれた通りに踊るしかあるまい。(……クラフトめ、なにがオペラの予行演習だ。ふざけおつて……)」

「でも中佐って誰かに踊らされるのって嫌いですよ？ いつか絶対我慢の限界が来て、暴れまわるんだらうなあ。楽しみです」

吐き捨てるようにベアトリスは楽しみと言う。

出来るならば戦争を早く終わらせたいという考えを持つベアトリスにとって、造物主　カール・クラフト＝メルクリウス　のやり方には反感を抱いてしまうものらしい。かくいう私とて好ましいとは思っていないが、造物主の正体を知る唯一の人間として、それには同意するわけにはいかなかった。

「楽しみといえばあれだ。お前は櫻井の長男に剣の指南をしているらしいな？」

「え。　な、なんで知ってるんです？」

「クリストフが教えてくれた」

「彼がですか？　……（余計な真似をお！）」

「で、結局どうなんだ？　楽しいか？」

「……楽しいですけど」

「そうか」

ならいい。そうやって私は戦場に目をやった。

「なにがいいんですか？　気になるからそういう言い方やめてくださいよお」

「いやなに、お前がシヨタコンであるかどうかアンナと賭けていてな。どうやら私の勝ちらしいということが分かって満足したただけだ」

「ちよつとお？！　なんて賭けしてるんですか中佐と彼女は！　わたしはシヨタコンなんかじゃありません！」

「ふむ……なら妹のほうは私が鍛えようか。面白そうだ」

「へっ？！」

「お前が鍛えた兄の方を、私が鍛えた10歳年下の妹が乗り超える……ふふ、実に面白そうだ。よし、やってみよう」

「ええっ？！　ど、どんだけDSなんですか中佐は！？　やめてく

ださい中佐が鍛えた子とぶつかったら戒が死んじやいますって!!」
「ふっ　なら死なないように鍛え上げておけ。それがお前のやるべきこと、やりたいことなんだろうっ?」

「ッ　は、はいっ!」

緩いやり取りを終えて、私は悲惨な戦況になりつつある帝国軍側に視線を戻しながら、紅き翼が1人も戦場に介入していないのを確認して、大事な部下であるマリータの奮闘を感じて満足げにうなずいた。

「そういえば中佐、マリータはどうしたんです?」

「出した。今頃は連合のエースとぶつかっているだろうよ」

「エース?　ああ、あの赤毛の少年ですよね、たしか」

「よく覚えてるじゃないかキルヒアイゼン。……というか【少年】だから覚えてたとか?」

「ちっ、ちがっ……わくはないです」

「ほう?　シヨタコンだと認めるのか」

「認めませんっ。……ただ、あんな小さな子供が戦場に出て、しかもエースに祭り上げられているなんて……可哀想だなんて。そう思っただけですよ」

シヨタコンではなく子供好きか。

なるほど、ならば子供が戦場に出ねばならない時代を嘆いても仕方ない。

「……にしても、さすがマリータですね。連合のエース3人を相手に足止めを成功しているだなんて、本当なら昇進ものの活躍です。聖遺物もないのに超人的な働きですよ。さすが、中佐に鍛えられただけの事があります」

「むしろ当然だな。私の魔力を供給しているんだ、足止めぐらい成

功してもらわねば私の面目が潰れる。特にヴィルヘルム辺りが笑ってくるだろうから絶対に失敗は赦さん」

「あはは……」

しかし……そのマリータはかなり苦戦しているようだ。

機転を利かせて3人の内2人を後退させたようだ、リーダーであるナギ・スプリングフィールドとの一対一の戦闘に陥るや押されている。4歳の頃からの15年間、私が徹底的に鍛え上げた強化人間マリータを、実戦経験が2度か3度しかない小僧が、だ。

驚異的な才能だ。

マリータの視覚から戦況を盗み見ているが、どうやらナギ・スプリングフィールドはマリータの戦闘技術や戦闘論理を本能的に吸収し、戦いながら驚くべき速度で成長している。

今こそマリータが優勢だが、粘り強いナギの戦いぶりになかなか決着をつけることができず、このままではナギがマリータを凌駕するだろう。

「欲しいな……」

ポツリと本音がこぼれ出る。

ナギ・スプリングフィールドは才能の塊だ。アンチヨコなどを用いているところから察するに、頭のほうは使いたがらないところがあるようだ、その戦闘センスだけを見るなら私にも匹敵するだろう。特に魔力量が個人のものとは思えないほどあり、なんと私の魔力総量の10分の1もある。10万の魂を内蔵するこの私の10分の1だ。これは大変なことである。もしもナギを聖遺物の使徒にすれば、短期間で大隊長の影を踏める存在になるのは間違いないだろう。

いつの間にか真剣にナギを取り込む策を頭の中で練り上げ始めているのに気づき、私は苦笑した。前世の人材収集癖が蘇ってきたことで、人と関わるのが楽しかったからだ。

（存外、私は教師に向いているのかもしれんな……）

差別的な言動を抜きにすれば、の話ではあるが。

面白そうだし、この戦争の時代を抜け、全てに決着をつけた後なら、どこかの学校の教師を試してみるのも面白いかもしれないと、選択肢の一つに入れておく。

「キルヒアイゼン。私はマリータと戦っている小僧のところに遊びに行く。頃合になったら撤退しろ。計画ではここを陥とすわけにはいかないことになっているからな」

「了解！^{ヤウゾール}……あーあ、可哀想に。戦闘モードの中佐に会ったら、その子シヨックのあまり寝込むんじゃないかな」

「ハッ！」

マリーダの吼えるような集中の声。

残り4基の魔動砲が機敏に動き、次々とナギに命中して魔力障壁を破壊した。

マリーダは魔動砲を同時に8基まで動かすことが出来る。その集中力を残された4基に集中できる状況になって、4基の魔動砲は機敏に動き回り、ナギの攻撃をことごとく回避していた。

「チッ！ やり辛れえったらねえぜ！！」

魔力障壁は数発しか耐えられず、壊されるたびに魔力を消費する。そのの不毛さに気づいたナギは魔力障壁を張るのは本当に回避が不可能な時だけに留め、あとは極力紙一重の回避によって魔動砲のオールレンジ攻撃をやり過ごしていた。

加えて、相手は女。年上とはいえ敵が女であるために、未熟な魔法使いは無意識の内に手心を加えてしまつてほとんど攻撃することができず、全力で守っているのに全力では攻めていないという奇妙な構図が出来上がっていた。

しかし、ことマリーダ戦で言うのならその選択肢は間違いでない。マリーダとナギには戦闘技術に開きがあるため、もしも全力で守りながら攻めるといふ二束の草鞋を履こうとすると、たちどころにナ

ギは仕留められてしまっただろう。

無意識の内に回避に専念していたことが、結果的にナギの命を救うと共に、天才ナギの才能がマリーダの戦闘技術をドンドンと吸収していった。ナギの戦闘力は秒刻みで向上して行っている。

マリーダは次第にその成長速度に焦燥を感じるようになっていた。

躲される、どんな攻撃を、どこからしても躲される。

この事實は、偉大な師であり親でもあるアオスブルフの恩恵を受けている身として、ひどい屈辱だった。

仮面の下のマリーダの表情は呪わしく忌々しそうに歪み、無意識の内に攻撃が雑になってきていた。

「キリがねえっ！」

いつまでも闘っていていられるほど甘い相手ではない。マリーダが自分に集中している間に決着をつけないと、マリーダがナギの足止めを諦めて戦争に参加するようなことがあればオスティアに対する被害が大きくなりすぎる。

そんな考えがナギに守りの姿勢を崩させた。

影分身。数は20。東洋の神秘。

ナギはいつまでもグダグダと守勢に回っているのに遂に痺れを切らして防御を捨てた。

本来ならマリーダの狙い通り。攻勢に引きずり込むことで隙を作り出し、そこで4基の魔動砲の集中砲火、次いで魔力剣での斬撃によってナギを仕留めるつもりだった。だが、ここにきてナギが一度も見せていなかった影分身による攪乱攻撃を仕掛けてきたことによつて一瞬マリーダは攻撃対象を見失ってしまい、咄嗟に守勢に回つて

しまった。

攻守が入れ替わる。

暴力的なまでの天賦の才。溢れんばかりの膨大な魔力。敵手の視界を埋め尽くし蹂躪する圧倒的な数。

「なっ
」

驚愕は刹那の彼方。

マリィダが驚きの声を喉から絞り出すより先んじてマリィダの脳は指令を四肢に送り、緑の魔力剣を構え、脳が直接4基の魔動砲に命令して4条のビームがマリィダの前方に網状のバリアーのように展開され、前方から突っ込んでくるナギに牽制する。だが遅い。無詠唱で放たれたナギの『魔法の射手』が雨霰のようにマリィダに直撃し、独眼の仮面と罅の入っていた胸甲が剥ぎ取られる。

そしてダメージこそゼロだったものの、その衝撃に怯んでしまった隙を突かれて、いつの間にかナギの本体がマリィダの背後に回りこみ、無詠唱の魔法の射手を拳に込めて渾身の拳撃を放った。

「
」

その瞬間。マリィダは直感に突き動かされるように腕だけを背後に回してナギの拳を魔力剣で防ぐ。

驚愕はナギのものだ。完全に気配を周囲に拡散し、放ったはずの奇襲攻撃がなんの脈絡もなく【直感】だけで防がれたのだ。驚きは並みではない。だがその驚愕はすぐに興奮に取って代わった。

「おいおい、後ろに目でもついてんのかアンタ……！」

「纏わり付くなあっ！」

大喝するマリーダの激情。

敵とは殺し、憎むために存在するという主の刷り込みにより、完全に憎む対象として認識されたナギは、その燃え立つような憎悪の目を感じ取り、一瞬威圧されてしまつて動きが鈍る。

「黙らせる　　！！」

ナギを撥ね退け、宣言するようにして唱えたマリーダが魔動砲4基を操つてナギの周囲に発射することで【動きを縫う】。同時に緑の魔力剣を投擲しナギを串刺さんとする。同時に暴風すら巻き起こす膨大な魔力を噴出し、マリーダがこの戦闘で初めて呪文詠唱に入つた。

ナギは動きを縫われて魔力剣が投擲されるのを視認するや魔力障壁を展開　などせず、渾身の魔力を右腕に収束し、その右腕で魔力剣を受け軌道を逸らし、貫通していった魔力剣になど目もくれず、全霊を掛けた呪文詠唱に入る。

頭が熱い。沸き立つ血潮が全身を灼熱させ、鳴動する魂が興奮を叫んだ。

アンチヨコは見ない。見ている暇がない。暗記しておらず、覚えているはずのなかった呪文を口が滑り出すように唱える。精神が素晴らしく高揚していた。魂が燃え上がるような興奮。マリーダが俺を見ている。それだけで頭が沸騰して最高の麻薬が脳内を蹂躪する。俺も見ている。今は俺がマリーダを見ている。倒して見せるさ。真っ白になつたナギの精神がもはや魂の在り方にすら刻まれている呪文を唱え、優れた触媒である杖へありつたけの魔力を籠める。

「　　ほとばしれよソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を死の塵に！」『燃える天空』　　ッ！」

「　　百重千重と重なりて、走れよ稲妻　　『千の雷』　　ッ！！！」

天上を染め上げる赤く紅いゆえの朱い魔炎。炎の使徒たるマリイダ・クルスが射ち放った炎の空。

迸る雷の暴風を束ねた雷帝の一撃がナギ・スプリングフィールドの手より解き放たれ、山すら穿ち燃やす千の暴雷が真っ向から赤い空を打ち破らんと吼え猛った。

「なっ?!」

「ぐ、グググ　　ウッ!!」

包み込むようにしてナギの千の雷を蹂躪しかけていた莫大な魔力が、ナギの乾坤一擲に突破される。

マリイダが呻き、ナギが吼える。

勝敗は、単純な理由からだ。

魔法の才に乏しく、主より供給された魔力で力任せに放っただけの魔法と。

魔法にこそ真価を発揮する神才の、強引だが解放された天賦の暴力。

勝敗の差は、それだけ。

選択ミス。魔法戦ではなく、接近戦ならばまた違った結果が待っていただろう。

「　　ウウオオオオオオオオオオオオオオオオツツ　　！！
！！」

戦場を染め上げる赤い空は、覚醒した雷の英雄によって打ち破られた。

「　　申し訳ありません、マスター……」

雷が直撃する直前。マリーダは呆然と咳き、従容と迫る死を受け入れ、その目をそっと閉じた。

そして　　その目が開かれる事は永遠になくなる

はずだった。

瞬間。マリーダは己を守護する朱い炎が体を包み込んでいることに気づいた。

温かい……

安息の火。守護の炎。マリーダの肌を僅かたりとも焦がさずに、仄かな熱のみを伝えてくる【あの人】の守り。それを認識した瞬間、マリーダの表情は穏やかに緩んだ。

「なっ
」

絶句の声は、サウザント・マスター、ナギ・スプリングフィールドのもの。当然だ。その決着の瞬間、確かにナギは勝利を確信したし、自身の

最大出力の魔法は確実に直撃したのを見届けたのだ。

なのに。

どういうわけか。

ナギが全身全霊を掛けて撃ち放った『千の雷』は、その存在が嘘だったかのように掻き消されてしまったのだ。

かつてなく異常回転していたナギの頭脳が疑問する。

なんだあれは『黄昏の姫御子』の力いや違うあれは魔法を打ち消したわけでも無効化したわけでもない単純に『押し潰された』つまりなんだ俺の魔法がまったく通用しない奴が現れ

疑問は確信に移行する。

そして いつの間にかマリダの前に立ち塞がり、ナギに対峙する1人の男の姿がナギの目に入った。

背中まで届く長い青髪に、鳶色の瞳。鋭い双眸と伶俐な顔立ち。鍛え上げられた長身強軀と、その身にまとわれる黒衣。赤い腕章。そして

気が付けば、ナギの息が止まっていた。

「ハアツ、ハ、アツ……！！??？」

ナギの魂を押し潰さんばかりの、絶望的なまでの存在密度。その男がそこに居るといっただけで、昂ぶっていたナギの戦意が怖気

づいたかのように萎んでいく。

事実。ナギは天才ゆえに確信していた。

格が違い。闘うな、コイツとだけは絶対に闘っちゃいけない

……！！

「……マリータ」

男の静かな声。

ナギが始めて聞いた男の声は、どこか慈愛を感じさせる優しい印象だった。

「はい……」

「私は必ず生きて帰れと命じたはずだが？ 何を生きるのを諦めている」

「……申し訳ありません」

素直に頭を下げるマリータに、男は淡白に告げた。

「手を後ろで組んで、歯を食いしばれ」

「了解」

ベチツ。

そんな、撫でるような平手の一撃が、ナギと互角の死闘を演じていたマリータの体を吹き飛ばし、マリータは今にも倒れてしまいそうなほど意識に霞がかかってしまったようだ。

「帰ったらお仕置きだ。下がれ、マリータ」

「は、はい……」

恐縮しきつたまま、マリィダは撤退する。それを見届けた男が、いつの間にか肩を落として意識を失いそうになっているナギに向き直った。

「……まだタダのガキか。つまらん」

「……なんだとお？ 舐めんじゃ、ねえ……!!」

強がり。

ただの強がり。

対峙しただけで絶望してしまいそうな男の威容に、しかしナギはなんとか強がって見せた。

それだけだ。

それだけで、ナギは気力を根こそぎ使ってしまったような錯覚を感じた。

「ほう。喋れたか。なかなかやる。やはり私の目に狂いはなかったか」

「ガ、ア、ハツ、アツ」

「苦しそうだな。そんなに怖いか？ 私が」

「怖くなん、か、ねえっ！」

冷たく微笑しながら、男はナギの顔を覗き込んだ。

「私は聖槍十三騎士団黒円卓第七位、大隊長、アオスブルフ・フオン・シュトライトン・ディリス・スパードだ。名乗れ、連合の勇者」

「ハツ ナギ、スプリングフィールドだ……!! 覚えとけチクシ

ヨウ……ッ!!」

「遊んでやるつもりだったが、気が変わった。ナギ、私の部下になれ」

唐突な勧誘。

抗う気力すらないのに、ナギの魂は断固として？裏切り？を拒絶した。

「ふざつ、けんなあつ!!」

全身にのしかかる巨大な圧力を撥ね退けるように、ナギは咆哮し、やっとの思いで真つ直ぐに背中を反らす。

それに男 アオスブルフは賞賛の拍手を贈る。

「やつと胸を張って立ったか。男ならそれくらい出来ねばな」

「うるせえ！いきなり出てきて、いきなり仲間になれたあ？ふざけてんじゃねえよ!!」

「矛盾しているな。そういうお前も、会ったばかりのマリーダへ仲間になるよう勧誘していたみたいだが？」

「あがつ？」

威勢よく言い放つナギに、揚げ足を取るようなことを笑いながら言うアオスブルフ。

アオスブルフは真剣にナギが欲しかった。他2名はいらん。だがナギだけは、是が非でも欲しい。その思いが、笑いながらも目に表れていたのか、ナギはそれを察して複雑そうに表情をゆがめた。

「しかし……お前のような男は大概が義理堅く、裏切りとは無縁の男だからな……力で屈服させて連れ帰ったほうがいいのか？」

「面白れえ……やるうってのか？」

「マリーダを相手に消耗する程度に分際で、この私に勝てるつもりでいるのか？ 度し難い。……が、だからこそ、か」

「マリーダ？」

なぜか、その名前に反応してしまうナギ。それに、アオスブルフはニヤリと笑った。

……強大な敵のはずなのに、なぜだか引き込まれるような深みのある笑顔だった。

「なんだ？ ナギ、まさかお前、マリーダに惚れたのか？」

「なあっ?! ん、んなわけあるかあっ!!!」

「分かりやすい奴だな……ツアラトウストラの前座君は」

やれやれと肩を竦めながら、アオスブルフは撤退を始めた帝国軍を見遣りながら、「もう撤退するのか」と呆れたように呟いた。

どうやら、戦線に復帰したアルビレオと詠春が、オスティアの金獅子と王女を援護し、帝国軍を倒したらしい。

「ハッ、どうすんだよアンタ。帝国は退いていくぜ？」

「ああ、そうだな。私1人でこんな小国ぐらい落とせるから、別に帝国軍など要らんが」

「……ハッターリ、じゃなさそうなのがムカつくぜ」

ところで、とあっさりとなぎに背中を向けながら、アオスブルフが冗談なのか真剣なのか、どっちなのかよくわからない顔でナギに問いかけた。

「私の部下になると言うのなら、マリーダをお前にやるが。どうする？」

「はあっ!？」

「マリーダは家事全般が得意で、私が認める一流の料理人でもある。加えて夜のお世話も私の仕込みでかなり得意だ。マリーダとセックスしたいか？ したいだろう。健全な男なら」

「な、な、な……… ツツツ!?!?!？」

「ふ、純情だな最強の魔法使い?」

顔を真っ赤にして言葉に詰まるナギの返事も聞かず、アオスブルフは撤退する帝国軍を追って飛び去っていった。

それを見送り、巨大な存在が去ったことよって場の空気が一気に安らいだのを感じながら、ナギは絶叫した。

「な　なに言ってたんだ、バカにしてんじゃねえエエエ!?!?!?!?!」

第3次オスティア防衛戦。

ヘラス帝国軍の侵攻作戦は、オスティアの金の主従と、『紅き翼』の活躍によって阻止された。

実質、ただ見逃してもらっただけのこの戦争は、歴史にだけ連合の勝利の華が添えられて、幕を下ろしたのだった。

外伝「心酔せし魔弾」

外伝

「心酔せし魔弾」

少年は、傍観者だった。

無邪気に笑い、遊び、怒り、涙する。

無様に喚き、怒りに狂い、絶望に恐怖する。

羨望とは、己が持ち得ぬ遙か高み、あるいは別次元のものに向けてる感情で。

少年には、その『羨望』という感情しか持っているモノはなかった。

少年は映画が好きだった。漫画が好きだった。アニメも、ドラマも、どんな安っぽいものでも、『物語』が好きだった。

なぜならそこには、常に血と涙と慟哭と絶望と希望と喜びと怒りと愛と憎悪と始まりと終わりが記されている。

己が持ち得ぬ感情が、そこには常に描かれていた。

だけど。そのどれもが少年に教えてくれない。

痛みとはなんだ？

恐怖とはなんだ？

少年は知らなかった。

持っていないかったから知らなかった。

痛くない。

殴られても、殴っても、切られても、撃たれても。

少しも痛くない。

痛くないから怖くない。

なにが怖いのか。なぜ、人は痛がるのか怖がるのか。

死とはそれほどまでに忌むモノなのか？

幼い少年には、なにも理解できなかった。

だから少年は渴望した。

他者の感情を感じたいと。

自己の感情を知りたいと。

己の知らぬモノを知りたい。知識欲とは違う、純粹な、求道だった。

探究が始まった。

己の内に無いモノをどうやって探すかが命題だった。

探す。だがどうやって？

どこかの滝に打たれて悟りを得る？

どこかの協会に入って神を崇めて救いを求める？

どちらも論外。

少年は、神など信じていなかった。悟りなんぞで答えは得られないと直感していた。

ゆえに、少年は、己の内に無いのだから外を探そうと決心した。

銃を手に。

弾丸を撃って絶望を。痛みを。恐怖を。

己に向けられるそれらを観察して、知ろうとした。

いつしか少年は日常の、陽だまりの世界から外れて畜生の道を歩む

ようになっていた。

戦場だ。

地獄が顕現したこの世の絶望。

欲するものが敷き詰められた宝箱。

そこを練り歩き、渡り歩き、とにかく渴望の由縁を探していた。

だが、見つからない。

なにも。

分からないし何を見ても感じない。

少年は絶望した。絶望して、しかし己には『痛み』と『恐怖』というモノがなかったから、その『絶望』はニセモノだ。少年は、そのニセモノの感触を打ち棄てた。

それから数年。

戦場を。畜生の住まう貧民窟を。
探し惑い求め続けた。

そして出会ったのだ。

運命の人に。 否、人外の化物に。

「う、うわああああ！！？？」

恐怖に喚く聞き慣れたBGM。

少年は銃を片手に街路を歩いていた。

酒場から転がり出て来たのは、それなりに名の知れたマフィアのボスだった。

豪胆で、強欲で、剛勇を誇る貧民窟の支配者。

誰もが彼に恐怖していた。

誰もが彼に媚びていた。

彼は紛れもなく、この貧民窟の王だった。

そして少年は、その王に傅く用心棒だ。

「て、てめえは、お、おい、助けるおっ！！」

少年の姿を見つけて助けを求めて手を伸ばして来るのを無感動に見つめながら、少年は思う。

カッコわる。

常日頃から威張り散らし、未だ子供の少年を嘲りの目で見ていた男だ。

それが、いざ危機的状況に陥ると、これだ。あまりにも普段の姿から変わり過ぎたその態度に、少年は失笑を溢してしまふ。

「無様」

酒場から、玲朧で、冷徹で、どこまでもつまらなげな声が、少年の耳に届いた。

奇しくもそれは、少年とまったく同じ感想だった。

「王を名乗る不埒者がいると聞き、どれほどの者かと思えばこの様か。……くだらん。貴様のような塵は、生きる価値すらない」

「ひ、い、あ、ああああああ　　ツツツ！！　死ね、死ね、死ねよあー！！」

男は錯乱しながら叫び、酒場の出口付近に銃口を向けて撃ちまくる。

「まだわからんか。私には、そんな玩具は利かないと」

呆れたような、憐れむような嘆息。

酒場のドアが開き、1人の男が、姿を現した。

「あ

」

少年は、我知らず声を洩らした。

蒼い髪。鳶色の瞳。黒い装束と赤い腕章。目を瞠るほどの美男であると同時に、極限までに鍛え上げられた長身。

立ち姿はあくまで自然。悠然にして泰然。力んだ様子は少しもなく、ただ退屈そうに、面白くなさそうに、完全に気が抜けていた。

だというのに、彼の姿は、どうしようもなく
美しかった。

少年は、いつの間にか思考が停止していた。

なおも男は銃を打ちまくる。その全てが青い男に命中した。
死んだ。死んだ。

なのに　そのはずなのに　青い男は、死んでいない。
否　始めから死んでいる。

「ば、バケモノおつ?!?!?!」
「然り。私は化け物だ。だが貴様は？ 貴様は何者だ？ なぜ貴様は生きています。何を求め、何を為し、何を生む？ 私は化け物だ。だが、ただ奪い、犯し、喰らい、排泄するだけの肉袋である貴様は何者だ？」

青い男は、疑問を投げた。 問いを投げた。

なぜ、腐ったゴミのような男が、人間のカタチをしているのか。
それが赦せない。己は人間ではなくなったのに、なんでこんな劣等が人間なのだと。
己に絶望し、何かに憤怒し、男を侮蔑した。

少年は、その青い男の言葉を横から聞いて、考えた。

オレは、何だ？

オレは、生きているのか？

オレは、何を求め、何を為し、何を生む？

オレは 『誰』だ？

レイン・デイル
存在証明。

生まれてこの方、ずっとずっとずっと、少年が考え続け求め続けたモノ。

それを、改めて考えさせられた。

「劣等。貴様は私の駒になる価値は無い。また生きている価値すら無い。外道を誅する理はこの世になく、ゆえに私が貴様を罰そう。」

死刑だ」

「ひゃあああああああ！！！！????????」

視えない何かを握って、青い男が腕を薙いだ。

瞬間。男は許しを乞うような無様な姿勢で首を刎ねられ、首から血を噴出した。

透明な何かが青い男の体に吸い込まれる。

食われたのだ。少年は、そう理解した。

「……ふん。やはり劣等は劣等か。マズ過ぎる」

吐き捨てるように言いながら、青い男は少年など眼中に内容に背を向けて、歩き出した。

行かせるな。

魂が叫ぶ。

心が叫ぶ。

探していたナニかを見つけられるような気がして、少年は焦燥に突き動かされて拳銃の銃口を青い男の後ろ姿に据えた。

発砲。3点ブースト。頭、背、腹。残らず急所を狙ったそれは、しかし。全て命中したにもかかわらず、直撃した弾丸の方が耐えられなくてヒシャゲてしまった。

カランカラン、と空薬莢が地に堕ちて転がる。

「なんだ、雇い主の仇討ちか？」

銃で武装し、明確な殺意と共に攻撃してきた少年に、しかし青い男はむしろ優しげな声音で振り返って来た。

「ふむ。どうやら私の目も濁って来たようだ。お前のような者を見落とすとはな」

自嘲するように嘆きながら、カッン、カッン、と軍靴を鳴らして青い男が少年に歩み寄る。

少年は笑った。何か可笑しかったのではない。ただ、男の気を惹くことが出来て、それが嬉しかったのだ。まるで幼子が親の温もりを得られたかのような、心からの安堵の顔。

だが。青い男は、そんな少年の様子になどまるで頓着した様子はなく、無造作に死刑宣告を投げつけてきた。

「私を攻撃したんだ。死ぬ覚悟はあるだろうか？」

「え」

それは唐突。

無造作に蹴り払われ、少年の体は吹っ飛んで壁に叩きつけられた。

「力、ハッ」

背中から叩きつけられ、体が呼吸の苦しさに喘ぎ声を上げる。だが、痛くない。痛くないから、再び男に向けて銃口を向けた。

「うん？　　そうか。お前、頭が壊れているだろう？」

ここにきてようやく青い男の顔に興味の色が広がった。

発砲。発砲。発砲。

常人ならば既に6度は死んでいる。にもかかわらず、青い男はまるで小さな子犬にじゃれつかれているかのような顔で、仕方の無い子だ、と失笑していた。

「他に武器が無いとはいえ、通用しないと分かっているモノを使い続けるのはいただけないな。そら、その玩具は没収だ」
「なっ?!」

またも、青い男は視えぬ何かを振るった。

それだけで、触れてもいないのに少年の手の中にあつた銃が破断され。

まるで怜悯な刃物で切り付けられたかのような傷が少年の意識を焼いた。

「あ、ああ、あああああああああ!!!????????!??

「……………喚くなッ！ 貴様は男だろっ！！」

「あつ ぎ、ぐう、」

嬉し泣きに悶えながら激痛し、痛みと恐怖に意味を為さぬ喚き声を発し続ける少年に、青い男は一喝した。

絶対服従のカリスマ。どこまでも深みがあり温かい炎の感覚が、少年を包み込んだ。

「あ、ああ」

「イイ子だ。男が泣くものではない。男が泣いていいのは、嬉しい時と、親が死んだ時だけだ」

諭すように、青い男は身をかがめて少年の頭に手を置いた。

暖かい。

感じた事の無いそれが、少年はどうしようもなく嬉しくて嬉しくて、それを表すための言葉を知らなくて、少年は、焦った。

「ああ、ああ」

「じゃあな、少年」

去って行く。男が去って行く。

暖かいが、痛みが、恐怖が、これまで求めてきた全てを持った男が、遠くなっていく。

それに、少年は 生れてはじめての絶望と恐怖に顔を引き攣らせた。

待って！

待ってくれ！

オレを、オレを置いて行かないでくれえっ！！

少年は駆けた。少年は吼えた。痛みを堪えて立ち上がり、必死になつて男を追いかけた。

「　　待ってくれ！！」

追いついて、その男の袖を掴む。身長差があつたからその男の顔は見えなかつたけど、少年は、手の中に男の炎ねっを感じる事が出来て、心底安堵した。

「なんだ。どうした少年」

「お、オレを　オレを連れていってくれ！　あんたについて行くどこまでもついて行く、だからオレを、オレを連れていってくれ！」

「……断る。私は子供のお守りをしてやれるほどお人好しではない」「なっ？！」

呆気なく袖にされ、少年は悲嘆し、しかし、去って行く男を追って走り続けた。

殴られた。
蹴られた。
罵倒された。
呆れられた。
時には姿を消された。

それでも少年は追いつけた。
探し続けた。男の消息を暴きだし、何度でも何度でもいつまでも追いつけた。

その男こそ、少年にとっての標しぼだった。
その男こそ、少年にとっての全てだった。

何回目になるか分からない出会いの中、ついに、男は心底呆れかえったように少年に言った。

「まったく。こうまで情熱的に追いかけられたのは初めてだ。
これで美女だったら、応えようもあるんだがな」

「悪いな。オレが女じゃなくて」
「まったくだ。延々と男に追いかけて、鬱陶しくてかなわん」

はあ、と嘆息し、青い男は少年　青年へと成長した男に、苦笑を向けながら問いを投げてきた。

「私についてきたいと言っただな」
「ああ」

「では問おう。貴様は、私のために死ねるか？」

「死ねる」

「貴様は私のために人を棄てられるか？」

「棄てる。あんたが捨てろと言うならなんだって」

「貴様は私の手足となつて、神にさえ挑む気概があるか？」

「ある！ オレは、あんたに惚れたんだ」

「ハッ……」

失笑し、青い男は青年に、手を差し伸ばした。

「いいだろう。気に入った。最後の問いだ。小僧、私と共に、来るか？」

差しのべられたその手。圧倒的で、鮮烈で、どこまでも感情的で、怖ろしい

青年は、まともに言葉さえ発せずに、しかし。

少年はこの時、間違いなく 青いその男に救われたような気がした。

その問いを、待っていた。これまでずっと、ずっと、気が遠くなるような孤独の中で、待ち続けていたんだ

「行く。あんたと共に。我がマスター。オレは、あんたのために死ぬ」

そうしてまた1人。

青騎士の下に忠義する兵が参陣した。

彼の名はジューダス。

ジューダス・ストライフ。

無感ゆえに痛みを知らず、痛みを知らぬゆえに恐怖を知らなかった
無知なる子供。

与えられた激痛と恐怖に心酔して　ここに、魔弾は生まれ出たの
だ。

外伝「心酔せし魔弾」（後書き）

感想で「青さんの聖遺物と創造が気になる。炎属性だったら面白い」という感じの質問？がありました。

ご安心を。作者も心得ております。炎が三人目とか、そういうことはないので心配は無用です。

聖遺物については、第1部の人物紹介であつたように、『憤怒の巨剣』。
メルクリウスが直々に作った『運命の神槍』と起源を同じくする水星印の聖遺物で、2m近い、柄から刃先まで真っ白い大剣です。

創造は、まあ秘密ですが、もしも青さんが流出位階に達した場合の能力のヒントは、第1部のプロローグでの『問10』がヒントになります。

外伝『信ずる道』

外伝

「信ずる道」

正義の味方に成りたかった。

正義の味方で在りたかった。

その思いは仕組まれたモノ。されど其処に至った筋道が間違いではないと、男だけが信じていた。

？悪？が栄えた過去は無く、

？義？が潰えた例しなし。

？悪？は在つてはならない。存在を許容せずに誅戮するべし。

敵を殺せ。味方を守れ。

その命令が間違いではないと男は信じていた。

男は笑顔が好きだった。見ているだけで幸せな気持ちになれるから。

男は子供が好きだった。未来を守っているのだと実感できたから。

男は平和が好きだった。穏やかに生きる暖かな世界を守っていたから。

だから？悪^敵？は殺さねばならない。

そして男の周りを固める環境も、全て。全てがそれを肯定していたのだ。

男　オリスタ・アルバはメガロメセンブリア所属の、本物の？正義？を掲げる善良な魔法使いだった。

光と風の属性魔法に長け、一流の域の魔力量、そして　悪との戦いで身に付けた戦闘術理。誰からも頼りにされて、誰からも信頼されて、オリスタはまさに、万人の模範となるべき善人だった。

困った人がいれば助けずにおられず、助けを求められれば限界を超えて救助に向かう。そして、悪が現れるといの一番に飛んでいって対峙した。

メセンブリーナ連合にオリスタあり。

ヘラス帝国、ウェスペリタティア王国、その他諸々の諸外国に、オリスタは広く名を知られていた。

オリスタはだが、メガロメセンブリアの元老院に、ヘラス帝国との戦争に参加するように言われても、決して首を縦には振らなかった。なぜか？　ヘラス帝国は、オリスタの同胞たちを殺めた憎い敵だったが、決して？悪？ではなかったからだ。

戦争で人が死ぬのは当たり前。

自身もまた人殺しであったために、そのことをよく心得ていたのだ。

むしろオリストは元老院に諫言した。

「この戦争は些細な誤解から始まったというではありませんか。ならばその誤解を解き、その上で深く謝罪すればよいだけのこと。もしも賠償金を払えと言われれば、双方に非があるとして痛み分けに終わらせればよいではありませんか。そうするのが、外交や政治を仕事とする貴方がた元老院の役目ではないのですか？」と。

正論だ。

徹底して正論。

オリストは生真面目な性格であったために、戦争という忌むべき行為を延々と続ける国家たちが、なぜ戦争を終わらせようと努力しないのが不思議で仕方がない。

戦争に勝てばいい？ では勝つまでに出る民衆の被害はどう考える。必要な犠牲？ そんな一言で、元老院は、オリストの守つて来た、オリストの大好きな平穏や子供たち、そして世界を壊すと言うのか？

最善を尽くさずにただ戦争の道を突き進む元老院の愚劣さを、真つ向から指摘したのだ。

その通りだ、と元老議員は言った。

君の言うとおり。目が覚めた思いだ、と老人は言った。

下がって良い。きみに戦争に参加するようには言わないから。

オリストは、左遷された。

何処とも知れない田舎町にである。誰の目から見てもそれが「厄介払い」であるのが分かり切っていたが、善良で生真面目な男は、それを左遷とは考えずに、この地域の守護を任されたのだと解釈し、元老院の指令に感謝した。

オリスタは、幸せだった。

のどかな町景色。笑顔が絶えぬ明るい世界。

一切の悪が存在しない理想郷。

そこにいられたオリスタ・アルバという1人の男は、心の底から幸せだったのだ。

崩壊の足音は、思えばすぐ耳元で鳴っていた。

オリスタに、元老院からとある指令が下されたのだ。その時のことを、今でも深く、深く後悔している。

「チャリベヤという町に、『ブラッドサッカー』が現れた！

奴は吸血鬼だ、その町は奴によって支配されて、みんな『ブラッドサッカー』の使徒にされてしまっている！被害がこれ以上広がる前に、チャリベヤに急行し、殲滅しろ！！」

「なっ！　わかりました、使者殿、連絡ご苦労さまです！　至急チャリベヤへと向かいます！」

チャリベヤ　ヘラス帝国とメセンブリーナ連合の国境付近にある大きな街だ。

マジイ！ このままで、無辜の人々まで傷ついてしまう！

吸血鬼についての知識は薄かったが、それでも吸血鬼に噛まれた者がその眷属になるという知識だけはあったから、オリスタは焦りながら現場へと向かう。それこそ三日三晩休まずに飛行し、被害が広がらぬように？ 悪？ を排除しようと勇躍したのだ。

オリスタと、そのほかの連合所属の魔法使いたちが生んだのは、火の海。

一見上はただの人間 亜人に見える人々を一方的に虐殺し、魂切る断末魔の絶叫に、善良な魂の持主は思わず耳と目を塞ぎたくなる。だが、塞ぐわけにはいかないし、生かすわけにもいかない。彼らは悪だから。平和を乱す病原菌だから。だから 殺したのだ。

そして、その街の全てを灰燼と化した時、オリスタは、信じがたい言葉を、同僚の魔法使いの会話で聞いてしまった。

「へっ、ざまあないな亜人も！ この人間もどきめ！ 正義の魔法使いに逆らうから悪いんだよ！」

「にしても災難だったな、なんでおれたちがこんな害獣駆除に駆り出されなければいけないんだか」

「まったくだぜ。でもま、上も気が利くなあ。こんな、亜人しかいないクソツタレなゴミ溜め場を掃除出来たんだから。清々すらあ」

「さっきの婆が言ったこと、マジでウケたぜ。『お願い、この子だけは助けて！』だってよ！！ だれが助けるかってんだ！

おれたちは亜人を殺すために来たのにな!!」

「……………なに？」

あいつらは、なんて言った？

「おい！ おまえたち、今なんと言った!？」

「っ!？ あ、アルバさん！ お疲れ様です、亜人どもを殺し回つてた魔法の冴え、見事でしたよ!」

「流石は『正義の魔法使い』！ 憧れるなあ、あなたみたいな人に成りたいって思ってたよ!」

「見てましたよ？ 亜人の小娘を風魔法で徹底的に、それこそもう粉微塵にバラしてましたよね？ あれ、どうやったんです？」

魔法使いたちの讃辞の言葉。それに、オリスタは言い知れぬ悪寒と、恐怖を感じた。

あれ、は……………吸血鬼だから、復活できないようにするために……………

「だから！ おまえたちは今、なんと叫んだ?!」

「何って……………なあ？」

「一亜人を駆除できてうれしい《……………》、つて話ですよね？」

「く、駆除?! 亜人を、つて、こいつらは吸血鬼じゃあないのか?!」

「何言ってるんですか。吸血鬼？ そんなのこんなところにいるわけがないじゃないですか」

なあ、と不思議そうに話し合う魔法使いたち。

つまり、なんだ……？

どういう、こと？

これは、いつたい……

オリストタとは決定的に違い過ぎる価値観を持つ男たちは、無邪気に、邪悪に笑った。

「ゴミ掃除、お疲れさまでした」

つまりはそういうこと。

オリストタという男がしていたのは、ただの 守りたいと願っていた世界の破壊でしか無かったのだ。

そのことを知って呆然とし、自失した状態のまま数日を過ごしたオリストタのもとに、元老院からの手紙が届いた。それは労いのための手紙らしい。それが届けられるというのは、かなりの名誉なことらしかった。

「きみは正義を為したのだ。誇りたまえ」

は？

「せい……ぎ……？」

致命的なまでに狂った文章だった。

「あれが、正義……？」

違う。あれは断じて正義などではない。悪だ。己は悪を為したのだ。なのになぜ責めない？ なぜ褒めたたえる？ なぜ正義などと世迷言を垂れる？

ああ、そういえば、あの指令は元老院が下したモノだったな。

今更のように思い出し、オリスタは、正義の味方は、絶望した。

夢に見る。

噴き出る血。デスマスク。罪なき人々の嘆きと悲しみと怒りの顔。

地獄のような悪の景色を。

亜人の、断末魔　悲鳴が耳にこびり付いている。
今も耳に響いている。

手には血。

これまで顧みてこなかった、殺人の傷跡。

「あ、ああ、あああああああ　　ツツツ!!???!??!?!?
!?!?!?!」

そうして男の心は折れた。

信じていたモノが、悪によって守られていたのだと知り。
信じていた組織が、これ以上ない悪だと知り。

抛り所を失った男は、逃げ出した。

オリスタ・アルバは死んだ。

正義の味方などどこにもいなかった。

己はただの殺人鬼。

己はただの悪人鬼。

己はただの愚か者。

神よ我を救い給え。我に殺められし者を蘇らせ給え。悪人に咎

を与え給え。どうか我をお許してください。

全ての悪に、神の裁きを。

逃げついた先は、心の弱い者が頼る宗教の道。

男は祈った。懺悔し、己の罪と嘆きを告げて神に願ひ続けた。

「くだらん。祈る暇があるのなら、自らの手で道を拓け」

鉄拳の如き声だった。

教会で、十字架を前に跪き、祈りを捧げ続ける男の前に、蒼髪の、黒い装束に身を包んだ男が現れて、そう言ったのだ。

「外道を誅する理はこの世になく、天罰は機能をしない。ならば誰が悪を裁く？ 神か、それとも悪魔か？ あるいは、祈りを聞き届けた前任の魔法使いたちか？ 阿呆が。貴様は逃げているだけだ。貴様の願ひは、悪の淘汰。咎への報い。ならばその祈りが他者への依存だとなぜ気づかん」

嘲弄と侮蔑。投げ掛けられたそれに、男は一切の反論を持ち合わせない。

ただ、黙って、その悪魔のような、神のような威光を放つ男に、目が釘付けにされた。

悪魔は言う。聞き手の魂を焼きつくす苛烈な炎を言葉に乗せ、弾劾

のような勢いで男の魂を鍛え上げた。

「願いを遂げたくば己の手を以って為せ。他力などあてにするな。己が悪に堕ちて全ての悪を一身に集める気概で正義を為せ。悪とは、正義とは、手段によって顔を変える風見鶏のようなもの。核なく心なく人を殺めた愚物よ。その愚かしさに埋もれたまま生きると言うのなら、今すぐ、この場所で、私が貴様を殺してやる」

「あなたは？」

男は問うた。

貴方は誰なのだ？

なぜそうも強く在れる？

その蒼髪の男からは、こびり付いて離れない血の臭いがした。硝煙の香りがした。

怨嗟と呪いと嘲りとを受けてなお揺らがぬ、炎の魂を持つ勇者。

その在り方に、羨望をすら抱きながら、男　かつてオリスタ・アルバと呼ばれていた魔法使いは疑問を投げた。

蒼髪の男は言う。

「私は人殺しだ」

己自身を嘲るような、

「私は軍人だ」

己の道を誇るような、

「私は私だ」

己の所業の全てに責任を負う、逃げるということを知らぬこの世の悪。

かつてなく鮮烈な魂の息吹を、オリスタは感じ。

正義を志したかつての己なら、絶対に許容できぬはずの存在。それを、眩しく思えた。

「貴様は何者だ？」

蒼髪の男が問いを返した。

「自分は……」

誰だ？

自分は誰だ？

逃げてばかりいて、いつの間にか失っていた答えを、オリスタは必死になつて探しまわった。

この男の問いに答えねばならない。

答えねば殺されるから、というのではなく、この苛烈なまで己を燃やし続ける男を前に、何も答える事が出来ない己を恥じて、懸命に己の内のどこかにある答えを探したのだ。

「自分は……」

オリスタ・アルバが求めたものは？

逃げて逃げて、何処までも逃げて、オリスタという男が求めたモノは一体何だ？

平和？
笑顔？

……違う。

そんなもの、自分が望む資格は無い。

それはきつと、自分とは違う、本当に強い人たちが守ってくれる。
己はただ、悪を狩り続ける剣となろう。

そう　オリスタ・アルバは生涯唯一無二の答えを得た。

「自分はッ！」

オリスタは吼えた。

宣誓するように、己の新たな在り方の誕生を誇るように、蒼髪の男と同じように、自分自身を誇れる男に成りたいと渴望し、願うように、断ずるように謳い上げた。

「自分の名はオリスタ・アルバ！　地上の悪を根絶やし、神の裁きを代行し与え続ける者！！　自分は迷わず揺るがず躊躇わない！！
この世の正義を守るため、この身を悪とし歩き続ける者だ　ッ
ッッ！！！」

パチ、パチ、パチ。

たった一つの、しかし男の新生を祝福する、蒼髪の男の拍手。
寂しい音が響いているだけなのに、オリスタは、神に祝福されたも同然の思いに浸る事が出来た。

「その魂、称賛と祝福に値する。神罰を代行する執行者よ。その道は己をも苛む修羅の道だ。これから先、お前は地獄を見るだろう。」

今までのそれがちつぽけに思える鬼と刃を交えるだろう。 汝、

己の殉ずる道に魂を捧げる覚悟はあるか？」

「迷わない。躊躇わない。それが私の定めた道だ！」

「美しい。私は聖槍十三騎士団の死に損ない。道を見失い、ただ道を壊した者への復讐を誓う愚か者だ。お前の真つ直ぐで美しい渴望が、心底、妬ましくも羨ましいよ」

「あなたの、名は？」

蒼髪の男は苦笑しながら、オリスタの問いに答えた。

「アオスブルフ・フォン・シュトライテン。……オリスタ・アルバ。問う。私と共に来るか？」

差し伸ばされる手。

誰もが惹きつけられて堪らないそれに、しかしオリスタは 己を確立した男は淡泊に、疑問した。

「あなたについて行くことで、なにかがあるのですか？」

オリスタは、誰かの下につく気などさらさらなかった。

目の前の男は敬服と畏敬に値する傑物だろう。だが、ただ従属するだけの者ではないオリスタには、男のカリスマは届かなかった。

アオスブルフは苦笑した。部下に誘ったのを袖にされ、しかしそれでこそと笑っていた。

そして アオスブルフは態度を改めた。

同盟者を求める対等の立場として、あるいは外部の協力者としての立場として、オリスタに要請をした。

「この世最大の悪の討伐。その一端を担って欲しい」

「この世最大の悪？」

「名をラインハルト・ハイドリヒ。数百万の魂を吸いし悪魔にして、この世界の全てを、殺し合いの戦場に塗り替えようとしている者だ」

「懐かしい過去の記憶を。」

かつて友と呼んだ男を思い返すアオスブルフの顔は、苦渋に塗れていた。

「私は、その男の友だった者だ。私はその男の部下だった男だ。」

友ならばこそ、そのような悪徳を征さねばならん。

部下だからこそ、上官の悪行を諫めねばならん。

オリスタ・アルバ。執行者よ。私と共に来い。共に巨悪を征そうではないか」

「わかりました」

数百万の命を奪い、なお奪うと？

オリスタの掲げる道に、そのような？悪？を許容する道理は無かった。

ゆえにこそ、オリスタは言った。

勧誘の手を執り、アオスブルフと共にいく覚悟を固めた。

「自分はあなたと行きましょう。その悪を征すその日まで」

外伝『信ずる道』（後書き）

というわけでMD様の『オリスタ・アルバ』でした。

以下、その紹介になります。

名前：オリスタ・アルバ

性別：男

身長：173cm

体重：64kg

血液型：A

生年月日：1957年1月16日

趣味：人助け、善行

特技：人間鑑定

性格：生真面目、内罰的、自虐的

好きなもの：正義、笑顔、平和

嫌いなもの：悪、メガロメセンブリア元老院、自分、殺人

称号：神罰の代行者

出演作品：オリキャラのため無し

聖遺物：初代立派な魔法使いが持っていた十字架

武装形態：事象展開型

渴望：全ての悪人に神の裁きを受けさせたい

位階：創造（第3部時点）

形成：人間大の十字架を形成し、視覚情報を介して目にした？魔？の者のみへ神聖属性のダメージを与える。敵味方の差別なし。また己自身にも有効

創造：神世界・天罰空間

自らの周囲に居る、オリスタから見た全ての悪人に対して回避

不可能の光撃を落とす。光撃の威力は悪の重さ〓殺した人数で決定され、その性質上、黒円卓の者のみならず戦場を生きる一騎当千の英雄たち全員にも効果抜群。絶対命中という属性柄、白騎士シユライバーでも避けられない。防御は出来るが、神の裁きを受け入れない〓悪であるため、防ぐほどに威力がどんどん上がっていく。

が、根本的な実力差が埋まるわけではないために、ラインハルトや三騎士を必殺するほどの威力は発揮しない。エイヴィヒカイトである以上自らも殺人をしている、イコールで自らも悪人だと考えているため、創造中は自らも光撃を喰らい続ける両刃の剣で、また、仲間だからといっても彼から見て悪人だと光撃は止められない。光撃を止めるには、オリスタがその人を悪人ではないと本心から認識しなければならぬ。

例えば、アオスブルフは殺人をしているが、その全てが「私」ではなく「公」である。とオリスタが思っている。ため、辛うじてアオスブルフに光撃は当たらない。

【人間関係】

マリーダ ただの同僚

ジューダス ?

ヴィルヘルム 十字架あ? うぜえ

ルサルカ 面白い坊やね

ベアトリス 中佐の部下だよな?

アオスブルフ 好ましく思っではいるが……

メルクリウス また英雄殿の駒が増えたのか

メガロ元老院 ちよ、やめ、殺さないで(ブシヤアアアア!!)

閑話「尋問」

閑話

「尋問」

【 :????: 】

カッン、カッン。

四肢を魔力封じの鎖で嚴重に囚われ、目を塞がれた虜囚の男は、地下の闇の中に反響する軍靴の音を敏感に聞き捨うやガチガチと歯を鳴らして恐怖の念が腹の底から湧き出てきた。

男の顔は完璧に整っており、街中を歩けばまず間違いない十人中十人の女が振り向くだろう圧倒的美貌を持っていた。だが、その顔は完全に恐怖に引き攣り醜く歪んでおり、美しかった銀髪は見るも無残な禿げ頭に刈り上げられてしまっていた。

男が囚われている地下牢には独特のアンモニア臭が充満しており、自身の股間より発されている。

男はついこの間まで普通の人間だった。

取り立てて顔立ちが整っていたわけでも、何か優れた特技を持っていたわけでも、家がお金持ちだったわけでも、友達が多いわけでもない、極々普通の一般人。 だった。

それが急に変わったのは、夢の中に出てきた妙なアンケートに答えてからだった。

『問10・二次創作の小説によくあるテンプレで、あなたは神様のミスで殺されてしまいました。そしてミスで殺してしまったお詫びに何でも願いを叶えてくれると言われました。あなたは何を願いますか?』

男はテンプレと聞いて真っ先に思い浮かべたのが二次創作　チートという最強の異能を得て、漫画やゲームの世界で二度目の人生を満喫する、というものだった。

その時の男は夢の中でアンケートだなんて、変わった夢を見るなあ、程度の気持ちだったわけだが、とりあえず真面目に答えてみることにしたのだ。

『そうだなあ。じゃ、フェイト・ステイナイトのアーチャー……エミヤシロウの戦闘技術と固有結界がほしいな。それで、魔力量はエミヤシロウの10倍ぐらいで、容姿はオッドアイの銀髪イケメン！　んで、「魔法先生ネギま!」の世界に転生させて欲しい。大分裂戦争時代の中盤ごろがいいな。そしていつかは紅き翼に入って英雄になる！　それで、欲張りすぎだけど、女の子にモテモテになりたいな。ハーレムとか作りたいし』

……今にして思えば、なんて安易な考えだったのだろう。

気が付けば赤ん坊として生まれていて、自分が転生したのだと知った。そして己の幼い容姿がアンケートもどきで望んだものと酷似していることに気づき、試しに投影魔術なんて練習してみた。するとどうだろ？ あっさりと投影は成功し、あまつさえ魔力はほとんど減少していない。

狂喜した。

平凡だった一度目の人生。あまりに退屈すぎた人生を生きていたせいで、突如与えられた『平凡ではない』力に酔いしれて、男は10歳のころに両親に黙って旅に出たのだ。

目的地は、当然のように魔法世界。

どういうわけかご都合主義のように密入国に成功し、魔法世界で10年を生きた。

その間に帝国の拳闘大会に出場して優勝したり、一度目の人生ではまったく縁のなかった美少女や美女に囲まれて、毎日をセックスや遊び、時々真面目に鍛錬などに費やして、紅き翼　ナギ・スプリングフィールドが魔法世界にやってくるのをただ待っていた。

ある時、男はその異能を見込まれて帝国に仕官の誘いが来た。いわく、戦力が不足している我が帝国に力を貸してほしい、とのこと。

連合に入る前に帝国に行つて、そこで第三皇女テオドラと親しくなつておくか、と安易に考えて仕官したのが男の間違い。

連合との戦争に参加し、多大な戦功を挙げ続ける彼は、いつしか帝国の最高戦力と謳われるようになり、髪の色にちなんだ『白騎士』、投影魔術にちなんだ『魔剣使い』、一度だけ使ったことのある固有結界にちなんで『錬鉄の英雄』と呼ばれていた。

男は幸せだった。

そして　その転落は唐突だった。

すべては　『白騎士』などという異名のせい。

その異名が奴　　聖槍十三騎士団の白い吸血鬼の逆鱗に触れたのだ。

ある時、帝国に5人の黒衣を纏った男女が仕官を申し出てきた。

1人が、マリーダ・クルス。

男は驚愕した。

なぜ『機動戦士ガンダムUC』のキャラクターがネギま！の世界にいるのかと。

とにもかくにも、そんな驚きなど捨て置いたまま男の食指が動いた。なにせマリーダは19歳の美女としてあらわれたのだ。その美貌とむしゃぶりつきたくなる体は、女の味に溺れていた男が目をつけるのには充分すぎるものだったからだ。

2、3、4人目が、ルサルカ・マリア・シュヴェーゲリン。ヴィルヘルム・エーレンブルグ。ベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン。

驚愕はさらに広がった。

なにせこの3人、男がよく知るPCゲーム『Dies irae』のキャラクターだったのだ。驚かないはずがない。

もしやクロスオーバー物の世界なのか、ここは！　男がそう驚いていると、急に息苦しさを覚えてしまった。何事だと危機感知の本能が　忌々しく呪わしい、そして絶大の恐怖を感じるバケモノ

アオスブルフ・フォン・シュトライテンを認識してしまう。

この5人は、聖槍十三騎士団を名乗った。

聖槍十三騎士団黒円卓第4位、ヴィルヘルム・エーレンブルグ、カズィクル・ベイ。

同じく第5位、ベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン。銘をヴァルキュリア。

同じく第8位、ルサルカ・マリア・シュヴェーゲリン。銘をマレウス・マレフィカム。

聖槍十三騎士団黒円卓番外位、マリアダ・クルス、クシャトリヤ。

そして 第七位。大隊長、アオスブルフ・フォン・シュトライテン、デイリス・スパード。

勝てない。それが、一目見て確信できた。

誰に勝てない？

誰にも。

誰一人にも勝てない。

勝算が見えるのは、マリアダのみ。他は駄目だ。絶対に。特にあの、蒼い悪魔は。

次いで、疑問。

もしやあのマリィダとアオスブルフは転生者ではなかるうか。そんな、自分がそうであるためコイツらもそうだという勝手な確信。

仕官の儀式が終わると、男は早速と二人に声を掛けた。

『アンタたち、転生者か？』

そんな、あまりにバカ正直に過ぎる問い。

それにマリィダは胡乱げな顔をするだけで、アオスブルフにいたっては完全なポーカーフェイスを保ったまま、まずは自己紹介をしよう、と礼儀に欠けた男の態度を指摘してきた。

とりあえず男は名乗った。

そこから先は余り覚えていない。

アオスブルフが喋り、こちらはいつの間にかベラベラと情報を垂れ流し、いつの間にかここがネギま！の世界であると口走ってしまったのだ。

勘違いしていたのだ。

転生者だからこの世界について知っていて当然だと。

だから、無防備に話し切って、アンタらの異能はなんだ？ だなん

て失笑されても仕方がない馬鹿正直さで問いかけた。

マリーダは、完全に冷え切った表情で男を見ていた。

もしかこの女は転生者ではないのか？

そんな可能性に遅ればせながら気づいたとき、男はいつの間にか気を失っていた。

そこからは、男の行方は不明とされ、帝国を脱走した反乱者というレッテルが貼られた。

男が意識を取り戻すと、そこはどこかの地下の牢獄で、両手足は魔力封じの鎖で縛られ、完全に自由を失っていた。

訳が分からなかった。そして 目の前に白い吸血鬼がいることを認識した瞬間。

男は己の運命を悟った。

『白騎士』 たしかヴィルヘルムはその称号を欲していなかったか？

白騎士という称号を持つ黒円卓の大隊長、ウォルフガング・シユライバーを打倒し、己こそが白騎士の称号に相応しいと認識していたのではなかったか？

殺される　　！？

男の確信は、間違っていた。

殺されなかったのだ。ただ　　殺されなかっただけで。死んだほうがマシの運命がこのあとの展開を待っていた。

ヴィルヘルムの拷問。手足を引き千切って遊ばれて、徹底的にいたぶられ正気を失いかけるほどの激痛の毎日。

ルサルカの拷問。ヴィルヘルムのものより本格的なそれで首を切り離され、その中身を覗かれあらゆる情報を抜き取られた末に異能を奪われ、首を体にくつつけられて遊び道具にされた。

そして、暇さえあれば二人は男の拷問のために、ただ遊ぶためだけに訪れるようになっていた。

ヴィルヘルムは、男のことが気に入らないと。猿風情が白騎士の名を名乗っていたことが赦せない。

ルサルカは、男の頑丈な体と男の悲鳴が面白くて仕方がないと。

ただ遊びに来る感覚で、男は延々と拷問の毎日を生かされ続け
いつしか男は言葉と理性を完全に失い、些細な物音一つにすら怯える毎日だった。

カッソ。カッソ。

軍靴の足音が、男の目の前で止まった。

「もうおまえは要らない。死なせて欲しいか？」

いつか聞いたことのある、アオスブルフというバケモノの声。

それに、あらゆる反抗心をもぎ取られた男は、名前すら既に思い出せない男は　小さくうなずいた。

「そうか。　だがおまえの魂は要らないからな。すまんが、殺した後は魂は八つ裂きにする。そうすれば、今度は転生などというふざけた現象に弄ばれることはないだろう」

男は、もう諦めていた。

早く殺して欲しかった。

「　ああ、そういえば、おまえに聞いておかなければならないことがあった」

殺して。

「ウエスペリタティア王国の王女に、ミリオルドという男の護衛がいる。そいつは『オスティアの金獅子』という異名で知られているわけだが、聞き覚えは？」

殺して。

「答える。答えれば楽にしてやる」

「　　ない」

そうか、とアオスブルフは淡白にうなずいた。

ズシュツ。

男は最後に、首筋に走った灼熱の激痛を感じて、永遠にその意識を失ったのだった

「　　そうか。なら、別に殺してしまってもかまわんのだろう？
クラフト」

閑話「尋問」(後書き)

ミリオルドの死亡フラグが強化されました。

第10話「戦争裏を暗躍する者たち」

第10話

「戦争裏を暗躍する者たち」

【 …… 】

それは一匹の畜生であった。

ただ一つの用途にのみ特化させられた、外道の法により養成された家畜。

替えなどいくらでもある、有象無象の虫ケラの一欠片。

そんな、誰からも必要とされない、疎まれ、憎まれ、嘲られる、数多くの郡隊より成り立つ一匹の畜生。それが己だ。

だが、ひとつだけ。1人だけ。

そんな己を必要としてくれるモノが居る。

誰かは知らない。知らないが、ソイツだけは己を必要としてくれる。己が持ち得るたった一つの機能を役立ててくれる。

己にとって、呼吸し、食事し、排泄するこの無意味な生に意味を与えてくれる、たった1人の、青髪の主だ。

己は、その人のためなら何でもできる。

踊れと言われたら踊ろう。笑えと言われたら笑おう。死ねと言われたら死のう。
そして

「h a a a
……」

ぴちゃん、と。手にした剣の刃先から赤い滴がしたたり落ちる。
畜生は立ち上がって、辺りを見渡した。

屍山血河。

屍の山と、血の河。

男がいた。女がいた。みんながみんな勇壮な鎧で身を纏い、そして
みんながみんな、首がない。腕がない。足がない。顔がない。指が
ない。耳がない。鼻がない。バラバラに乱れ、赤黒い柘榴の花を咲
かせている。

そして 殺せと言われたら、誰だって殺してみせよう。

劣化した刃を一瞥して、畜生は手にした剣を投棄した。

ソレは漆黒で身を包んでいた。

黒いローブに似た装束。黒い革の脛当て。黒い鋼の手甲。それぞれが呪的なマジックアイテムで、強力な魔術装甲が施されている。唯一、顔に着けられた赤い血化粧で塗れた白い仮面のみが、黒い畜生の中でくつきりと浮かび上がっていた。

畜生は激烈な攻防によって損壊した宮殿内を練り歩きながら、生き残りがいないかを丹念に調べまわった。

幾つものクレーターが出来て見る影もない、綺麗だった大理石の床。見るも豪華なミリオルドテリアは灯りを失い、鎖一本で辛うじて天井にぶら下がっていたり、床に落ちて破片を散らしている。

赤い絨毯、飾り立てられていた柱、宮殿に華を添えていた調度品の数々。

その中を、足音一つ立てずに畜生は感じられる気配をスンスンと鼻を鳴らしながら辿って、やがて無数の屍が転がる大広間へと辿り付いた。

そこには、畜生と同じような格好をした者たちが壁に頭から突き刺さっていたり、首をへし折られて死んでいたり、上半身と下半身を断ち切られ内蔵物をぶちまけていたり、さきほど畜生が宮殿騎士たちに贈った死に様と似たり寄ったりの地獄絵図だった。

そして、その地獄を構成する全てのモノたちが、己と同じ主に仕える畜生たちだと悟ったが、なんの感慨も懐かない。所詮は死した肉塊。まだ生きてなんらかの機能を残していたのなら、なんらかの延命手段を行使して回収しただろうが、そんな気も起こらなかった。

ただ一匹残った畜生が大広間を見渡す。するとその中心に1人の青年と少女がいたことに畜生は気づく。

見敵必殺。

与えられた指令どおりに、畜生はその男女に歩み寄りながらその風体を分析する。

少女は見るからに気丈そうな令嬢だ。

すらりと伸びた肢体に、薄い金の長髪。あどけない幼顔には表情と呼べるようなものはひとつもなく、あたりの惨状をしっかりと認識しておきながらその全てを直視する精神的タフネスも持っているようだ。

幼いながらもその瞳には確とした知性と強い個我が宿っており、近づいていく己を見ても眉一つ動かさなかった。

そして男 いや、青年は一見ただけでそれとわかるほどの武の達人だ。

180センチ近い長身は、一分の隙もなくみっちり筋肉に鎧われしており、尋常ではないほどの攻方を積んでいるのが窺える頑健な体格だ。

その容貌は、しかし剣呑でありながら静凜とした闘気を宿しており、少女に先んじて己に気づくや庇うようにして前に進み出してくる。

少女は戦力外。

が、青年は極めて危険。

そう正しく認識した畜生が、青年に視点を絞ってその戦力を分析する。

身につけている防具は、申し訳程度の肩当てが右肩に着けられているだけで、後はまったくと言っていいほど防具がない。己と同じく漆黒の装束を纏い、露出した右の豪腕が存在を主張しているだけだ。

武装は、なし。無手だ。おそらく拳士なのだろう。わざわざ相手の土俵に登ってやるつもりも必要もない畜生は、接近戦は避けるべきかと思考する。

「よお、よくも好き勝手暴れてくれたな。……あとはてめえだけだ。死ぬ覚悟と神への祈りは済ませたか？」

漆黒の装束ゆえにわかり辛かったが、注視すると、その青年の両拳と両肘、加えて膝と足に夥しいまでの返り血が付着していた。顔にかかった返り血はなく、すでに拭われた後なのだろう。そして、その台詞から察するに、この大広間の惨状はこの青年が作り上げたものらしい。

「h a a a

」

「ふん……ドイツもコイツも人語を解さない人形どもか。つまらん」

さらに、切り刻むように青年の総身を見渡し、畜生は珍しく感嘆の念を懷いた。

その青年は、その体の内に宿した氣の総量こそ平均的な一流のそれに過ぎなかったが、その練り込み具合は常軌を逸していたのだ。たとえ戦闘の素人であろうと、眼を細めてみれば青年の全身に陽炎のように立ち昇る氣炎のようなものを見ることが出来るだろう。それほどまでに練り上げられた氣は、畜生の目からすれば黄色い焰のように見える。

なるほど。己に先んじて進んでいったモノが一匹も戻ってこないわけだ。この青年と対するには、先行したモノどもでは手に負えない。

「キセキ……」

「……ああ、わかってる。コイツは……これまでの奴とは格が違い」
少女が注意を促す声を上げ、青年は心得ているとばかりに小さくうなずいた。その目は、一瞬たりとも己から離れない。

畜生は、正確に青年の脅威を推し量るや、一言も声を発さずに袖から滑り出てきた3本の剣柄を片手に掴み、剣柄に魔力を送入して魔力刃を構成する。

そしてそれを青年　ではなく少女を目掛けて無造作に投擲した。

「っ!?　チイツ!!」

ギギギン　　ツツツ!!

並みの者なら文字通り眼にも留まらぬ速度で迫ったそれに、青年は盛大に舌打ちしながら右端脚と左端脚の連環腿を振るって蹴り落とし　次の瞬間。投擲された剣の影に隠れて接近して来ていた畜生に、驚愕したように眼を見開いた。

地を縫うように疾駆した畜生の、新たに構築された魔力刃での掬い上げるような一撃。狙うは青年の頸動脈。青年が咄嗟に首を傾けて回避するや、畜生はその投剣を少女に目掛けて投げ放った。

「」のっ　　!!」

『瞬動』。

『入り』と『抜き』が己にも見抜けぬほどの高度な技術で発動された移動術が、少女を串刺さんと迫っていた一本の投剣に追いつかせ、青年はなんとかその魔力刃を蹴り飛ばした。

その隙を見逃す畜生ではない。

『瞬動』とは割りとポピュラーな技である。ゆえにこそ、その弱点を誰でも知っている。

即ち 真つ直ぐにしか進めず、曲がるには一度止まらねばならないという弱点を。

畜生は一切の容赦と躊躇いなくその隙を突いた。さらに劍柄を4本取り出して魔力を注ぎ魔力刃を構築すると、それを投げ放つや青年と同様に『瞬動』で間合いを詰め、近くに転がっていた剣を拾い上げて青年に斬りつけたのだ。

青年は驚くべき反射神経を発揮し、畜生の劍撃を右肩の肩当てで受け止めて左拳を振るった。だがその時には畜生は横に飛んで青年の間合いから逃れており 畜生の背後から追いかけるようにして飛来してきた4本の投剣が、青年の目に入った。

瞠目する青年。

これこそが畜生が最も得意とする外法の術。『暗剣』だ。

投げ放った剣の影に隠れて接近するパターン。

投げ放った投剣を『瞬動』で追い越し、対象にその存在を隠して接近し、目の前で姿を翻して対象に投剣を直撃させる奇襲技。

これを初見で破るのはまず不可能。氣の装甲をまとって防ごうにもこの投剣は1本1本が膨大な魔力で研ぎ澄まされた代物である。数十人がかりで展開した結界さえも貫通するそれを、個人で防ぐのは極めて困難だ。

加えて、青年はこの攻撃を回避することすらできない。

なぜなら。かわした先には守るべき対象だろう少女がいるのだから。

直撃。

青年は最小の犠牲で、何とか畜生の奇襲攻撃を防いだ。その左腕を代償に。

「てめえ……狡っからい攻撃ばかりしやがって……！」

したたり落ちる血が、ぴちゃん、と床に落ちる。

青年の左腕は完膚なきまでに破壊され尽くしていた。左肩に一本。左上腕に一本。左肘に一本と左手首に一本。千切れかけた腕は、なんとか胴体に繋がっている有様だ。

激怒する青年と、少女。

しかし畜生は、偽らざる賞賛の念を青年に懐いていた。

なにせ己が投じた魔力剣は、数十人がかりで張った結界をも貫通する代物である。

それを4本とも、しかも腕一本で凌いだのだ。青年が練り上げた氣の装甲の厚さには脱帽ものの感動を覚える。

左腕は奪った。ならばこれで五分だろう。

畜生は、決して青年を見くびっていなかった。その戦闘力は、この僅かな攻防だけで十分に把握している。もしも万全のまま対峙したなら己もまた瞬く間に青年に縊り殺されていたことだろう。

左腕を奪ってようやく互角。とっておきの奇襲技を使ってなお、互角の戦力。こんな難敵は、はじめてだ。

「おう、てめえ。もしもこれ以上狡つからい動きをしてみる。……その瞬間がてめえの最期になるぜ？」

言われずとも承知している。

青年もまたこちらの戦法を知った。ならば、いかようにも対処できるだろう。

己はまだ皆殺しの指令を完遂していない。まだ死ぬわけにはいかないのだ。

対峙する、1人の戦闘者と一匹の殺し屋。

互いに殺気を 強烈な？殺？す？気？を総身より放射し、夜の冷気を灼熱の熱気に変えているかのような錯覚が、宮殿の大広間に充満していった。

青年の総身から、目を逸らしたくなるほどの覇気が発される。右拳を構えたその姿は、気の弱い者なら対峙しただけで失禁してしまいそうな迫力があつた。

白い仮面の下で畜生は嗤った。こんな興奮は、はじめてだ。

存在感は薄いが致命的なまでに常理を外れた戦闘人形は、右手に三本、左手に三本の剣柄を構えて魔力刃を構築し、防御の構えを取つた。

対峙。

隙を探るように眼を細め、互いに好機の到来を待ち受ける。

「
……」

互いに掛ける言葉は持ち合わせていなかった。
話し合いなど無い。武人として 戦闘者として対面した今、両者
にあるのは相手を必殺するという意思だけだ。

「
ッ！」

先手は青年であった。

これ以上の隙の探り合いは無用。敵手が隙を晒さぬのなら、無理やり
にでも防御の構えを崩すまで。その意思をあらかじめさまなまでに畜
生に見せつけながら、10歩の間合いを詰め寄った。

白い仮面の畜生は、応じる手を誤らなかつた。

三本の投剣を精密な機械のように青年の眉間、喉、心臓を目掛けて
投擲したのだ。続いて黒いローブの裾を翻し、左に跳躍しながらさ
らに三本。拳士の間合いに自ら入る愚を犯さず、徹底して距離を空
ける戦術だ。

正しい戦術。間違いではない。だが

……瞬間。青年の顔が嘲りに歪んだ。

嘲笑。嘲弄だ。

馬鹿めがと、青年のその瞳は語っていた。「正しいからこそ読み易
い」と、そう言っている。「下法の者なら外道らしく、最期までそ
う振舞えば良いものを」と、哀れんでいる。

一瞬、それを悟った畜生の脳裏に疑念が芽生えるが、すぐにそれを
思い違いだと考え、距離を空け続ける戦術を、さらに投剣を七本投
げつけるまで続けた。

四、五、六、七本。速射砲もかくやの超人的な膂力で放たれたそれ

は、精密な機械のような正確さで青年の急所を穿たんと迫る。
同時。
畜生が驚愕した。

彼我の距離は8歩以上。

長身の青年は、それを僅か一步で詰め寄ったのである。「瞬動」ではない。「活歩」の歩法だ。
畜生の知識が、それが八極拳の秘門たる離れ業であると看破した。畜生は己の失策を悟るも、遅い。青年は畜生に近づきながら、投げつけられた全ての魔力刃を右腕の「纏」の化剄だけで捌き抜いた。本来の化剄は敵の拳を巻き取って受け流すだけの技だが、青年はその技量と氣の装甲を以って投げられた刃をさえ捌いて見せたのだ。

慄然となった畜生の内懐に、黒い装束を纏った長身が死神のごとく滑り込む。

八極拳が最大効果を発揮する至近距離。その拳は、八方の極遠に達する威を以って敵門を打ち開く。踏み込まれた震脚が大理石の地面を雷鳴のように打ち鳴らし、繰り出された巖の如き縦拳が、畜生の胸板に直撃する。

八極拳の金剛八式、衝睡の一撃。

もはや胸元で手榴弾が炸裂したも同然の威力だった。吹き飛ばされた畜生の体は宙を舞い、激しく壁に叩きつけられる。肺と心臓を諸共に粗挽き肉へと変えられていた。

「……………」

残心。

右の拳に即死の感触を得ていながら、青年　ミリオルド・A・シ
ユツラーハは一瞬も油断を見せなかった。
敵は超常の世界に生きる異端の者である。もしも敵手が心臓を潰さ
れても動くことが出来るバケモノならば、ミリオルドが構えを解い
た瞬間を狙うだろう。

やがて、敵手の落命をその静寂で確信したミリオルドは、ゆっくり
と構えを解いた。

「　キセキ！」

決着を知った少女が、あられもない悲鳴をあげた。

ミリオルドがゆっくりと振り向くと、その少女　ミリオルドが守
護するウエスペリタイア王国の王女、アリカ・アナルキア・エン
テオフユシアがミリオルドに縋り付いてきた。

「……んだよ。まだ残党がいるかもしれないねえから、あんまり大きな
声は出すなっ」

「馬鹿者！　腕が……お主の腕が千切れかけておるのだぞ！？　な
ぜそつも落ち着いていられる！」

先程までの無表情が信じられないほど、アリカ王女は表情を崩して
涙を流していた。

アリカにとって、ミリオルドは小さい頃から共にいた唯一の友であ
り、魍魎跋扈のオスティアで腹を割って話せる無二の存在なのだ。
そのミリオルドの腕が　幼馴染の騎士の腕が失われようとして
いる。普段は気丈な姫でも、こればかりは能面の無表情で流せるわ
けがなかった。

「あー……」

ミリオルドは困ったような声を出しながら、自身より圧倒的に小柄な少女の泣き顔から目を逸らしつつ、少女の頭に無事な右手を乗せて撫でた。

「あれだ、俺はこれぐらい覚悟してるからな。どおってことはない。それよりも、アリカに怪我はないか？」

「ない。お主が守ってくれたからな……。……それにしてもあの卑怯者！」

キツ、とアリカはミリオルドの胸に顔をうずめながら、横目にミリオルドと交戦した白い仮面の男に激しい怒りを孕んだ憎しみの目を向けた。

「わらわの存在に付け込んでキセキを攻撃するなど……恥を知らぬのか?!」

「もう死んでるって。それに……暗殺者に正々堂々なんか求めても無駄だ」

カッコつけてみたはいいが、ミリオルドとて忌々しい思いはある。ミリオルドの左腕は使い物にならなくなっていたのだ。不幸にも治療の魔法を使える者は近くには居ない。この大規模な暗殺者の集団が来るまでは居たが、残らず殺されてしまった。

つまり、治療の魔法をかけて貰う前にミリオルドは左腕を切断し、その存在を諦めねばならないのだ。

高性能な義手を買わないとなあ。とミリオルドは考えながら、とりあえずアリカをぞんざいに引き剥がしながら、懐から短剣とひとつのマジックアイテム　魔力を帯びた包帯を取り出す。

「キセキ……？ よせえッ！！」
「っ！」

ザシユ。

右手に握った短剣を左腕の根元にあてがうと、ミリオルドは躊躇なく斬り払った。

ぼとりと落ちる左腕を見て、アリカが悲鳴を上げる。

許容外の激痛がミリオルドの脳を焼くが、ミリオルドの右腕は迅速に動き続けた。魔力を帯びた包帯を傷口に巻きつけて出血を押さえ込み、痛みを封印する。

「このっ、愚か者がツツッ！ 治療をしてもらえばその腕は」

「無理だ。暗殺者の武器で傷つけられたものを、いつまでもくつつけておくわけにはいかねえ。それに、その治療の魔法を使える奴が近くに居るとも思えねえし」

「くっ」

悲痛な顔色で寄り添うアリカに、ミリオルドは苦笑した。

（そんなことがわからんわけでもないだろうに。……いやあ、いい女になつてくなあ、アリカは）

自身が仕える王女殿下に対するにはあまりにも不遜で不敬な態度をとる護衛騎士は、これからアリカが巻き込まれていくだろう戦乱の時代を思つて、ポツリと呟いた。

「にしても……コイツら俺ばかり狙つてやがったが……何のつもりだ？ 『コスモ・エンテレケイア完全なる世界』めが……」

閑話「黒円卓の日常」

閑話

「黒円卓の日常」

【 :???: 】

「へえ、やるじゃない金色の子猫ちゃん」

ヘラス帝国の帝都・皇宮。その一室にて。

そこは、たった5人の黒衣の者たちの存在のせいで、世界で最も平穏とはかけ離れた魔境となっていた。

その魔境を形成している5人の1人　ルサルカ・マリア・シユヴェーゲリンは、割と本気で感心したように笑い、同意を求めるようにこの中で最も古い付き合いであり、かつ現存する黒円卓の最高位にある青髪の男に目を向けた。

「…………ふん。『腕試し』程度の感覚で送った刺客を相手に片腕を失うなど、とんだ期待外れだがな」

アオスブルフはルサルカの？目？から送られてきていた視覚情報を共有していたため、仔細に状況を把握できており、刺客を送った先

オスティアの王宮にいるミリオルドがどのようにして戦い、どのようにして左腕を失ったのかも把握していたが、失望したように

嘆息しただけだった。

辛辣な評価に、ルサルカは苦笑する。

「あらら。ねえヴァルクユリア。あなたはどう思う？」

「……彼はアーティファクトは使っていない。それを使った上でマスターの補給を受けられたのなら、今のものより数段上の戦力は発揮するはず」

ヴァルクユリア　ベアトリス・キルヒアイゼンは普段の明るさを
なりを潜めさせ、冷静に、冷たくルサルカに対した。

その言葉に反応したのは、壁にもたれかかって立っていた白髪白貌の吸血鬼だった。

「ハッ。どっちにしろ大したあねえだろ。おいスパイダ。なんでこんな奴を生かしてんだ？ 俺にやちつとも理解できねえ」

「コイツが金獅子……『黄金の獣』と似たような異名持ちなのが気に入らないのか？ 安心しろヴィルヘルム。あと数ヶ月先に大きな戦争が起こる。そこで殺せばいい」

串刺し公　ヴィルヘルム・エーレンブルグの掛け値なし本気の殺気が混じった不満を、アオスブルフは笑って受け流した。

この場　いや、世界中を見渡しても群を抜いて強大な存在であるアオスブルフにとって、同胞たる魔人ヴィルヘルムの殺気でさえ微風のようなもの。本気で殺し合う場でないざ知らず、このような場で戦いを挑んでくるほどヴィルヘルムとて頭がないわけではなかった。

ゆえに警戒するに値せず。アオスブルフはそう判断している。

「アンナはお手柄だったな。『黒鍵』、だったか？ あの白騎士もどきの知識の中にあつたものは」

「ええ、そうよ。他には伝説上の宝具がたくさんあるわ。エクスカリバー、カラドボルク、干将莫耶とか、かなり完成度の高いものが『黒鍵と干将莫耶のような、凡人でも努力すれば使いこなせるようなものは量産しろ。私の部下の下にある道具どもに装備させる」

一時期帝国最大の英雄の名をほしいままにしていた患者の名を挙げ、アオスブルフがルサルカに問いかける。するとルサルカはかなりの上機嫌になり、対してヴィルヘルムは患者の存在を思い出し不機嫌になる。

「で、奴から奪つた異能に、他に力はないのか？」

「他について言うより、『投影魔術』の大元は固有結界とかいうベいの創造に似たもの。体内の異能の副産物みたいなものね。そこから零れ落ちたものが、投影魔術っていう異端の業に繋がってるみたい。ま、どちらにしろわたしの戦力が大幅に向上したわ。殴り合いは本来得意じゃないけど、今ならとっても得意になつてるに違いないわよ」

「ああ？ 俺の創造と似た能力？」

称号で呼ばれたヴィルヘルムが、胡乱そうにルサルカを睨みつける。

「正式名称を『固有結界：無限の剣製』。それが刀剣なら、たとえ聖遺物だろうとなんだだろうとコピーすることができる異能。一度視認しないと駄目だけど。あ、そうだフランメ！ あとヴァルキユリア！ あなたたちの聖遺物出してみて？ きつと完璧にコピーして見せるから！！」

「断る」

剣をコピー？ そんなことを剣士たるアオスブルフとベアトリスが許すはずがなく、ルサルカは残念そうに唇を尖らせた。

「しかし、どちらにしる宝の持ち腐れだな。お前には剣の才能は皆無だろ。そして剣技を磨く気もゼロときた」

「なによあ。そこはほら、憑依経験とかいう奴でカバーできるし」

「わたしの『戦雷の聖剣』を仮にコピーしたとして、わたしの創造の力までコピーできるの？ その異能は」

「あ。できないわ」

残念。とルサルカは消沈し、いつの間にか投影されていたアヴァロン……伝説の聖剣の鞘を4つ取り出し、それをこの場に居合わせたメンバーに渡した。

「これは？」

「宝具アヴァロン。エクスカリバーの鞘。持ち主に不死性を付与し、傷を癒してくれるスーパードアイテムよ。わたしが投影する過程で、わたしの魔力で作動するようにしてあるから、みんなの体に埋め込んでいて」

「アンナ……先に言っておくが、それ以外に仕掛けがあったりしないよな？ おまえの任意で体の中で爆発するとか」

「フランメ！ わたしがそんなことをすると思ってるの?!」

「するだろうな」「するだろ」「弁護できない」「……………」

アオスブルフ、ヴィルヘルム、ベアトリス、マリーダの順で確信的な目を向けられたルサルカはウツ、と言葉に詰まったが、すぐに顔を真っ赤にして怒鳴った。

「なによなによみんなして！ しーてーまーせーんうっ！ 誓って

言えるわ、絶対にそんな小細工はしてません！ なんなら強制証文を血で書いてあげようか!？」

「おう、書け」

ヴィルヘルムの容赦なしの言葉に、ルサルカは呻きながら証文の作成に取り掛かった。「なによお、人がせっかく善意で頑張っただのにい」とつぶくさ文句を言いながら。

「 マスター、昼食の準備ができました」

厨房に居たマリーダの声が届き、アオスブルフが他3人に声をかける。

飯だぞ。……ジューダスは何処だ？

やっとできたか、トロいんだよ。

おお、マリーダの御飯かあ。久しぶりだなあ。あ、戒も呼んでこようかな。

ちよつとお?! わたしの分も残しといてよねえ!

そんな、黒田卓の食卓。その日常の一風景であった。

第11話「金獅子と紅き翼」

第11話

「金獅子と紅き翼」

【 …ミリオルド … 】

「おいおい、左腕とられたってどういって冗談だよ」

赤毛の少年が呆れたような、驚いたような顔で問いかけてくるのに、俺は肩を竦めるしか術を持たなかった。

「アリカの奴を守った時にな、暗殺者にやられちゃった。分かり易く言えば名誉の負傷、って奴だぜ」

「なんと……まさかミリオルド殿の片腕を奪うほどの敵だったのか」

詠春が驚愕したように呻く。

新たに『紅き翼』に参加した4人の男　ジャック・ラカンと、フイリウス・ゼクト、白髪青年、黒衣の男は興味深そうに俺の話に耳を傾けていた。

「いや、あれは強い、ってんじゃないかって、『したたか』って感じだった。徹底的に戦いを『殺し合い』だと定義し、周りにあるもの全てを利用する戦争屋の戦い方　って感じだな。多分、アレを鍛え

たのは相当の合理主義者　それか究極のバケモノだろうよ」

「へえ〜。金獅子がそこまで言うなんてな。俺様も少し興味が出てきたし昂って来た。……よしミリオルド！　いっちょやろうぜ！」

「待て待て。せめて義手ぐらい付けさせる。堪え性の無い筋肉だなおい！　まだかプリームム！」

「ふっ、堪え性がないのはキミも同じようだね　「あ？」　あ
んまり睨まないでくれ。怖いじゃないか」

白髪の青年、プリームムが持ってきた漆黒の義手を奪い取り、俺はそれを検分する。

なんか黒人の生腕みたいなデキだな。

此処はオステイアの高級ホテルである。

先のオステイアでの戦いで『紅き翼』の面々と知り合った俺は、『完全なる世界』の存在を知ったアリカの命を受けてナギたちに接触し、こうして時々だけ彼らと顔を合わせるようになっていた。

近況の報告を受ける。どうやらナギはアンチヨコを破棄、魔法呪文を全て暗記し、さらに多くの魔法を修得、肉弾戦での鍛練を積んでいるとの事。

詠春、アルビレオもまた同じく。初めてナギがラカンと戦った時、

ナギがラカンに勝つたらしい。引きわけではなく。

原因は、きっと以前の戦場で現れた強大に過ぎる馬鹿げた気配のせいだろう。

あの気配　ナギ曰く、アオスブルフという男　が現れた瞬間、戦場は凍った。比喻でも何でもなく、周囲の気温が一気に低下したのだ。

勝てない。

一騎当千の英雄たちが、残らずそう確信した。俺も、到底勝てる気がしなかった。

いつかあの敵と対面する時、俺は生き残れるのかどうか……
今になって、左腕を失ったことが悔やまれる。

それはともかくとして

(なんで、なんでアーウェルンクスとデュナミスがこんなところにいるんだよッ!!)

内心で、ミリオールドは絶叫していた。

何度目かの対面の時、『紅き翼』は4人ほどメンバーを増やしていた。

しかも俺の知らない間に妙なイベントがあったらしく、……どうい

うわけか。

原作では『紅き翼』の宿敵として登場した『完全なる世界』のメンバーが、『紅き翼』に参加していたのだ。

その二人こそ、一番目。^{プレミアム}そして黒衣の魔法使い、デュナミス。なぜか『紅き翼』に参加して、帝国と戦うことになっているらしい。

「彼らと君たちでは戦力に差があり過ぎる。だから助太刀するよ用に？彼？に命じられたのさ」

初めて会った時、「完全なる世界の人形が、いったいなんのつもりでここにいる！？」と殺気全開で問い詰めたら、プレミアムは妙に人間らしい仕草でそう言っていた。

そして、「所詮僕は『ツアラトウストラ』の試作品だ。なら、試作品なら試作品らしく、バグを生んで主に反抗しないと」とも。

本格的に、決定的にミリオルドの知る『魔法先生ネギま！』の展開とは違ってしまっている。どうすればいいのか、まるでわからなかった。(ツアラトウストラってなんのことだ?)

「…………お。割とイイ義手だな、これ」

装着し、俺は感嘆した。

プリームムが持っていたというそれは、見事なぐらい俺の腕となっていた。

流石に生身と比べると氣と魔力の通しは悪いが、それでも自由に動く。これでハンデは無くなったと思って良い。

「いずれ戦うことになる敵のために、今は君ほどの戦力を失うわけにはいかないからね」

「…………ワシはその敵と対したことはないから分からぬが、そこまで強いのか？　ワシら総出でかかっても勝てぬほど？」

「…………ああ、悔しいが、今の俺たちが束でかかって、勝てねえ」

ナギが、ゼクトの疑問に応える。

それを茶化すかのようにラカンが笑った。

「嘘だろ？　そんな化け物いるわけねえだろ。ナギと互角に戦ったっていう女が子供扱いされるって、んな馬鹿な」

「事実だぜジャック。俺は、ソイツを倒すためにアンチヨコは棄てたし、ジャックとミリオルドを見習って氣の扱いを修行してる。…

…それでもまだ、影さえ踏める気がしねえ」

「…………マジかよ」

真剣な顔。底抜けに馬鹿だったはずのナギが、己の『馬鹿』から卒業し、完全に努力をおこない始めていた。

天才が本気で修練を積んでいる。最初から強かったバグが、さらに強くなるうとしてている。

（本格的に、原作からズレテ来てるしな……俺以外にも転生者がいるのか？）

ミリオルドはそう思う。

「……多分だけど、アオスブルフの野郎は、次の決戦　グレート
＝ブリッジでも出てくるはずだ。ジャック、お師匠、プリームム、
デユナミス。いいか、絶対に油断するな。いつでも死んでるって、
殺されてるって覚悟して戦場に立ってくれ。　それほどやべえん
だよ」

「……はっ、面白いじゃねえの。俺様を負かしたナギがそこまで言
うんだ、俺様だって負けてらんねえ。　よし、気が変わった、こ
こからはみんな修行しようぜ！」

「『紅き翼』修行編ですか。いいですよ、私もまだ死にたくありま
せんし」

「私も賛成だ」

「僕も参加しよう。君たちの強さには興味があるしね」

「プリームムが出るなら私もやろう」

「……ふむ、ワシも参加しようかの。ミリオルドはどうする」

「馬鹿。最初は俺とラカンの戦いの筈だったんだぞ？　どいてる脇
役ども」

笑いあい、8人の男たちは全員力強く笑いあい　味方なしの超バ
トルロワイヤルが、アルビレオの魔法球の中で展開された

『紅き翼』とミリオルドは知る由もなかったが、黒円卓では巷で噂の究極技法、『感卦法』などがアオスブルフによって基本中の基本とされ、全ての団員たちが修得していた。果たして、彼らが黒円卓に勝つ事は いや、一矢報いる事は出来るのだろうか。

第12話「ウエスペリタティア王家の事実」

第12話

「ウエスペリタティア王家の事実」

「……どうしようか」

アオスブルフは迷っていた。

「……私が戦えば10分以内に殲滅できるが……」

考えているのは、明日にでも開幕するグレートブリッジの戦争の事だ。

『完全なる世界』の副首領として連合と帝国の戦争を長期化させるのには成功した。が、いざ終幕が近づいて来るにつれて私は追い込まれていた。

戦争に。観覧者を魅せる舞台作り。

本当なら己が出張るのが確実なのだが、そうなったらあまりに一方的になり過ぎる。ゆえに私が出るわけにはいかなかった。

あまりに格が違い過ぎて戦闘にすらならない。そんな戦場に私が出ようものなら、それだけで勝敗は決すると言っても過言ではないのだ。

ベアトリスやアンナ、ヴィルヘルムは聖遺物の使徒である。そして

マリーダとジューダスはこの私の従者、私兵でまだ人間。この中で一番弱いその二人でさえ、紅き翼のリーダーと互角に戦える。

「……キルヒアイゼン達を連れて来たのが間違いか」

これではただのオーバークイルだ。舞台監督者としての力量が問われている今、オペラの観覧者であるクラフトに笑われるのは避けたい。

苦し紛れの策として、限界まで強化に強化を施したアーウエルンクスの人形　ツアラトウストラの試作品らしい者たちを『紅き翼』に送って戦力比のバランスを取ろうとしたが、所詮は焼け石に水。遊びがある性格で、かつ明確な弱点が存在するヴィルヘルム相手なら戦えるが、弱点の無いバランスに優れたベアトリスと、用心深く、また近距離での戦闘方法まで確立したアンナには、到底勝ち目はないだろう。

「……仕方ない。私の代行として部下を出すか」

これまでずっと裏方に回っている間、私は遊んでいたわけではない。いずれ起こるシャンバラでの戦争。ラインハルトとの根本的な【兵力差】を承知している私は、なんとかその差を埋めるべく私兵を溜めこんでいた。

その筆頭が、マリーダとジューダスである。あと2人いるが、そいつらはジューダス達ほどではない。

だが私兵4人にはまだ聖遺物は与えていないため、実戦経験を積ませる意味で、私の代わりに使うにちょうどいいかもしれない。

「……この戦争が終わったら、聖遺物を与えるか」

頷きつつ、私は革張りの椅子から立ち上がり、政務を押し付けてきた帝国宰相オリガに対する躰け方法を考えながら執務室を後にする。

（にしても……オリガの奴、調教がそんなに楽しいのだろうか）

恍惚の表情で見つめてくるメスの事を思い出して、アオスブルフは嘆息したのだった。

「聖槍十三騎士団、だと……？」

俺　ミリオルドはメセンブリーナ連合の諜報員、ガトウ・カグラ・
なんとかの持ってきた情報に、思わず絶句した。

連合の、帝国に対する奇襲作戦、グレートブリッジ攻略作戦の前日の事だ。俺は戦争に参加するべく『紅き翼』に合流したアリカ王女の護衛としてやってきており、敵側の情報をまとめて、対策を立てるべくこうして一同に顔を合わせていたのだ。

宿の中で、ナギを始めとしてラカン、詠春、アルビレオ、ゼクト、ガトウ、プリムム、デュナミスの七人と、俺、アリの力の合計10人は、情報を並べ、どのようにして対するかを話しあっていた。

「マジかよ、ジャンル違いにもほどがあるぞ……！」

聖槍十三騎士団 あれから……転生から25年も経っているが、不思議とその名前だけは憶えていた。いや、思い出した、と言った方が正しいかもしれない。

PCゲーム『ディエスイレ』。

俺がPCゲームの中で初めて『燃える事の出来た』作品で、大好きなゲームである。

当然、その登場人物たちの滅茶苦茶ぶりも憶えている。到底 『魔法先生ネギま！』世界の連中が勝てる相手ではない。

本来ならネギま！世界に存在しないはずの名前とあって、俺は不思議と、それが【本物】なのだと認識できた。

「お、おい知ってんのかよミリオルド」

ナギが驚いたように訊いてきた。

確か旧世界の史実にも実在した組織のはずだが、学の薄いナギが知っているはずがなく、また日本人の詠春が知っているとは思えない。

「……聖槍十三騎士団。私は、聞いた事があります」
「アル？」

戦慄に身も心も凍ってしまった俺に代わって、アルビレオが口を開

いた。

「1940年代に結成された、ナチスドイツのオカルトクラブ。本来は、ナチス高官のお遊び程度だったものが、ある時から、本物の『バケモノ』軍団になったのだと」

「……よく知ってるじゃないか、アルビレオ」

俺は肯定の意を乗せてうなずいた。

「端的に言っぞ。ぶっちゃけ今の俺たちにはそいつらの身の上なんかどうでもいいしな」

俺は、アリカ、ナギたちの目を見渡しながら、恐らくはガトウやアルビレオすら知らぬ情報を提供する。

まずは聖槍十三騎士団の構成員。今現在確認されている、ヘラス帝国にいる3人のバケモノについてだ。

黒円卓の第四位、ヴィルヘルム・エーレンブルグ。
犯罪者上がりの経歴を持つ殺人鬼で、白貌鬼とも言われる。近親相姦から生まれた畜生児でアルビノ。日光をはじめとする光を忌むが、夜には全ての感覚器官が増幅される吸血鬼のような体質である。本人もそれをアイデンティティとしており、吸血鬼じみた属性を好んでいる。

ワルシャワ蜂起戦において敵、市民、同胞を虐殺し串刺しにして晒したことで粛清されたとされているが、その後も世界各地の戦場で目撃されており、兵隊世界では「絶対に戦ってはならない」と言われ、伝説となっている。

「ヴィルヘルム・エーレンブルグ……?!」

不意に、その名を聞いたアルビレオとゼクトが驚愕の声を上げた。

「……アルビレオ・イマ、そのヴィルヘルムとは、どういう輩なのじゃ？」

アルビレオたちの様子に、アリカが訊ねた。

本来なら王女が戦場に出るなどあつてはならないと俺は反対していたが、聖槍十三騎士団の名を知つては止める気も失せている。

アリカの王家の魔力。この助けが無いととてもではないが戦う気にもなれない。

「……最強にして最悪の吸血鬼のことです、王女殿下」

「最悪の吸血鬼じゃと？ それは、『闇の福音』のことではないのか」

「その『闇の福音』が、ヴィルヘルム・エーレンブルグに討ち取られたのですよ。ですから吸血鬼という種族で最強なのは、彼です」

「『闇の福音』が討たれた……！？」

この場に居た全員が絶句した。

ただ、情報通のガトウだけは驚いた様子はなく、俺に早く話の続きを促してきた。

「……次に第五位、ベアトリス・ヴァルトルート・フォン・キルヒアイゼン、ヴァルクユリア」

聖槍十三騎士団黒円卓の第五位。戦乙女と称えられた独ソ戦争の英雄であるが、性格は陽気で飾り気のない気さくな女性。他団員とは異なる陽的な気質の持ち主で、本来騎士団に居るには不自然な人物だ。

魔道に頼らず純粋な剣士としての技量を極めており、魂の総量などの根本的な力の差を別にすれば、幹部と伍するほどの戦闘技術を持っている。

「あ？ 魂の総量、ってなんだよ」

ラカンの疑問。それに、俺は肩を竦めた。半ばやけっぱちな気分だった。

「それを説明するには、まず『エイヴィヒカイト』について知らないとな」

「エイヴィヒカイト、とはなんじゃ」

「永劫破壊……黒円卓の副首領が編み出した複合魔術だよ」

魔術と言っても、本当の『魔法』の域にある超理論だけだな、と笑いながら俺は言った。

聖遺物……聖なる遺物ではなく。なんらかの信仰、怨念を帯びたマジックアイテムを武装化し、超常の力を行使する理論体系。

駆式に人間の魂を必要とし、エイヴィヒカイトを操るには常に殺人を続けなければならない。ただ殺した人間の数に相当する霊的装甲を常時纏うようになり、殺せば殺すほど強くなっていく。また、原則としてエイヴィヒカイトを操る者には銃火器やナイフ、打撃などといった“常識的攻撃手段”は通じず、ダメージを与えることは出来ない。その他の特性として、

- 1．聖遺物とその使徒は、聖遺物によってしか倒すことが出来ない
- 2．聖遺物が破壊されればその使徒も死ぬ
- 3．聖遺物による攻撃は、物理的・霊的の両面で防がなければ止められない
- 4．聖遺物が破壊されない限り、その使徒は不老不死

「ちよ、ちよつと待て！」

詠春が慌てて話をせき止めてきた。

「それは、つまり、……連中を倒すには聖遺物がないと不可能だという事か!？」

「ああ」

「神鳴流の斬魔剣式の太刀なら」

「さあ？ 切るモノを選択できるって言ったって、お前、千以上ある魂の中から連中の本来の魂を見極める事が出来るか？ できたにしても、確率は千分の一だ。幹部の中には十万近い魂を持つてる奴がいるって話なんだぞ」

「なっ!？ くっ……」

「おいおい、いよいよ反則じみてきたな」

ラカンが冷や汗を浮かべながら言った。

ラカンも理解したのだろう。『殺せば殺すほど強くなる』 つまり、大量殺戮者集団である黒円卓のバケモノぶりを。

「……君は、どうしてそんなことを知っているんだい？」

ブリームムが疑問を投げってきたが、俺は素っ気なく答えるしか術を持っていないかった。

「なんで知っているかは問題じゃねえだろ。今は対策を立てるための時間のはずだぜ？」

「……そうだね」

「気も、魔法も通用せぬのか？」

ゼクトの疑問。それに俺は頷いた。

「言っただろ。聖遺物以外の攻撃は利かないってよ。現に、ガトウ

」

「……ああ、ミリオルドの言うとおりだ。連中と交戦して逃げ帰って来た魔法使いはこう言っていた。『魔法がまったく利かなかった』ってな」

「……なんと」

だんだんと暗くなる雰囲気。俺はそれを意に介さず、さらに3人目の情報を述べた。

「第八位、ルサルカ・マリーア・シュヴェーゲリン」

実年齢は副首領を除いた団員の中で最年長を誇り、気まぐれでマイペースな性格、かつふざけたような言動が目立つが、その本性は狡猾で残忍で老獪な拷問好きで、ヴィルヘルムと残忍さは同等。

基本的に戦闘型ではないが、それでも魔人の1人である。戦闘型ではない、というのは、黒円卓の中では、の話であり、実際に戦場に出れば一騎当千なんて言葉すら生温い最凶の魔女である。

「……おい、アオスブルフって奴と、マリーダはどうなんだよ」

ナギの問い。それに俺は首を傾げた。

「アオスブルフ？ マリーダ？ 誰だそれ」

「アオスブルフを知らないのですか！？ 聖槍十三騎士団を知っているのに?!」

「あ、ああ」

アルビレオの驚いたような言いように、俺は困惑した。

アオスブルフ……？ マリーダ？ 誰だよそれは。

俺は、そんな奴、知らない。

「アオスブルフ・フォン・シュトライテン。聖槍十三騎士団の大幹部。現存する新・旧世界の最強の魔人。その首に懸けられている懸賞金は、大国二つを丸々買い取れるほどで、魔法界、旧世界、その全てが国の威信にかけて追いかけている怪物の中の怪物。闇の福音など、彼と比べれば赤子も当然ですよ」

「ちよつと待てよ！ だったらなんで、ソイツは帝国の中に居られるんだ！？」

「『完全なる世界』。その副首領だからじゃ」

アリカが言った。

『完全なる世界』 その名を始めて知ったナギたちが、そしてプリームムとデユナミスが驚いたようにアリカを見やった。

そして、アリカはそれまでガトウなどの諜報員を使って調べ上げてきた情報を、『紅き翼』に掲示した。

連合と帝国を操る組織の事。

戦争が何故これほど長く続き、なぜ、そもそも些細なきっかけで戦争が起こり始めたのか。

「なんだよそれ！ つまり、あれか！ そいつらは世界を滅ぼそうとしてるって事かよ！！」

ナギの怒声が響き渡る。

詠春も、アルビレオも、深刻な顔つきだった。

「……………待て、副首領、だと？」

俺は、それを抜きにして、アリカの言った台詞の中に引っかかりを覚えた。

「？ うむ。アオスブルフは帝国の総司令官であると同時に、完全なる世界の実質的指揮官でもあるようじゃ」

「首領は誰だ！？」

「……………わからぬ」

「おいおい、つまり、そういうことか……………！？」

俺は、電撃が奔ったかのような閃きに、思わず椅子を蹴立てて立ち上がり、頭を掻き毟った。

「お、おい、どうしたんだよミリオルド」

「ナギ！ 最悪だ！ 最悪かもしれないぞこの世界！！」

錯乱したように叫ぶ。

叫ばずにいられなかった。

アオスブルフ、って奴が誰なのかは知らない。だが、アオスブルフが黒円卓の大幹部で、そして黒円卓の面子が完全なる世界にいる。それは、つまり、大幹部のアオスブルフが副首領と言う事は、

首領は、あの水星なのではないか……？

「あ”ああああああ ツツツ！！！！！！」

叫ぶ。最悪過ぎる想像の割に、有り得過ぎるほど造物主の役柄が似合いそうで、俺はその想像が滑稽だとは思えなかった。

「ど、どうしたのじゃキセキ！！」

「らしくねえぞ、落ち着け！」

「これが落ち着いていられるかあ！！！！」

ダン！ と壁を殴り付け、俺は思考を巡らせた。

ディエスイレとのクロスオーバー世界、つてのは殆ど確実だ。
アオスブルフ、つて奴が転生者なのも。

なんてこった。あの水星がいるっただけで、この魔法世界の全てが茶番に思えて仕方がない！！

「アリカ。確か、ウエスペリティア王家の始祖って、始まりの魔法使いだっただけか？」

「う、うむ」

「……………そして、時々だが『完全魔法無効化能力』保持者が生ま

れる……………」

『所詮僕らは『ツアラトウストラ』の試作品だ』

いつかの、プリームムの科白が思い起こされる。

あの時は意味が分からなかったし、所詮は戯言だろうと聞き流していたが

（オステイアの王家。始まりの魔法使い〓造物主。デイエスイレ。水星。魔法界。流出。聖遺物。人間並みの自立行動を可能にする人形、ツアラトウストラ〓アーウエルンクス）

「……………キセキ？」

……………チクシヨウ、前世より回転の速い頭が、今は憎い……………！
わかってしまった。

わかつちまつたんだよ畜生！！

アリカは、アスナは、メルクリウスの血を継ぐ魔人の家系
なんだって

第12話「ウェスぺリティア王家の事実」(後書き)

「 策が閃いた。俺たちが、聖遺物なしで、黒円卓のバケモンどもを倒す秘策が 」

戦慄した顔のまま、ミリオルドは、ある策を『紅き翼』とアリカに提示した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9442x/>

主義主張

2011年11月7日07時34分発行